

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

－畑地帯総合整備（担い手育成型）事業城久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

# 城久遺跡群

## 山田中西遺跡Ⅱ



2008年3月  
喜界町教育委員会



土坑墓副葬品



# 序 文

この報告書は、畑地帯総合整備（担い手育成型）事業城久地区 に伴い、平成14年度と平成15年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

この遺跡は畑地帯総合整備（担い手育成型）事業城久地区 に伴い発掘調査を実施し、掘立柱建物跡37棟、土坑墓7基などを検出しました。出土遺物は、中世の様相を示すものが多く出土しましたが、その中には、越州窯系青磁・初期高麗青磁など、当時では役所などのごく限られたところではしか出土していない中国・朝鮮半島の高価な焼き物なども出土しています。

また、土師器・須恵器・白磁・滑石製石鍋・カムイヤキなど、島外産の遺物が多く見られ、南西諸島及び日本本土との活発な交流があったことをうかがわせます。

今回の発掘調査報告書によって、喜界町民はもとより、多くの方々が山田中西遺跡について理解していただくとともに、今後とも広く文化財の保護にご理解とご協力をいただくことができましたら幸いです。

おわりに、発掘調査に従事していただいた町民の皆様はじめ、発掘調査から報告書作成にいたるまで、ご指導・ご協力いただきました鹿児島県教育庁文化財課、県立埋蔵文化財センター、その他関係機関の方々に対し、深く感謝の意を表しますとともにお礼申し上げます。

平成20年3月

喜界町教育委員会  
教育長 晴 永 清 道

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	やまだなかにしいせき
書名	山田中西遺跡
副書名	畑地帯総合整備（担い手育成型）事業城久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	9
編集者名	澄田直敏 野崎拓司
編集機関	喜界町教育委員会
所在地	〒891-6292 鹿児島県大島郡喜界町湾1746
発行年月日	西暦2008年 3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまだなかにしいせき 山田中西遺跡	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 きかいちょうおおあぎやまだ 喜界町大字山田 あぎやまだなかにし 字山田中西	469251	90-77	28° 18' 05"	129° 58' 05"	2002.5.13	確認調査 230 本調査 5,400 計 5,630	畑地帯総合整備 (担い手育成型) 事業城久地区
						~		
						2002.5.29		
						2003.5.12 ~ 2003.8.19		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山田中西遺跡	集落跡	古代・中世	掘立柱建物跡37棟 土坑墓7基 炉跡2基 土坑1基 柱穴列6列 溝状遺構2条 柱穴約1,400基	土師器, 須恵器, 越州窯系青磁, 布目圧痕土器, 白磁, 初期高麗青磁, 朝鮮系無釉陶器, カムイヤキ, 滑石製石鍋, 滑石混入土器, 青磁, 刀子, 鞆の羽口, 鉄滓, 粘土塊, 銭, ガラス玉, 磨製石斧, 台石, 凹石, 磨石, 砥石, 金床石, 軽石製品	調査後の遺跡については消滅。

要約	<p>畑地帯総合整備（担い手育成型）事業城久地区に伴い調査された当遺跡は、海岸段丘上に営まれた古代～中世の集落跡である。集落跡は掘立柱建物跡を中心に構成され、隣接するように複数の土坑墓が検出されている。土坑墓内には焼骨と共に白磁碗, 白磁小皿, カムイヤキの小壺, ガラス玉などが副葬されている。また、遺物では、中国や朝鮮半島産の陶磁器の他、本土系の土師器や須恵器, 滑石製石鍋, カムイヤキなどの占める割合が非常に高いという特徴がある。中でもこれまでの出土事例の南限を下げた越州窯系青磁や南九州で出土事例の少ない初期高麗青磁の出土は大きな注目を集めている。</p>
----	---



遺跡位置図 (1/50,000)

## 例 言

- 1 本報告書は、畑地帯総合整備（担い手育成型）事業城久地区に伴う山田中西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成15年度に喜界町教育委員会が、鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所土地改良課の受託事業として、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもとに実施した。
- 3 報告書作成は、喜界町教育委員会が平成18・19年度事業として鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもとに実施した。
- 4 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高による。
- 5 遺物番号は全て通し番号とし、本文及び挿図、図版番号とも一致する。
- 6 遺構・遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。遺構は30分の1もしくは60分の1、遺物は3分の1を基本とする。
- 7 発掘調査については熊本大学名誉教授白木原和美氏、琉球大学教授池田榮史氏の指導を受けた。  
第Ⅵ章自然化学分析については、鹿児島女子短期大学准教授竹中正巳氏、札幌大学教授高宮広土氏に玉稿いただいた。また(株)パレオ・ラボに炭化材の放射性炭素年代測定及び樹種同定、(株)古環境研究所に焼骨の放射性炭素年代測定及び炭素・窒素安定同位体分析を委託した。
- 8 本書の執筆、編集は野崎、澄田が担当した。
- 9 出土した遺物は喜界町教育委員会で保管し、展示・活用する計画である。なお、本遺跡の遺物注記の略号は「YN」である。

# 目 次

巻頭カラー	12	ガラス玉	75
序文	13	轡の羽口・鉄滓	75
例言	14	土製品	75
報告書抄録	15	石器	75
遺跡位置図			
<b>第Ⅰ章 調査の経過</b>		<b>第Ⅵ章 自然化学分析</b>	
第1節 発掘調査に至るまでの経緯	1	第1節 山田中西遺跡出土人骨の分析	88
第2節 調査の組織	1	第2節 炭化材の放射性炭素年代測定及び樹種同定	93
第3節 調査の経過	2	第3節 火葬骨放射性炭素年代測定及び炭素・窒素安定同位体分析	96
<b>第Ⅱ章 遺跡の立地と環境</b>		第4節 山田中西遺跡出土の植物遺体：速報	99
第1節 地理的環境	4	<b>第Ⅶ章 基礎資料</b>	101
第2節 歴史的環境	4	<b>第Ⅷ章 山田中西遺跡Ⅰ補遺</b>	130
<b>第Ⅲ章 城久遺跡群の調査概要</b>		<b>第Ⅸ章 まとめ</b>	133
第1節 調査の進捗状況	7	<b>写真図版</b>	
第2節 調査の成果	7		
<b>第Ⅳ章 調査の概要</b>			
第1節 発掘調査の方法	11		
第2節 発見された遺構・遺物	11		
第3節 層位	11		
<b>第Ⅴ章 発掘調査の成果</b>			
第1節 遺構			
1 掘立柱建物跡、柱穴列	15		
2 土坑墓	51		
3 土坑	58		
4 焼土跡（炉跡）	58		
5 溝状遺構	58		
第2節 遺物			
1 土師器	61		
2 須恵器	63		
3 越州窯系青磁、古代白磁	64		
4 布目圧痕土器	64		
5 白磁	64		
6 初期高麗青磁	65		
7 朝鮮系無釉陶器	66		
8 カムイヤキ	66		
9 滑石製品	68		
10 滑石混入土器	70		
11 青磁	72		



## 挿 図 目 次

### 遺跡位置図

第 1 図 主な島内遺跡位置図…………… 6	第44図 掘立柱建物跡39号……………47
第 2 図 城久遺跡群遺跡位置図…………… 9	第45図 掘立柱建物跡40号……………48
第 3 図 山田中西遺跡調査範囲図……………10	第46図 掘立柱建物跡41号……………49
第 4 図 基本土層図……………11	第47図 柱穴列及び出土遺物(1)……………50
第 5 図 山田中西遺跡全体遺構配置図……………12	第48図 柱穴列及び出土遺物(2)……………51
第 6 図 土層断面図……………14	第49図 土坑墓 4 号及び副葬品……………52
第 7 図 遺構配置図(1)……………15	第50図 土坑墓 5 号及び副葬品……………53
第 8 図 遺構配置図(2)……………16	第51図 土坑墓 6 号及び副葬品……………54
第 9 図 遺構配置図(3)……………17	第52図 土坑墓 7 号及び副葬品……………55
第10図 掘立柱建物跡 5 号……………18	第53図 土坑墓 8 号及び副葬品……………55
第11図 掘立柱建物跡 6 号……………19	第54図 土坑墓 9 号及び副葬品……………57
第12図 掘立柱建物跡 7 号……………20	第55図 土坑墓10号及び副葬品……………58
第13図 掘立柱建物跡 8 号……………21	第56図 土坑 6 号及び出土遺物……………58
第14図 掘立柱建物跡 9 号……………22	第57図 焼土跡(炉跡)……………58
第15図 掘立柱建物跡10号……………23	第58図 溝状遺構及び出土遺物……………60
第16図 掘立柱建物跡11号……………24	第59図 土師器……………61
第17図 掘立柱建物跡12号……………24	第60図 須恵器(1)……………62
第18図 掘立柱建物跡13号……………25	第61図 須恵器(2)……………64
第19図 掘立柱建物跡14号……………26	第62図 越州窯系青磁, 古代白磁……………66
第20図 掘立柱建物跡15号……………27	第63図 布目圧痕土器……………66
第21図 掘立柱建物跡16号……………28	第64図 白磁……………67
第22図 掘立柱建物跡17号……………29	第65図 初期高麗青磁……………70
第23図 掘立柱建物跡18号……………30	第66図 朝鮮系無釉陶器……………70
第24図 掘立柱建物跡19号……………31	第67図 カムイヤキ(1)……………71
第25図 掘立柱建物跡20号……………32	第68図 カムイヤキ(2)……………73
第26図 掘立柱建物跡21号……………32	第69図 カムイヤキ(3)……………75
第27図 掘立柱建物跡22号……………33	第70図 滑石製品(1)……………76
第28図 掘立柱建物跡23号……………34	第71図 滑石製品(2)……………77
第29図 掘立柱建物跡24号……………34	第72図 滑石製品(3)……………79
第30図 掘立柱建物跡25号……………35	第73図 滑石混入土器……………81
第31図 掘立柱建物跡26号……………36	第74図 青磁及びガラス玉……………82
第32図 掘立柱建物跡27号……………37	第75図 韃の羽口……………82
第33図 掘立柱建物跡28号……………38	第76図 鉄滓及び土製品……………82
第34図 掘立柱建物跡29号……………39	第77図 石器(1)……………84
第35図 掘立柱建物跡30号……………40	第78図 石器(2)……………85
第36図 掘立柱建物跡31号……………41	第79図 石器(3)……………86
第37図 掘立柱建物跡32号……………42	第80図 石器(4)……………87
第38図 掘立柱建物跡33号……………43	第81図 安定同位体比からみた海産資源への 依存率……………98
第39図 掘立柱建物跡34号……………44	第82図 先史時代の食資源の同位体分布と 資料の同位体比……………98
第40図 掘立柱建物跡35号……………44	第83図 ピット内遺物出土状況(1)…………… 108
第41図 掘立柱建物跡36号……………45	第84図 ピット内遺物出土状況(2)…………… 109
第42図 掘立柱建物跡37号……………46	第85図 ピット内遺物出土状況(3)…………… 110
第43図 掘立柱建物跡38号……………47	第86図 ピット内遺物出土状況(4)…………… 111
	第87図 ピット内遺物出土状況(5)…………… 112

第88図	ピット内遺物出土状況(6)……………	113
第89図	ピット内遺物出土状況(7)……………	114
第90図	ピット内遺物出土状況(8)……………	115
第91図	ピット内遺物出土状況(9)……………	116
第92図	ピット内遺物出土状況(10)……………	117
第93図	詳細遺構配置図(1)……………	118
第94図	詳細遺構配置図(2)……………	119
第95図	詳細遺構配置図(3)……………	120
第96図	詳細遺構配置図(4)……………	121
第97図	詳細遺構配置図(5)……………	122
第98図	詳細遺構配置図(6)……………	123
第99図	詳細遺構配置図(7)……………	124
第100図	詳細遺構配置図(8)……………	125
第101図	詳細遺構配置図(9)……………	126
第102図	詳細遺構配置図(10)……………	127
第103図	詳細遺構配置図(11)……………	128
第104図	詳細遺構配置図(12)……………	129
第105図	山田中西遺跡 I 出土遺物実測図 (追補)……………	130

## 目 次

第 1 表	主な島内遺跡地名表……………	5
第 2 表	城久遺跡群発掘調査一覧……………	8
第 3 表	掘立柱建物跡 5 号計測表……………	18
第 4 表	掘立柱建物跡 6 号計測表……………	19
第 5 表	掘立柱建物跡 7 号計測表……………	20
第 6 表	掘立柱建物跡 8 号計測表……………	21
第 7 表	掘立柱建物跡 9 号計測表……………	22
第 8 表	掘立柱建物跡 10 号計測表……………	23
第 9 表	掘立柱建物跡 11 号計測表……………	25
第 10 表	掘立柱建物跡 12 号計測表……………	25
第 11 表	掘立柱建物跡 13 号計測表……………	25
第 12 表	掘立柱建物跡 14 号計測表……………	26
第 13 表	掘立柱建物跡 15 号計測表……………	27
第 14 表	掘立柱建物跡 16 号計測表……………	28
第 15 表	掘立柱建物跡 17 号計測表……………	29
第 16 表	掘立柱建物跡 18 号計測表……………	30
第 17 表	掘立柱建物跡 19 号計測表……………	31
第 18 表	掘立柱建物跡 20 号計測表……………	32
第 19 表	掘立柱建物跡 21 号計測表……………	33
第 20 表	掘立柱建物跡 22 号計測表……………	33
第 21 表	掘立柱建物跡 23 号計測表……………	35
第 22 表	掘立柱建物跡 24 号計測表……………	35
第 23 表	掘立柱建物跡 25 号計測表……………	35
第 24 表	掘立柱建物跡 26 号計測表……………	36

第 25 表	掘立柱建物跡 27 号計測表……………	37
第 26 表	掘立柱建物跡 28 号計測表……………	37
第 27 表	掘立柱建物跡 29 号計測表……………	39
第 28 表	掘立柱建物跡 30 号計測表……………	40
第 29 表	掘立柱建物跡 31 号計測表……………	41
第 30 表	掘立柱建物跡 32 号計測表……………	42
第 31 表	掘立柱建物跡 33 号計測表……………	43
第 32 表	掘立柱建物跡 34 号計測表……………	45
第 33 表	掘立柱建物跡 35 号計測表……………	45
第 34 表	掘立柱建物跡 36 号計測表……………	46
第 35 表	掘立柱建物跡 37 号計測表……………	46
第 36 表	掘立柱建物跡 28 号計測表……………	48
第 37 表	掘立柱建物跡 39 号計測表……………	49
第 38 表	掘立柱建物跡 40 号計測表……………	49
第 39 表	掘立柱建物跡 41 号計測表……………	49
第 40 表	柱穴列 2 計測表……………	50
第 41 表	柱穴列 3 計測表……………	50
第 42 表	柱穴列 4 計測表……………	50
第 43 表	柱穴列 5 計測表……………	51
第 44 表	柱穴列 6 計測表……………	51
第 45 表	柱穴列 7 計測表……………	51
第 46 表	土坑墓 4 号出土遺物観察表……………	52
第 47 表	土坑墓 5 号出土遺物観察表……………	53
第 48 表	土坑墓 6 号出土遺物観察表(1)……………	56
第 49 表	土坑墓 6 号出土遺物観察表(2)……………	56
第 50 表	土坑墓 6 号出土遺物観察表(3)……………	56
第 51 表	土坑墓 7 号出土遺物観察表……………	56
第 52 表	土坑墓 8 号出土遺物観察表(1)……………	56
第 53 表	土坑墓 8 号出土遺物観察表(2)……………	56
第 54 表	土坑墓 9 号出土遺物観察表(1)……………	56
第 55 表	土坑墓 9 号出土遺物観察表(2)……………	57
第 56 表	土坑墓 10 号出土遺物観察表……………	58
第 57 表	土坑 6 号出土遺物観察表……………	59
第 58 表	溝状遺構 1 出土遺物観察表……………	59
第 59 表	溝状遺構 2 出土遺物観察表……………	59
第 60 表	土師器観察表……………	63
第 61 表	須恵器観察表……………	65
第 62 表	越州窯系青磁等観察表……………	66
第 63 表	布目圧痕土器観察表……………	66
第 64 表	白磁観察表(1)……………	68
第 65 表	白磁観察表(2)……………	69
第 66 表	初期高麗青磁観察表……………	70
第 67 表	朝鮮系無釉陶器観察表……………	70
第 68 表	カムイヤキ観察表(1)……………	72
第 69 表	カムイヤキ観察表(2)……………	74
第 70 表	滑石製品観察表(1)……………	78

第71表	滑石製品観察表(2)……………	80
第72表	滑石混入土器観察表……………	81
第73表	青磁及びガラス玉観察表……………	83
第74表	轆の羽口観察表……………	83
第75表	鉄滓観察表……………	83
第76表	土製品観察表……………	83
第77表	石器観察表……………	86
第78表	放射性炭素年代測定及び 暦年校正の結果……………	93
第79表	放射性炭素年代測定資料と方法……………	97
第80表	測定結果……………	97
第81表	骨コラーゲンの安定同位体比測定結果……………	98
第82表	山田中西遺跡出土の植物遺体……………	100
第83表	ピット内出土遺物一覧表(1)……………	101
第84表	ピット内出土遺物一覧表(2)……………	101
第85表	ピット内出土遺物一覧表(3)……………	102
第86表	ピット内出土遺物一覧表(4)……………	102
第87表	ピット内出土遺物一覧表(5)……………	103
第88表	ピット内出土遺物一覧表(6)……………	103
第89表	ピット内出土遺物一覧表(7)……………	104
第90表	ピット内出土遺物一覧表(8)……………	104
第91表	ピット内出土遺物一覧表(9)……………	105
第92表	ピット内出土遺物一覧表(10)……………	105
第93表	ピット内出土遺物一覧表(11)……………	106
第94表	ピット内出土遺物一覧表(12)……………	106
第95表	山田中西遺跡出土遺物出土区別 集計表……………	107
第96表	山田中西遺跡 I 出土遺物出観察表 (追補)……………	130
第97表	山田中西遺跡 I ピット内遺物 一覧表(1)……………	131
第98表	山田中西遺跡 I ピット内遺物 一覧表(2)……………	131
第99表	山田中西遺跡 I ピット内遺物 一覧表(3)……………	132
第100表	山田中西遺跡 I ピット内遺物 一覧表(4)……………	132
第101表	山田中西遺跡 I 出土遺物出土区別 集計表……………	132

	土坑墓 4 号焼骨及び炭化物出土状況 土坑墓 4 号副葬品, 焼骨及び炭化物 出土状況
図版 3	土坑墓 5 号副葬品出土状況 土坑墓 5 号焼骨及び炭化物出土状況 土坑墓 5 号副葬品, 焼骨及び炭化物 出土状況 土坑墓 7 号副葬品出土状況(1) 土坑墓 7 号副葬品出土状況(2) 土坑墓 7 号副葬品出土状況(3)
図版 4	土坑墓 8 号副葬品出土状況 土坑墓 8 号骨片出土状況 土坑墓 8 号副葬品及び骨片出土状況 土坑墓 6 号副葬品出土状況 土坑墓 6 号焼骨及び炭化物出土状況 土坑墓 4・5・6 号完掘状況 土坑墓 9 号副葬品出土状況
図版 5	土坑墓 10 号検出状況 土坑墓 10 号副葬品出土状況 炉跡半裁状況 ピット内遺物出土状況 竹中先生現地指導 現地説明会
図版 6	土坑墓出土遺物(1)
図版 7	土坑墓出土遺物(2) 溝状遺構出土遺物 土師器
図版 8	須恵器
図版 9	越州窯系青磁・布目圧痕土器・白磁
図版 10	白磁・朝鮮系無釉陶器・カムイヤキ
図版 11	カムイヤキ
図版 12	カムイヤキ 朝鮮系無釉陶器 A 群 朝鮮系無釉陶器 B 群 滑石製品(1)
図版 13	滑石製品(2)
図版 14	滑石混入土器・青磁・轆の羽口など
図版 15	石器

## 図 版 目 次

図版 1	遺跡周辺空中写真
図版 2	土層断面 柱穴列 2 完掘状況 土坑墓 4 号副葬品出土状況

# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所土地改良課、以下県農政部）は、大島郡喜界町山田・城久地内において、県営畑地帯総合整備事業（城久地区）を計画し事業区域内の埋蔵文化財の有無について、喜界町教育委員会に照会した。

これを受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、県埋蔵文化財センター）と喜界町教育委員会が平成11年に分布調査を実施したところ、事業区域内に複数の遺物散布地（山田中西遺跡、山田半田A・B遺跡、半田口遺跡など）が確認された。

この分布調査の結果をもとに、県農政部、鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）、喜界町教育委員会（以下、町教育委員会）は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った結果、山田中西遺跡と山田半田B遺跡について事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施することとなった。確認調査は、喜界町教育委員会が調査主体となり、平成14年5月13日から同年5月29日まで実施した。調査の結果、山田中西遺跡で約4,000㎡、山田半田B遺跡で約3,000㎡の範囲で古代末から中世の時期のものと考えられる遺構・遺物を確認した。

この結果をもとに、再度県農政部、県文化財課、町教育委員会は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行い、遺跡の現状保存が困難であることから記録保存を目的とした本調査を実施することとなった。

発掘調査は、町教育委員会が調査主体となり、県埋蔵文化財センターの支援を受け、平成15年5月12日から同年8月19日（実働59日）まで実施した。

## 第 2 節 調査の組織

### 平成14年度 確認調査

事業主体者 鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所土地改良課）

調査主体者 喜界町教育委員会

企画・調整 喜界町教育委員会生涯学習課

調査責任者

喜界町教育委員会 教育長 平 義哉

調査企画者

喜界町教育委員会社会教育課長 福岡 功彦

喜界町教育委員会社会教育課

課長補佐

益 一幸

〃 派遣社会教育主事

上原 一宏

調査・事務担当者

喜界町教育委員会社会教育課主事 澄田 直敏  
調査指導者

鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事

堂込 秀人

### 平成15年度 本調査・整理

事業主体者 鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所土地改良課）

調査主体者 喜界町教育委員会

企画・調整 喜界町教育委員会社会教育課

調査責任者

喜界町教育委員会 教育長 平 義哉

調査企画者

喜界町教育委員会社会教育課長 福岡 功彦

〃 課長補佐

益 一幸

〃 派遣社会教育主事

上原 一宏

調査・事務担当者

喜界町教育委員会社会教育課主事 澄田 直敏  
調査指導者

熊本大学名誉教授

白木原和美

琉球大学教授

池田 榮史

鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財研究員

横手浩二郎

### 平成18年度 整理作業

事業主体者 鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所土地改良課）

整理主体者 喜界町教育委員会

企画・調整 喜界町教育委員会中央公民館

整理責任者

喜界町教育委員会 教育長 晴永 清道

整理企画者

喜界町教育委員会中央公民館長 岡村進一郎

〃 館長補佐

藤崎 嘉

〃 主査

竹内 功

整理担当者

喜界町教育委員会中央公民館主査 澄田 直敏

〃 埋蔵文化財調査員

野崎 拓司

事務担当者

喜界町教育委員会中央公民館主査 竹内 功

整理指導者

専修大学教授 亀井 明德

東京大学史料編纂所教授	石上 英一
熊本大学教授	甲元 眞之
ラ・サール学園高等学校教諭	永山 修
琉球大学教授	池田 榮史
鹿児島女子短期大学助教授	竹中 正巳
鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事	寺原 徹

## 平成19年度 報告書作成

事業主体者 鹿児島県農政部農地整備課（大島支  
庁喜界事務所農地振興係）

作成主体者 喜界町教育委員会

企画・調整 喜界町教育委員会生涯学習課

作成責任者

喜界町教育委員会 教育長 晴永 清道

作成企画者

喜界町教育委員会生涯学習課長 益 一幸  
 〃 課長補佐 岩松 利一  
 〃 埋蔵文化財係主査 竹内 功

作成担当者

喜界町教育委員会生涯学習課  
埋蔵文化財係長 澄田 直敏  
埋蔵文化財係主事 野崎 拓司

事務担当者

喜界町教育委員会生涯学習課  
埋蔵文化財係主査 竹内 功

作成指導者

東京大学史料編纂所教授 石上 英一  
 熊本大学教授 甲元 眞之  
 ラ・サール学園高等学校教諭 永山 修  
 琉球大学教授 池田 榮史  
 鹿児島女子短期大学准教授 竹中 正巳  
 札幌大学教授 高宮 広土  
 太宰府市教育委員会文化財課  
主任主査 中島恒次郎  
 福岡市教育委員会埋蔵文化財課  
調査員 田中 克子  
 伊仙町教育委員会社会教育課  
学芸員 新里 亮人  
 鹿児島県教育庁文化財課  
文化財主事 堂込 秀人  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
文化財研究員 馬籠 亮道

## 第3節 調査の経過

### 1 確認調査（平成14年度）

第1節の発掘調査の経緯でも記したように、平成14年5月13日～29日まで喜界町教育委員会が調査主体となって確認調査を実施した。調査は2m×5mのトレンチを基本として6か所実施した。その結果、1, 2, 3トレンチで中世の遺構・遺物を確認し、遺構・遺物の出土状況から約4,000㎡の範囲に遺跡が残存していると判断した。

### 2 本調査・整理（平成15年度）

平成14年度の確認調査の結果を受けて、本調査を平成15年5月12日から8月19日まで実施した。

調査では、まず調査区域内に10m×10mのグリッドを設定し実施した。グリッドは北側から南側方向にA～Iとし、それに直行する東側から西側方向へ1～6と呼称した。

発掘調査は、確認調査で得られた資料をもとに、遺構検出面直上まで（一部の遺物包含層が残る部分はその直上まで）は表土を重機により除去し、その後、作業員を投入して遺物及び遺構の検出作業を行った。

以下、調査の経過については日誌抄にて記載する。

5月12日(月)～5月16日(金)

重機による表土剥ぎ。機材を搬入、環境整備、グリッド設定、レベル移動を行う。

5月19日(月)～5月23日(金)

重機による表土剥ぎ。調査区に水まき・シート敷き後、B～I-2・3区Ⅲ層の遺構検出作業、遺構検出状況写真撮影、遺構検出状況平板実測、ピット・土坑の掘り下げ。ダンプによる排土移動。

5月26日(月)～5月29日(木)

重機による表土剥ぎ。調査区に水まき・シート敷き後、A～I-2・3区Ⅲ層の遺構検出作業、遺構検出状況写真撮影、遺構検出状況平板実測、ピット・土坑の掘り下げ。ダンプによる排土移動。

6月2日(月)～6月5日(水)

E～I-4・5区Ⅱ層の包含層の掘り下げ。

6月10日(火)～6月13日(金)

G～I-3～5区Ⅱ層包含層の掘り下げ、C～I-1・2区Ⅲ層の遺構検出状況平板実測、G～I-3・4区Ⅱ層遺物出土状況平板実測。重機による表土剥ぎ。

6月16日(月)～6月20日(金)

A～D-3・4区Ⅱ層包含層の掘り下げ，A～I-1～4区Ⅲ層の遺構検出作業，遺構検出状況平板実測，ピット・土坑の掘り下げ，レベル実測，同Ⅱ層の遺物出土状況平板実測。重機による表土剥ぎ。

6月23日(月)～6月27日(金)

A・B-3・4区，H・I-4～6区Ⅱ層包含層の掘り下げ，A～I-1～4区Ⅲ層，H・I-4～6区Ⅱ・Ⅲ層の遺構検出作業，A～C-1・2区Ⅲ層遺構検出状況平板実測，A～G-3・4・6区Ⅲ層ピット・土坑の掘り下げ，D・E-3区，E～H-1・2区Ⅲ層遺構レベル実測，A～I-1～6区遺跡範囲平板実測。重機による表土剥ぎ。

6月30日(月)～7月4日(金)

A・B-3・4区，H・I-4～6区Ⅱ層包含層の掘り下げ，A～I-1～4区Ⅲ層，H・I-4～6区Ⅱ・Ⅲ層の遺構検出作業，A～C-1・2区Ⅲ層遺構検出状況平板実測，A～G-3・4・6区Ⅲ層ピット・土坑の掘り下げ，D・E-3区，E～H-1・2区Ⅲ層レベル実測，A～I-1～6区遺跡範囲平板実測。重機による表土剥ぎ。

7月7日(月)～7月11日(金)

F・G-5・6区Ⅲ層の遺構検出作業，H・I-4～6区Ⅲ層の遺構検出状況平板実測，E～I-3～6区Ⅲ層ピット・土坑の掘り下げ，I-6区Ⅲ層の土坑墓実測。

7月14日(月)～7月18日(金)

E～I-3～6区Ⅲ層の遺構検出状況平板実測，E～I-3～6区Ⅲ層ピット・土坑の掘り下げ，I

-6区Ⅲ層の土坑墓実測。

7月22日(月)～7月26日(土)

E～I-4～6区Ⅲ層ピット・土坑の掘り下げ，D-5区Ⅲ層の土坑墓の実測，土層断面の実測。

7月28日(月)～8月1日(金)

A～I-4～6区Ⅲ層ピット・土坑の掘り下げ，D-5区Ⅲ層の土坑墓の実測，A～I-4～6区Ⅲ層の遺構レベル実測。機材撤収・プレハブ撤去。

8月4日(月)～8月6日(水)

I-5区Ⅲ層の土坑墓実測。遺構（土坑墓など）の写真撮影。

8月18日(月)～8月19日(火)

土坑墓実測。人骨の取り上げ。

整理作業は平成16年1月～平成16年3月に遺物の水洗い・注記の作業を行った。

### 3 整理（平成18年度）

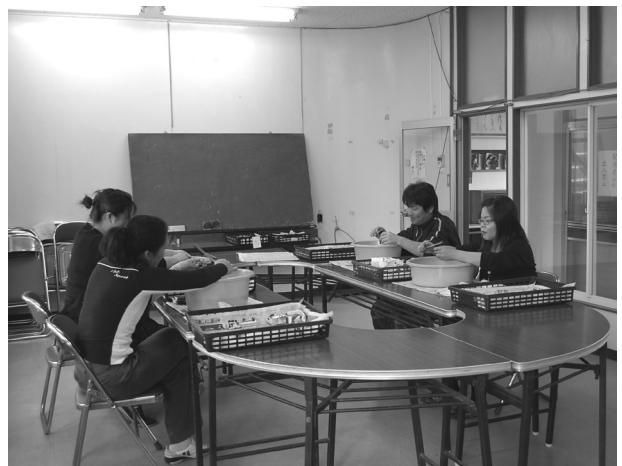
整理作業は平成18年5月～平成19年3月に行った。遺物の水洗い・注記・接合・図面整理・実測・拓本・トレースなどの作業を行った。

### 4 整理（平成19年度）

整理作業は平成19年5月～平成20年3月に行った。図面整理・トレースなどの作業を行い，報告書を刊行した。



発掘調査風景



整理作業風景

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

喜界島は鹿児島県本土から南へ約380km、奄美大島から東へ約25kmの北緯28度19分、東経130度線上の太平洋と東シナ海の洋上に浮かぶ島である。現在でも約2mmずつ隆起し、学術的にも非常に貴重な島といわれている。1島で1町をなし、南東に長く14km、北東部から南西部にかけて次第に幅を広げており、周囲50.0km、面積56.9㎡である。

概して平坦な隆起珊瑚礁の島で、海岸段丘で形成されている。島内での最高所は島の中央東側にある百之台で標高は214mある。この百之台を中心に北西側へは緩やかに傾斜し、広い段丘地形が見られる。これに対して南東部は急崖となり、海岸線にそってわずかな平坦地が見られるだけである。こうした地形のために、河川の発達は乏しく、用水のほとんどは地下水や湧水に依存している。海岸線は単調で裾礁からなっているため、港として利用できる場所は限られている。代表的な港としては湾、早町、志戸桶、小野津があり、各集落では港を背に必ず砂丘が形成されている。砂丘上では、縄文時代から近世までの遺物が採取でき、古くから人々の生活が営まれていたことをうかがい知ることができる。

気候は亜熱帯性気候で年平均気温22.2℃と、年間を通じて温暖である。年間の降水量は3,000mmに達し、全島がガジュマルなどの常緑樹に覆われている。本島の基盤をなしているのは、新生代新第三紀鮮新世の島尻層で、琉球石灰岩、志戸桶層、隆起珊瑚石灰岩、砂丘が上層を形成している。マージと呼ばれる暗赤褐色土壌が島の大部分を覆っている。

山田中西遺跡は、島内で最も標高の高い城久集落を取り巻く8遺跡の総称である城久遺跡群の1つである。遺跡群は、喜界島の中央部の標高90m～160mの海岸段丘上に立地している。島内の段丘は、巨視的に見て4段あり、遺跡群は2番目に標高の高い中位段丘の縁辺部に展開しており、天気の良い日には奄美大島が眺望できる。山田中西遺跡はその中でも、最も高所に位置し、遺跡の標高は160m程である。遺跡周辺に河川はないが、湧水点がいくつか点在する。例えば遺跡北側の城久集落内に3か所(ウマヌッサー、イインカーハー、イチインマーハー)残っている。また、滝川集落内には、島内でも有数の湧水量を誇る滝川の泉がある。これらの湧水は崖下にあることが多く、島尻層と琉球石灰岩の不整合面から

湧出するといわれている。

### 第2節 歴史的環境

喜界島における考古学的研究は、戦前は昭和6年の重野豊吉による荒木貝塚の発見に始まり、三宅宗悦による湾貝塚・手久津久貝塚の報告がある。

戦後においては、昭和30年代に九学会連奄美大島共同調査委員会考古学班による分布調査が行われ、荒木農道遺跡、荒木小学校遺跡、湾天神貝塚、伊実久巖島神社貝塚、七城などが紹介されている。

中世においては源氏や平家にまつわる伝承や地名が数多く残っていることも1つの特徴である。今回調査した山田中西遺跡の近くにも僧俊寛の言い伝えが残る場所がある。また、志戸桶の「七城」や早町の「平家森」は、平家の落人の残したものであると伝えられている。小野津の「雁股の泉」については、源為朝にまつわる伝承も残っている。

#### 1 縄文時代

島内で最も古い縄文時代の遺跡は、平成13年に発見された総合グラウンド遺跡である。遺跡では口縁端部に刻目があり、両端の尖った施文具による連続刺突文と4～6条の横条線が交互に施されて、砲弾形の器形をなす大型の深鉢土器と、4条程度を1単位として押し引き条線が施される砲弾形の小型の土器や、爪形文土器、石器、そして3層の貝層などが確認されている。この大型土器に付着していた煤を放射性炭素年代測定分析にかけ、約7,000年前という数値が出ており、遺跡の範囲確認とともに他の遺物などのさらなる検討が必要となってきている。また、昭和27年に県立喜界高等学校校庭拡張工事に伴って出土した土器は、赤連系土器と名付けられ、縄文時代前期といわれている。昭和61年には熊本大学によるハンタ遺跡の発掘調査が実施され、宇宿上層式期の住居跡群やかまど状遺構が確認された。遺物は、面縄西洞式・喜念I式・宇宿上層式などの土器、石斧・敲石・クガニイシなどの石器が出土している。平成16年には、喜界町役場新庁舎工事に伴い見付山遺跡の発掘調査が行われ、石鏃や黒曜石が本町で初めて発見されている。遺跡の時期は縄文時代晩期頃と考えられている。

#### 2 弥生時代～古墳時代併行期

弥生時代の遺跡は発掘調査は行われてはいないが分布調査などで荒木小学校遺跡などの数遺跡が確認

されている。

古墳時代並行期の遺跡は、昭和61年に喜界町教育委員会による先山遺跡の発掘調査が実施され、兼久式土器や貝斧などが報告されている。その他には中里貝塚など約20遺跡が確認されている。

### 3 古代・中世

古代・中世の遺跡は昭和63年に島中B遺跡、平成4年にオン畑・巻畑B・巻畑C遺跡、平成5年に前ヤ遺跡、平成6年に提り遺跡などの発掘調査が実施されている。また、本町の大多数の遺跡がこの時期に属している。

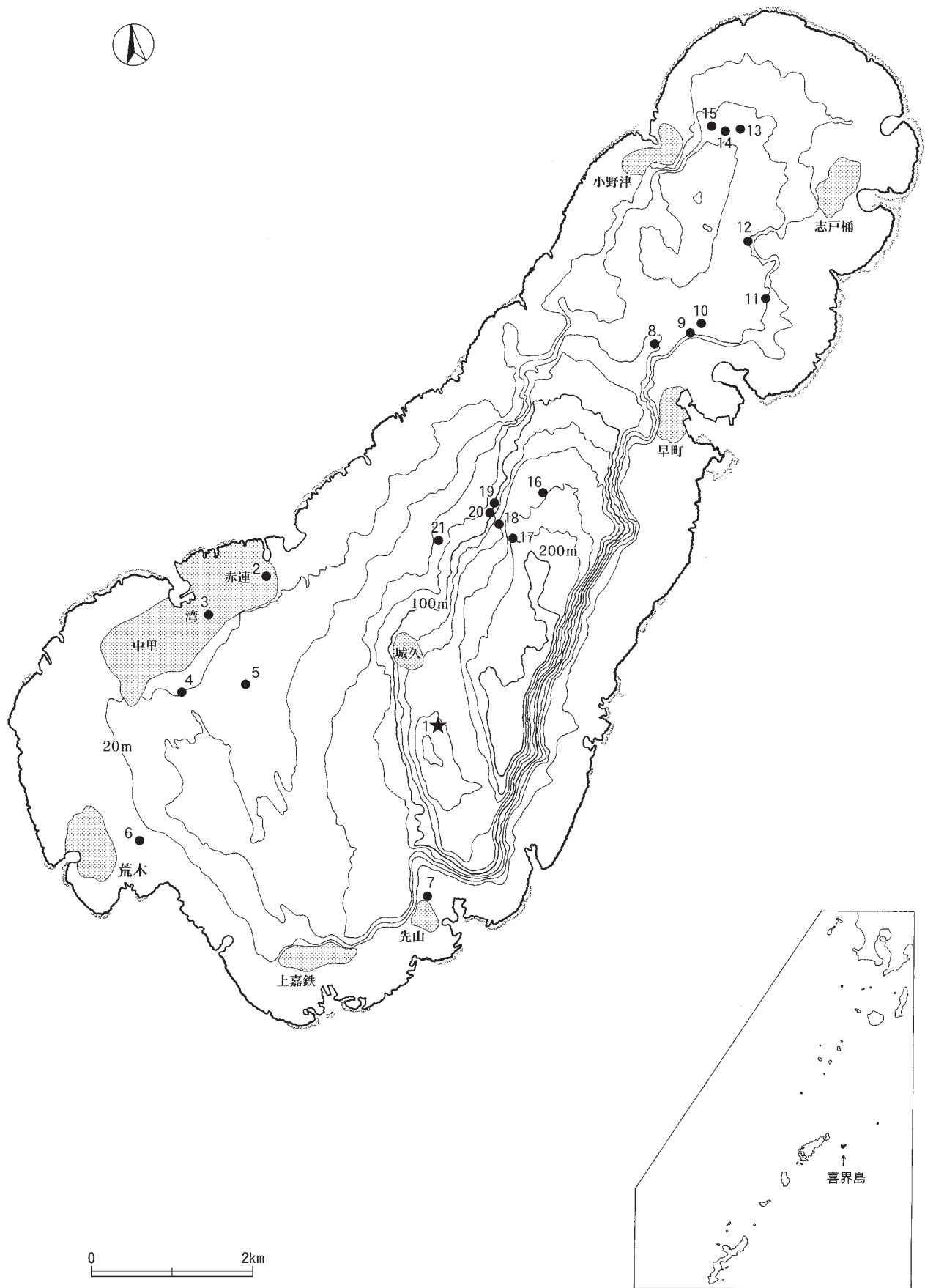
### 〈参考・引用文献〉

- 喜界町 2000 『喜界町誌』  
 喜界町教育委員会 1987 『先山遺跡』 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)  
 喜界町教育委員会 1987 『ハンタ遺跡』 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)  
 澄田直敏・堂込秀人・池畑耕一 2003 「喜界町総合グラウンド遺跡(弓道場)出土の土器」『鹿児島考古』第37号 鹿児島県考古学会  
 喜界町教育委員会 2006 『山田中西遺跡 I』 喜界町埋蔵文化財報告書(8)

第1表 主な島内遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	主な遺構・遺物	備考
1	山田中西	喜界町山田	海岸段丘	古代～中世	掘立柱建物跡、土坑墓、炉跡、土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目圧痕土器、白磁、初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、鉄製品、韃の羽口、ガラス玉	平成14年確認調査 平成15・16年本調査
2	赤連	喜界町赤連	海岸段丘	縄文	赤連式土器	現喜界高校
3	湾天神	喜界町湾	海岸段丘	縄文	土器、石器、貝製品、獣骨	
4	総合グラウンド	喜界町湾	砂丘	縄文	土器、石器、貝、獣骨	
5	竿ク	喜界町湾	海岸段丘			削平により消失した可能性
6	荒木貝塚	喜界町荒木	低地	縄文	石器、貝	
7	先山	喜界町浦原	海岸段丘	縄文～近世	面縄前庭式・兼久式土器、石器、貝、獣骨	昭和61年調査
8	平家森	喜界町早町	山頂	中世	規模・形状：200×200 複郭	
9	後田	喜界町塩通	海岸段丘			削平により消失した可能性
10	水口	喜界町塩通	海岸段丘			削平により消失した可能性
11	堤り	喜界町塩通	海岸段丘	古代～中世	須恵器、カムイヤキ、白磁、青磁、滑石製石鍋、石器、獣骨	平成6年調査
12	七城	喜界町志戸桶	台地	中世	規模・形状：200×200 複郭	
13	オン畑	喜界町小野津	海岸段丘	古代～近世	掘立柱建物跡、炉跡、溝状遺構、カムイヤキ、鉄滓	平成4年調査
14	巻畑C	喜界町小野津	海岸段丘	古代～中世	土師器、カムイヤキ、滑石製石鍋	平成4年調査
15	巻畑B	喜界町小野津	海岸段丘	古代～中世	土師器、須恵器、滑石製石鍋、韃の羽口、鉄滓	平成4年調査
16	ハンタ	喜界町西目	海岸段丘	縄文	住居跡群、かまど状遺構、宇宿上層式土器、土製品、石器、カムイヤキ、青磁	昭和61年調査
17	前ヤ	喜界町島中	海岸段丘	古墳～中世	青磁、カムイヤキ	平成5年調査
18	ウ川田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	土器、土師器、白磁、青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、染付	平成5年調査
19	上田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	柱穴、土器、青磁、カムイヤキ	平成5年調査
20	向田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	土器、土師器、白磁、青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、染付	平成5年調査
21	島中B	喜界町島中	海岸段丘	古代～近世	土器、内黒土師器、須恵器、白磁、青磁、韃の羽口、鉄滓、石器、染付	昭和63年調査





第1図 主な島内遺跡位置図

## 第三章 城久遺跡群の調査概要

### 第1節 調査の進捗状況

城久遺跡群の発掘調査は、平成14年度の山田中西遺跡・山田半田遺跡を皮切りに本調査と確認調査を並行して行っている。本調査は山田中西遺跡を平成15・16年度に実施し、平成16・17年度と平成19年度に山田半田遺跡、平成18年度に小ハネ・前畑・半田遺跡、平成19年度に大ウフ・半田口遺跡の本調査を行っている。

平成15年度以降の確認調査は、平成16年2月に山田半田遺跡の北側部分と半田口遺跡を、平成17年2月と4月に小ハネ・前畑・大ウフ・半田遺跡を実施した。これらの調査によって、小ハネ・前畑・大ウフ・半田遺跡で古代末～中世の遺構・遺物を確認し、赤連遺跡を含む8遺跡全体の総面積が130,000㎡に及ぶことが明らかとなった。これにより、現在の城久集落を中心に展開するそれぞれの遺跡を城久遺跡群として位置づけ、一連のものとしてとらえるとともに、本調査を実施している山田中西・山田半田遺跡で南西諸島では初見となる重要な遺構・遺物が検出されていることから、遺跡の取り扱いについては保存も視野に入れながら開発との調整を行っていく必要が生じてきた。

このため、町教育委員会ではまだ遺跡の取り扱いについて結論の出していない半田口・大ウフ・半田遺跡について平成17年7月と平成18年2月にの確認町を実施したが、保存する地区とそれ以外の地区を分けるにはさらなる情報の蓄積が必要という結果であった。このような状況の中、平成18年7月と平成19年7月には、城久遺跡群の詳細な内容把握と範囲確認のために文化庁の国庫補助事業を活用しての調査を実施しさらなる情報収集に努めている。

このように度重なる確認調査で一定の成果も上がってきている。それは城久遺跡群のうち山田半田遺跡の掘立柱建物跡集中箇所や前畑遺跡の石敷遺構が確認された箇所などより重要な遺構などが確認された箇所を開発部局や地元農家の理解が得られ工法を盛土工法に変更し現状保存の対策がとれた箇所も出てきている。その面積は、約43,000㎡である。

### 第2節 調査の成果

これまでの発掘調査では、古代～中世の遺構・遺物が多数確認され、南西諸島では他に類を見ない大

規模な集落跡であることがわかってきていると同時に、出土した遺物群は非在地的な様相が強いという特徴がある。最も古い遺物は、山田半田遺跡で出土した8世紀代の須恵器の蓋であるが、出土数が少ない上に同時期の遺物は他になく、その様相は判然としない。

山田中西・山田半田・半田口・小ハネ・前畑・大ウフ遺跡からは9・10世紀頃の遺物と11世紀後半～12世紀頃の遺物、13・14世紀頃の遺物が出土しているが、中でも11世紀後半～12世紀頃の遺物が圧倒的多数を占める。ただし、城久遺跡群の中でももっとも標高の低い半田遺跡では11世紀後半～14世紀頃に位置づけられる遺物が確認されているが、中でも13・14世紀頃の遺物も出土量が多い傾向にある。遺跡群全体を見ると出土した遺物からは9世紀頃～14世紀頃までの時間幅が与えられるが、9・10世紀頃と11世紀後半～12世紀頃、13・14世紀頃の3時期にピークがあると思われる。

以下、各遺跡について概略を述べる。

#### (1) 山田中西遺跡

平成14年度に確認調査、平成15・16年度に本調査を実施した。調査面積は約6,000㎡である。掘立柱建物跡を41棟を復元し、土坑墓10基、炉跡3基、焼土跡3か所、土坑3基、溝状遺構2条などを検出している。出土遺物は土師器・須恵器・越州窯系青磁・布目圧痕土器・白磁・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・龍泉窯系青磁・刀子・鞆の羽口・鉄滓・石器などが出土しているが、中世の傾向を示すものが多い傾向にある。

#### (2) 山田半田遺跡

平成14・15年度に確認調査、平成16・17年度に本調査を実施し、平成19年度も一部調査中である。調査面積は約22,000㎡である。掘立柱建物跡は約50棟復元し、土坑墓5基、炉跡2基、土坑16基、溝状遺構1条、柱穴4,000基などの遺構のほか、土師器・須恵器・越州窯系青磁・布目圧痕土器・灰釉陶器・白磁・青磁・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・鉄製品・鞆の羽口・石器などが出土している。建物には奄美地域特有の1間×1間、1間×2間の掘立柱建物跡も多く見られる。前者には柱穴直径が1.2mと大きく、しかもその四方を30本の柱穴によって囲む特殊な構造のものが1棟確認されている。さらに、柱穴直径が50cmを超える2間×2間の総柱の建物跡や2間×3間の掘立柱建物跡の四方に計34本の柱穴を配置する大型の建物がある。

### (3) 半田口遺跡

平成15～18年度に確認調査が実施されている。平成19年度は本調査を実施し、12,000㎡を調査中である。掘立柱建物跡は約10棟復元し、土坑墓・溝状遺構・土坑などの遺構のほか、土師器・須恵器・越州窯系青磁・白磁・青磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・轆の羽口・石器などの遺物が出土している。

### (4) 小ハネ遺跡

平成17年度に確認調査を実施し、平成18年度に本調査を実施している。調査面積は7,000㎡。掘立柱建物跡を約10棟復元し、土坑墓は5基検出している。また、炉跡10基などの遺構のほか、土師器・須恵器・越州窯系青磁・布目圧痕土器・白磁・青磁・初期高麗青磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・轆の羽口・石器などの遺物が出土している。

### (5) 前畑遺跡

平成17年度に確認調査を実施し、平成18年度に本調査を実施している。調査面積は7,000㎡である。柱穴跡約4,000基を検出し、掘立柱建物跡を約20棟復元している。土坑墓は、8基検出している。また、炉跡4基、溝状遺構2条、柱穴列2列、石敷遺構を確認している。遺物としては土師器・須恵器・越州窯系青磁・布目圧痕土器・兼久式土器・白磁・青磁・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・轆の羽口・砂鉄・石器などが

出土している。なお、砂鉄は包含層中から出土している。

### (6) 大ウフ遺跡

平成16・17年度に確認調査を実施し、平成19年度は本調査を2,000㎡の面積を対象に行っている。掘立柱建物跡を約10棟復元しており、土坑墓3基、焼土跡が約30基と多くそのうち約20基は鍛冶炉跡と考えられる。土師器・須恵器・越州窯系青磁・白磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・龍泉窯系青磁・轆の羽口・砂鉄・鉄滓などの遺物が出土している。また、砂鉄を集積したピット状の土坑を検出している。その他、蔵骨器と考えられる須恵器を伴う土坑墓や木棺墓と思われる土坑墓など城久遺跡群で初見となる事例が確認されている。

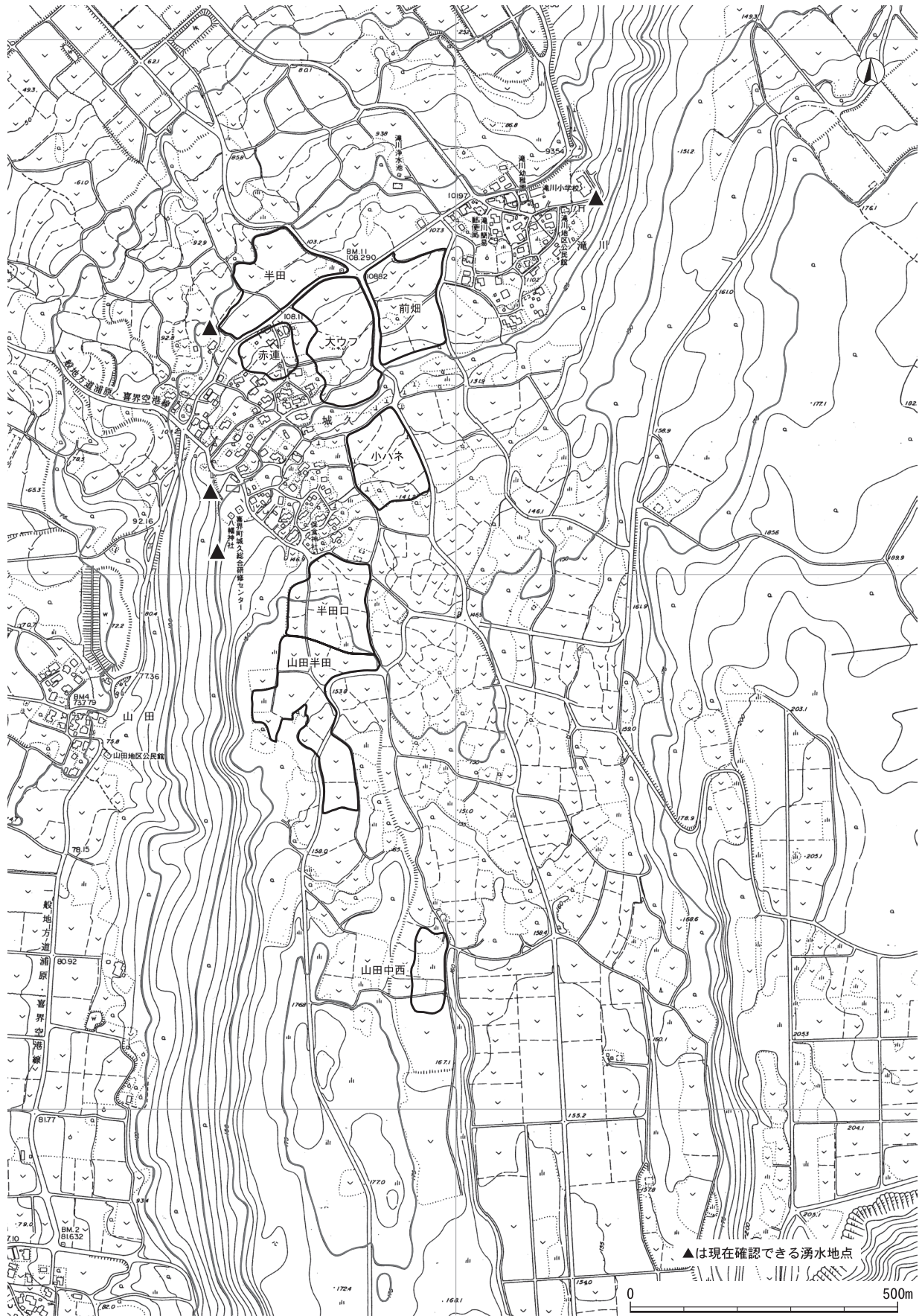
### (7) 半田遺跡

平成16・17・18年度に確認調査などを実施し、古代末から中世の土坑墓・溝状遺構・土坑・柱穴などの遺構を検出している。土坑墓は6基検出し、取り上げた人骨は9体を数える（男性3名・女性3名・乳児1名・性別不明2名）。越州窯系青磁・兼久式土器・白磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・龍泉窯系青磁・ガラス玉などの遺物が出土した。

土坑墓の形状は、基本的に方形状である。全て土葬で、屈葬の状態で検出している。いずれも明瞭な副葬品は確認できていない。

第2表 城久遺跡群発掘調査一覧

遺跡名	調査の種類	調査期間	調査面積	時代	遺構	遺物	調査主体		
山田中西	本調査(畑)	平成15年5月～8月	5,900㎡	古代末～中世	掘立柱建物跡(4)、土坑墓(10)、炉跡(3)、土坑(6)、焼土跡(3)、溝状遺構(2)、柱穴列(7)	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目圧痕土器、白磁、初期高麗青磁、朝鮮系無釉陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、轆の羽口ほか	町教育委員会		
	本調査(通)	平成15年12月 平成16年10月～12月					県文化財課・町教育委員会		
山田半田	本調査	平成16年5月～8月 平成17年4月～平成18年3月	22,000㎡	古代末～中世	掘立柱建物跡(50)、土坑墓(5)、土坑(16)、古道(1)、炉跡(2)	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目圧痕土器、灰釉陶器、白磁、初期高麗青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、轆の羽口ほか	町教育委員会		
	本調査	平成19年4月～平成20年3月	800㎡				土師器、須恵器、白磁、カムイヤキ、滑石製石鍋ほか		
半田口	確認調査	平成15年2月、平成16年2月 平成17年7月、平成18年2月	2,500㎡	古代末～中世	柱穴、土坑、溝状遺構	土師器、須恵器、白磁、青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋ほか	町教育委員会		
	確認調査(国)	平成18年7月	800㎡					柱穴多数	土師器、須恵器、カムイヤキ、石器ほか
	本調査	平成19年4月～平成20年3月	11,200㎡					掘立柱建物跡(6)、土坑墓(1)	土師器、須恵器、越州窯系青磁、白磁、カムイヤキ、滑石製石鍋ほか
小ハネ	本調査	平成18年4月～平成19年3月	7,000㎡	古代末～中世	掘立柱建物跡(11)、土坑墓(6)、炉跡(10)	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目圧痕土器、白磁、初期高麗青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、轆の羽口ほか	町教育委員会		
前畑	本調査	平成18年4月～平成19年3月	7,000㎡	古代末～中世	掘立柱建物跡(19)、土坑墓(8)、炉跡(4)、溝状遺構(2)、石敷遺構(1)	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目圧痕土器、兼久式土器、白磁、初期高麗青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、轆の羽口、砂鉄ほか	町教育委員会		
大ウフ	確認調査	平成16年2月～3月 平成17年7月、平成18年2月	500㎡	古代末～中世	柱穴、土坑、溝状遺構	土師器、須恵器、越州窯系青磁、朝鮮系無釉陶器、白磁、青磁、カムイヤキほか	町教育委員会		
	確認調査(国)	平成18年7月	700㎡					柱穴多数、溝状遺構	土師器、須恵器、カムイヤキ、石器ほか
	本調査	平成19年4月～10月	2,000㎡					掘立柱建物跡(11)、土坑墓(2)、炉跡(30)、焼土跡(2)	土師器、須恵器、越州窯系青磁、白磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、轆の羽口、砂鉄ほか
半田	確認調査	平成17年2月～3月、4月～5月、7月 平成18年2月、10月	3,000㎡	古代末～中世	柱穴、土坑墓(5)、溝状遺構、土坑	越州窯系青磁、兼久式土器、白磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、龍泉窯系青磁、ガラス玉ほか	町教育委員会		
	確認調査(国)	平成18年7月	200㎡					柱穴、土坑墓(1)	土師器、白磁、青磁、石器ほか
赤連	分布調査	平成8年農政分布調査		中世					



第2図 城久遺跡群遺跡位置図



第3図 山田中西遺跡調査範囲図

## 第Ⅳ章 調査の概要

### 第1節 発掘調査の方法

平成15年度の本調査は、東から西方向に1・2…、北から南方向にA・Bとする10m間隔の調査用グリッドを設定して実施した。伐採などの環境整備を実施した後、重機によって表土を除去し、遺物包含層であるⅡ層を人力で掘り下げ、Ⅲ層上面で遺構検出を行った。検出した遺構については、掘り下げを行い、写真撮影や50分の1の遺構配置図、10分の1の個別図の作成を行った。なお、掘立柱建物跡の復元は、H-5区の2基を除き殆どは、整理作業の段階で図上復元を行った。発掘調査終了後は、プレハブなどの撤収を終え鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所土地改良課）へ調査現場を引き渡した。

### 第2節 発見された遺構・遺物

調査では、古代末～中世（9世紀～13世紀）の遺構・遺物が発見された。遺構は、掘立柱建物跡37棟、土坑墓7基、炉跡2基、土坑1基、柱穴列6列、ピット約1,400基を検出した。遺物は土師器・須恵器・越州窯系青磁・布目圧痕土器・白磁・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・龍泉窯系青磁・刀子・ガラス玉・銭・鞆の羽口・鉄滓・石器などが出土した。調査成果の詳細については、第Ⅴ章でふれることとする。なお、陶磁器の分類は太宰府分類を参考にしている。

### 第3節 層位

遺跡の土層は大きく4層に分けることができる。石灰岩の風化土壌であるために堆積は薄く、表土から基盤層までの深度は40cm程である。

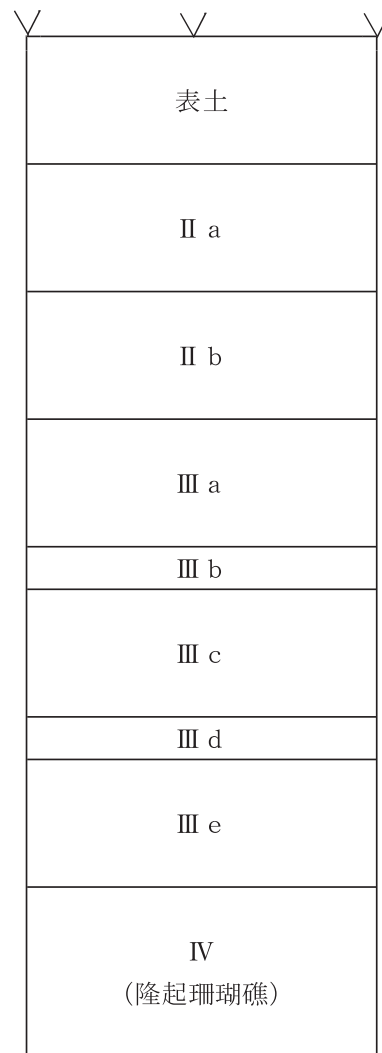
I層——灰褐色粘質土で、サトウキビ畑の耕作土として利用されている。

Ⅱ層——硬質の黒褐色粘質土で古代・中世の遺物包含層である。削平されている地点も多い。鉄製品と人骨の保存状態は比較的良好であるが、土師器の残りは非常に悪い。層厚は10～30cmで、炭化物・焼土を多く含んでいる。

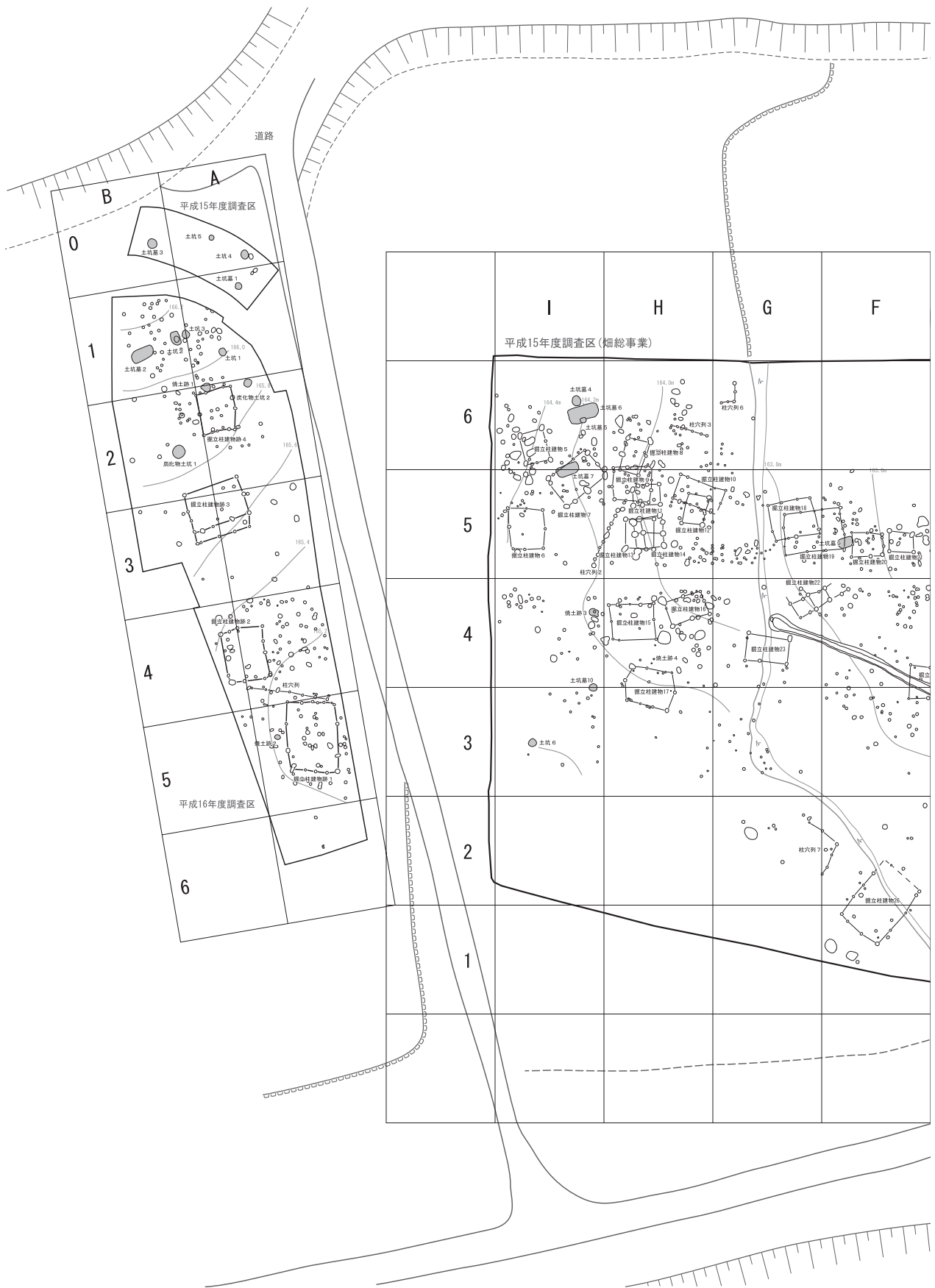
Ⅲ層——赤褐色粘質土で一般にマージと呼ばれる

遺跡の基盤層である。

Ⅳ層——隆起珊瑚礁である。調査区の至る所に露頭がみられる。



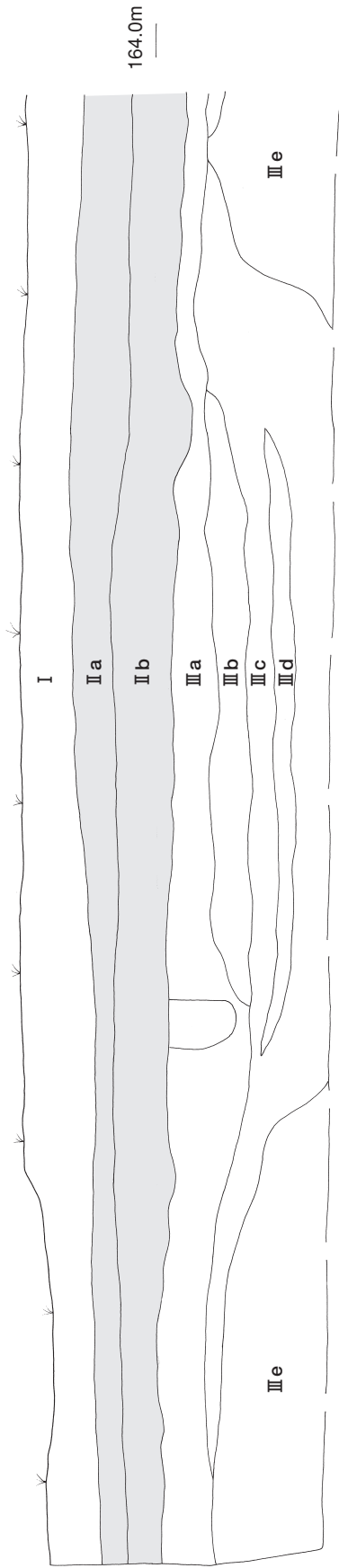
第4図 基本土層図



第5図 山田中西遺跡全体遺構配置図

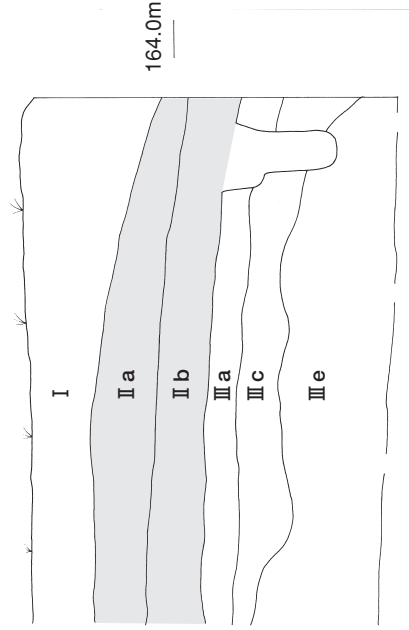






**土層説明**

- I 層 淡褐色粘質土層。表土。現代の耕作土である。
- II a 層 淡茶褐色粘質土層。遺物包含層。
- II b 層 濃茶褐色強粘質土層。遺物包含層。赤色粒・炭化物細粒などを多く含む。
- III a 層 暗紫褐色強粘質土層。この面の上面で古代・中世の遺構が検出される。地山。
- III b 層 暗茶褐色粘質土層。地山。
- III c 層 明黄褐色強粘質土層。地山。
- III d 層 黄褐色粘質土層。地山。
- III e 層 赤褐色強粘質土層。地山。



第6図 土層断面図

# 第V章 発掘調査の成果

## 第1節 遺構

### 1 掘立柱建物跡，柱穴列

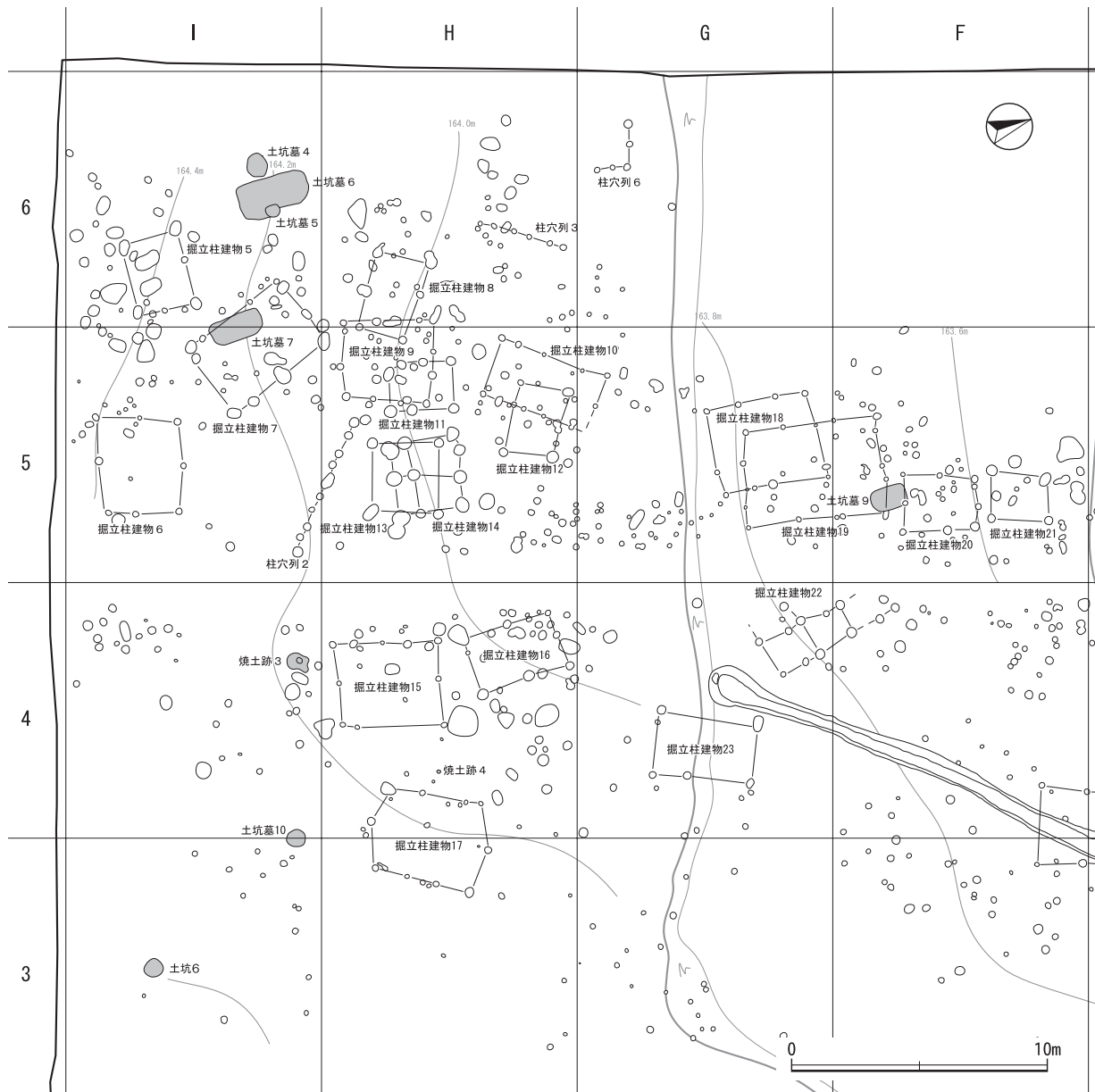
37棟の掘立柱建物跡を検出した。建物跡の規模は2×1間や3×2間を主体とする。H-5・6, F・G-5区, C・D-3・4区付近には建物群の集中が見られる。ただし、検出された遺構面には所々に段差があり、近世以降の削平の影響を受けている可能性が高い。検出された掘立柱建物跡は平面的な重複が見られ、主軸方向から見ても複数の時期に細分される可能性が高い。

### 掘立柱建物跡5号(第10図, 第3表)

I-6区で検出している。建物の北側・東側の柱間にはそれぞれ径の小さな柱穴が確認できる。平面プランは方形状であり、面積は小さい部類に入る。柱穴内から土師器, カムイヤキなどが出土している。

### 掘立柱建物跡6号(第11図, 第4表)

I-5区で検出している。2×2間の建物跡である。東側でやや柱間間隔が短く、ややいびつである。柱穴内からは土師器や滑石製品が出土している。



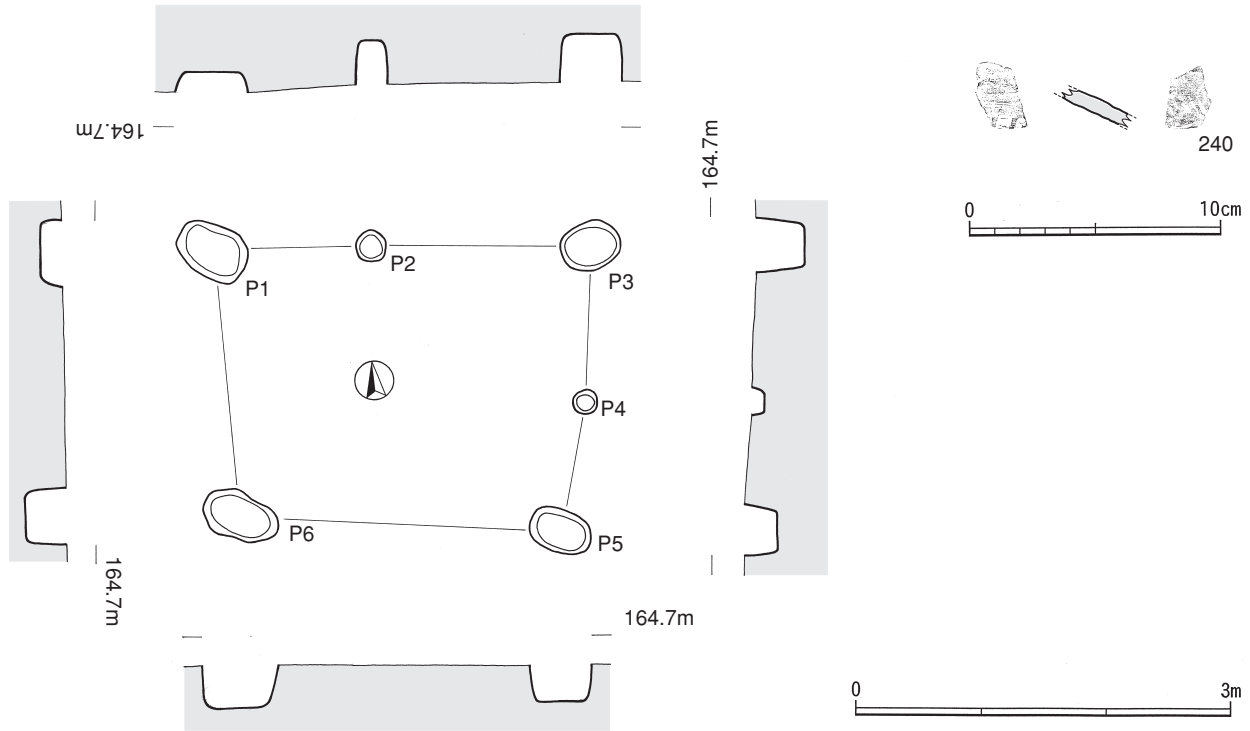
第7図 遺構配置図(1)



第8図 遺構配置図(2)



第9図 遺構配置図(3)



第10図 掘立柱建物跡5号

掘立柱建物跡7号 (第12図, 第5表)

I-5・6区で検出している。3×2間の建物跡である。柱間隔・直径にばらつきが見られる。本掘立柱建物跡は土坑墓7号と重複しているが、前後関係は不明である。東側にやや大きな柱穴が並んでいる。柱穴内からは滑石製品などが出土している。

掘立柱建物跡8号 (第13図, 第6表)

H-5・6区で検出している。2×1間の建物跡である。梁行の東側でやや短くなっている。掘立柱建物跡9号と重複している。柱穴内からは白磁・滑石製品などの遺物が出土している。

掘立柱建物跡9号 (第14図, 第7表)

H-5・6区で検出している。3×3間の建物跡

である。P9とP10の間隔が非常に狭い。掘立柱建物跡8・10号と重複している。柱穴内からは白磁や滑石製品などの遺物が出土している。

掘立柱建物跡10号 (第15図, 第8表)

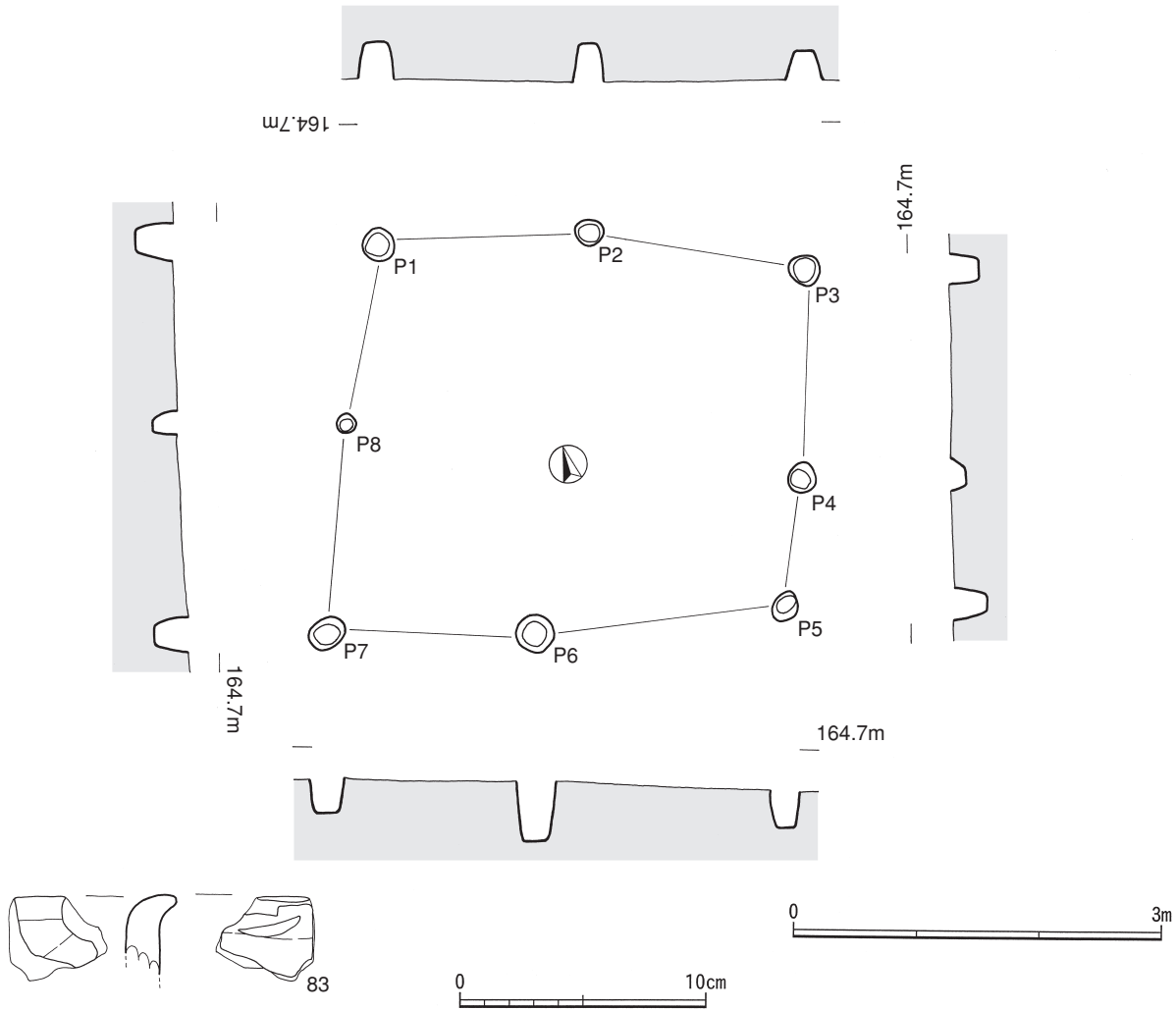
H-5区で検出している。北東-南西方向に主軸を持つ細長い建物跡である。掘立柱建物跡12号と重複している。柱穴内からは土師器・須恵器・カムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡11号 (第16図, 第9表)

H-5区で検出している。西側の桁間で柱間が1つ多くなっているが、それ以外の柱穴はやや深い。柱穴内からは土師器や白磁が出土している。

第3表 掘立柱建物5号計測表

梁行方向		桁行方向		方向 N 85° W		遺物			
1-6	208cm	平均	208cm	6-5	260cm	平均	260cm	P直径 21~63cm P深さ 10~39cm 床面積 6.7㎡	1:土師器(1) 2:カムイヤキ(1), 滑石製品(1), 土師器(3), 轡の羽口(1) 5:石器(1) 6:土師器(2), 粘土塊(2) [掲載遺物] 2:第67図240
3-5	232cm	平均	116cm	1-3	306cm	平均	153cm		
1-6	208cm	3-4	124cm	1-2	128cm	6-5	260cm		
		4-5	108cm	2-3	178cm				



第11図 掘立柱建物跡6号

掘立柱建物跡12号 (第17図, 第10表)

H-5区で検出している。2×1間の建物跡である。東側の梁間では柱穴が大きく、深くなっている。掘立柱建物跡10号と重複している。柱穴内からは土師器や滑石製品が出土している。

掘立柱建物跡13号 (第18図, 第11表)

H-5区で検出している。1×1間の建物跡であ

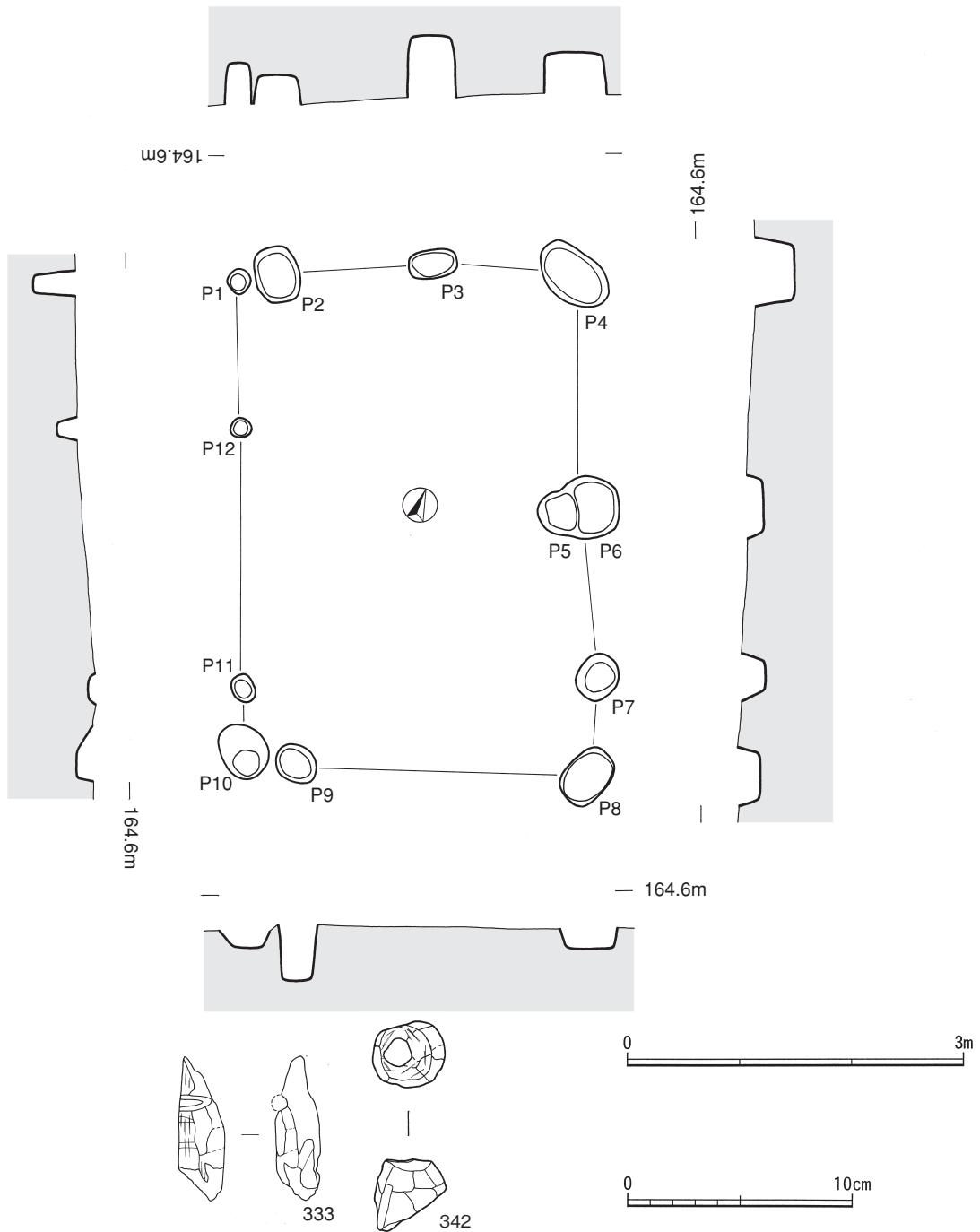
る。柱間隔は270cm前後であり、平面プランは方形形状である。掘立柱建物跡14号と重複している。

掘立柱建物跡14号 (第19図, 第12表)

H-5区で検出している。北側で1間多いが、2×2間の建物跡であると考えられる。柱穴の深さは70cm前後であるが、P5のみ浅い。掘立柱建物跡13号と重複している。

第4表 掘立柱建物6号計測表

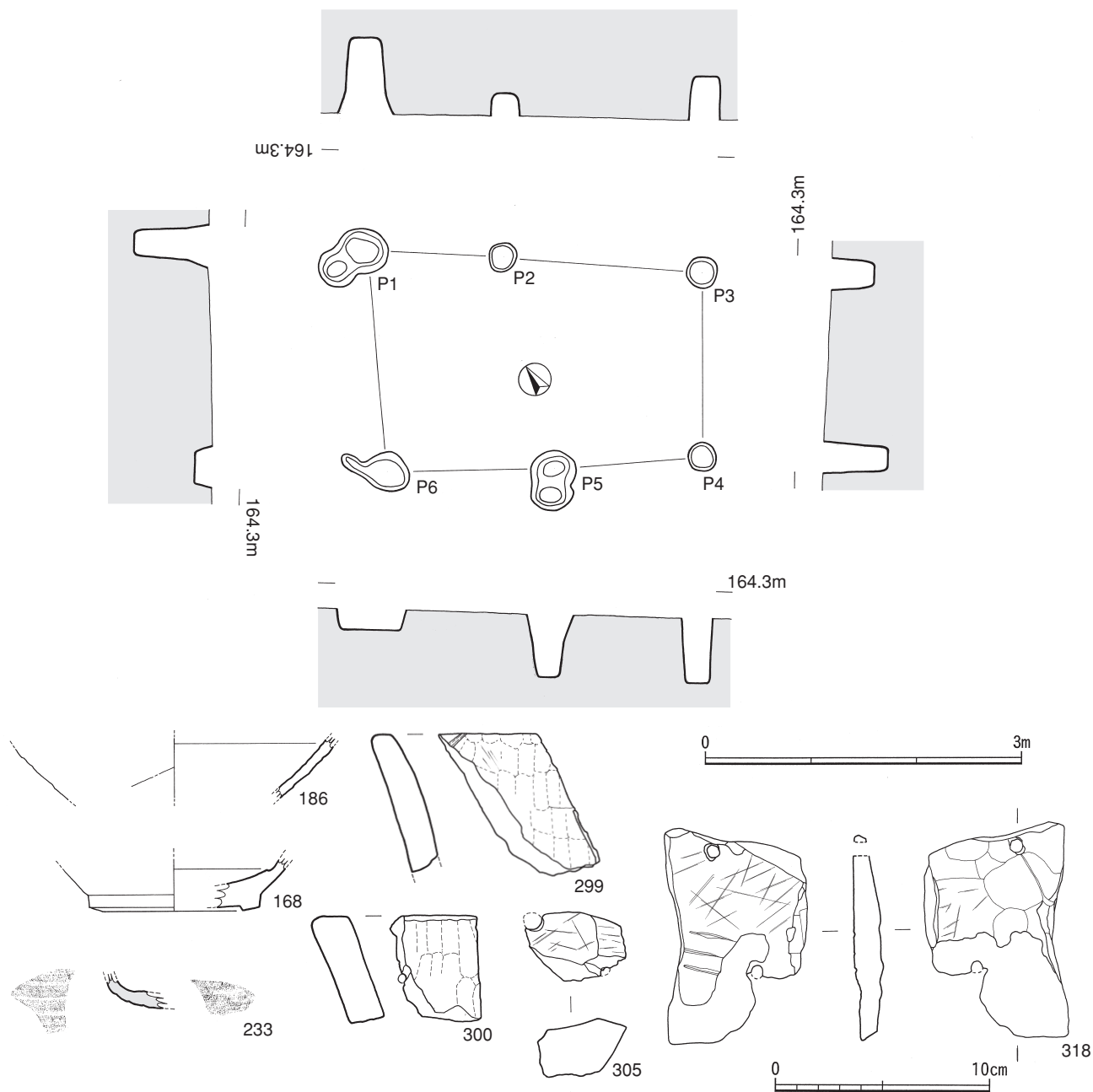
梁行方向				桁行方向				方向 N 77° W	遺物
1-7	324cm	平均	162cm	1-3	356cm	平均	178cm	P直径 17~30cm	1:土師器(1)
3-5	272cm	平均	136cm	7-5	380cm	平均	190cm	P深さ 12~50cm	3:石器(1)
1-8	152cm	3-4	168cm	1-2	176cm	7-6	172cm	床面積 11.1㎡	4:滑石製品(2)
8-7	172cm	4-5	104cm	2-3	180cm	6-5	208cm		5:土師器(1), 轡の羽口(2)
									7:土師器(1)
									8:土師器(1), 轡の羽口(1)
									[掲載遺物]
									3:第78図399 [石器]
									8:第59図83



第12図 掘立柱建物跡7号

第5表 掘立柱建物7号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 25° W	遺物
1-4	284cm	平均	95cm	4-8	454cm	平均	151cm	P直径 20~72cm	1:滑石製品(1), 鉄滓(2)
10-8	308cm	平均	154cm	1-10	400cm	平均	133cm	P深さ 9~51cm	3:軽石(1), 石器(1), 土師器(1), 粘土塊(2)
1-2	34cm	10-9	48cm	4-6	212cm	1-12	128cm	床面積 12.9㎡	6:軽石(1)
2-3	122cm	9-8	260cm	6-7	152cm	12-11	236cm		7:滑石製品(1)
3-4	128cm			7-8	90cm	11-10	36cm		11:滑石製品(2), 石器(1), 土師器(2)
									12:滑石製品(1), 軽石(1), 土師器(1)
									[掲載遺物]
									11:第72図333
									12:第72図342

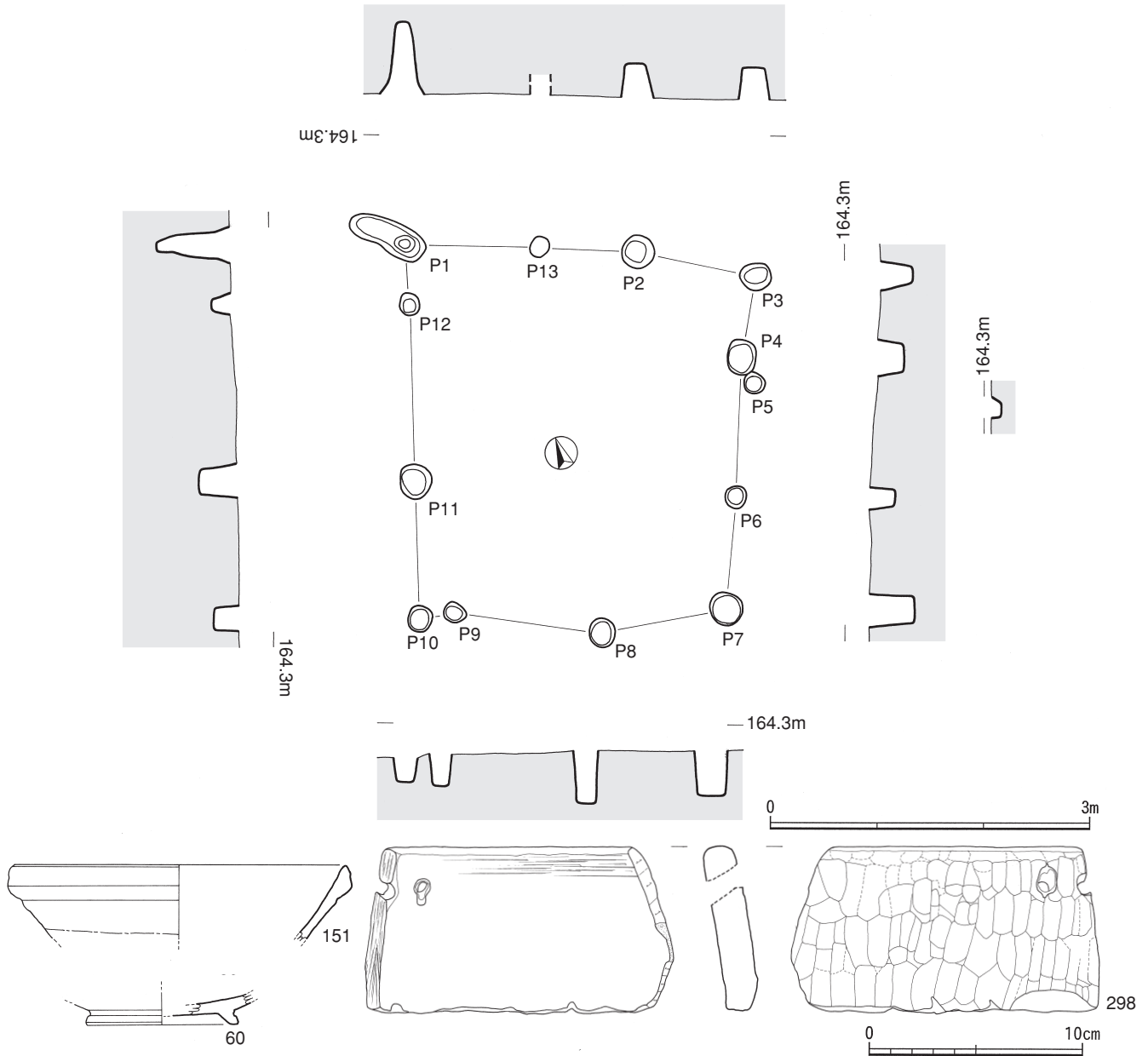


第13図 掘立柱建物跡8号

第6表 掘立柱建物8号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 50° W	遺物
1-6	214cm	平均	214cm	1-3	328cm	平均	164cm	P直径 29~72cm	1 : カムイヤキ(1), 滑石製品(5), 石器(6), 土師器(1), 轡の羽口(4)
3-4	176cm	平均	176cm	4-6	300cm	平均	150cm	P深さ 17~84cm	
				1-2	140cm	5-4	140cm	床面積 6.2㎡	2 : 石器(1), 中世白磁(2) 5 : 滑石製品(5), 軽石(1), 鉄滓(1), 土師器(1), 中世白磁(1), 轡の羽口(1)
				2-3	188cm	6-5	160cm		
[掲載遺物]									
1 : 第67図233, 第71図305, 第71図300									
2 : 第64図169, 第64図186									
5 : 第71図318, 第70図299									

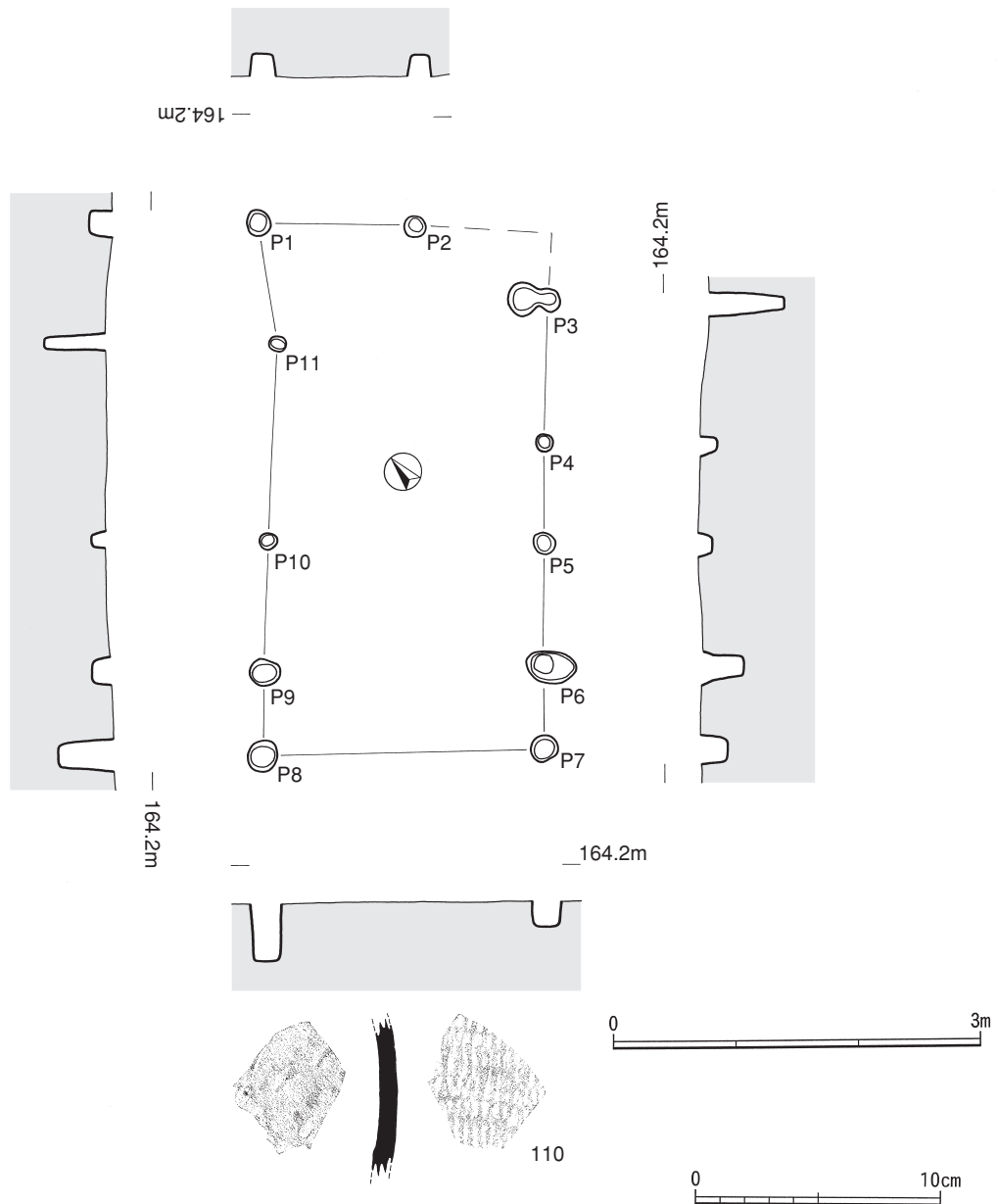




第14図 掘立柱建物跡9号

第7表 掘立柱建物9号計測表

梁行方向			桁行方向			方向 N 20° E	遺物
1-3	335cm	平均 168cm	3-7	363cm	平均 121cm	P直径 21~77cm	1:滑石製品(2), 石器(1)
10-7	303cm	平均 101cm	1-10	357cm	平均 119cm	P深さ 20~69cm	2:韃の羽口(2)
1-2	219cm	10-9 36cm	1-12	57cm	3-4 123cm	床面積 11.5㎡	3:鉄滓(1), 土師器(1), 粘土塊(3)
2-3	116cm	9-8 147cm	12-11	168cm	4-6 132cm		8:黒色土器(1), 土師器(2), 粘土塊(2)
		8-7 120cm	11-10	132cm	6-7 108cm		10:石器(1)
							11:中世白磁(1)
							12:土師器(1)
							[掲載遺物]
							1:第70図298
							8:第59図60
							10:第79図402 [石器]
							11:第64図151



第15図 掘立柱建物跡10号

掘立柱建物跡15号 (第20図, 第13表)

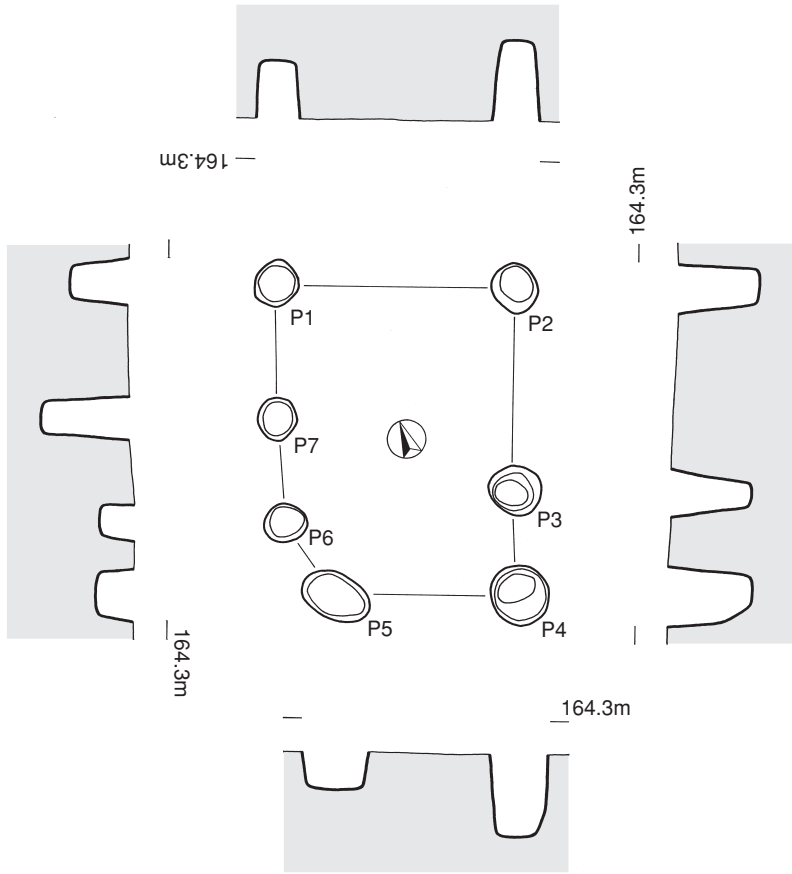
H-4区で検出している。東側で柱穴が確認できなかった部分があるが、4×2間の建物跡であると考えられる。柱穴内からは土師器やカムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡16号 (第21図, 第14表)

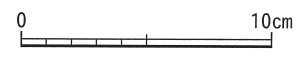
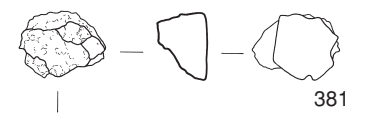
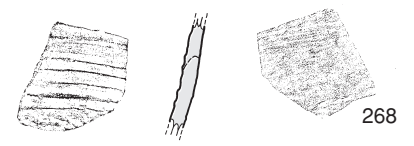
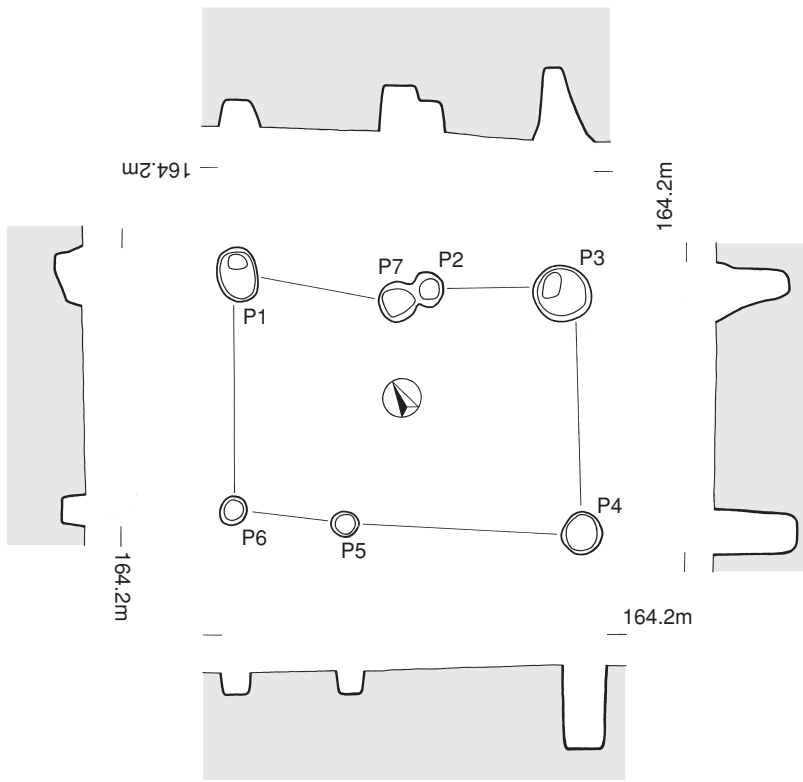
H-4区で検出している。2×2間の建物跡である。ほぼ南北方向に主軸を持つ。柱穴内から土師器・須恵器・滑石製品などが出土している。

第8表 掘立柱建物10号計測表

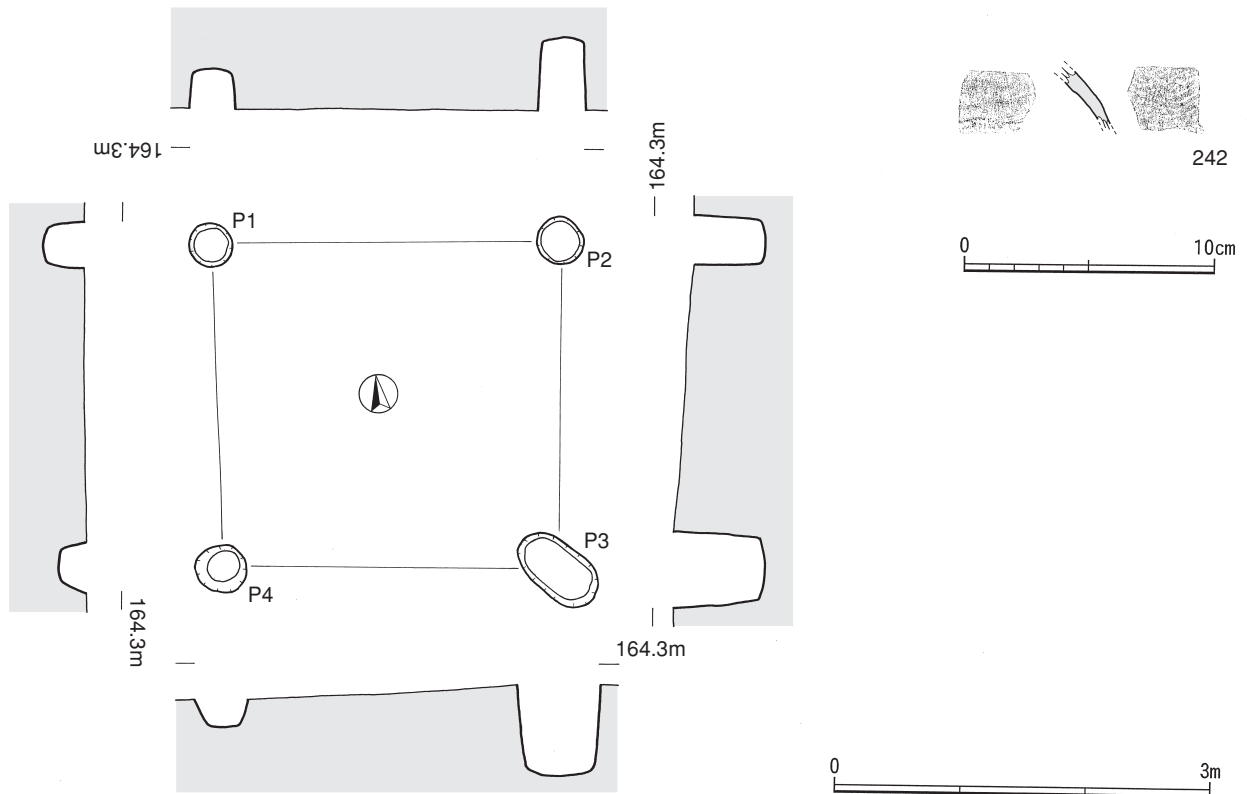
梁行方向				桁行方向				方向 N 40° E	遺物
8-7	228cm	平均	228cm	3-7	366cm	平均	92cm	P直径 15~42cm	1 : 鞆の羽口(1)
1-2	128cm	平均	128cm	1-8	436cm	平均	109cm	P深さ 12~65cm	3 : 須恵器(1), 土師器(6)
				1-11	94cm	3-4	120cm	床面積 10.1㎡	6 : 滑石製品(2), 土師器(2), 中世白磁(1)
				11-10	164cm	4-5	82cm		7 : 鉄滓(1), 土師器(1), 鞆の羽口(2)
				10-9	108cm	5-6	100cm		11 : 土師器(3)
				9-8	70cm	6-7	64cm		[掲載遺物]
									3 : 第60図110



第16图 掘立柱建物跡11号



第17图 掘立柱建物跡12号



第18図 掘立柱建物跡13号

第9表 掘立柱建物11号計測表

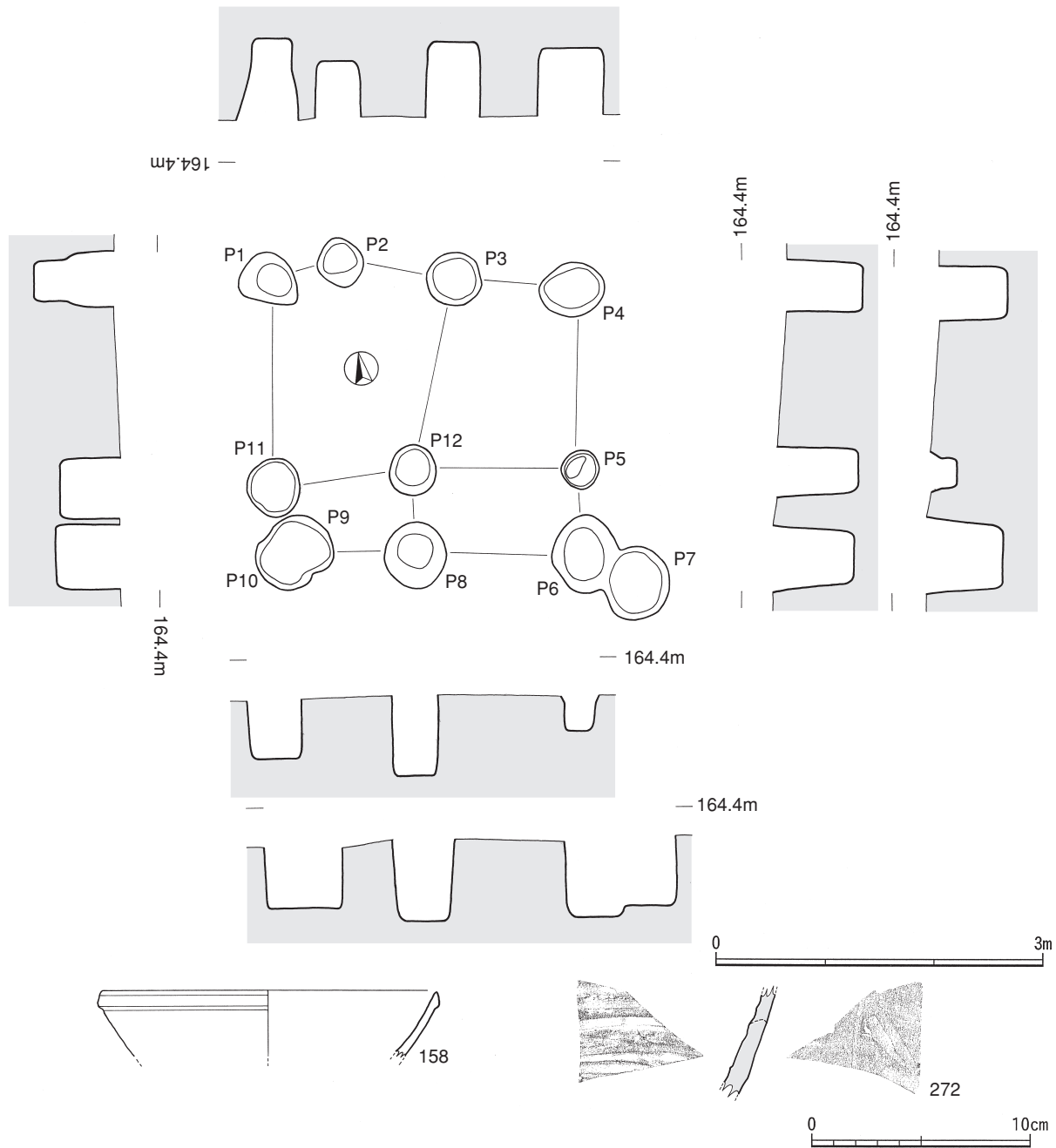
梁行方向				桁行方向				方向 N 20° E	遺物
1-2	195cm	平均	195cm	1-6	246cm	平均	123cm	P直径 36~57cm	1 : 滑石混入土器(1), 滑石製品(1), 石器(1), 土師器(1) 3 : 滑石製品(1), 鉄滓(1), 中世白磁(1), 轆の羽口(6) 5 : 土師器(2) 7 : 朝鮮系無釉陶器(1), 石器(7), 土師器(4), 粘土塊(8), 布目圧痕土器(2), 轆の羽口(3) [掲載遺物] 1 : 第73図352 7 : 第68図251
5-4	147cm	平均	147cm	2-5	261cm	平均	87cm	P深さ 30~72cm	
				1-7	108cm	2-3	261cm	床面積 4.3㎡	
				7-6	81cm	3-4	75cm		
				6-5	72cm				

第10表 掘立柱建物12号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 50° W	遺物
1-6	192cm	平均	192cm	1-6	262cm	平均	131cm	P直径 23~47cm	2 : 滑石製品(1), 轆の羽口(5) 3 : 土師器(4) 4 : カムイヤキ(1), 滑石製品(1), 軽石(1), 石器(1), 土製品(1), 轆の羽口(11) 7 : 滑石混入土器(2), 粘土塊(2) [掲載遺物] 4 : 第68図268, 第76図381
3-4	198cm	平均	198cm	3-4	280cm	平均	140cm	P深さ 18~71cm	
				2-3	108cm	4-5	190cm	床面積 5.4㎡	
				1-2	154cm	5-6	90cm		

第11表 掘立柱建物13号計測表

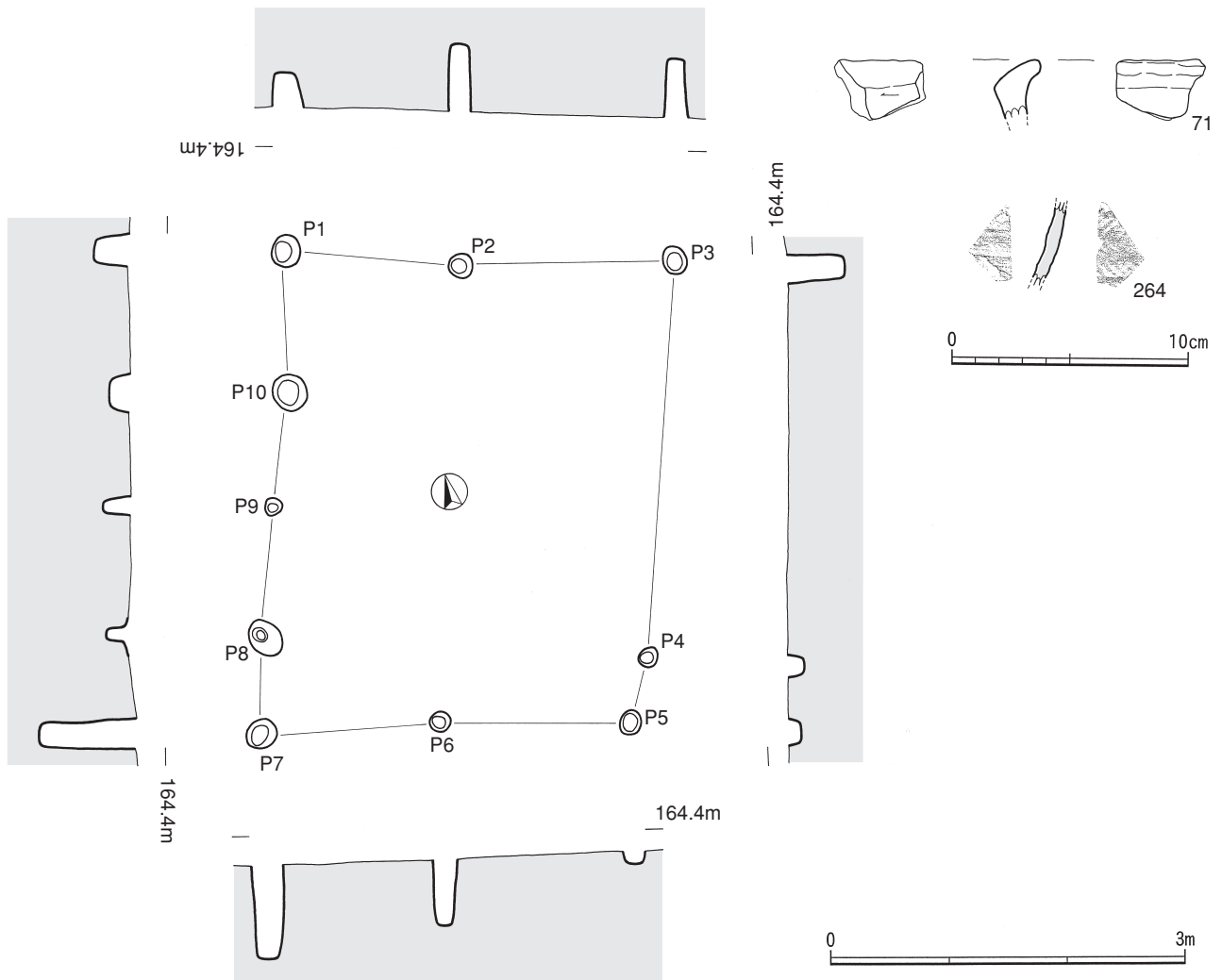
梁行方向				桁行方向				方向 N 85° W	遺物
1-4	261cm	平均	261cm	4-3	270cm	平均	270cm	P直径 36~74cm	1 : カムイヤキ(1), 滑石製品(1), 土師器(1), 轆の羽口(1) 4 : 滑石製品(1), 石器(1) [掲載遺物] 1 : 第67図242
2-3	264cm	平均	264cm	1-2	282cm	平均	282cm	P深さ 22~73cm	
								床面積 7.3㎡	



第19図 掘立柱建物跡14号

第12表 掘立柱建物14号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 75° W	遺物
1-10	264cm	平均	132cm	1-4	288cm	平均	96cm	P直径 38~114cm P深さ 33~75cm 床面積 7.0㎡ 3:滑石製品(1), 中世白磁(1) 4:滑石製品(1) 6:カムイヤキ(1), 滑石製品(2), 土師器(1) 9:滑石製品(1) 10:石器(1) 11:滑石製品(2), 土師器(1) 12:滑石製品(1), 石器(5), 炭化物(1), 土師器(1) [掲載遺物] 3:第64図158 6:第68図272	
4-6	244cm	平均	122cm	10-6	280cm	平均	140cm		
3-8	256cm	平均	128cm	11-5	288cm	平均	144cm		
1-11	192cm	4-5	164cm	1-2	64cm	10-8	124cm		
11-10	72cm	5-6	80cm	2-3	112cm	8-6	156cm		
		3-12	180cm			11-12	136cm		
		12-8	76cm			12-5	152cm		



第20図 掘立柱建物跡15号

掘立柱建物跡17号 (第22図, 第15表)

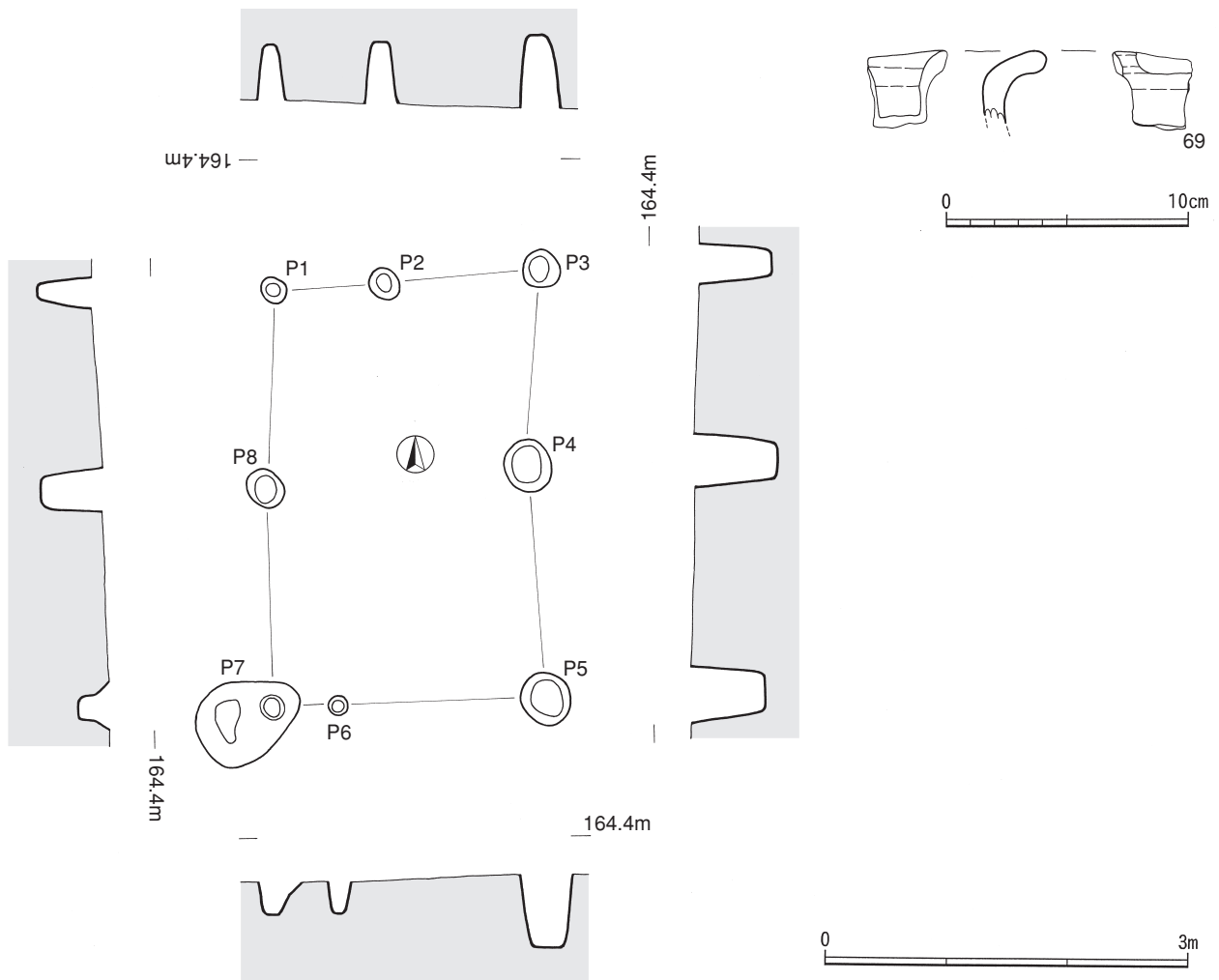
H-3・4区で検出している。3×2間の建物跡である。梁間が外側に張り出している。柱間は比較的そろっているが柱穴の深さはばらつきが見られる。柱穴内から土師器や須恵器などが出土している。128は越州窯系青磁である。大宰府分類Ⅲ類に相当する。

掘立柱建物跡18号 (第23図, 第16表)

G-5区で検出している。3×2間の建物跡である。桁間の西側は比較的柱間間隔がそろっているが、東側ではばらついている。掘立柱建物跡19号と重複している。柱穴内から白磁や朝鮮系無釉陶器が出土している。133は大宰府分類白磁碗Ⅰ類に相当する。邢窯・定窯系のもので精製品である。

第13表 掘立柱建物15号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 20° E	遺物
1-3	316cm	平均	129cm	1-7	423cm	平均	106cm	P直径 15~35cm	2:石器(1), 土師器(3)
7-5	315cm	平均	158cm	3-5	405cm	平均	203cm	P深さ 12~83cm	4:土師器(2)
1-2	150cm	7-6	153cm	1-10	120cm	3-4	342cm	床面積 13.1㎡	7:土師器(4)
2-3	183cm	6-5	162cm	10-9	99cm	4-5	63cm		8:カムイヤキ(1)
				9-8	111cm				9:土師器(3)
				8-7	93cm				10:土師器(1)
									[掲載遺物]
									8:第68図264
									10:第59図71



第21図 掘立柱建物跡16号

掘立柱建物跡19号 (第24図, 第17表)

F・G-5区で検出している。3×4間の建物跡である。桁間間隔が150～200cmと長い、それに対して梁間間隔は非常に短く、間数が多い。柱穴の直径はいずれも小さいものが多い。掘立柱建物跡18号と重複している。柱穴内から須恵器や滑石製品が出土している。

掘立柱建物跡20号 (第25図, 第18表)

F-5区で検出している。北側の梁間で間隔がやや狭く、間数にもばらつきが見られる。土坑墓9号を切っている。柱穴内からは土師器や滑石製品が出土している。

土している。

掘立柱建物跡21号 (第26図, 第19表)

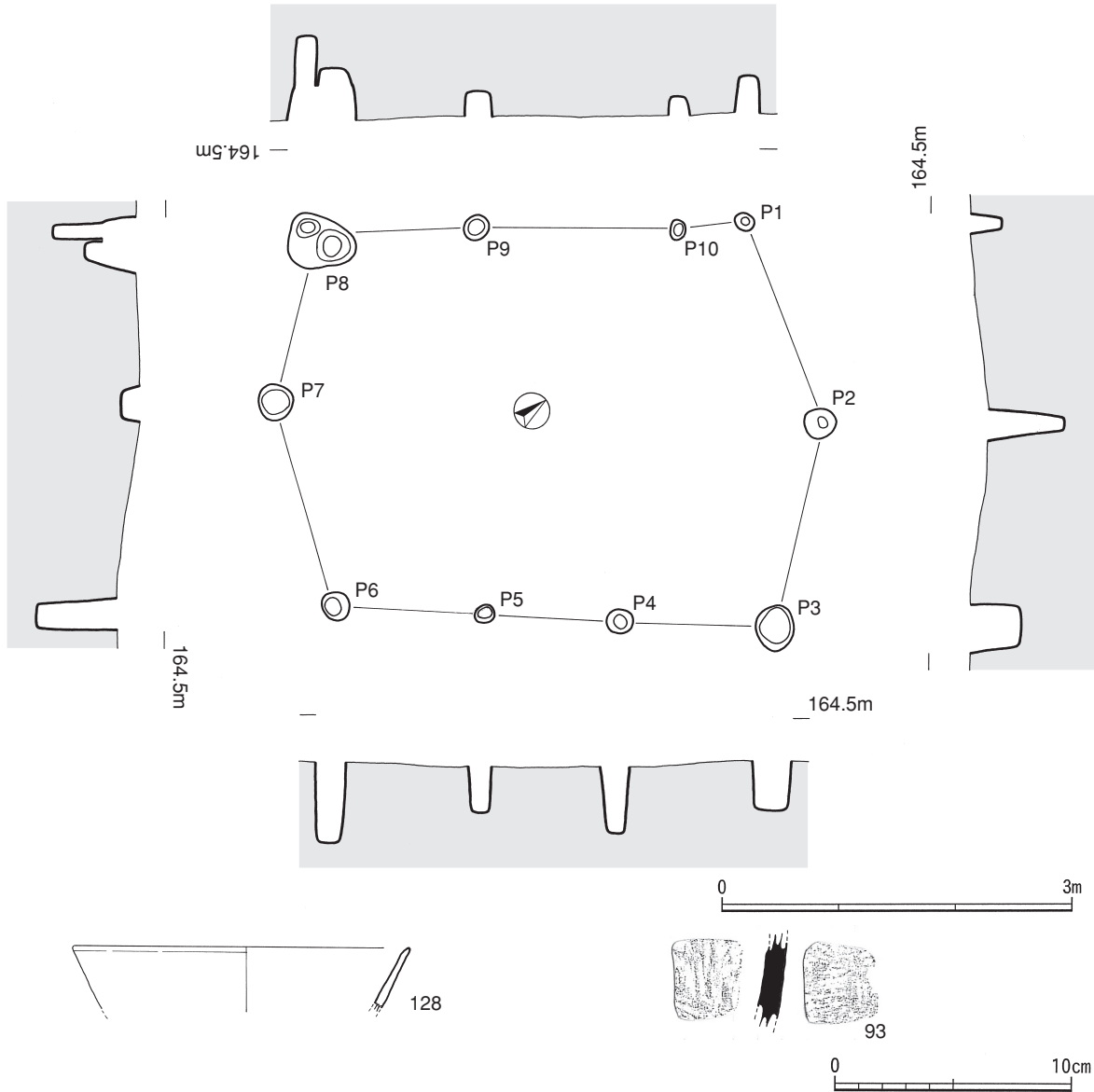
F-5区で検出している。1×1間の建物跡である。P1は柱穴の直径は大きい、他の柱穴に比べてやや浅い。柱穴内から白磁や滑石製品が出土している。

掘立柱建物跡22号 (第27図, 第20表)

F・G-4区で検出している。周囲の状況からより大きな建物跡になる可能性が考えられる。柱穴の間隔・深さには比較的まとまりが見られる。柱穴内からは土師器・滑石製品が出土している。

第14表 掘立柱建物16号計測表

梁行方向			桁行方向			方向 N 3° W	遺物
1-3	224cm	平均 112cm	1-7	348cm	平均 174cm	P直径 17~45cm	5: 滑石製品(1), 須恵器(1), 石器(1), 土師器(3)
7-5	232cm	平均 116cm	3-5	360cm	平均 180cm	P深さ 27~60cm	7: 土師器(3)
1-2	92cm	7-6 56cm	1-8	168cm	3-4 164cm	床面積 8.1㎡	[掲載遺物]
2-3	132cm	6-5 176cm	8-7 180cm	4-5 196cm			5: 第59図69



第22図 掘立柱建物跡17号

掘立柱建物跡23号 (第28図, 第21表)

G-4区で検出している。西側で柱が足りないが、2×1間の建物跡であると考えられる。柱穴内から土師器・滑石製品が出土している。

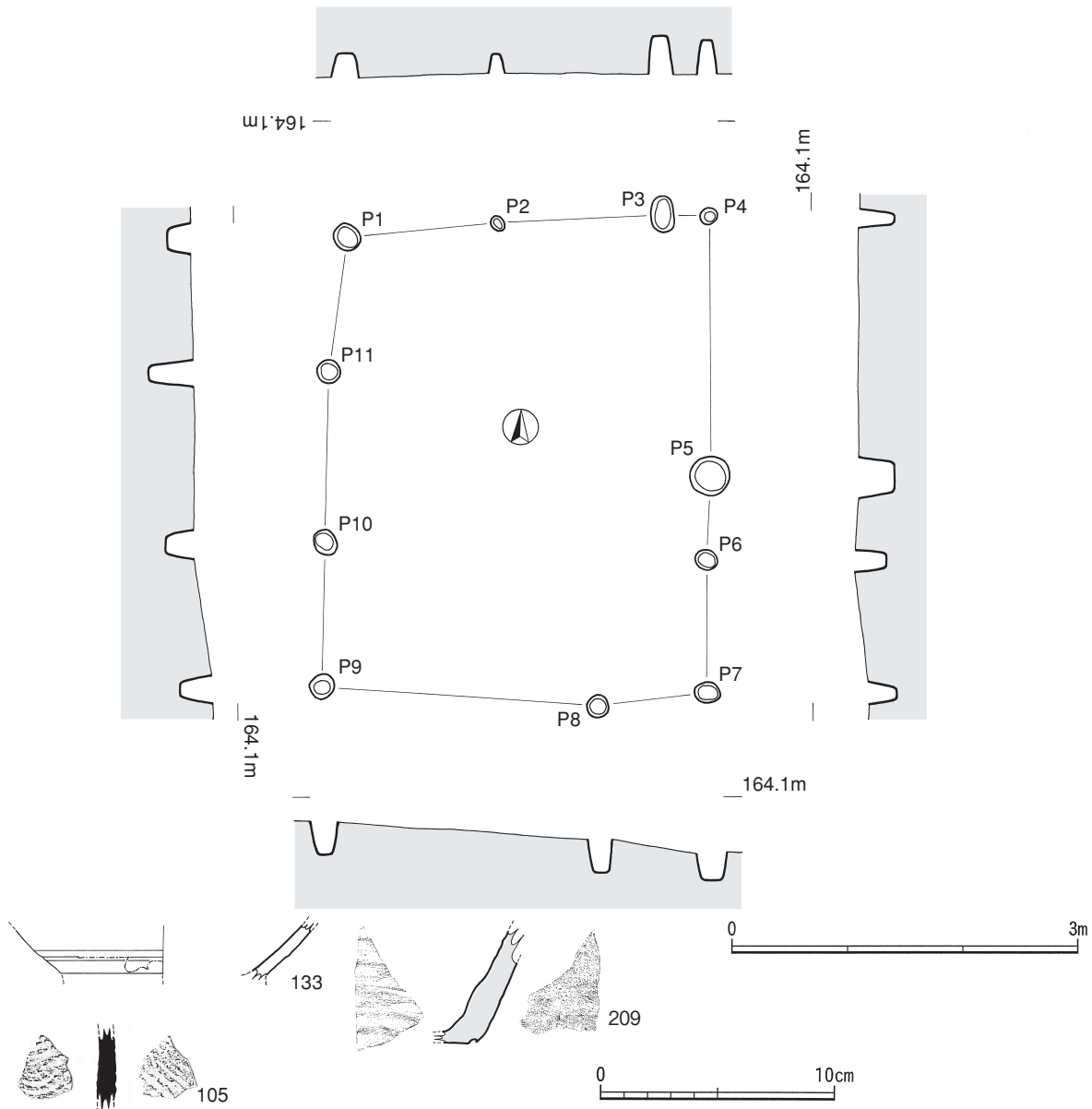
掘立柱建物跡24号 (第29図, 第22表)

E・F-3・4区で出土している。2×1間の建物跡である。溝状遺構1と重複している。柱穴内からは土師器・滑石製品が出土している。

第15表 掘立柱建物17号計測表

梁行方向		桁行方向		方向 N 30° E		遺物				
1-3	352cm	平均	176cm	3-6	382cm	平均	127cm	P直径	18~60cm	7 : 越州窯系青磁(1), 石器(1)
8-6	316cm	平均	158cm	1-8	366cm	平均	122cm	P深さ	17~74cm	8 : 石器(1), 鉄滓(1), 土師器(2)
1-2	176cm	8-7	136cm	3-4	132cm	1-10	58cm	床面積	12.2㎡	9 : 須恵器(1), 石器(1)
2-3	176cm	7-6	180cm	4-5	118cm	10-9	176cm			[掲載遺物]
				5-6	132cm	9-8	132cm			7 : 第62図128
										9 : 第60図93





第23図 掘立柱建物跡18号

掘立柱建物跡25号（第30図，第23表）

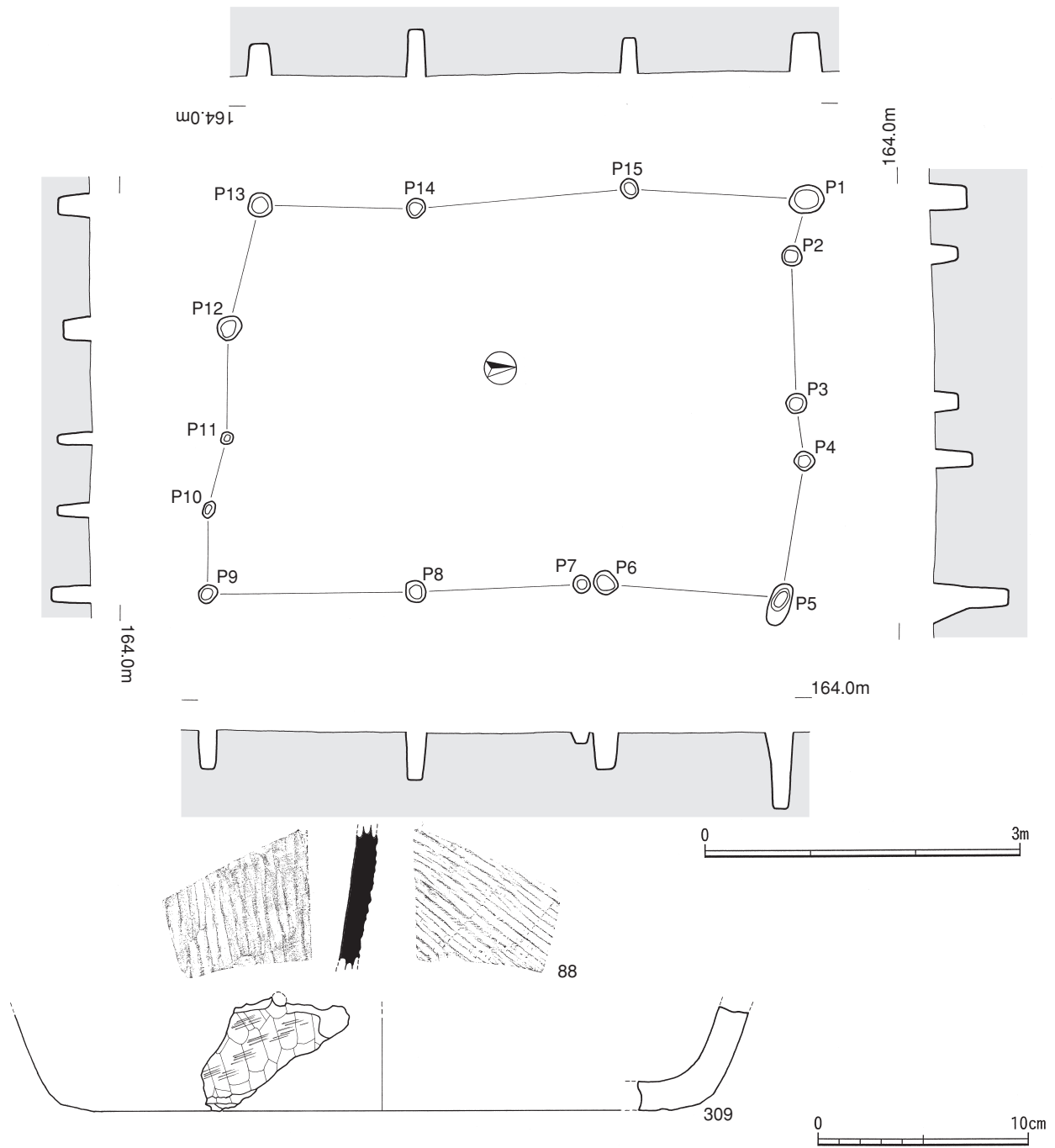
E-2区で出土している。ややひずんでいる。柱穴内からは滑石製品が出土している。

掘立柱建物跡26号（第31図，第24表）

F-1・2区で出土している。梁・桁行で間数にばらつきがみられる。柱穴内からは石器・鞆の羽口が出土している。

第16表 掘立柱建物18号計測表

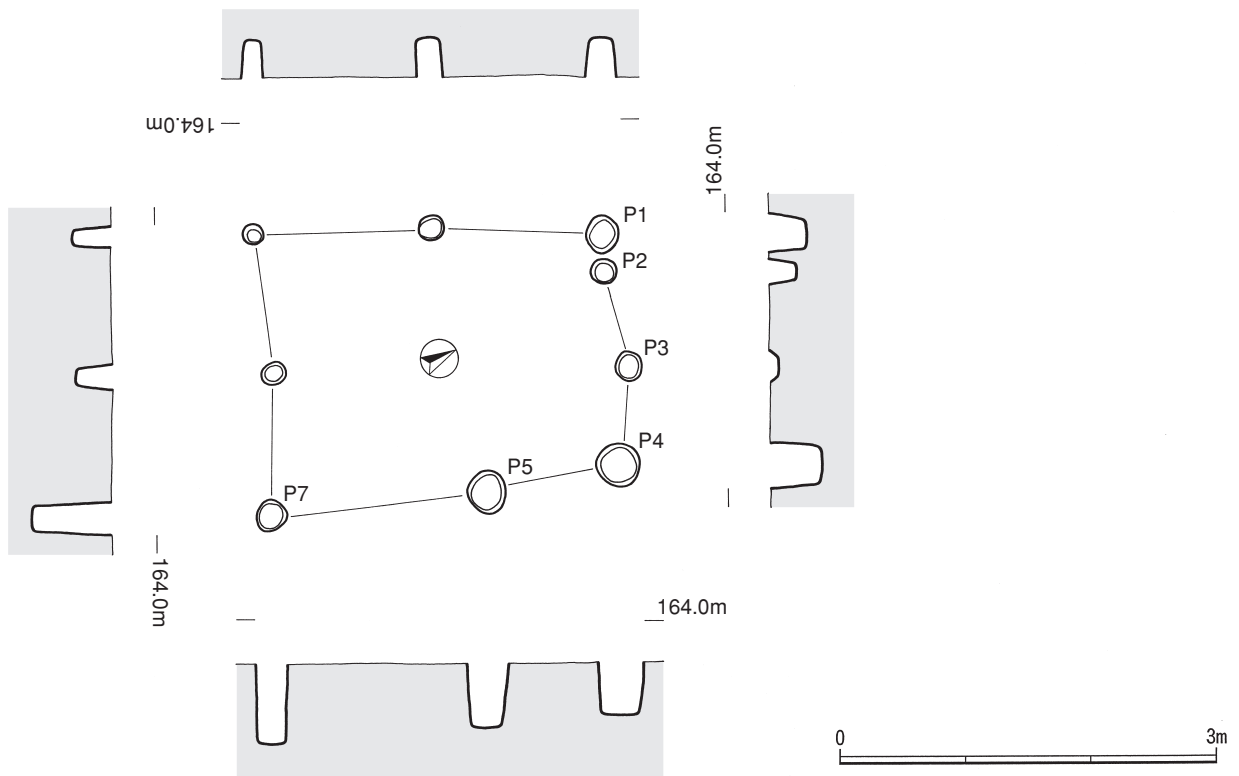
梁行方向				桁行方向				方向 N 5° E	遺物
1-4	318cm	平均	106cm	1-9	408cm	平均	136cm	P直径 15~36cm	3：須恵器(1)
9-7	338cm	平均	113cm	4-7	414cm	平均	138cm	P深さ 17~39cm	4：古代白磁(1)
1-2	132cm	9-8	240cm	1-11	117cm	4-5	225cm	床面積 13.5㎡	5：須恵器(1)，朝鮮系無釉陶器(1)，土師器(2)
2-3	144cm	8-7	98cm	11-10	150cm	5-6	75cm		[掲載遺物]
3-4	42cm			10-9	141cm	6-7	114cm		4：第62図133
									5：第66図209，第60図105



第24図 掘立柱建物跡19号

第17表 掘立柱建物19号計測表

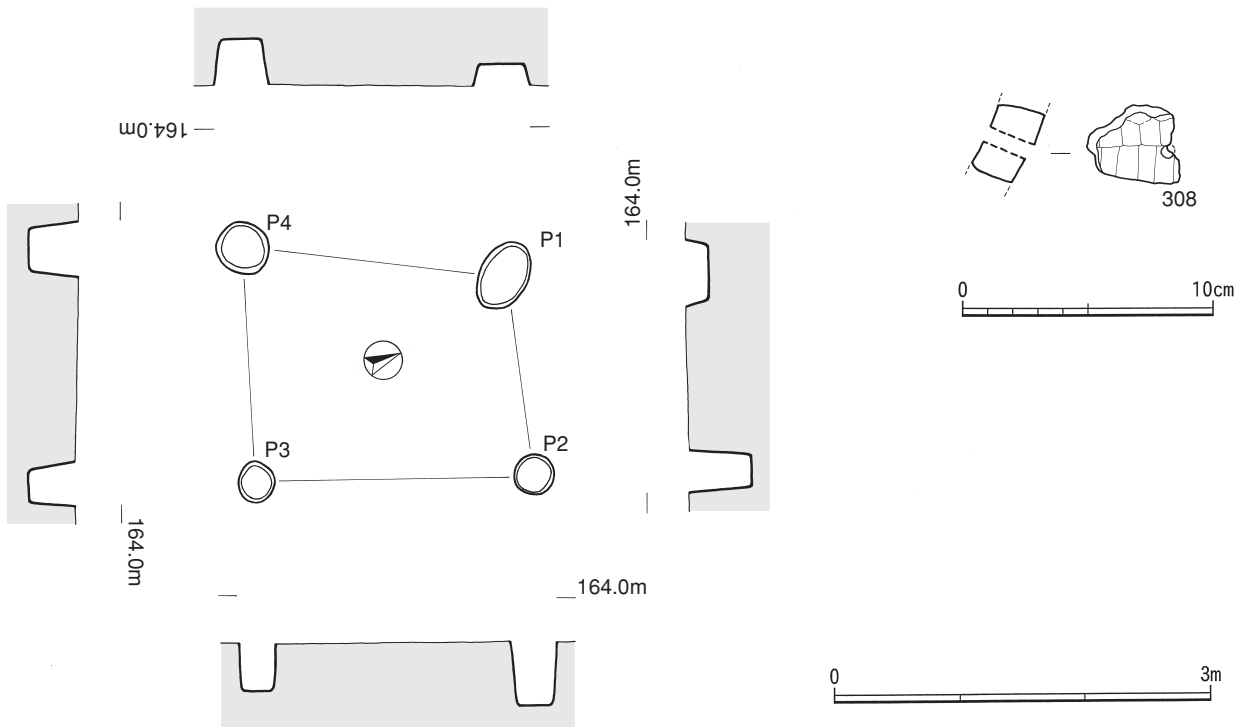
梁行方向		桁行方向		方向 N 5° E	遺物	
1-5	366cm	平均	92cm	P直径	12~41cm	1 : 土師器(1)
12-8	375cm	平均	94cm	P深さ	9~72cm	5 : 須恵器(1), 石器(1), 土師器(1)
1-2	57cm	13-12	120cm	床面積	20.0㎡	7 : 粘土塊(1)
2-3	123cm	12-11	105cm			8 : 土師器(1)
3-4	54cm	11-10	69cm			9 : 土師器(1)
4-5	132cm	10-9	81cm			12 : 滑石製品(1)
						13 : 滑石製品(2), 土師器(1), 轆の羽口(2)
						[掲載遺物]
						5 : 第60図88
						12 : 第71図309



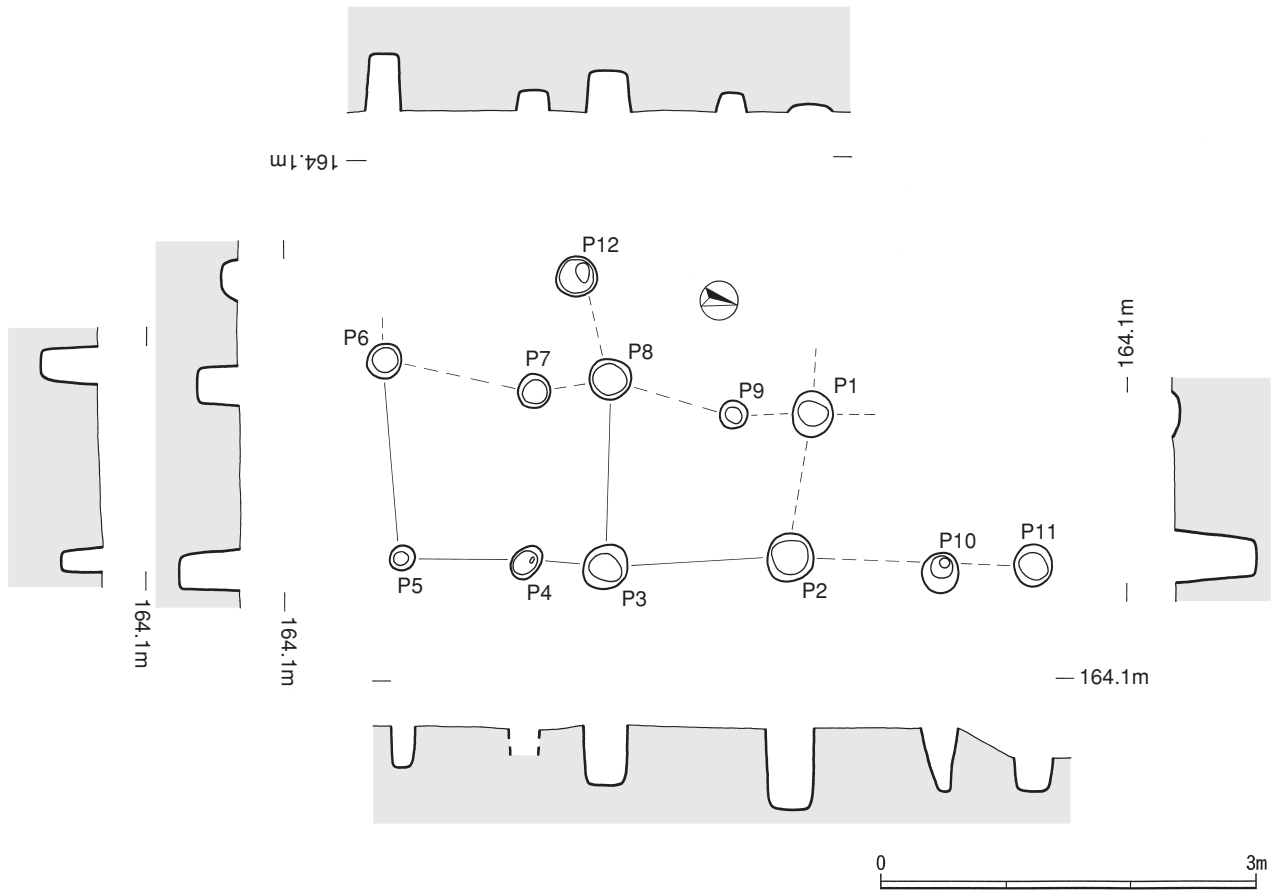
第25図 掘立柱建物跡20号

第18表 掘立柱建物20号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 28° E	遺物
1-4	192cm	平均	64cm	1-8	269cm	平均	135cm	P直径 18~36cm	2 : 滑石混入土器(1), 石器(1), 土師器(3), 粘土塊(2)
5-7	224cm	平均	112cm	3-5	282cm	平均	141cm	P深さ 30~66cm	
1-2	32cm	8-7	112cm	1-9	113cm	4-5	132cm	床面積 5.6㎡	4 : 滑石製品(1)
2-3	80cm	7-6	112cm	9-8	156cm	5-6	150cm		6 : 滑石製品(1),土師器(2)
3-4	80cm								



第26図 掘立柱建物跡21号



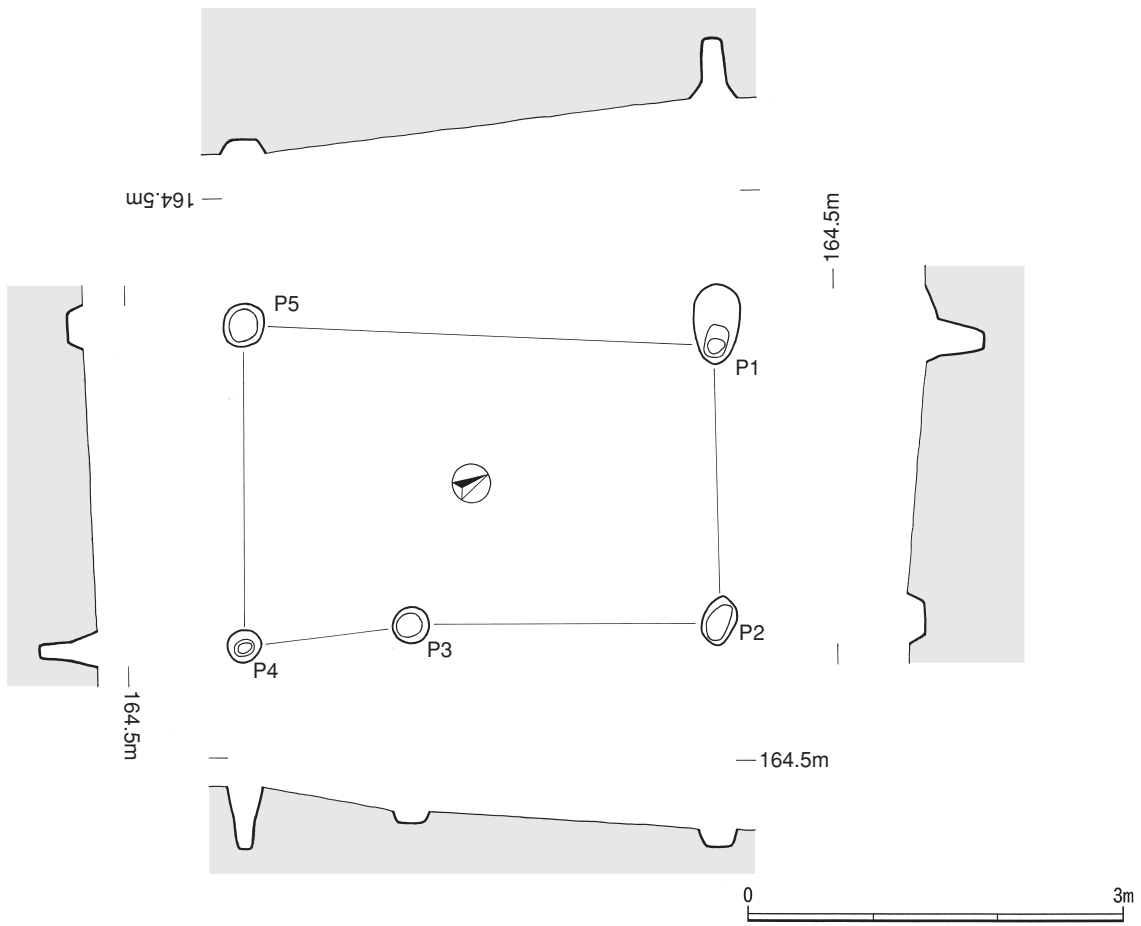
第27図 掘立柱建物跡22号

第19表 掘立柱建物21号計測表

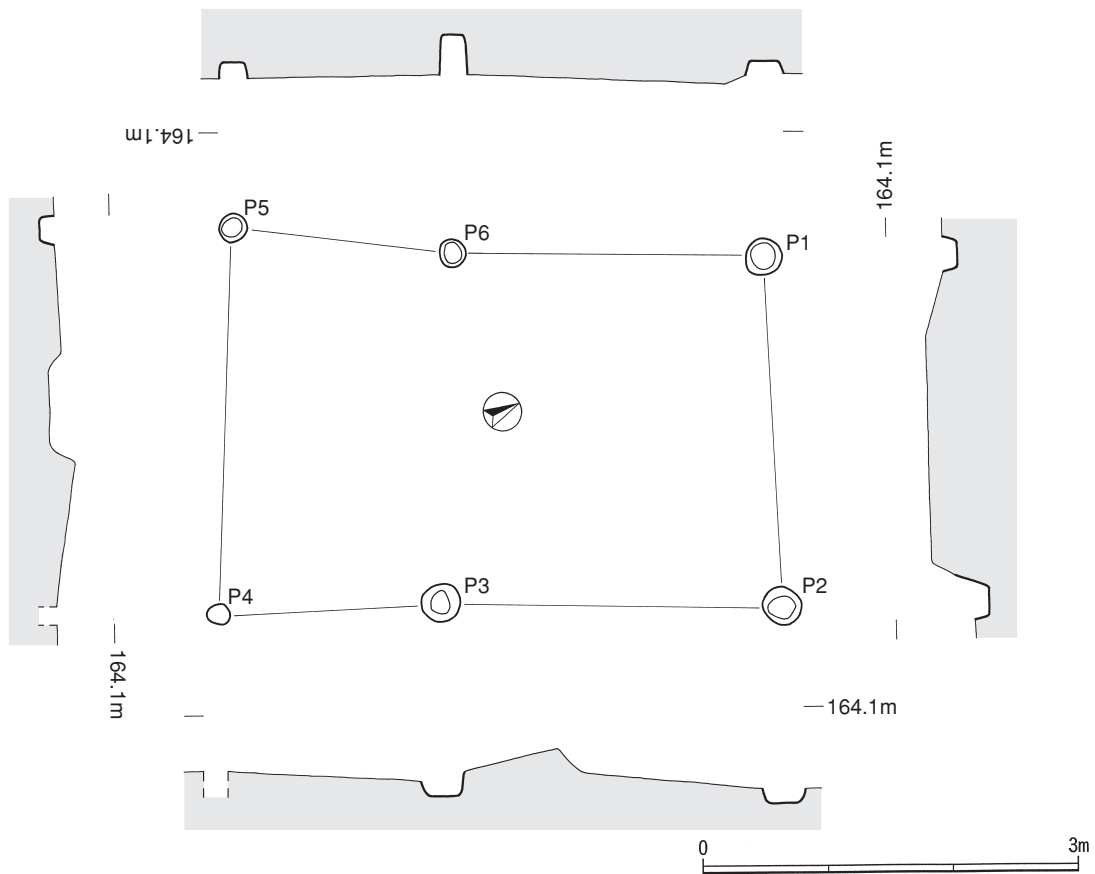
梁行方向				桁行方向				方向 N 20° E	遺物
1-2	162cm	平均	162cm	1-4	212cm	平均	212cm	P直径 33~59cm	1 : 滑石製品(2) 2 : 滑石製品(2), 石器(1) 3 : 滑石製品(1), 土師器(2) 4 : 滑石製品(1), 石器(1), 土師器(2), 中世白磁(1), 韃の羽口(1) [掲載遺物] 1 : 第71図308
4-3	184cm	平均	184cm	2-3	222cm	平均	222cm	P深さ 21~53cm	
								床面積 3.7㎡	

第20表 掘立柱建物22号計測表

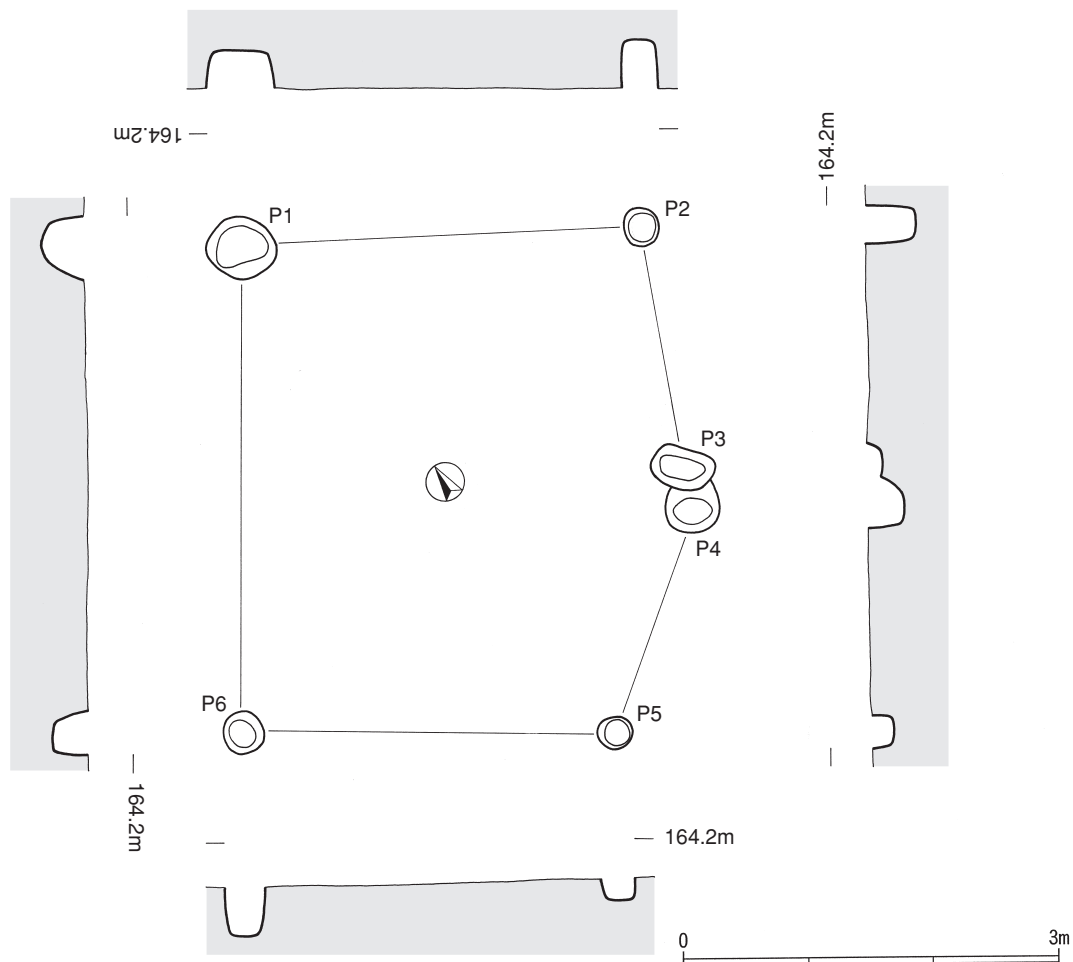
梁行方向				桁行方向				方向 N 13° W	遺物
1-2	116cm	平均	116cm	2-5	314cm	平均	105cm	P直径 21~41cm	2 : 滑石製品(2), 土師器(8) 8 : 滑石製品(1) 10 : 軽石(3), 石器(1), 土師器(1), 粘土塊(2)
6-5	156cm	平均	156cm	1-6	352cm	平均	88cm	P深さ 6~65cm	
								床面積 4.6㎡	
							11-10	72cm	
							10-2	124cm	
							2-3	150cm	
							3-4	66cm	
							4-5	98cm	
							1-9	64cm	
							9-8	104cm	
							8-7	62cm	
							7-6	122cm	



第28图 掘立柱建物跡23号



第29图 掘立柱建物跡24号



第30図 掘立柱建物跡25号

第21表 掘立柱建物23号計測表

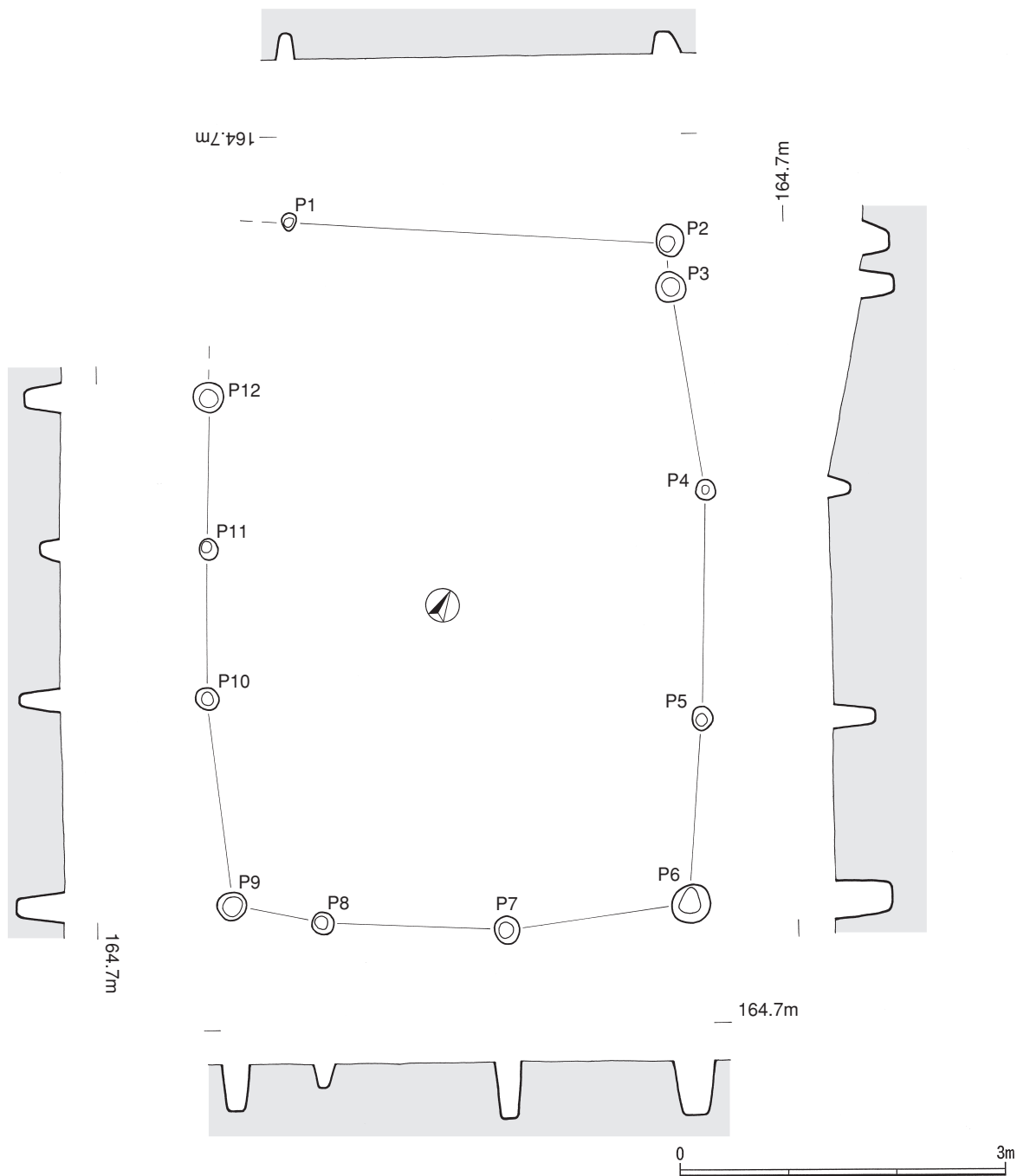
梁行方向				桁行方向				方向 N 27° E	遺物
1-2	216cm	平均	216cm	2-4	390cm	平均	195cm	P直径 20~65cm	1 : 土師器(1)
5-4	254cm	平均	254cm	1-5	388cm	平均	254cm	P深さ 11~48cm	3 : 滑石製品(1), 土師器(1)
				1-5	388cm	2-3	252cm	床面積 9.4㎡	4 : 土師器(1)
						3-4	138cm		

第22表 掘立柱建物24号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 25° E	遺物
1-2	284cm	平均	284cm	2-4	454cm	平均	227cm	P直径 18~30cm	2 : 滑石製品(1)
5-4	288cm	平均	288cm	1-5	432cm	平均	216cm	P深さ 11~32cm	4 : 土師器(2)
				1-6	252cm	2-3	274cm	床面積 12.8㎡	
				6-5	180cm	3-4	180cm		

第23表 掘立柱建物25号計測表

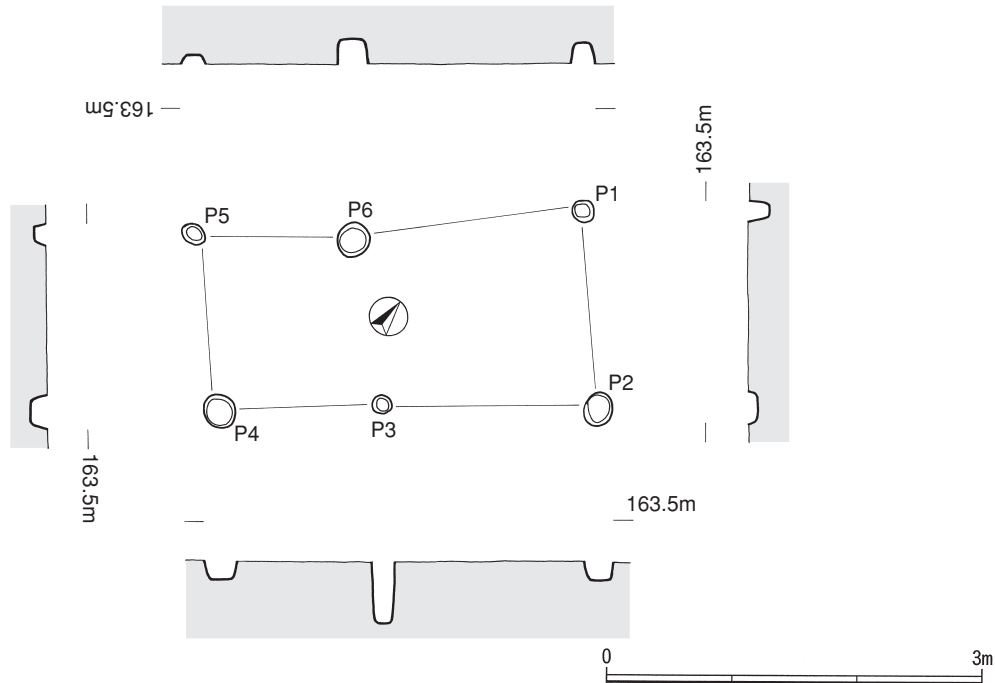
梁行方向				桁行方向				方向 N 35° E	遺物
1-2	324cm	平均	324cm	2-5	424cm	平均	141cm	P直径 29~66cm	5 : 滑石製品(2)
6-5	300cm	平均	300cm	1-5	394cm	平均	197cm	P深さ 9~44cm	
						2-3	200cm	床面積 12.4㎡	
						3-4	32cm		
						4-5	192cm		



第31図 掘立柱建物跡26号

第24表 掘立柱建物26号計測表

梁行方向		桁行方向		方向 N 35° W		遺物			
1-2	354cm	平均	354cm	12-9	477cm	平均	159cm	P 直径 17~36cm P 深さ 17~54cm 床面積 27.5㎡	1 : 石器(1), 轡の羽口(1)
9-6	432cm	平均	144cm	2-6	636cm	平均	159cm		
1-2	354cm	9-8	84cm	12-11	139cm	2-3	132cm	[掲載遺物] 1 : 第80図407 [石器]	
		8-7	174cm	11-10	113cm	3-4	150cm		
		7-6	174cm	10-9	156cm	4-5	234cm		
				5-6	171cm				



第32図 掘立柱建物跡27号

掘立柱建物跡27号 (第32図, 第25表)

E-5区で出土している。2×1間の建物跡である。柱穴の深さも浅いものも多く、面積は非常に狭い。柱穴内から滑石製品が出土している。

掘立柱建物跡28号 (第33図, 第26表)

C-4区で検出している。柱間間隔・柱穴の深さともにややばらつきが見られる。掘立柱建物跡29・31号と重複している。柱穴内からカムイヤキや滑石製品が出土している。

掘立柱建物跡29号 (第34図, 第27表)

C-4区で検出している。桁行の北側では柱穴数が1つ多いが、直線上に柱穴が並ぶ。掘立柱建物跡28号とほぼ同じ主軸方向である。柱穴内から白磁や滑石製品が出土している。

第25表 掘立柱建物27号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 45° E	遺物
1-2	158cm	平均	158cm	2-4	302cm	平均	151cm	P直径 16~29cm P深さ 6~45cm 床面積 4.7㎡ 6:滑石製品(2)	
5-4	142cm	平均	142cm	1-5	314cm	平均	157cm		
				1-6	186cm	2-3	172cm		
				6-5	128cm	3-4	130cm		

第26表 掘立柱建物28号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 53° W	遺物
1-9	364cm	平均	182cm	1-4	454cm	平均	151cm	P直径 21~32cm P深さ 5~45cm 床面積 17.0㎡ 2:カムイヤキ(1), 滑石混入土器(2), 滑石製石鍋(1), 土師器(1) 10:カムイヤキ(1) [掲載遺物] 第69図275, 第73図358, 第73図360	
4-6	384cm	平均	192cm	9-6	466cm	平均	155cm		
1-10	128cm	4-5	288cm	1-2	164cm	9-8	122cm		
10-9	236cm	5-6	96cm	2-3	100cm	8-7	148cm		
				3-4	190cm	7-6	196cm		

掘立柱建物跡30号 (第35図, 第28表)

C・D-4区で検出している。南側の梁行では柱穴がやや外に張り出している。桁行の東側では柱穴の深さが浅いものが多い。柱穴内からは滑石製品や軽石が出土している。

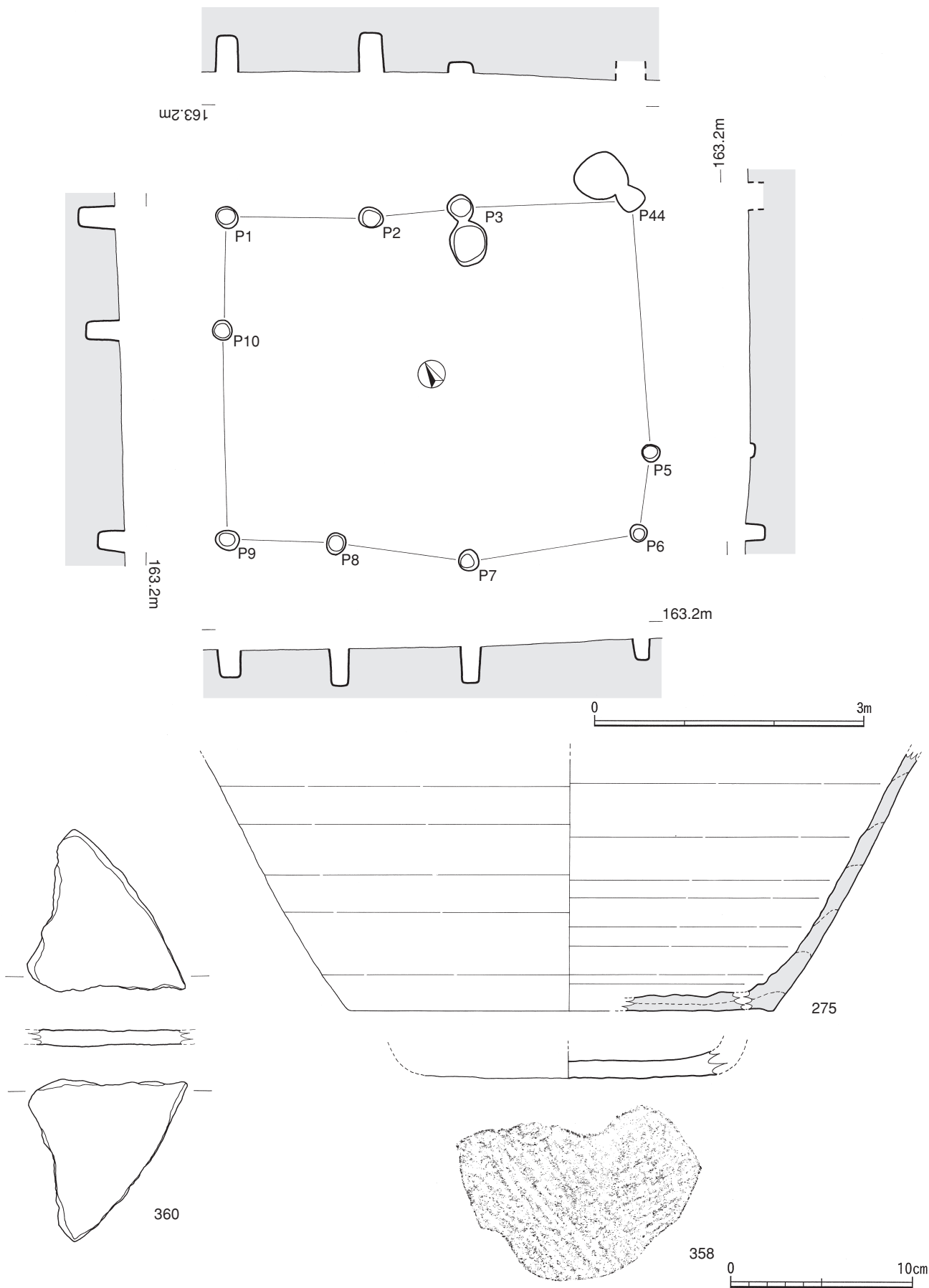
掘立柱建物跡31号 (第36図, 第29表)

C-3・4区で検出している。桁行の南側では柱間が1間多い。床面積は約24㎡あり、大きな部類に入る。掘立柱建物跡28・29号と重複している。柱穴内からは土師器・白磁が出土している。

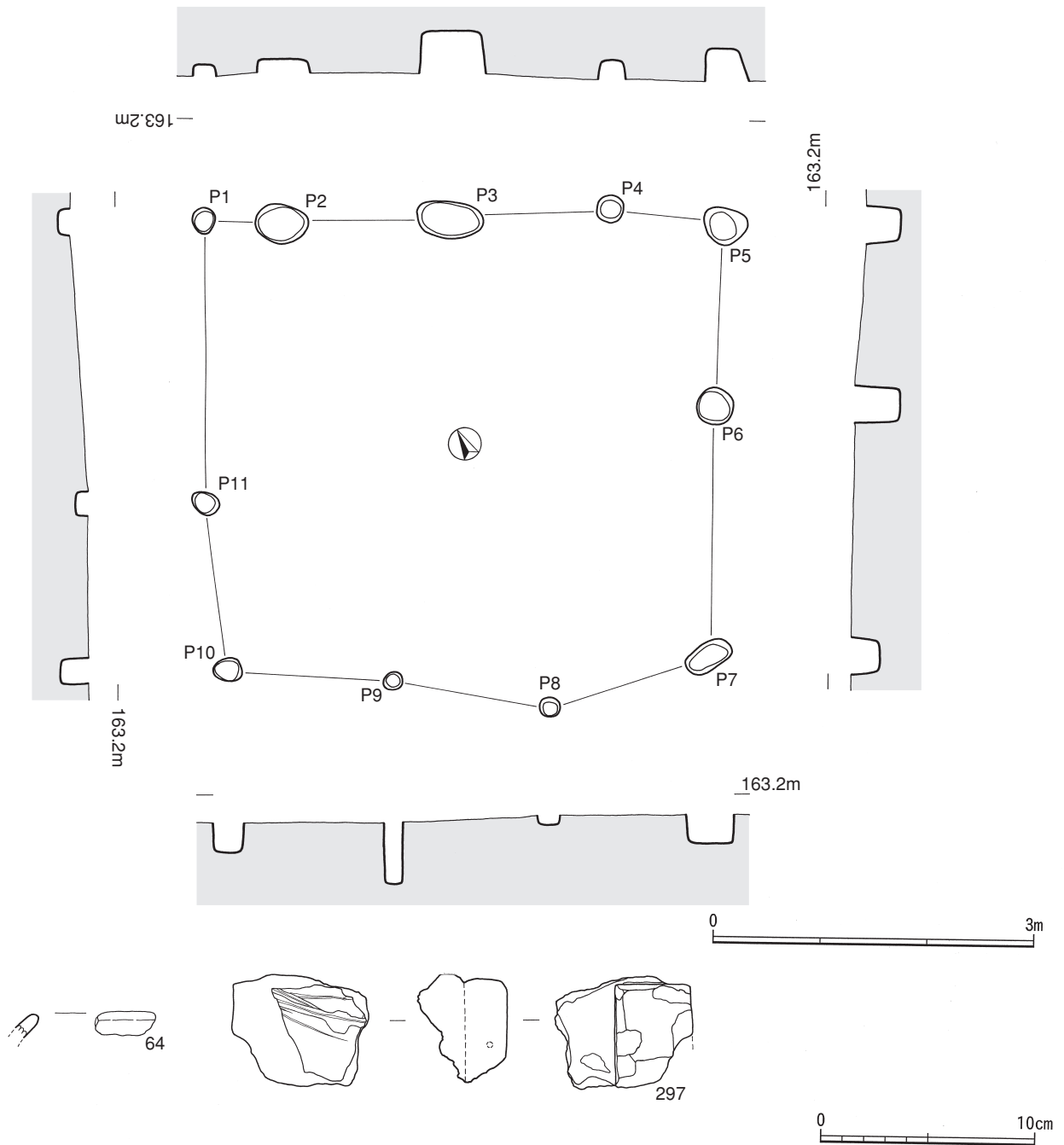
掘立柱建物跡32号 (第37図, 第30表)

D-3・4区で検出している。梁行の北側で間隔が狭い柱穴が並んでいる。中央の柱は他の柱穴に比べやや浅い。柱穴内からはカムイヤキが出土している。





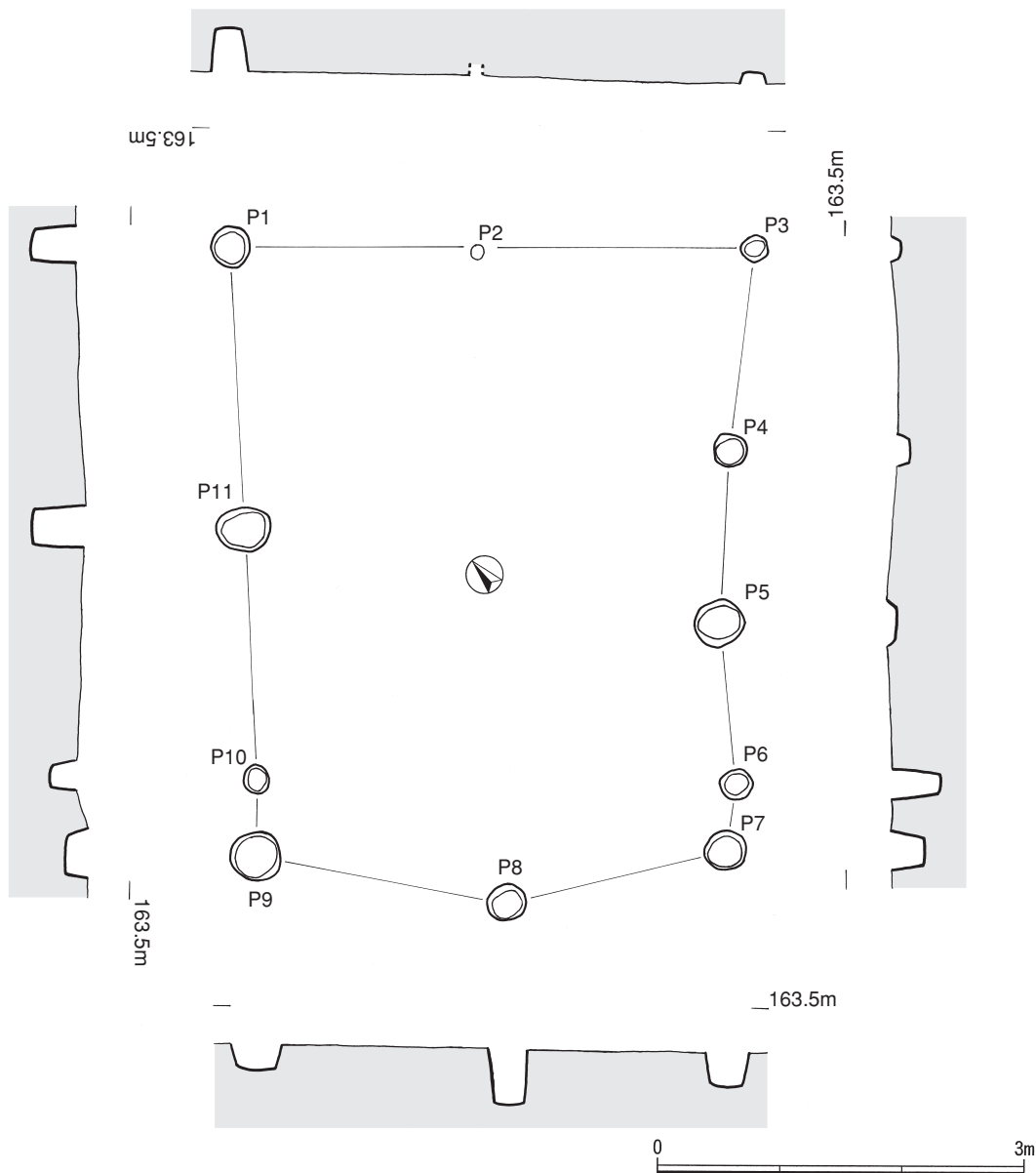
第33图 掘立柱建物跡28号



第34図 掘立柱建物跡29号

第27表 掘立柱建物29号計測表

梁行方向		桁行方向		方向 N 65° W		遺物			
1-10	431cm	平均	216cm	1-5	492cm	平均	123cm	P直径 18~51cm P深さ 9~59cm 床面積 20.2㎡	3 : 滑石製品(1), 轡の羽口(4) 5 : 石器(1), 土師器(2), 轡の羽口(2) 7 : 中世白磁(1) 10 : 滑石製品(1) [掲載遺物] 5 : 第59図64 10 : 第70図297
5-7	411cm	平均	206cm	10-7	467cm	平均	156cm		
1-11	162cm	5-6	174cm	1-2	74cm	10-9	156cm		
11-10	269cm	6-7	237cm	2-3	158cm	9-8	152cm		
				3-4	152cm	8-7	159cm		
				4-5	108cm				



第35図 掘立柱建物跡30号

掘立柱建物跡33号 (第38図, 第31表)

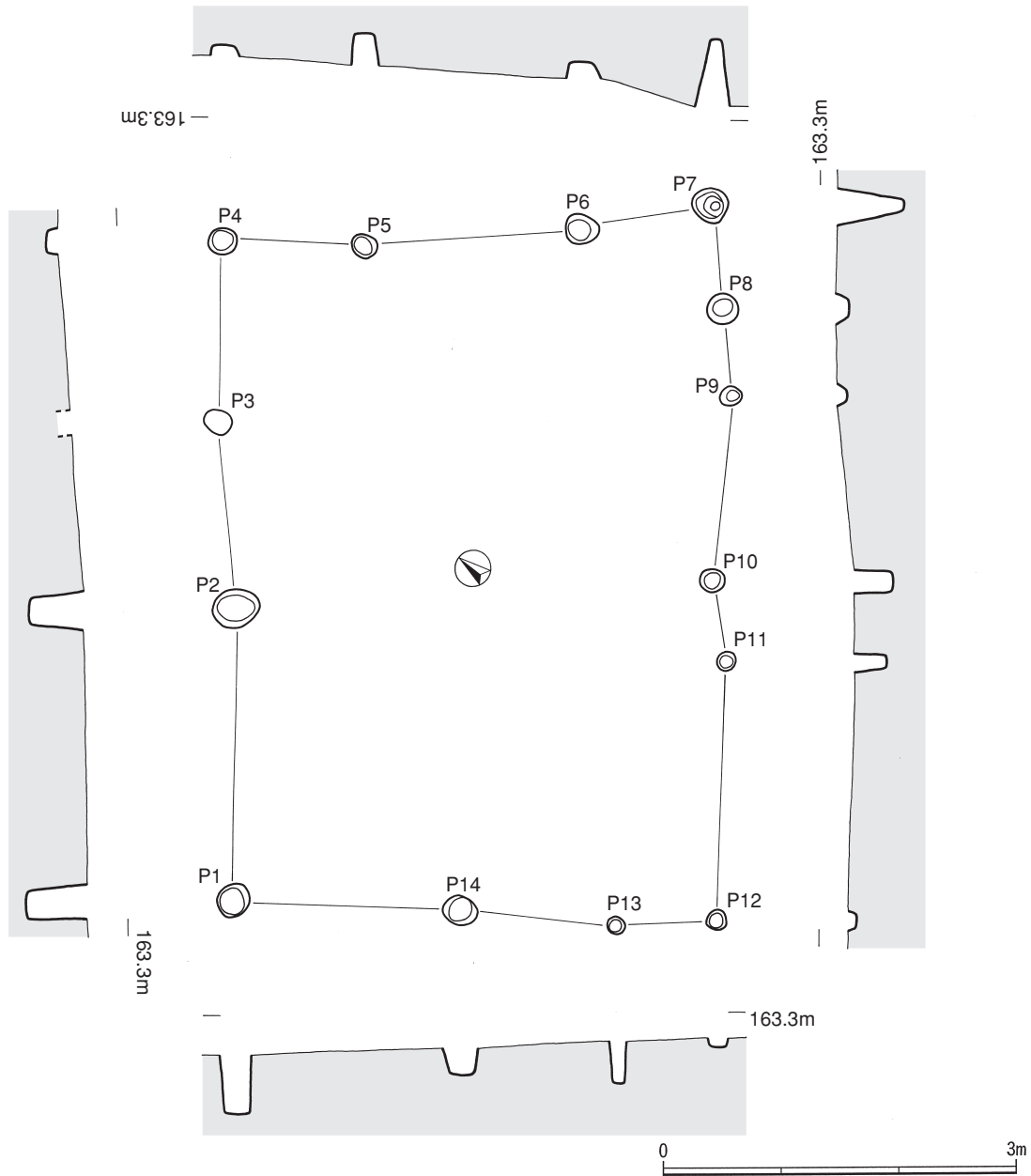
C・D-3区で検出している。東側に庇状の柱穴の並びが検出されている。柱穴内からは土師器や滑石製品・カムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡34号 (第39図, 第32表)

C-2区で検出している。1×1間の建物跡である。1×1間の建物跡の中では柱穴が非常に小さく、深さも浅い。柱穴内からは遺物は検出されていない。

第28表 掘立柱建物30号計測表

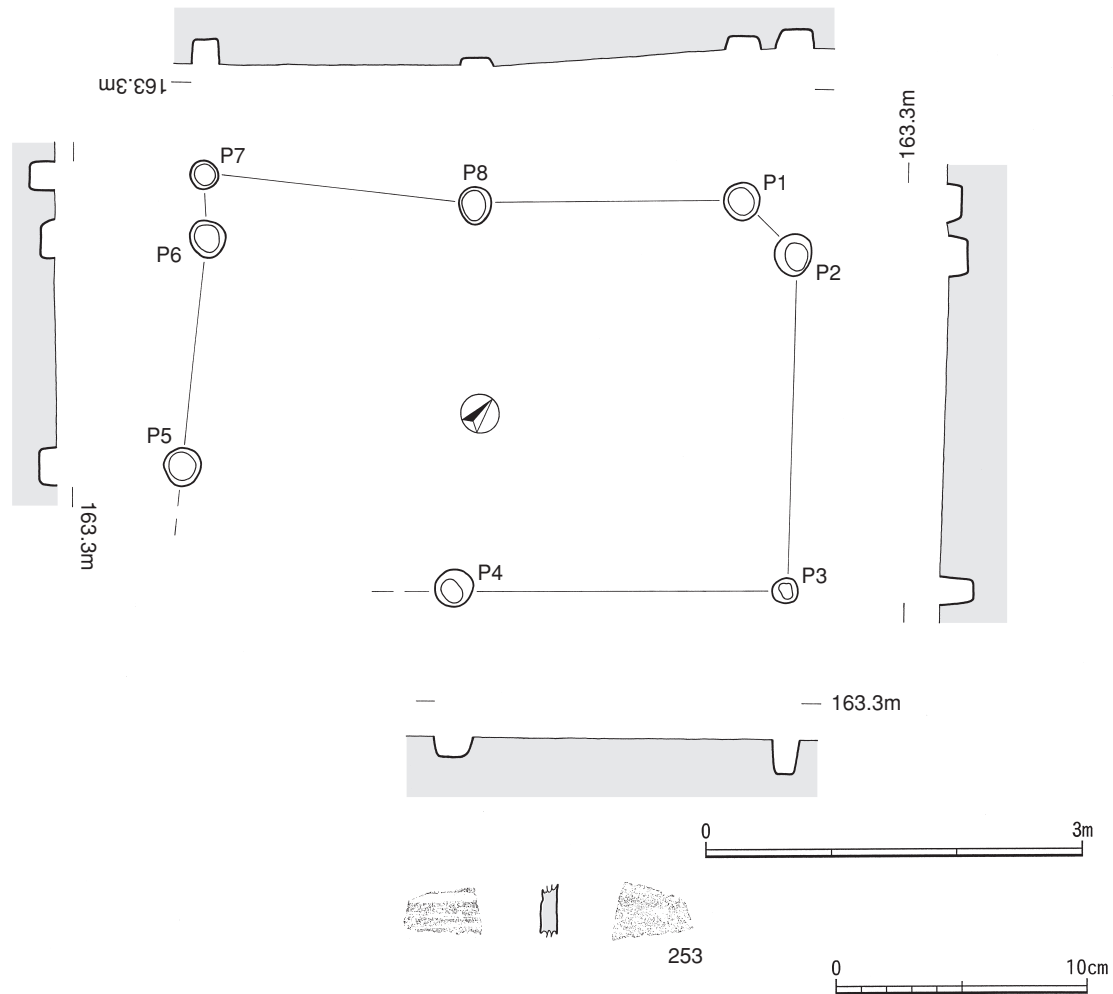
梁行方向			桁行方向			方向 N 38° E	遺物
1-3	424cm	平均 429cm	1-9	500cm	平均 167cm	P直径 23~45cm	10:滑石製品(1), 軽石(1)
9-7	395cm	平均 198cm	3-7	498cm	平均 125cm	P深さ 8~45cm	
1-2	200cm	9-8 210cm	1-11	231cm	3-4 168cm	床面積 20.5㎡	
2-3	224cm	8-7 185cm	11-10	204cm	4-5 141cm		
			10-9	65cm	5-6 132cm		
					6-7 57cm		



第36図 掘立柱建物跡31号

第29表 掘立柱建物31号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 55° E	遺物
1-12	420cm	平均	140cm	1-4	568cm	平均	189cm	P直径 15~41cm	3 : 石器(1)
4-7	424cm	平均	141cm	12-7	616cm	平均	123cm	P深さ 9~53cm	5 : 土師器(1), 中世白磁(1)
1-14	196cm	4-5	120cm	1-2	252cm	12-11	220cm	床面積 24.8㎡	7 : 粘土塊(3)
14-13	136cm	5-6	184cm	2-3	160cm	11-10	72cm		
13-12	88cm	6-7	120cm	3-4	156cm	10-9	160cm		
						9-8	76cm		
						8-7	88cm		
									[掲載遺物]
									3 : 第78図398 [石器]



第37図 掘立柱建物跡32号

掘立柱建物跡35号 (第40図, 第33表)

A-5区で検出している。北西-南東方向に主軸を持つ、細長く狭い建物跡である。柱穴の深さは概ね同じである。柱穴内から土師器・カムイヤキが出土している。

掘立柱建物跡36号 (第41図, 第34表)

A・B-3・4区で検出している。梁・桁行で間数にばらつきが見られるが、面積は約23㎡と広い。柱間隔は110cm前後のものが多く見られる。柱穴内からは白磁と石器が出土している。

掘立柱建物跡37号 (第42図, 第35表)

A-3区で検出している。北西-南東方向に主軸

を持つ、細長く狭い建物跡である。柱穴内からは鞆の羽口が出土している。

掘立柱建物跡38号 (第43図, 第36表)

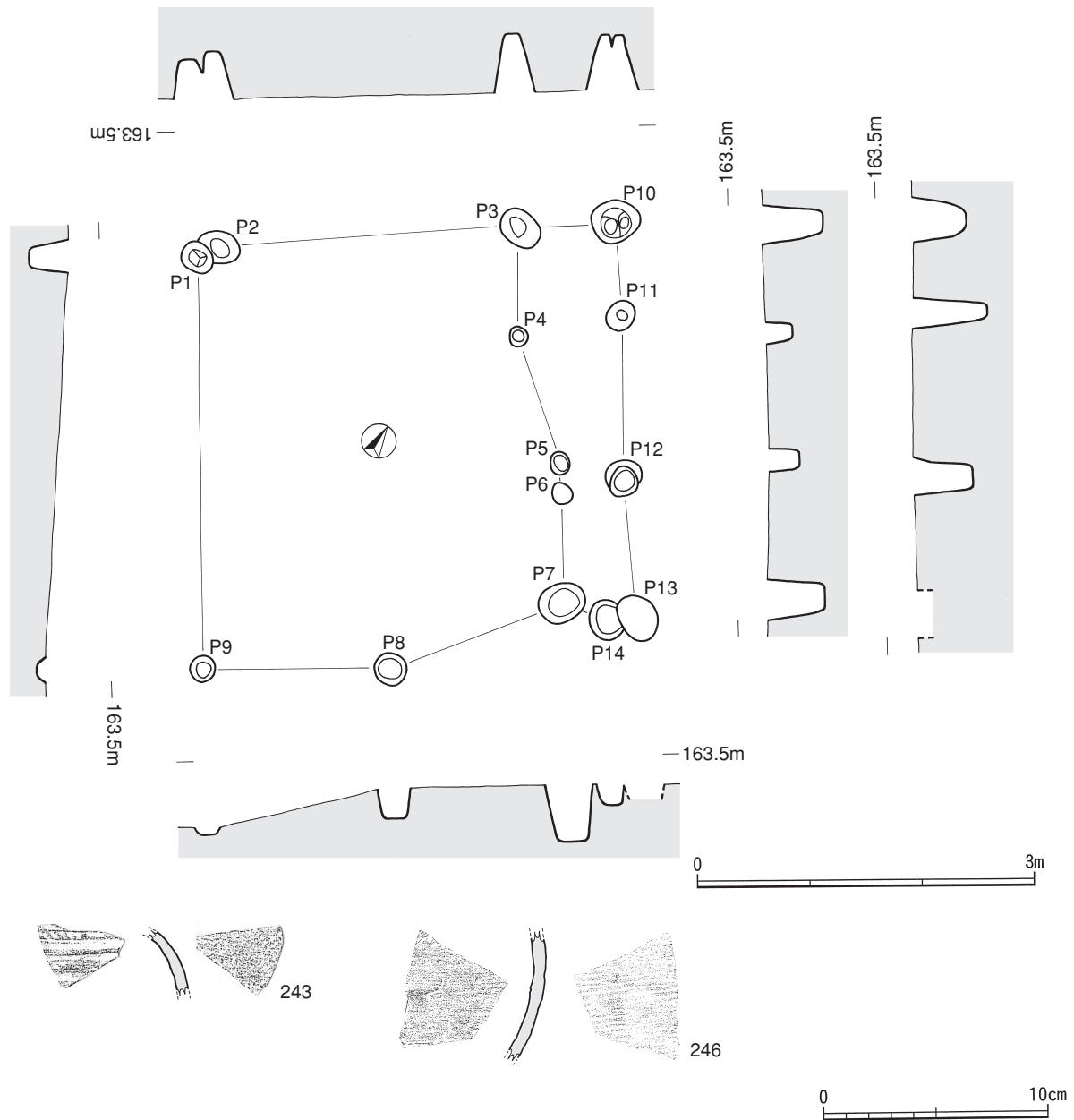
A・B-2・3区で検出している。東西方向に主軸を持つ建物跡である。柱間数や深さにはばらつきが見られる。柱穴内から土師器が出土している。

掘立柱建物跡39号 (第44図, 第37表)

A・B-2区で検出している。東側で1間多いが、2×2間の建物跡であると考えられる。柱穴内からは遺物は検出されていない。

第30表 掘立柱建物32号計測表

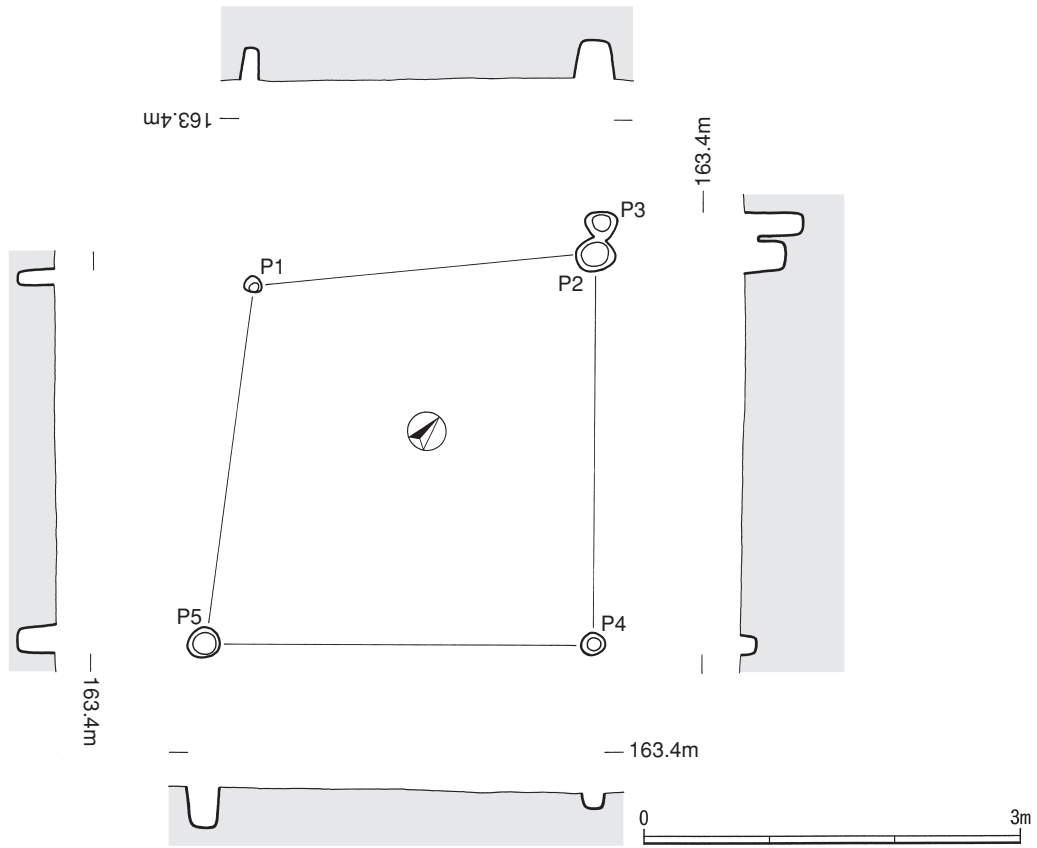
梁行方向				桁行方向				方向 N 47° E	遺物
1-3	330cm	平均	165cm	1-7	436cm	平均	218cm	P直径 20~33cm P深さ 11~27cm 床面積 14.5㎡	7:カムイヤキ(1) [掲載遺物] 7:第68図253
7-5	236cm	平均	118cm	3-4	268cm	平均	268cm		
1-2	64cm	7-6	52cm	1-8	216cm	3-4	268cm		
2-3	266cm	6-5	184cm	8-7	220cm				



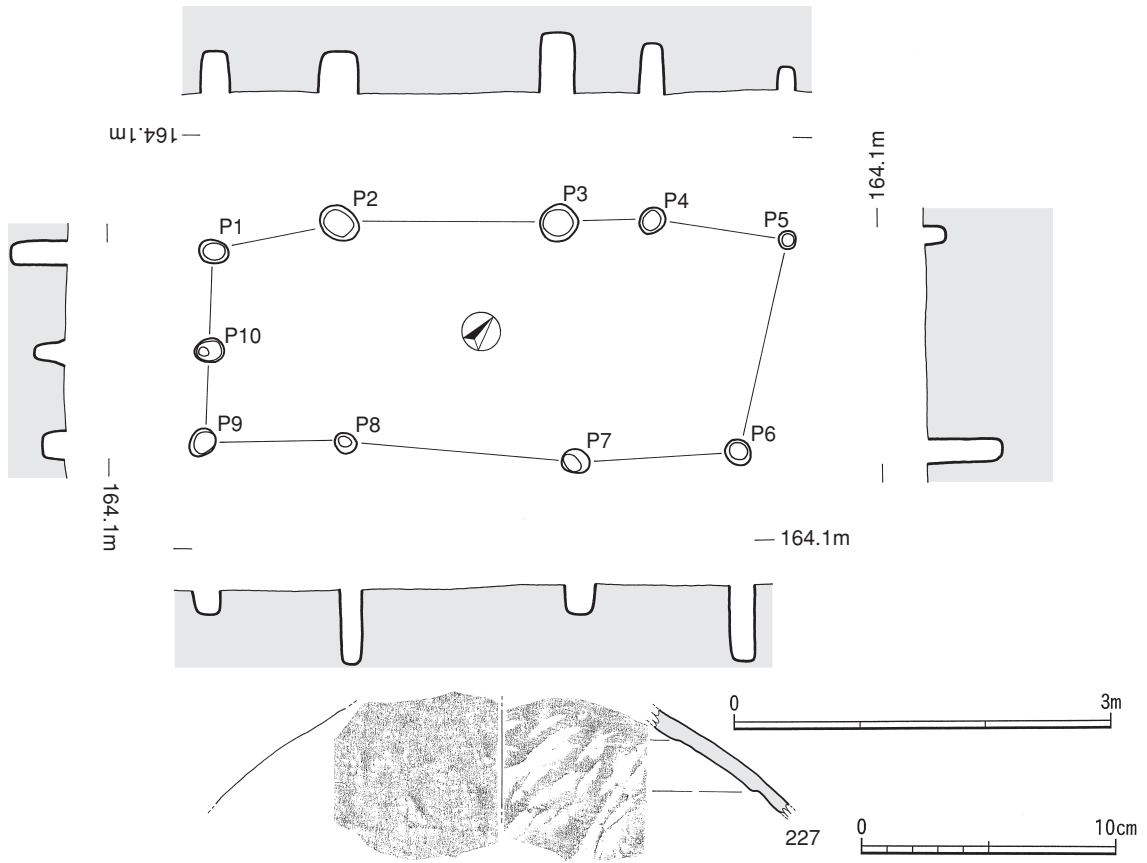
第38図 掘立柱建物跡33号

第31表 掘立柱建物33号計測表

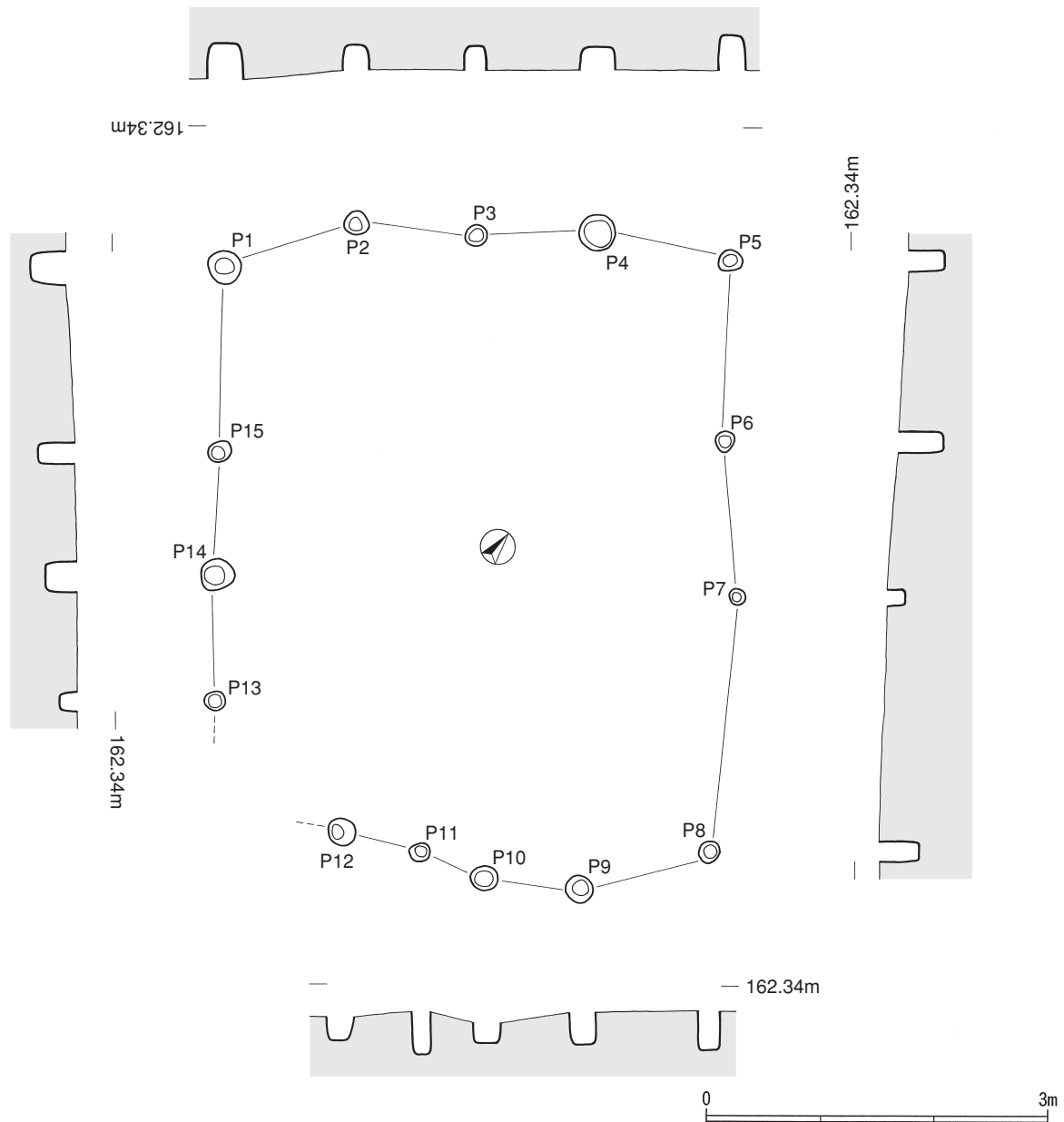
梁行方向		桁行方向		方向 N 38° W		遺物			
1-9	370cm	平均	370cm	1-3	292cm	平均	146cm	P直径 20~44cm P深さ 6~69cm 床面積 13.3㎡	1 : 石器(1) 5 : カムイヤキ(2), 土師器(4), 布目圧痕土器(1) 7 : 土師器(2), 粘土塊(1) 10 : 滑石製品(2), 土師器(3), 轆の羽口(1) 11 : 滑石製品(1), 軽石(2), 土師器(1), 轆の羽口(1) 12 : カムイヤキ(3) 14 : 土師器(2)
3-7	336cm	平均	112cm	9-7	366cm	平均	163cm		
1-9	370cm	3-4	98cm	1-2	20cm	9-8	168cm	[掲載遺物] 12 : 第67図243, 第68図246	
		4-5	114cm	2-3	272cm	8-7	158cm		
		5-6	28cm						
		6-7	96cm						
10-11	84cm			3-10	86cm	7-13	68cm		
11-12	146cm								
12-13	124cm								



第39图 掘立柱建物跡34号



第40图 掘立柱建物跡35号



第41図 掘立柱建物跡36号

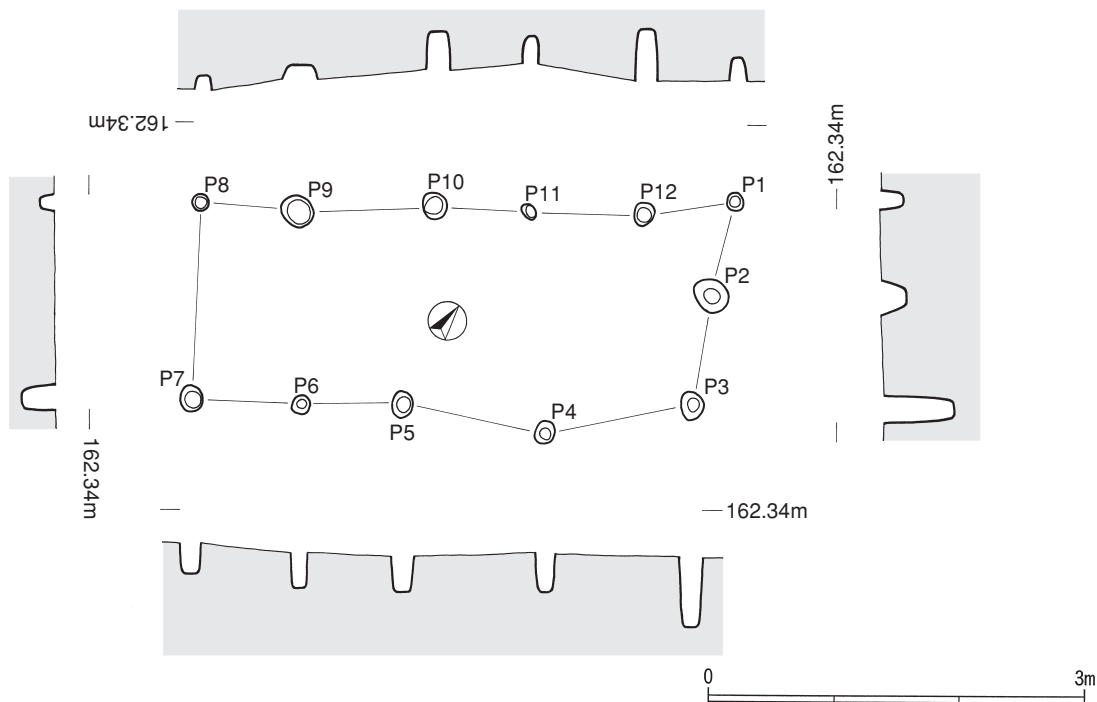
第32表 掘立柱建物34号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 38° W	遺物
1-2	276cm	平均	276cm	1-5	310cm	平均	310cm	P直径 18~33cm	
5-4	310cm	平均	310cm	2-4	310cm	平均	310cm	P深さ 14~48cm	
								床面積 9.0㎡	

第33表 掘立柱建物35号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 48° E	遺物	
1-9	152cm	平均	76cm	1-5	442cm	平均	111cm	P直径 15~35cm	8 : カムイヤキ(1), 石器(2)	
5-6	174cm	平均	174cm	9-6	434cm	平均	145cm	P深さ 20~62cm		
1-10	80cm	5-6	174cm	1-2	100cm	9-8	116cm	床面積 7.0㎡	[掲載遺物] 8 : 第67図227	
10-9	72cm			2-3	178cm	8-7	188cm			
				3-4	74cm	7-6	130cm			
				4-5	90cm					





第42図 掘立柱建物跡37号

掘立柱建物跡40号 (第45図, 第38表)

a・A-1・2区で検出している。庇を持つ建物跡である。内部にも構造柱を有している。柱間間隔は規則的である。柱穴内からは遺物は検出されていない。

掘立柱建物跡41号 (第46図, 第39表)

a-1区で検出している。柱穴が検出できなかった部分があるが、推定で復元した。柱穴内からは遺物は出土していない。

柱穴列

柱穴列は6列検出されている。柱穴内出土遺物から見ると中世の遺構であると考えられる。柱穴列2・3は柱間間隔が約50～80cm前後で、他の柱穴列に比べ、間隔は密である。柱穴列2は周囲にピットが集中するにもかかわらず、これ以上の連続性は認められないことから、柵列等の機能が想定される。

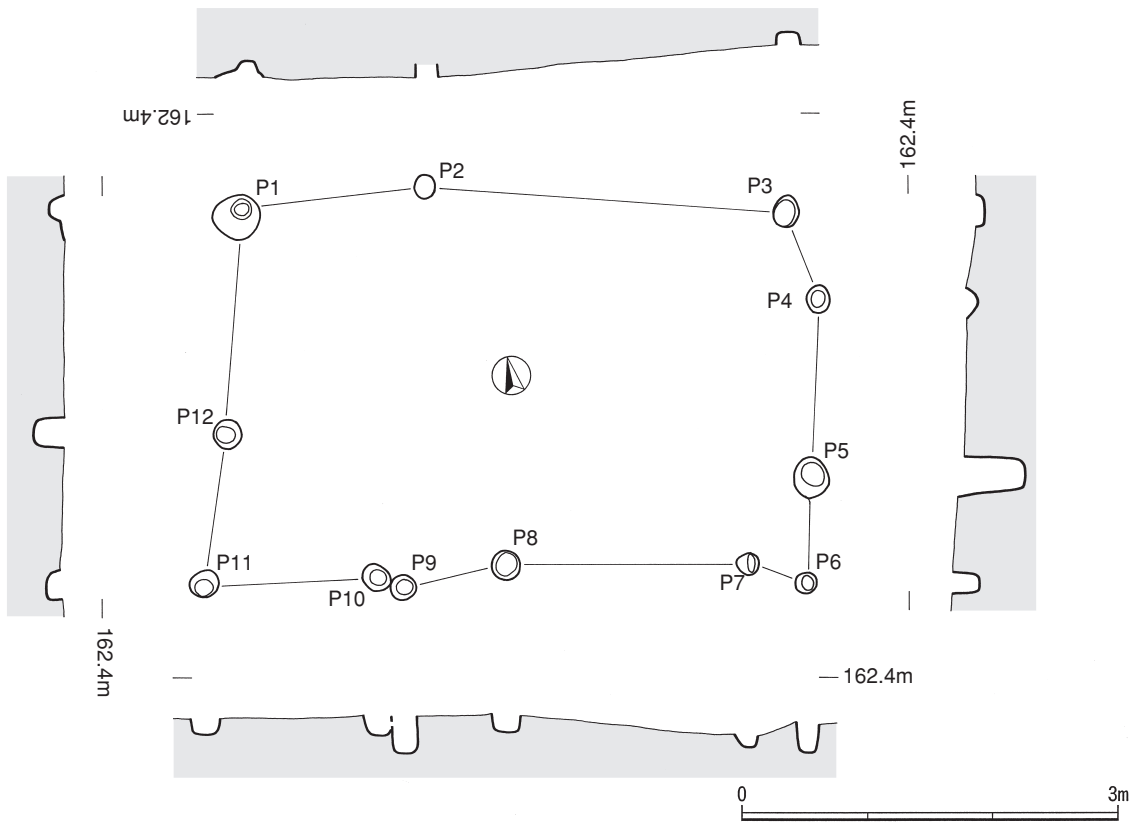
L字状に検出された柱穴列6・7については、建物跡の一部になる可能性がある。

第34表 掘立柱建物36号計測表

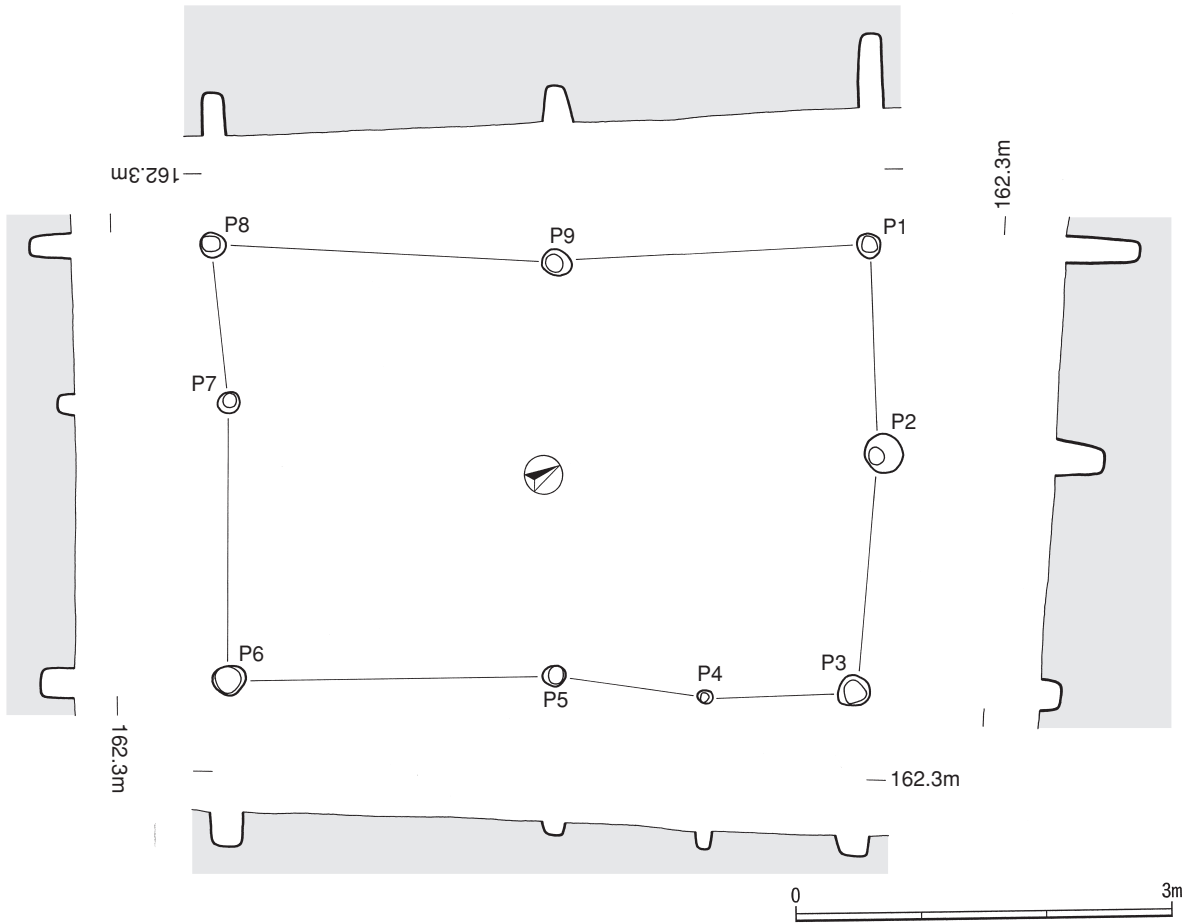
梁行方向				桁行方向				方向 N 40° W	遺物
1-5	450cm	平均	113cm	1-13	388cm	平均	129cm	P直径 15~33cm P深さ 18~41cm 床面積 23.4㎡ 12:石器(1) 14:中世白磁(1)	
12-8	332cm	平均	83cm	5-8	524cm	平均	175cm		
1-2	116cm	12-11	72cm	1-15	166cm	5-6	162cm		
2-3	106cm	11-10	56cm	15-14	110cm	6-7	138cm		
3-4	108cm	10-9	92cm	14-13	112cm	7-8	224cm		
4-5	120cm	9-8	112cm						

第35表 掘立柱建物37号計測表

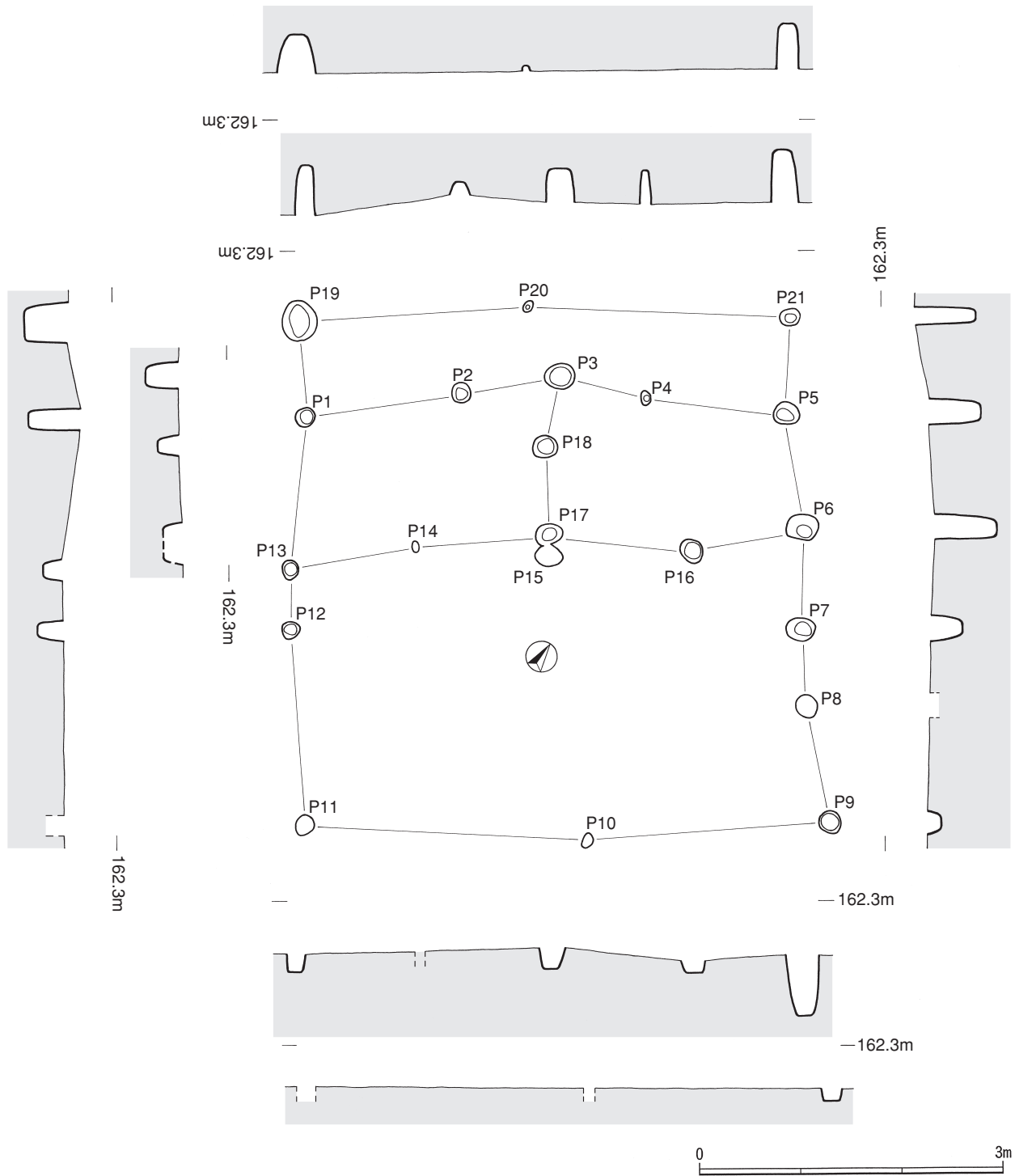
梁行方向				桁行方向				方向 N 48° E	遺物
1-3	166cm	平均	83cm	3-7	406cm	平均	102cm	P直径 14~30cm P深さ 12~57cm 床面積 6.7㎡ 4:粘土塊(1), 轡の羽口(5)	
8-7	154cm	平均	154cm	1-8	428cm	平均	86cm		
1-2	76cm	8-7	154cm	1-12	74cm	3-4	118cm		
2-3	90cm			12-11	90cm	4-5	116cm		
				11-10	74cm	5-6	84cm		
				10-9	110cm	6-7	88cm		
				9-8	80cm				



第43图 掘立柱建物跡38号



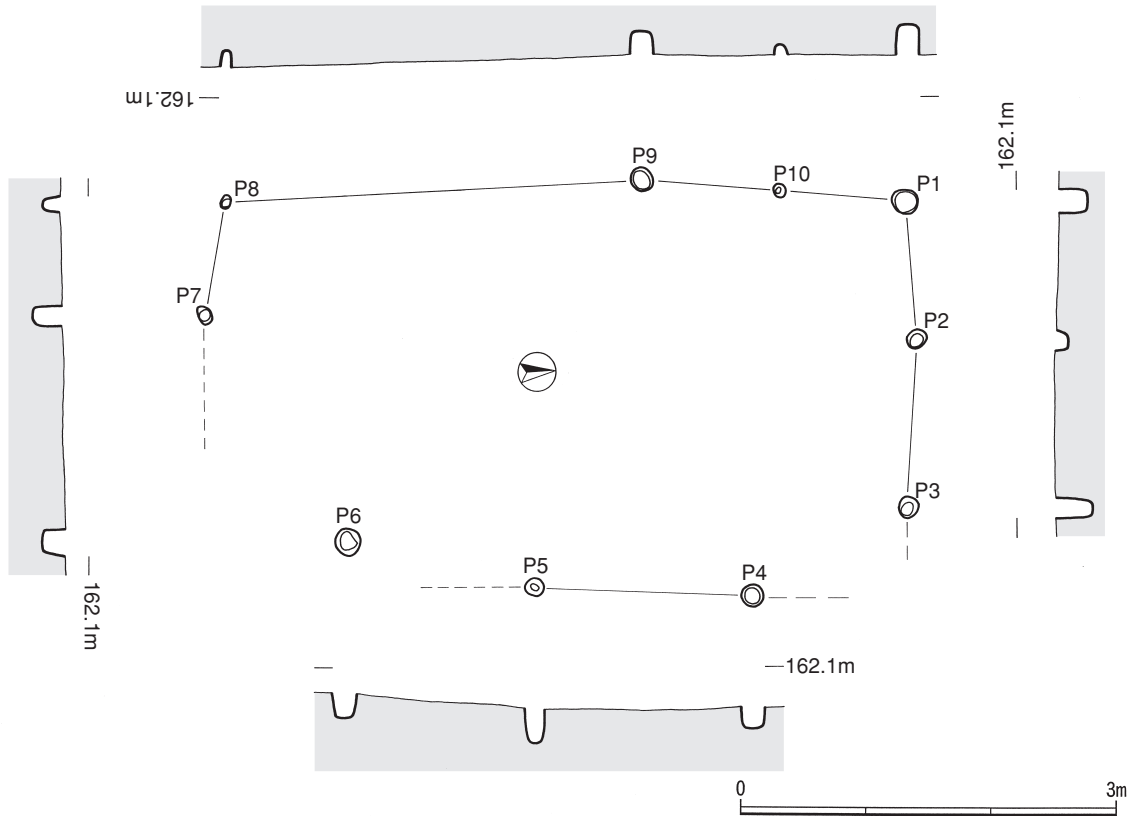
第44图 掘立柱建物跡39号



第45図 掘立柱建物跡40号

第36表 掘立柱建物跡38号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 83° W	遺物
1-11	300cm	平均	147cm	1-3	442cm	平均	221cm	P直径 18~39cm P深さ 8~53cm 床面積 15.5㎡	6 : 土師器(1)
3-6	354cm	平均	118cm	11-6	492cm	平均	98cm		
1-12	176cm	3-4	93cm	1-2	152cm	11-10	140cm		
12-11	124cm	4-5	175cm	2-3	290cm	10-9	24cm		
		5-6	86cm	9-8	84cm	8-7	194cm		
				7-6	50cm				



第46図 掘立柱建物跡41号

第37表 掘立柱建物39号計測表

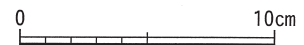
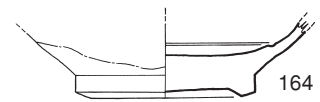
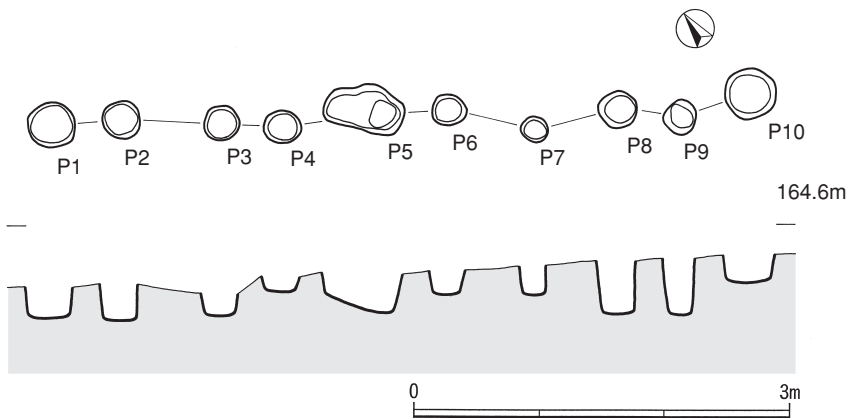
梁行方向				桁行方向				方向 N 30° E	遺物
1-3	358cm	平均	179cm	3-6	504cm	平均	252cm	P直径 14~32cm	
6-8	350cm	平均	175cm	1-8	530cm	平均	176cm	P深さ 14~60cm	
1-2	166cm	8-7	128cm	1-9	252cm	3-4	120cm	床面積 18.2㎡	
2-3	192cm	7-6	222cm	9-8	278cm	4-5	122cm		
						5-6	262cm		

第38表 掘立柱建物40号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 52° E	遺物
11-1	404cm	平均	135cm	1-5	476cm	平均	119cm	P直径 12~41cm	
9-5	416cm	平均	104cm	11-9	522cm	平均	261cm	P深さ 9~47cm	
1-13	150cm	5-6	120cm	1-2	154cm	11-10	280cm	床面積 20.5㎡	
13-12	60cm	6-7	102cm	2-3	98cm	10-9	242cm		
12-11	194cm	7-8	78cm	3-4	86cm				
		8-9	116cm	5	138cm				
19-1	96cm	21-5	98cm	13-14	122cm	19-20	230cm		
				14-15	132cm	20-21	260cm		
				15-16	144cm				
				16-6	110cm				

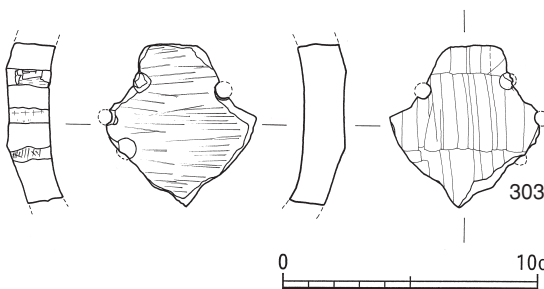
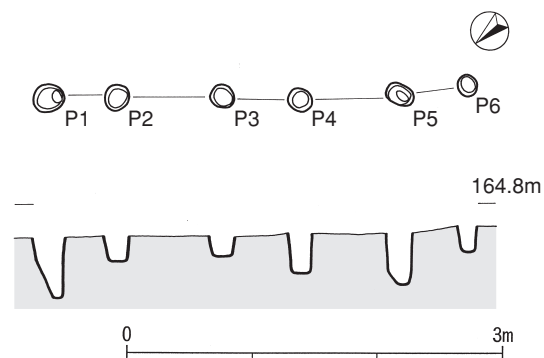
第39表 掘立柱建物41号計測表

梁行方向				桁行方向				方向 N 2° E	遺物
1-3	279cm	平均	140cm	1-9	627cm	平均	209cm	P直径 12~23cm	
7-8	99cm	平均	99cm	4-6	351cm	平均	178cm	P深さ 9~29cm	
1-2	135cm	8-7	99cm	1-10	147cm	4-5	189cm	床面積 17.6㎡	
2-3	144cm			10-9	120cm	5-6	167cm		
				9-8	360cm				



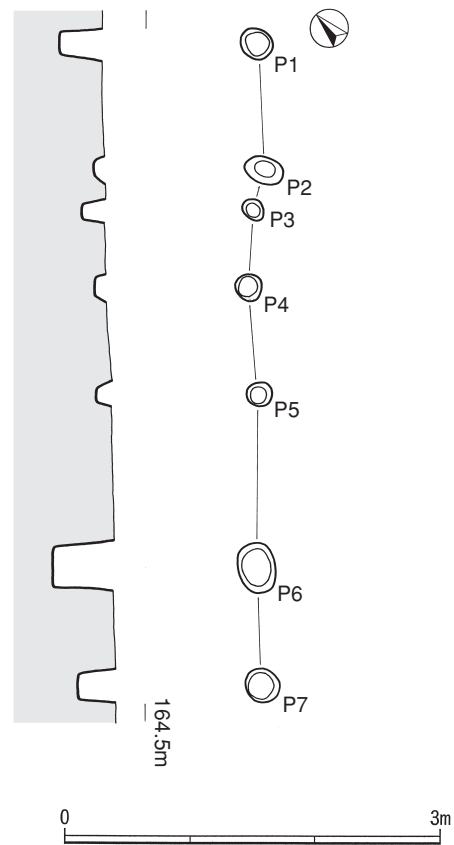
第40表 柱穴列2計測表

間隔	遺物
1-2 57cm	1 : カムイヤキ(1), 滑石製品(1), 中世白磁(1)
2-3 81cm	5 : 滑石製品(1), 石器(3)
3-4 48cm	[掲載遺物]
4-5 48cm	1 : 第64図164, 第68図271
5-6 54cm	5 : 第79図401
6-7 72cm	
7-8 72cm	
8-9 51cm	
9-10 60cm	



第41表 柱穴列3計測表

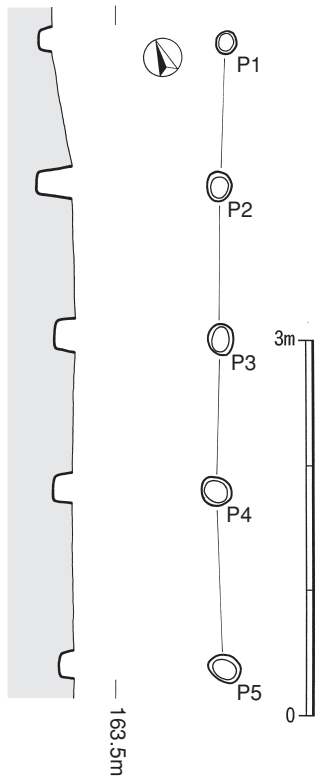
間隔	遺物
1-2 48cm	1 : 中世白磁(1)
2-3 84cm	2 : 土師器(1)
3-4 63cm	3 : 土師器(1), 轆の羽口(2)
4-5 81cm	5 : 滑石製品(1), 鉄滓(1), 土師器(1)
5-6 54cm	6 : 土師器(2)
	[掲載遺物]
	5 : 第71図303



第42表 柱穴列4計測表

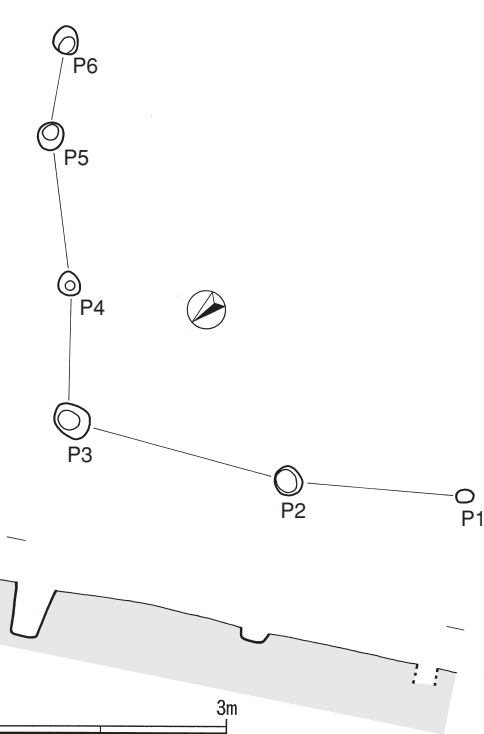
間隔	遺物
1-2 102cm	
2-3 36cm	
3-4 63cm	
4-5 90cm	
5-6 138cm	
6-7 96cm	

第47図 柱穴列(1)

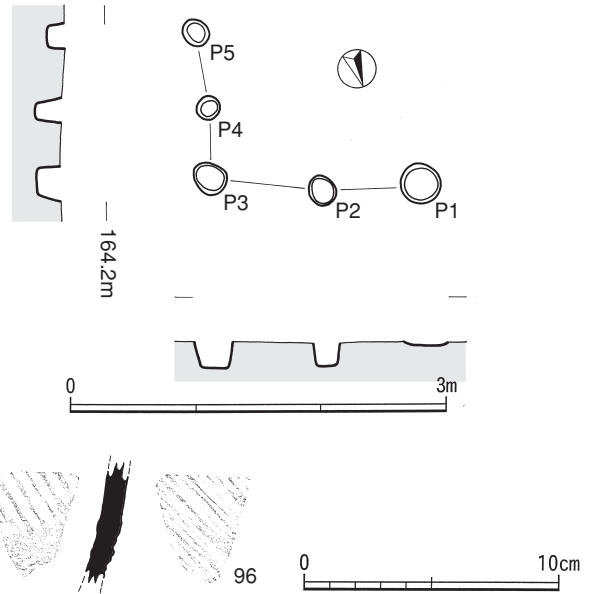


第43表 柱穴列5計測表

間隔	遺物
1-2	117cm
2-3	123cm
3-4	123cm
4-5	144cm



第48図 柱穴列(2)



第44表 柱穴列6計測表

間隔	遺物
1-2	80cm
2-3	92cm
3-4	56cm
4-5	64cm

第45表 柱穴列7計測表

間隔	遺物
1-2	144cm
2-3	183cm
3-4	108cm
4-5	126cm
5-6	72cm

## 2 土坑墓

土坑墓は7基確認されている。形状には円形状のものと長方形のものがあり、焼骨や土葬されたと考えられる人骨が検出される場合が多い。焼骨は炭化物と混在した塊状で検出され、副葬品としてカムイヤキや白磁などが共伴するものが多い。カムイヤキ内部には人骨片は確認されておらず、確認された人骨は全てカムイヤキの外からの出土である。

### (1) 土坑墓4号(第49図)

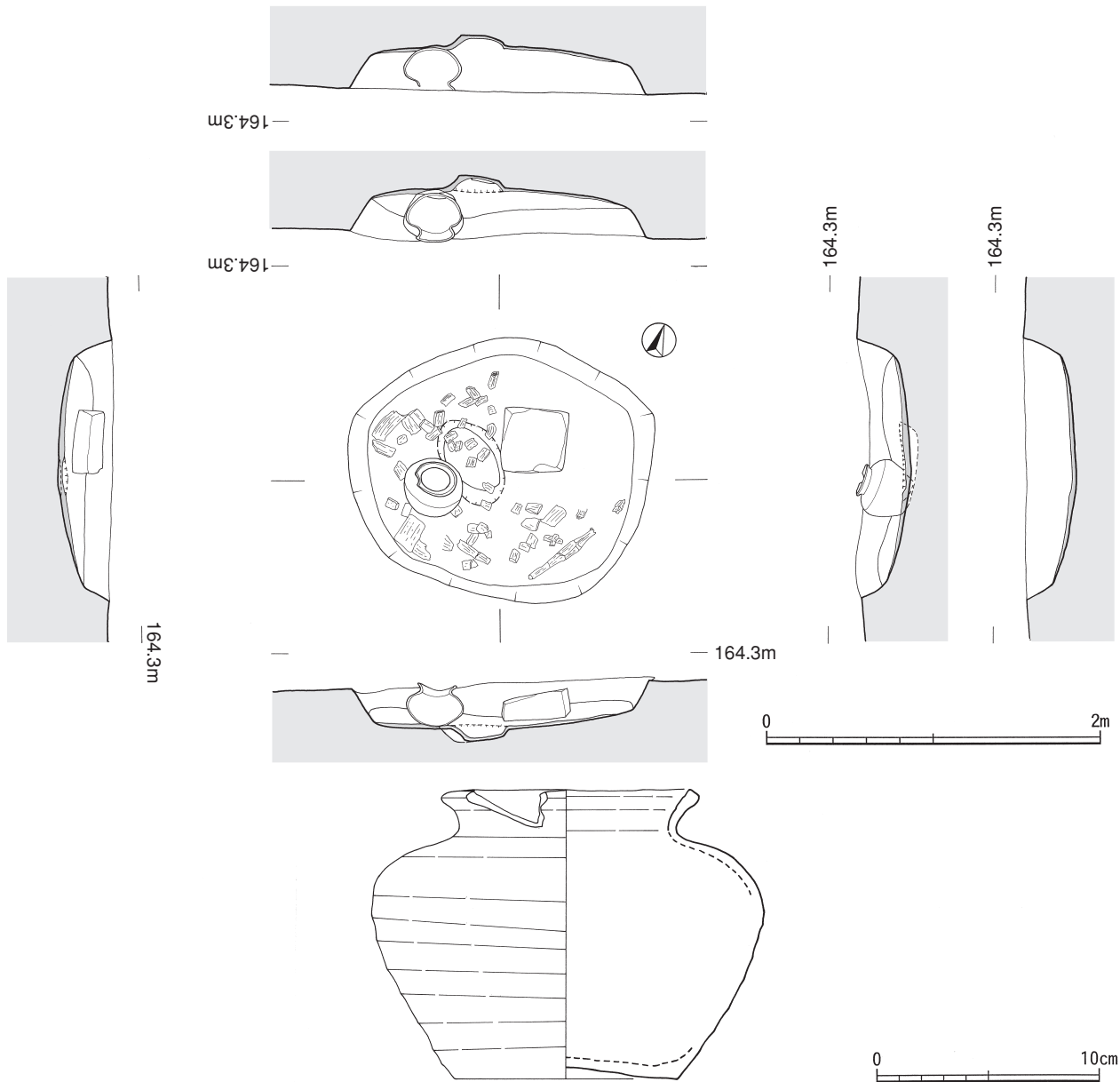
形状は90×80cmの円形状を呈している。深さ約15cmを測る。床面全体に炭が敷き詰められており、その上にカムイヤキ壺と焼骨・炭化物が混在する塊を検出している。その範囲は20cm角の方形状を呈し、厚さは約5cmである。箱状の容器に入れられていたものと推察できる。

#### 副葬品(1)

1はカムイヤキ壺である。口縁部を一部欠く以外は完形品である。作りは端正で、タタキの痕跡が見られない程丁寧にナデられている。焼成良好である。

### (2) 土坑墓5号(第50図)

形状は55×48cmの円形状を呈している。深さ12cm



第49図 土坑墓4号及び副葬品

を測る。焼骨・炭化物が混在している塊の上に白磁碗がかぶせられた状態で出土している。その傍らにはカムイヤキ壺が出土している。塊の範囲は27×16cm程で厚さは約4～7cmである。後述する土坑墓6号を切っている。

副葬品 (2, 3)

2は白磁碗である。完形品であるが、ややひずんでいる。大宰府分類碗IV 1a 類である。体部下半部は露胎である。福建省閩江流域で製作されたもので

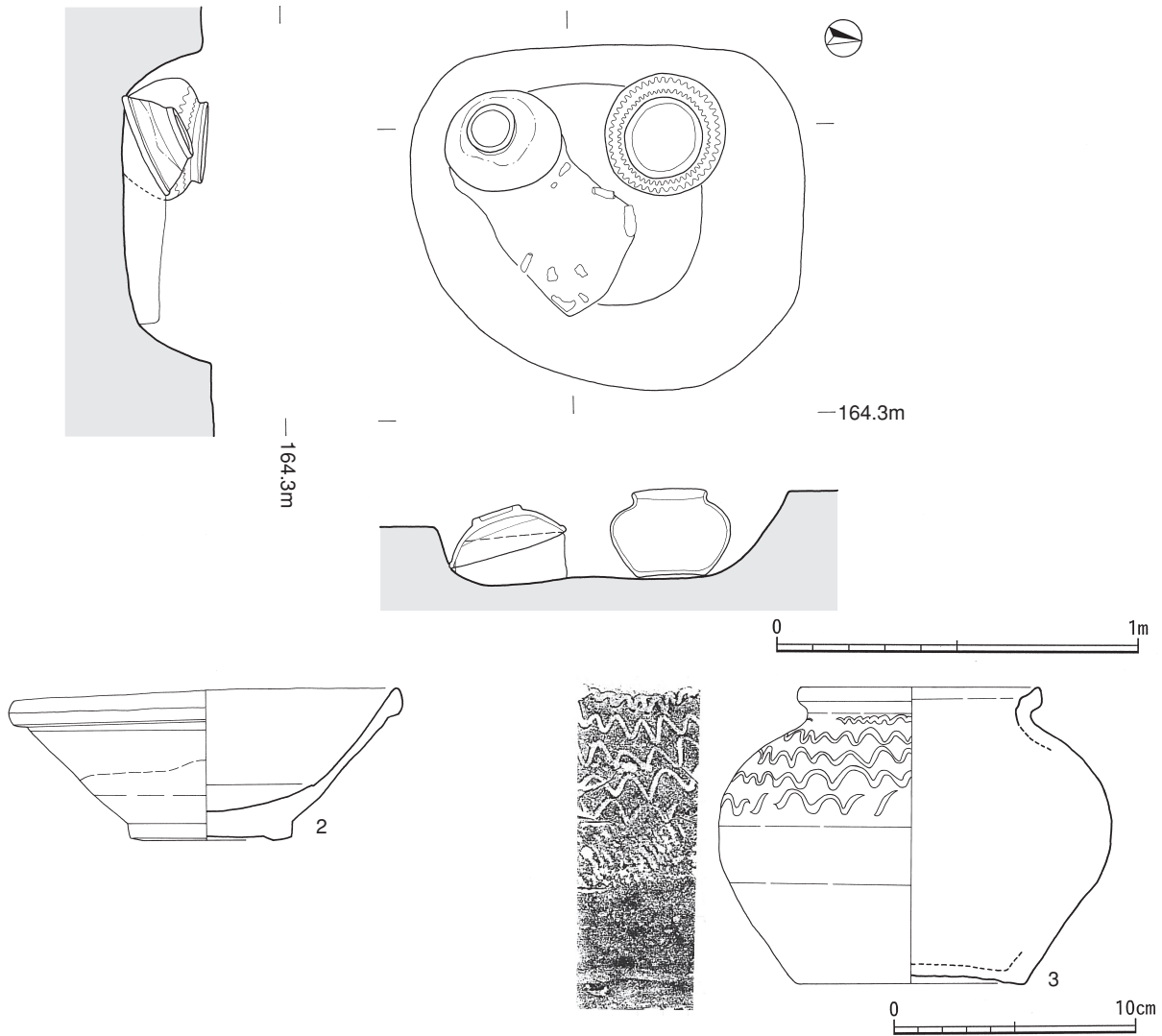
ある。3はカムイヤキ壺である。色調は赤色をしている。非常に脆く、一部欠損している。肩部には波状沈線文を5条施している。焼成は不良であるが、作りは丁寧である。

(3) 土坑墓6号 (第51図)

形状は145×85cmの長方形を呈している。深さ38cmを測る。床面には約100×60cmの範囲で炭が敷き詰められており、その上に副葬品と32×16cmの長

第46表 土坑墓4号出土遺物観察表

挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)				調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								口径	胴径	底径	器高						
49	1	I-6	土坑墓4	カムイヤキ	壺		完形品	10.8	17.7	10	13	ナデ	ナデ	褐灰色	褐灰色	良好	A群



第50図 土坑墓5号及び副葬品

方形状の焼骨と炭化物が混在している塊を検出している。厚さは3cm程である。塊の中からガラス玉と崇寧重寶を検出している。

副葬品（4～17）

4はカムイヤキ壺である。完形品であるが、ややひずんでいる。胴部上半部の一部は成形のため凸凹している。重く、ずっしり感がある。5はカムイヤキ壺である。頸部付近に「A？」様の印が刻まれている。外面は丁寧にナデられ、端正に作られている。6は刀子である。刃部は緩やかな曲線を描いている。厚みは2～4mm程である。7は崇寧重寶（1103年初鑄）である。直径3.5cmを測る、大錢で

ある。10～19はガラス玉である。直径は1.2～1.6cm前後のものが見られる。表面が白色化しているものと、黄色味を帯びるものが見られる。8・14・17には線状の跡が見られ、紐状のものが巻かれていた可能性がある。

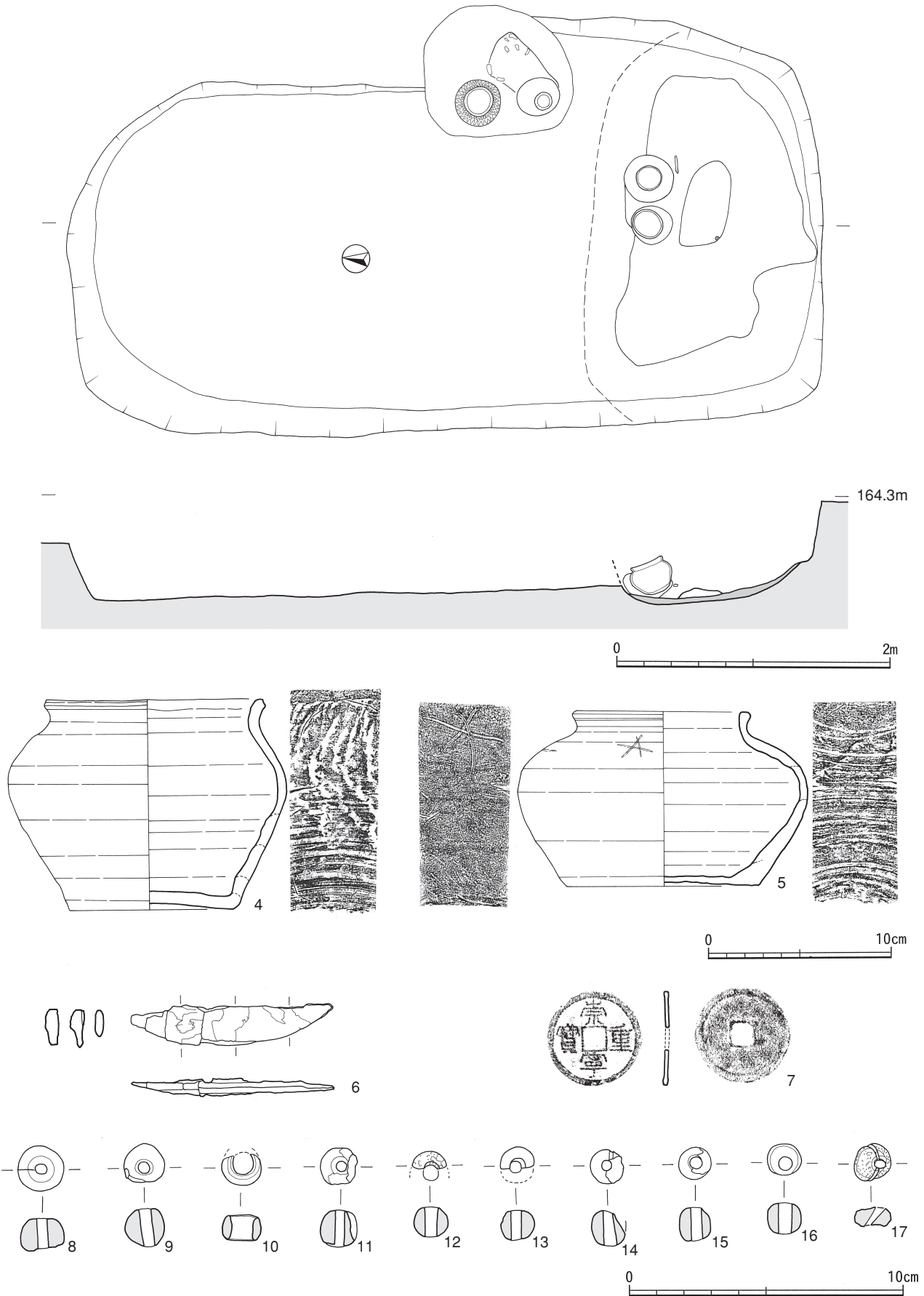
(4) 土坑墓7号（第52図）

形状は206×98cmの長方形を呈している。深さ12cmを測る。床面はほぼ平坦である。南端に白磁碗と皿が伏せられた状況で出土した。本土坑墓では焼骨・炭化物の塊や炭化物層は検出されなかった。

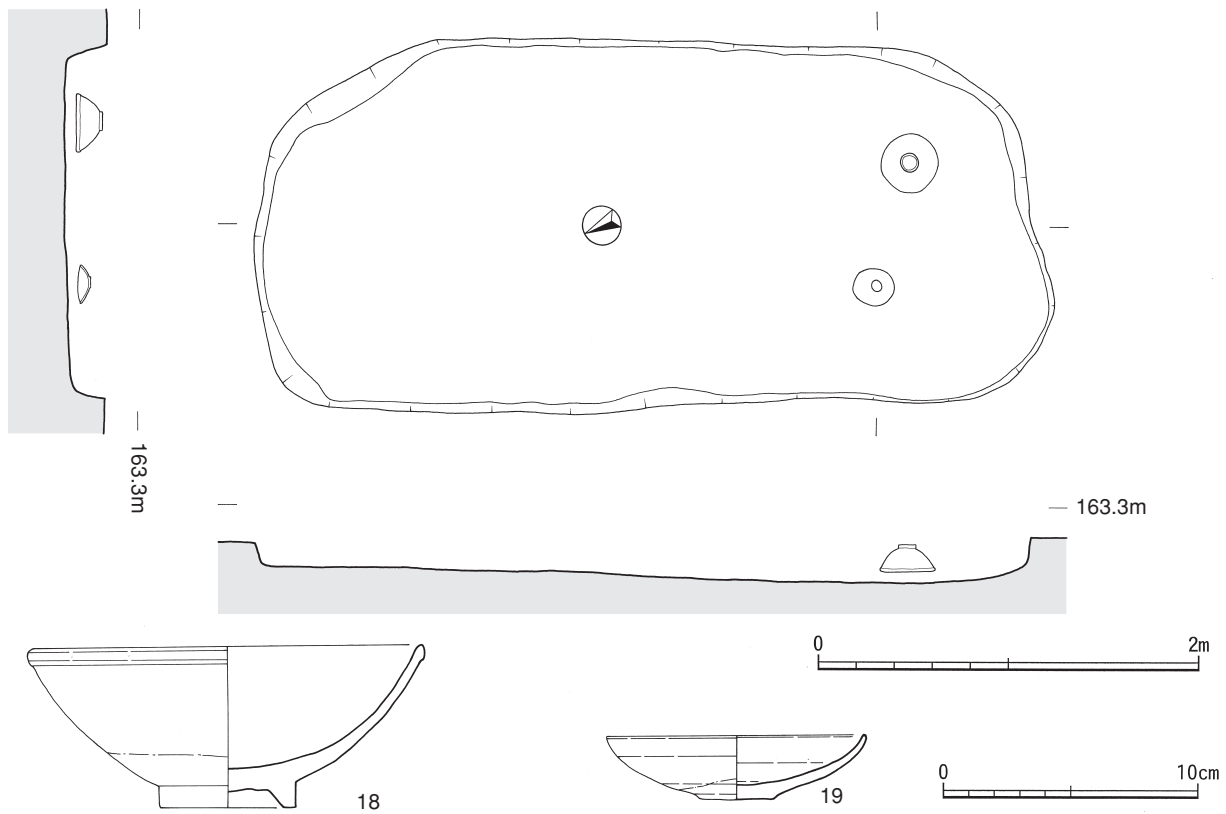
第47表 土坑墓5号出土遺物観察表

挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)				調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								口径	胴径	底径	器高						
50	2	I-6	土坑墓5	白磁	碗	IV1a	完形品	16		5.4	6.3					良好	
	3	I-6	土坑墓5	カムイヤキ	壺		完形品	10.1	16.3	9.5	12.3			橙色	橙色	軟	波状沈線文, A群

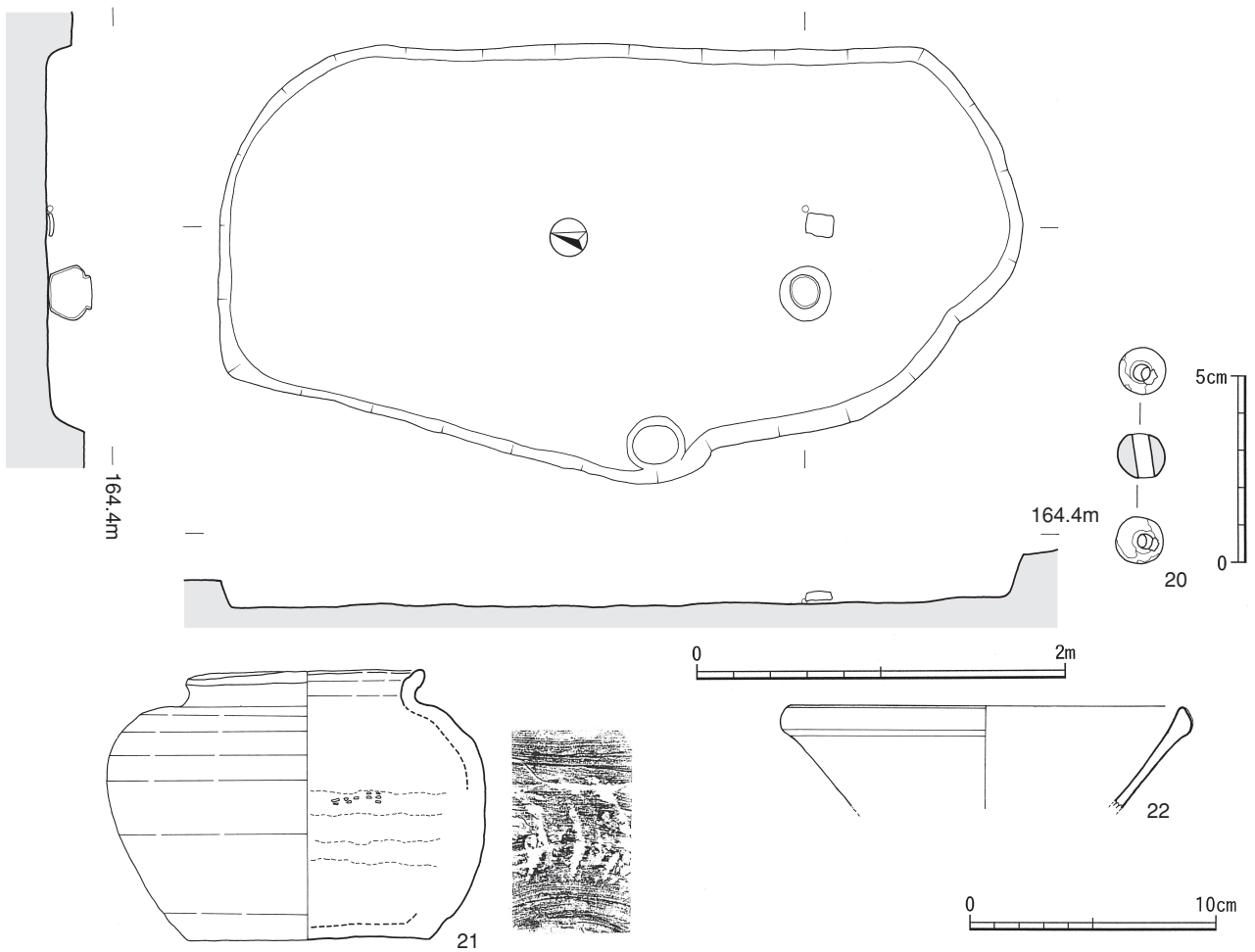




第51図 土坑墓6号及び副葬品



第52図 土坑墓7号及び副葬品



第53図 土坑墓8号及び副葬品

副葬品 (18, 19)

18は白磁碗である。大宰府分類碗Ⅱ 1 a類に該当する。全体に細かい貫入が見られ、体部外面は露胎である。広東省潮州窯系である。19は白磁皿である。大宰府分類皿Ⅵ 1 b類に該当する。体部外面は露胎である。こちらも広東省潮州窯系のものである。

(5) 土坑墓8号 (第53図)

形状は221×120cmの長方形を呈している。深さ11cmを測る。南側に向かって緩やかに傾斜している。南端にカムイヤキ壺が副葬され、その東側に炭化物と焼骨が混在している塊を検出した。その範囲は8×6cmの方形状を呈し、厚さは3cm程である。ガラス玉もそれに隣接するように検出している。

第48表 土坑墓6号出土遺物観察表(1)

挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)				調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								口径	胴径	底径	器高						
51	4	I-6	土坑墓6	カムイヤキ	壺		完形品	12	15.4	9	11.5	格子目	ナデ	灰色	灰色	良好	A群
	5	I-6	土坑墓6	カムイヤキ	壺		完形品	9.5	16	10.5	9.7	列点状	ナデ	灰色	灰色	良好	A群、内面は当て具の縁を使用

第49表 土坑墓6号出土遺物観察表(2)

挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)				調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								長さ	幅	厚み	重量						
51	6	I-6	土坑墓6	鉄製品	刀子			7.5	1.4	0.2	7						

第50表 土坑墓6号出土遺物観察表(3)

挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)				調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								径	孔径	高さ	重量						
51	7	I-6	土坑墓6	崇寧重寶	銭			3.5	0.9		6g						
	8	I-6	土坑墓6	ガラス玉				1.7	0.4					灰白色		ひも状の痕跡あり。	
	9	I-6	土坑墓6	ガラス玉				1.4	0.4	1.4				浅黄色		三角形を呈する。	
	10	I-6	土坑墓6	ガラス玉				1.5	0.7	1				灰白色		表面が摩滅	
	11	I-6	土坑墓6	ガラス玉					0.4	1.3				褐灰色		表面が摩滅	
	12	I-6	土坑墓6	ガラス玉					0.4	1.1				黄橙色		約1/3残存	
	13	I-6	土坑墓6	ガラス玉				1.3	0.4	1.1				灰白色		約1/2残存	
	14	I-6	土坑墓6	ガラス玉				1.3	0.3~0.5	1.4				淡黄色		ひも状の痕跡あり。	
	15	I-6	土坑墓6	ガラス玉				1.2	0.4	1.2				淡黄色		表面が摩滅	
	16	I-6	土坑墓6	ガラス玉				1.3	0.5	1.2				明黄褐色		表面が摩滅	
17	I-6	土坑墓6	ガラス玉				1.4	0.2~0.3	0.7				黄橙色		潰れている。 ひも状の痕跡あり。		

第51表 土坑墓7号出土遺物観察表

挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)				調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								口径	胴径	底径	器高						
52	18	I-5.6	土坑墓7	白磁	碗	Ⅱ 1 a	完形品	15.7		5.4	6.4					やや良	細かい貫入有
	19	I-5.6	土坑墓7	白磁	皿	Ⅵ 1 b	完形品	10.4		2.9	2.5					良好	

第52表 土坑墓8号出土遺物観察表(1)

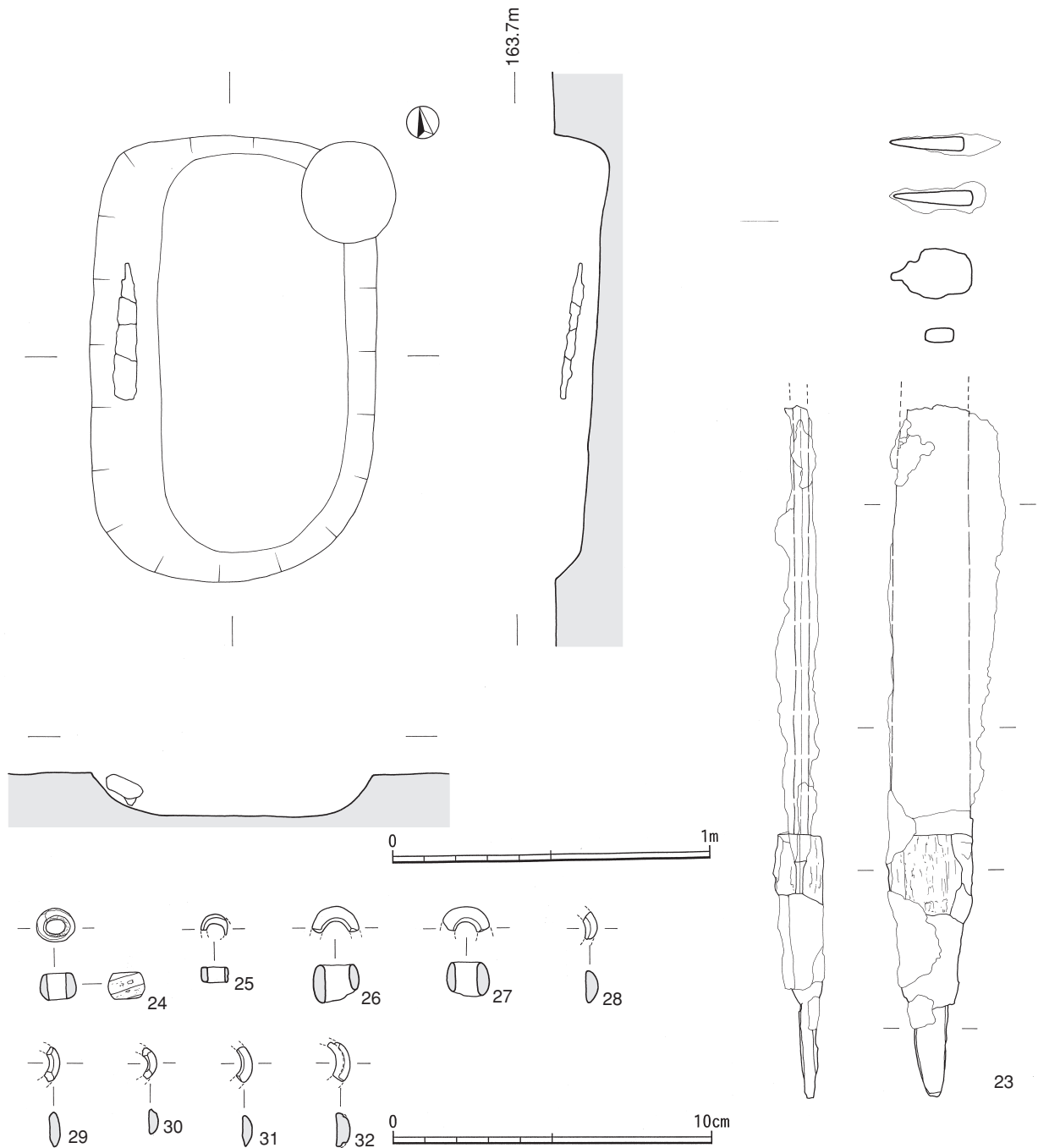
挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)			調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								径	孔径	高さ						
53	20	I-5	土坑墓8	ガラス玉				1.3	0.4	1.2				灰白色	表面が摩滅	

第53表 土坑墓8号出土遺物観察表(2)

挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)				調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								口径	胴径	底径	器高						
53	21	I-5	土坑墓8	カムイヤキ	壺		完形品	9.8	15.4	10	10.9	格子目	ナデ	灰色	灰色	良好	A群
	22	I-5	土坑墓8	白磁	碗	Ⅳ	口縁部	16						灰白色	灰白色	良好	細かい貫入有

第54表 土坑墓9号出土遺物観察表(1)

挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)				調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								長さ	幅	厚み	重量						
54	23	F-5	土坑墓9	鉄製品	短刀			21.6	2.5	0.5							



第54図 土坑墓9号及び副葬品

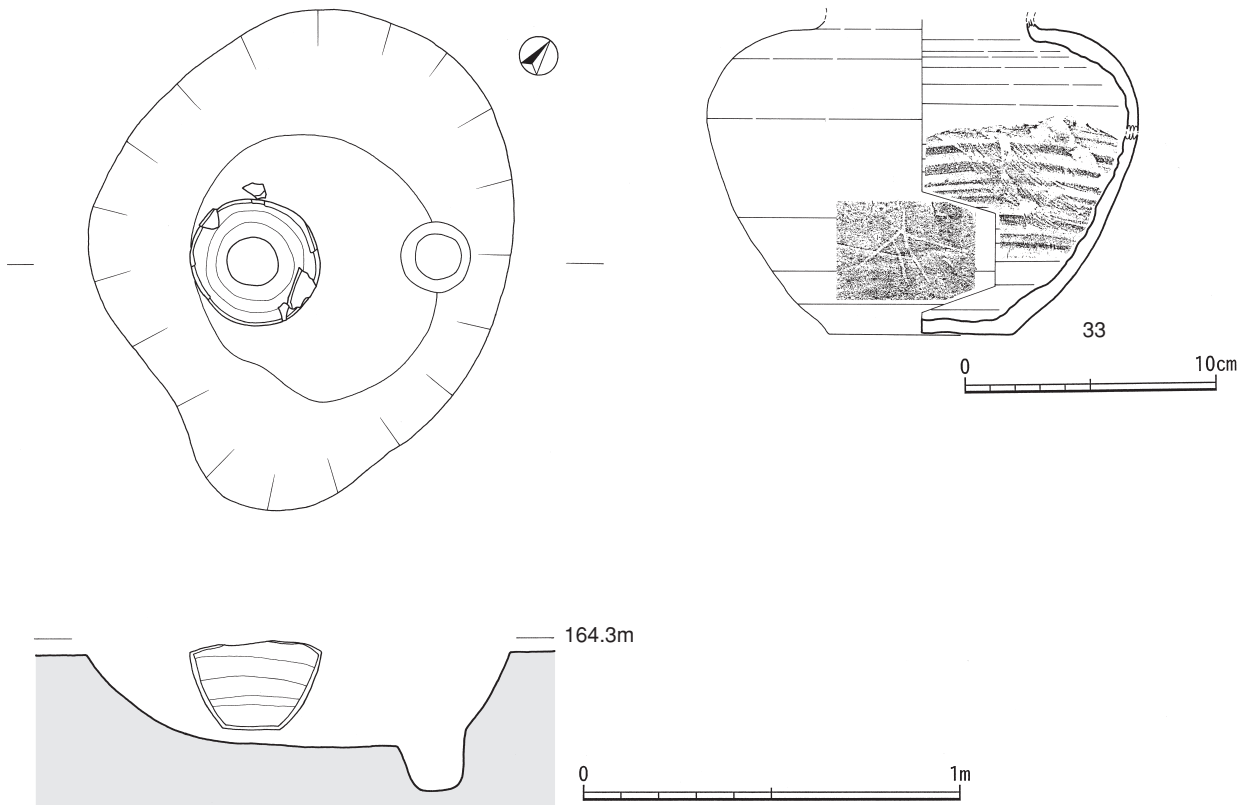
副葬品 (20～22)

20はガラス玉である。表面は剥離しており、灰白色を呈している。21はカムイヤキの壺である。口縁部は比較的丁寧に行われているが、ややひずんでい

る。肩部の張り出しがそろっておらず、張り出しが弱いところは器壁が厚く、ぼってりとしている。外面はやや粗いナデ調整である。22は土坑墓内で検出された白磁碗Ⅳ類である。

第55表 土坑墓9号出土遺物観察表(2)

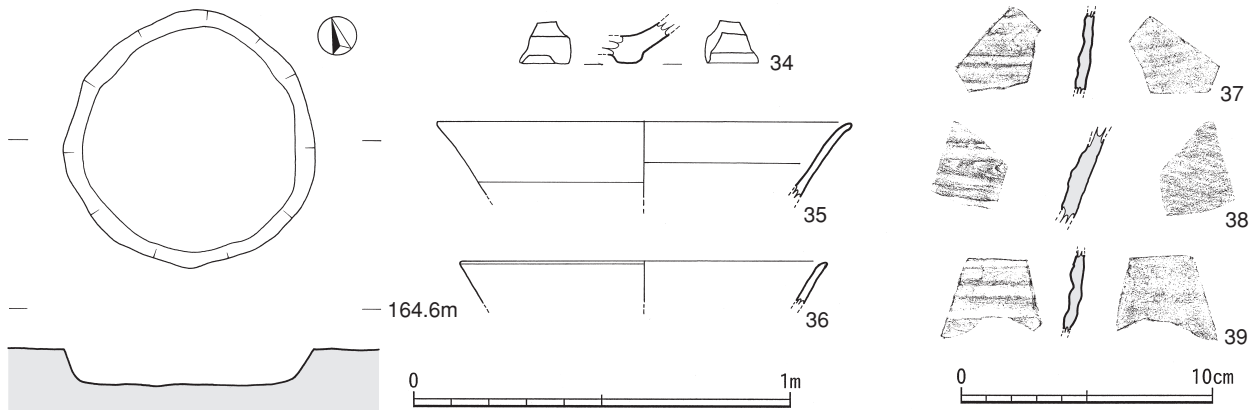
挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)			調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								径	孔径	高さ						
54	24	F-5	土坑墓9	ガラス玉				1.2	0.5~0.6	1.4						
54	25	F-5	土坑墓9	ガラス玉					0.5	0.5						約3/4残存
54	26	F-5	土坑墓9	ガラス玉					0.7~0.8	1.2						約1/2残存
54	27	F-5	土坑墓9	ガラス玉					0.7	1.1						約1/2残存
54	28	F-5	土坑墓9	ガラス玉						1						約1/5残存
54	29	F-5	土坑墓9	ガラス玉						1.1						約1/5残存
54	30	F-5	土坑墓9	ガラス玉						0.8						約1/6残存
54	31	F-5	土坑墓9	ガラス玉						1						約1/5残存
54	32	F-5	土坑墓9	ガラス玉						1.1						約1/4残存



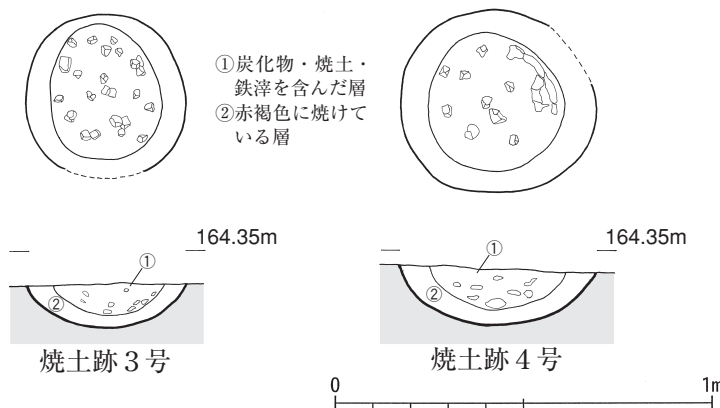
第55図 土坑墓10号及び副葬品

第56表 土坑墓10号出土遺物観察表

挿図No	図No	出土区	遺構名	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値(cm)				調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
								口径	胴径	底径	残器高						
55	33	I-3.4	土坑墓10	カムイヤキ	壺		上半部 ~ 底部		17.2	7.5	12.4	ナデ	ナデ	灰色	灰色	良好	A群



第56図 土坑6号及び出土遺物



第57図 焼土跡(炉跡)

(6) 土坑墓9号(第54図)

形状は71×45cmの円形状を呈している。深さ8cmを測る。鉄製品とガラス玉が破片で9点検出されている。土坑からは人骨片は検出されなかったが、形状や出土位置から土坑墓と判断した。

副葬品(23~32)

23は鉄製品である。錆が多く付着しているが、ほぼ直線的な形状をしているものと見られる。刃部では厚さ4mmほどである。短刀であると推察される。

24～32はガラス玉の破片である。いずれも摩滅している。表面の色調が白色と黄色のものが見られる。

### (7) 土坑墓10号 (第55図)

形状は67×56cmの円形状を呈している。深さ12cmを測る。土坑からは人骨片は検出されなかったが、形状などから土坑墓の可能性はある。

#### 副葬品 (33)

カムイヤキ壺1点が検出されている。口縁上部は欠損している。体部外面下部には「介？」様の刻みが入っている。外面は丁寧なナデられており、成形痕は認められない。内面には刷毛目のような痕跡が確認できる。

### 3 土坑3 (第56図)

I～3区にて確認された。長軸69×短軸67cmを測る、円形状土坑である。深さは10cm余りである。越州窯系青磁(34)・白磁(35・36)・朝鮮系無釉陶器(37～39)が出土している。出土遺物から11世紀後

第57表 土坑6号出土遺物観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考	
56	34		II	I3	土坑6	越州窯系青磁	碗	I 2ア	底部				灰色	灰オリブ色	良好		
	35		III	I3	土坑6	白磁	碗	VIII 2	口縁部	口径: 16.6cm			灰白色	灰白色	良好		
	36		III	I3	土坑6	白磁	碗・皿	華南	口縁部	口径: 14.6cm			灰白色	灰白色	良好		
	37			I3	土坑6	朝鮮系無釉陶器			胴部			ナデ	ナデ	灰黒色	灰黒色	良好	胎土バームクーヘン状。
	38		III	I3	土坑6	カムイヤキ			胴部				平行	暗灰色	オリブ黒色	良好	
	39			I3	土坑6	朝鮮系無釉陶器			胴部			ナデ	ナデ	灰黒色	灰黒色	良好	胎土バームクーヘン状。

第58表 溝状遺構1号出土遺物観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考	
58	40	一括		G4	溝状遺構1	白磁	碗	IV	底部	底部: 7cm			灰黄色	黄灰色	良好		
	41	一括		G4	溝状遺構1	越州窯系青磁	碗	III 1b	胴部				オリブ褐色	オリブ褐色	良好		
	42	一括		G4	溝状遺構1	朝鮮系無釉陶器			胴部				暗青灰色	暗青灰色	良好		
	43	一括		G4	溝状遺構1	土師器	甕		頸部				にぶい黄褐色	にぶい黄色	良好		
	44	一括	II	F4	溝状遺構1	須恵器	甕		胴部				灰色	褐灰色	良好	F4II一括,G4溝一括,2点接合	
	45	一括		G4	溝状遺構1	須恵器	壺		胴部				灰白色	灰白色	良好		
	46			F3	溝状遺構1	カムイヤキ			胴部		格子目	綾杉	青灰色	暗青灰色	良好		
	47	一括		G4	溝状遺構1	カムイヤキ			胴部			ナデ	ナデ	灰色	灰色	良好	
	48	一括		G4	溝状遺構1	滑石混入土器			口縁部					にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	器表面はザラつく。微量の滑石が混入。

第59表 溝状遺構2号出土遺物観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	調整(内)	調整(外)	焼成	備考
58	49	一括		G4	溝状遺構2	土師器	甕		口縁部				橙色	灰黄褐色	良好	内外面摩滅が激しい。
	50			E6	溝状遺構2	須恵器			胴部				青灰色	青灰色	良好	胎土バームクーヘン
	51			D6	溝状遺構2	カムイヤキ			胴部		格子目	平行	オリブ灰色	オリブ灰色	良好	
	52			E6	溝状遺構2	カムイヤキ			胴部		格子目	綾杉	青灰色	暗青灰色	良好	
	53			C6	溝状遺構2	カムイヤキ			胴部			平行	灰色	灰色	良好	
	54			D6	溝状遺構2	カムイヤキ			胴部		格子目	平行	青灰色	黒青灰色	良好	
	55			D6	溝状遺構2	カムイヤキ			胴部			平行	暗青灰色	青灰色	良好	

半～12世紀頃に廃棄された土坑と考えられる。

### 4 焼土跡(炉跡) (第57図)

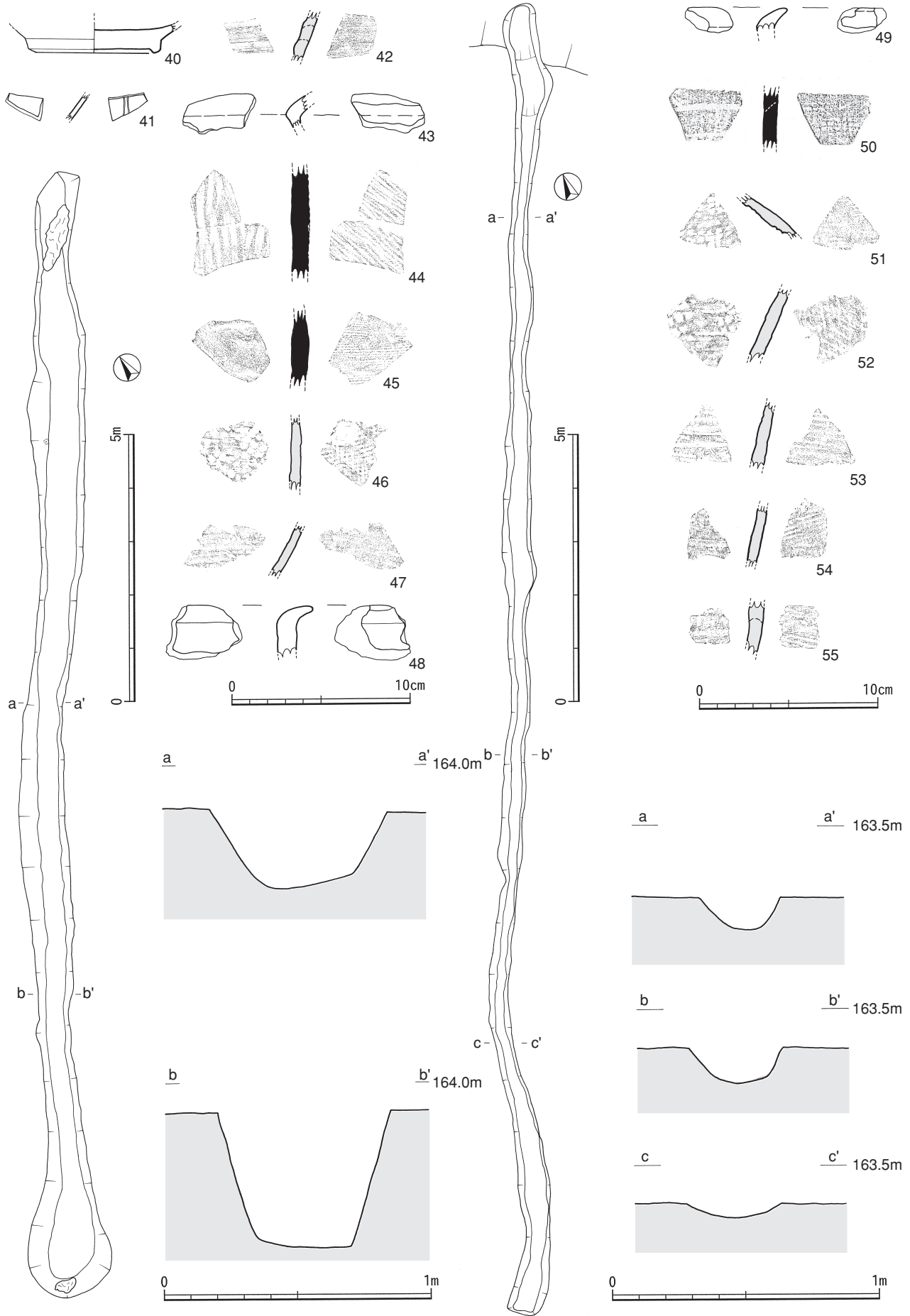
双方とも直径20～25cm程で、周囲が赤く変色している。変色していない部分からは焼土粒や微細な鉄滓が確認されている。鍛冶炉と考えられる。

### 5 溝状遺構(第58図)

2条検出されている。出土遺物からいずれも中世の遺構であると考えられる。

溝状遺構1はE～G-3・4区において確認されている。全長約21m、幅12～32cm、深さ30～52cmを測る。越州窯系青磁(41)・須恵器(44・45)・白磁(40)・朝鮮系無釉陶器(42)・カムイヤキ(46・47)・滑石混入土器(48)が出土している。

溝状遺構2はC～E-6区において確認されている。全長約25m、幅30～60cm、深さ5～18cmを測る。土師器(49)・カムイヤキ(50～55)が出土している。



第58図 溝状遺構

## 第2節 遺物

### 1 土師器 (第59図56～85)

出土したのは口縁に屈曲を持つ甕形土器が主体であるが、黒色土器や滑石製石鍋を模倣したと見られる土器が数点出土している。口縁部に明瞭な屈曲をもつ甕形土器は当時の奄美の在地土器であると考えられる兼久式土器にはない形状であり、本土系の土師甕と考えられる。ここでは屈曲部を含む口縁部資料を中心に32点を図化した。

#### (1) 埴・坏

57・58は胴部片である。胎土には混和材が少なく、精製された胎土を使用している。色調は肌色を呈している。59は推定径5.6cmを測る。約1/2残存しているが、胴部・高台部分が破損している。1mm程の花崗岩片が器表面に見られる。黒色土器の範疇に入る可能性がある。56は黒色土器の口縁部である。小破片であるが、内外面黒く変色している。60は黒色土器の底部である。推定底径7cmを測る。胎土に

は角閃石が多く混入している。61は坏の底部である。

#### (2) 甕

62～83は口縁部付近の破片である。

62～69, 73は口縁部が細長く伸びるものであり、口縁端部をやや肥厚させる。やや不明瞭な稜線を持つものである。70～72, 74～80, 83は口縁部を短く成形し、内面に明瞭な稜線を持つものである。81・82は口縁部は破損しているが、あまり屈曲しない甕の一群であると考えられる。

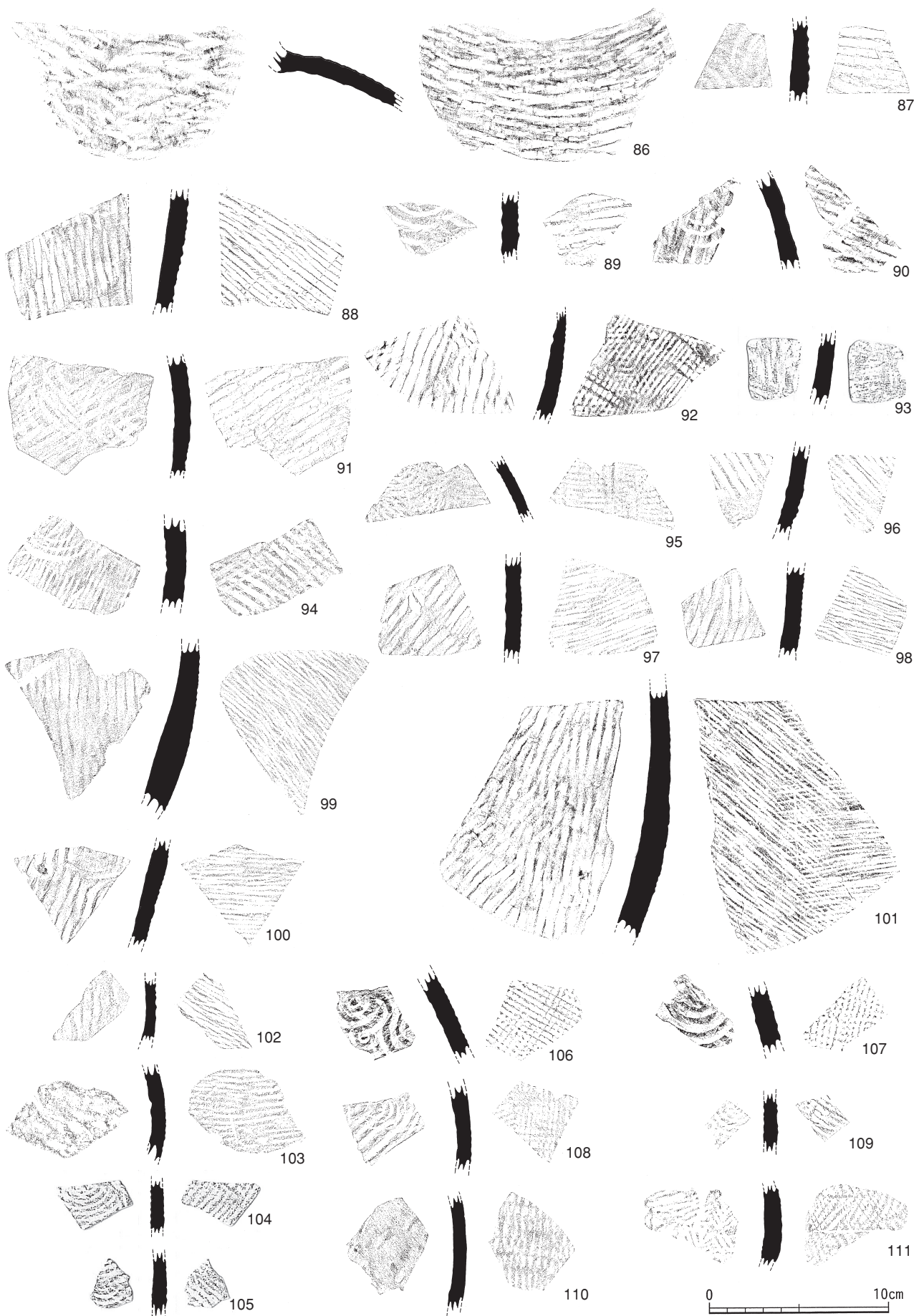
#### (3) 模倣土器

滑石製石鍋を模倣した可能性が考えられるものである。84は口縁部の破片であり、口縁部に瘤状の凸帯がつくものである。胎土は土師器の甕と同様で、白色の粒子を多く含み、ざらついている。85は口縁部の破片である。そのほとんどが破損しているが、口唇部は平坦に作られている。胎土は精選されており、大きな粒子は見られない。破損部には瘤状あるいは縦耳状の突起があった可能性が考えられる。



第59図 土師器





第60图 須惠器(1)

## 2 須恵器 (第60・61図 86～125)

カムイヤキとは明らかに胎土・調整が異なることから、本土系の須恵器であると考えられる。須恵器は総数101点出土しており、その内41点図化した。

### (1) 甕

86～111は甕と考えられる資料である。出土したのは胴部の破片である。86～95は外面に格子目もしくは平行タタキを有する一群である。88と94は破断面を擦っており、転用品である可能性がある。96～105は内外面に平行状タタキ・当て具を有する一群である。101は胴部下半の資料である。外面は平行タタキ、内面は平行当て具で調整されている。96～102は同一個体であるとみられる。106～109は外面に格子目状タタキを有するものである。110は

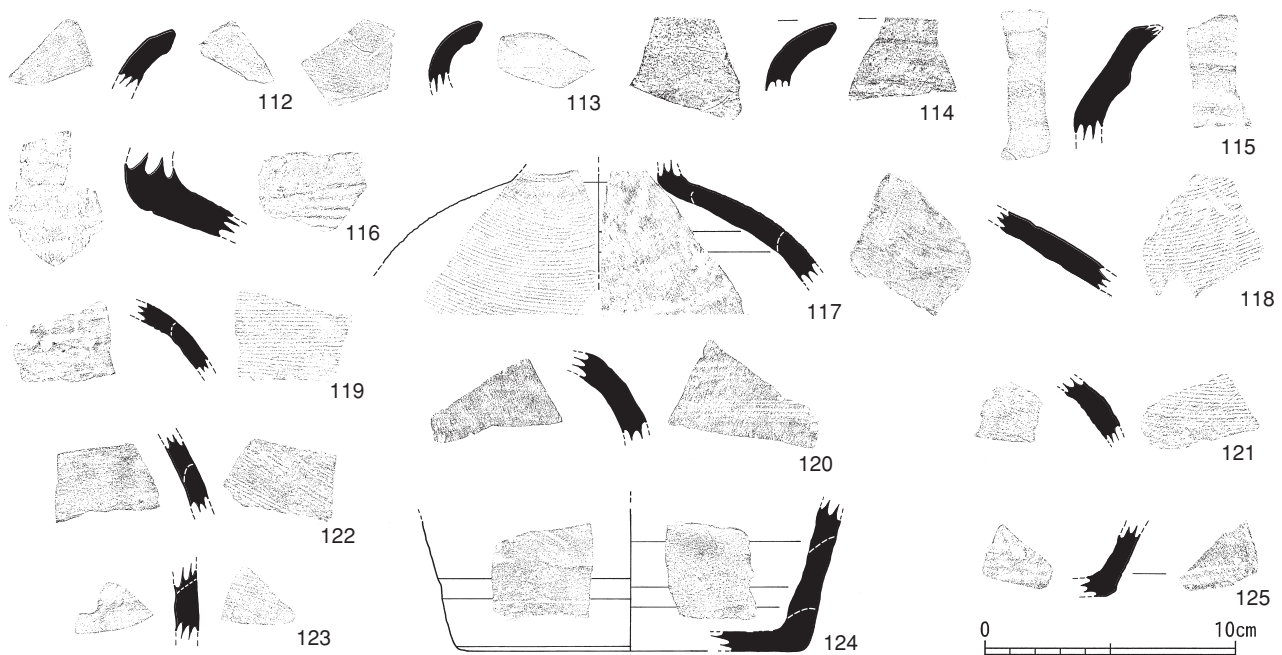
第60表 土師器観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
59	56	一括	II	B3		黒色土器	壺	A類	口縁部				褐灰色	褐灰色	良好	胎土は微細な石英粒を多く含む。精製された胎土を使用。
	57			H6	H0601	土師器	壺		胴部				浅黄褐色	浅黄褐色	やや軟	
	58		III	H4	H0496	土師器	壺		胴部				浅黄褐色	浅黄褐色	やや軟	内外面とも摩滅。
	59	一括	II b	H4		土師器	壺		底部				白色	灰色	やや軟	器表面に1～2mmの白色粒あり。
	60			H5	掘立9(P8)	黒色土器	壺	B類	底部	底径：7cm	ナデ	ナデ	黒色	淡黄色	良好	胎土にガラス質の粒あり。
	61		III	H4	H0427	土師器	坏		底部	底径：8.8cm			灰黄色	黄褐色	やや軟	全体的に摩滅。
	62	一括	II a	I5		土師器	甕		口縁部				にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	やや軟	器表面に1～2mm前後の粒子が見られザラついている。
	63	一括	II a	I5		土師器	甕		口縁部				灰黄褐色	にぶい黄褐色	やや軟	
	64		III	C4	掘立29P5	土師器	甕		口縁部				明赤褐色	明赤褐色	やや軟	口唇部のみ残存。
	65	一括		I4		土師器	甕		口縁部				灰黄褐色	灰黄褐色	良好	
	66			H6	H0646	土師器	甕		口縁部				褐灰色	橙色	やや軟	器表面に1mm以下の粒子が見られややザラつく。
	67		III	H3		土師器	甕		口縁部				橙色	橙色	良好	
	68		III	I4	I0419	土師器	甕		口縁部				黒褐色	黒褐色	良好	内外面摩滅。
	69		III	H4	掘立16(P5)	土師器	甕		口縁部				にぶい黄褐色	灰褐色	良好	
	70	一括		G3		土師器	甕		口縁部	口径：13cm			にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	残存率約1/5。内外面摩滅。
	71		III	H4	掘立15(P10)	土師器	甕		口縁部				橙色	橙色	やや軟	
	72		II	H3	H0341	土師器	甕		口縁部				にぶい褐色	にぶい褐色	良好	二点接合。内面は丁寧に削られている。
	73	一括		D4		土師器	甕		口縁部				灰黄褐色	灰黄褐色	良好	内面は強く削られる。全体的に摩滅し調整痕不明瞭。
	74		III	G4	G0421	土師器	甕		口縁部				灰黄褐色	灰黄褐色	良好	
	75			G4	G0416	土師器	甕		口縁部				にぶい黄褐色	橙色	良好	1mm程の白砂粒子を混入。全体的に摩滅。
	76	一括	不明	I4		土師器	甕		口縁部				橙色	橙色	良好	
	77		III	I6	I0651	土師器	甕		口縁部				にぶい褐色		良好	
	78		III	H4	H0421	土師器	甕		頸部				黒褐色	橙色	良好	
	79			H3	H0356	土師器	甕		口縁部				橙色	明晰褐色	やや軟	
	80			C4	C0445	土師器	甕		口縁部				にぶい黄褐色	にぶい褐色	やや軟	
81		III	I4	I0409	土師器	甕		頸部				灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好		
82			G3	G0318	土師器	甕		頸部				橙色	橙色	やや軟	内外面摩滅している。白色粒子が多く見られる。	
83		III	I5	掘立6(P8)	土師器	甕		口縁部				にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好		
84			F3	F0306	模倣土器			口縁部				明赤褐色	明赤褐色	やや軟	瘤状凸帯。胎土は土師器甕と同様。	
85		III	E5	E0536	模倣土器			口縁部				橙色	橙色	良好	胎土はキメの細かい精製されたものを使用。	

内外面摩滅している。特に内面は摩滅が激しい。転用品である可能性がある。111は内面に鋸歯状の当て具痕を残すものである。

### (2) 壺

112～125は壺と考えられる資料である。112～115はいずれも口縁部である。全て褐色の色調を呈する。112～114は内面に自然釉が観察される。また、口縁部外面に稜をもち、断面三角形をなす。内外面とも回転ナデで調整している。116は頸部から胴部への屈曲部である。外面は平行タタキ、内面は指ナデで調整されている。112, 113, 114, 116は同一個体とみられる。117～123は胴部破片である。いずれも外面にカキ目が施される資料で、117と118, 119



第61図 須恵器(2)

～123が同一個体とみられる。124,125は底部付近の資料である。

### 3 越州窯系青磁, 古代白磁 (第62図126～133)

#### 越州窯系青磁 (第62図126～132)

越州窯系青磁は総数10点出土している。古代を代表する遺物であり、国衙・群衙に相当すると考えられる遺跡から出土するとされる。

129は推定底径2.95cmを測る底部である。大宰府分類碗Ⅰ2ア類に相当し、8世紀末～10世紀中頃のA期に比定される。約1/4残存しており、釉色は灰オリーブ色を呈している。高台部に一部釉がかかっていない部分があるが、全面施釉されている。底部には目跡が確認できる。126は推定口径16.6cmを測る。大宰府分類碗Ⅲ1b類に該当する。大宰府分類のB期に相当し、10世紀後半～11世紀中頃に比定される。口縁端部は輪花状を呈し、体部外面に篋押縦線を有する。内面には文様などは見られない。127は推定口径16cmを測る。異なる柱穴内遺物が接合した資料である。内面・外面には文様等は確認できない。130は胴部破片である。大宰府分類碗Ⅲ3b類に該当する。内面は文様が施されている。

#### 白磁Ⅰ類 (第62図133)

白磁Ⅰ類は1点出土している。古代を代表する遺物である。胎土は緻密で精良である。掘立柱建物跡18号を構成するピットより出土している。

### 4 布目圧痕土器 (第63図 134～139)

布目圧痕土器は総数19点出土しており、図化したのは6点である。いずれも胎土中に1mm程の白色粒や砂粒状の粒子を含む。内面に布目跡が見られるが、その痕跡は不明瞭なものが多い。色調は赤褐色や橙色を呈している。破片のため、全体の形状は不明である。

134・135は口縁部の破片である。口唇を平坦に作るものと、先細りするものが得られた。136は胴部片であるが、明瞭に布目痕が残っているものである。139は胎土に砂粒状の粒子以外に金雲母が混入されている。土師器にも同様の胎土のものが見られ、これらと同一の地域で製作されている可能性が考えられる。

### 5 白磁 (第64図 140～192)

白磁は総数147点出土している。そのうち図化できたのは56点である。出土した器種は碗・皿が得られ、碗が最も多く出した。

140は口径16.2cmを測り、薄手の細い玉縁を持つ。大宰府分類碗Ⅱ類に相当する。器壁・釉共に薄い。143はⅡ類の底部である。推定底径4.8cmを測る。体部外面は露胎である。70・60・51は皿である。146は大宰府分類Ⅵ1b類の底部である。底径3.7cmを測り、若干上げ底気味である。

147～175は大宰府分類椀Ⅳ類、玉縁を有する碗の口縁部・底部である。147～160はⅣ類の口縁部である。玉縁は厚手のものから薄手のものまで出土している。164～175は大宰府分類椀Ⅳ類の底部である。164～168は内面見込みに段を有するものであり、大宰府分類Ⅳ1a類に相当する。

176～188は大宰府分類椀Ⅴ類、口縁端部を直口・内湾・端反させているものである。

189～192は大宰府分類椀Ⅷ類に相当するもので

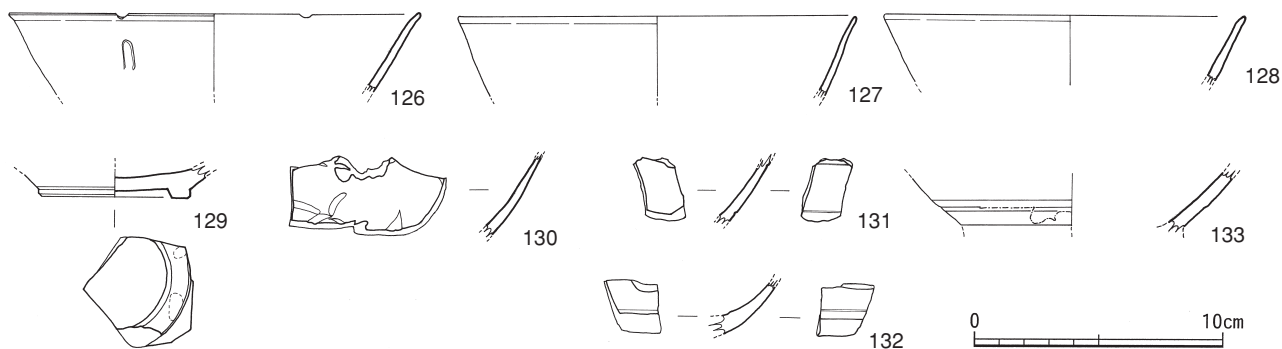
ある。190は推定底径6.6cmを測り、底部外面は露胎である。内面見込みに段を有し、輪状に釉剥ぎされている。

## 6 初期高麗青磁 (193・194)

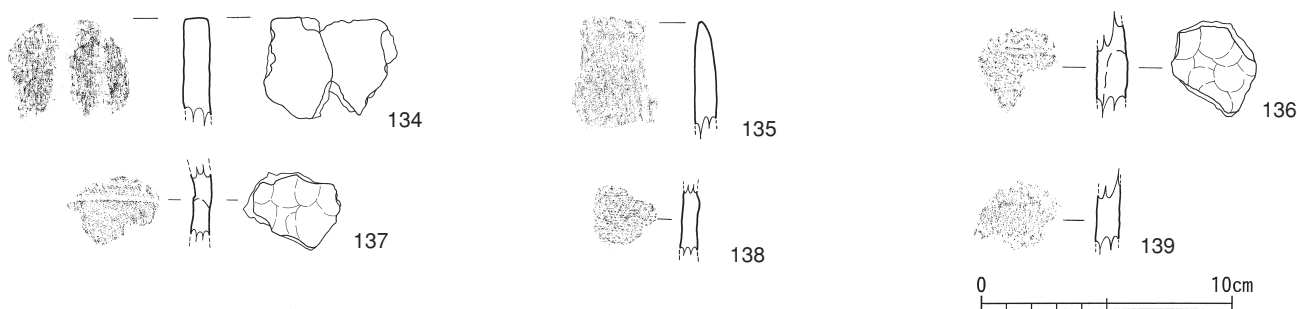
初期高麗青磁は象嵌技法が主たる施文技法となる以前の高麗青磁である。確認できたものはいずれも小破片の胴部であるが、大宰府分類椀Ⅲ類とみられる。

第61表 須恵器観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
60	86	一括	Ⅲ	I4		須恵器	甕		胴部		同心円	平行	黄灰色	褐灰色	良好	
	87	一括	Ⅱb	H6		須恵器	甕		胴部		同心円	平行	黄灰色	褐灰色	良好	
	88		Ⅲ	F5	掘立19(P5)	須恵器	甕		胴部		平行	平行	緑灰色	橙色	良好	側面を擦っている。転用品の可能性あり。
	89	一括	Ⅱb	H6		須恵器	甕		胴部		同心円	平行	灰黄褐色	灰色	良好	
	90	一括	Ⅱb	H6		須恵器	甕		胴部		平行・同心円	平行	灰色	灰褐色	良好	
	91	一括	Ⅱb	H6		須恵器	甕		胴部		平行・同心円	平行	黄灰色	にぶい黄褐色	良好	
	92	一括	Ⅱb	I4		須恵器	甕		胴部		平行	平行	灰黄褐色	灰黄色	良好	
	93	73	Ⅱ	H4	掘立17(P9)	須恵器	甕		胴部		平行	平行	浅黄色	浅黄色	良好	
	94	一括	Ⅱ	F4		須恵器	甕		胴部		平行・同心円	平行	淡赤褐色	にぶい褐色	良好	側面を擦っている。転用品の可能性あり。
	95	一括	Ⅱb	I6		須恵器	甕		胴部		同心円	平行	褐灰色	にぶい黄褐色	良好	
	96		Ⅲ	G6	柱穴列6P3	須恵器	甕		胴部		平行	平行	灰白色	明黄褐色	良好	
	97	一括	Ⅱb	H5		須恵器	甕		胴部		平行	平行	明緑灰色	橙色	良好	
	98	一括	Ⅲ	I6		須恵器	甕		胴部		平行	平行	オリブ灰色	黄褐色	良好	
	99	一括	Ⅱb	H4		須恵器	甕		胴部		平行	平行	灰白色	黄褐色	良好	
	100			F4	F0428	須恵器	甕		胴部		平行	平行	灰白色	にぶい褐色	良好	
	101	一括	Ⅱa	H6		須恵器	甕		胴部		平行	平行	灰白色	黄褐色	良好	
	102	一括	Ⅱb	H6		須恵器	甕		胴部		平行	平行	オリブ灰色	にぶい黄褐色	良好	
	103	一括		I4		須恵器	甕		胴部		平行	平行	浅黄褐色	浅黄褐色	軟	
	104	一括	Ⅱ	F4		須恵器	甕		胴部		同心円	平行	灰色	灰白色	良好	
	105		Ⅲ	G5	掘立18(P5)	須恵器	甕		胴部		同心円	平行	浅黄色	褐灰色	良好	
	106		Ⅲ	F5	F0564	須恵器	甕		胴部		同心円	格子目	灰黄色	浅黄色	良好	
107	一括	Ⅱ	A3		須恵器	甕		胴部		同心円	格子目	黄灰色	灰黄色	良好		
108		Ⅲ	H6	H0610	須恵器	甕		胴部		平行・同心円	格子目	灰黄色	黄灰色	良好		
109		Ⅲ	H4	H0439	須恵器	甕		胴部		同心円	平行	灰色	灰黄色	良好		
110		Ⅲ	H5	掘立10(P3)	須恵器	甕		胴部		ナデ	格子目	灰オリブ色	灰黄色	良好	摩滅が激しい	
111	一括	Ⅱb	H4		須恵器	甕		胴部		鋸歯状	格子目	灰白色	灰白色	良好		
61	112	一括	Ⅱ	H3		須恵器	壺		口縁部		ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	
	113	一括		I4		須恵器	壺		口縁部		ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	褐灰色	良好	
	114		Ⅱ	H3	H0314	須恵器	壺		口縁部		ナデ	ナデ	浅黄褐色	にぶい黄褐色	良好	
	115	一括	Ⅲ	B5		須恵器	壺		口縁部		ナデ	ナデ	灰黄色	灰黄色	良好	
	116	一括	Ⅱb	H4		須恵器	壺		胴部		ナデ	平行	にぶい黄褐色	にぶい黄色	良好	
	117		Ⅲ	F5	F0570	須恵器	壺		胴部		ナデ	カキ目	灰色	灰白色	良好	
	118	一括	Ⅱa	G5		須恵器	壺		胴部		ナデ	カキ目	灰白色	灰白色	良好	
	119		Ⅲ	H5	H5105	須恵器	壺		胴部		ナデ	カキ目	灰色	灰白色	良好	
	120		Ⅲ	I4	I0412	須恵器	壺		胴部		ナデ	平行	灰色	灰色	良好	
	121	一括	Ⅱb	H6		須恵器	壺		胴部		ナデ	カキ目	灰オリブ色	灰色	良好	
	122		Ⅲ	H6	H0658	須恵器	壺		胴部		ナデ	カキ目	灰色	灰白色	良好	
	123	一括		G6		須恵器	壺				ナデ	カキ目	灰色	灰色	良好	
	124	一括	Ⅱb	G6		須恵器	壺		底部	底径：13.1cm	ナデ	ナデ	黄灰色	暗灰黄色	良好	自然釉がかかる
	125		Ⅲ	H4	H0445	須恵器	壺		底部		ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	良好	



第62図 越州窯系青磁



第63図 布目圧痕土器

## 7 朝鮮系無釉陶器 (第65図 195 ~ 209)

韓国で製作されたと考えられる陶器である。カムイヤキ窯成立にも影響を与えた可能性が指摘されている。朝鮮系無釉陶器である可能性のものは胎土の状況から2種類考えられる。

A群：器壁は非常に薄く、タタキ痕や当て具痕は丁寧にナデ消される。胎土は白い線状の帯が混ざり込んでおり、堆積状・バームクーヘン状に見えるもの。B群：器壁はA群より厚みを持ち、丁寧にナデられ

ているが、タタキ痕や当て具痕を残すものもある。胎土には混和材をほとんど混入しておらず、焼成はカムイヤキに良く似ているもの。

Aは195 ~ 203が該当し、Bは204 ~ 209が該当する。204・205は同一個体であると考えられる。

## 8 カムイヤキ (第68・69図 210 ~ 286)

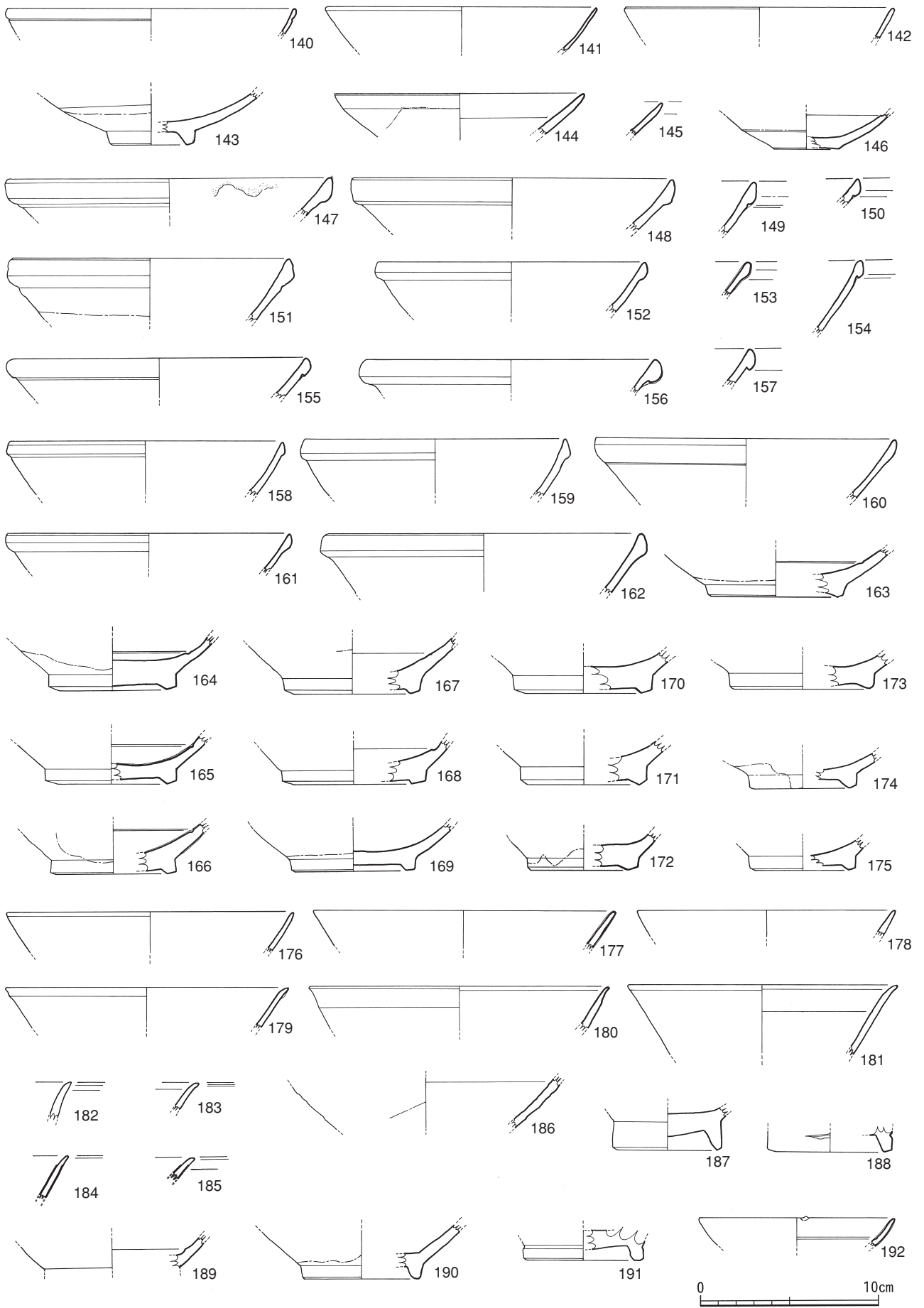
カムイヤキは徳之島伊仙町で製作された陶器である。鹿児島～沖縄まで広く分布する。窯で還元焰焼成される。器の表面は青灰色を呈するが、芯部まで

第62表 越州窯系青磁等観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
62	126		II	H4	H0440	越州窯系青磁	椀	III 1b	口縁部	口径：16.6cm			黄褐色	黄褐色	良好	外面に篋押圧縦線
	127	186	III	H3	H3186	越州窯系青磁	椀	III	口縁部	口径：16cm			黄褐色	褐色	良好	胎土は均一で良質。
	128		III	H4	掘立17(P7)	越州窯系青磁	椀	III	口縁部	口径：15cm			黄褐色	黄褐色	良好	
	129	一括	III	H5		越州窯系青磁	椀	I 27	底部	底径：6cm			灰オリブ色	灰オリブ色	良好	胎土は緻密。生地は灰色。
	130	一括	II b	G6		越州窯系青磁	椀	III 3b	胴部				暗灰黄色	暗灰黄色	良好	片切り彫り文様あり。緻密。
	131		III	I4	I0428	越州窯系青磁	椀	III	胴部				暗灰黄色	暗灰黄色	良好	二条の沈線?あり
	132	一括		I4		越州窯系青磁	椀	III	腰部				暗褐色	暗褐色	良好	二条の沈線?あり
	133		III	F5	掘立18(P4)	白磁	椀	I	胴・底部	胴径：10.6cm			灰色	灰色	良好	

第63表 布目圧痕土器観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
63	134		III	C4	C4110	布目圧痕土器			口縁部				明褐色	橙色	良好	
	135		III	E5	E0506	布目圧痕土器			口縁部				橙色	褐色	良好	
	136		III	F3	F0308	布目圧痕土器			胴部				明褐色	黄褐色	良好	
	137		不明	H6	H0649	布目圧痕土器			胴部				橙色	にぶい黄褐色	良好	
	138	一括	II	G4	G4157	布目圧痕土器			胴部				橙色	赤褐色	良好	表面は破損。内面のみ残存。
	139	一括	III	E4		布目圧痕土器			胴部				にぶい黄褐色	明赤褐色	良好	



第64图 白磁

還元されないため、赤褐色の色調を示すものが多い。胎土には微細な白色粒を含む。総点数316点出土しており、図化できたのは87点である。

(1) 碗

カムイヤキ分類碗Ⅱ類に該当する（伊仙町教育委員会2005）、やや内湾するものである。2点出土している。210は推定口径12.6cmを測る。

(2) 甕・壺

212～220は口縁部である。全て口径復元している。212は口縁端部が鋭く、明瞭な稜線を形成している。214・215は口縁を三角形状に形成するものである。220は口縁部が厚くぼってりとしている。

223～243は上胴部の破片である。径が復元できたのは8点である。221の器壁は非常に薄く作られており、肩部に波状沈線文を有している。

244～254は中央部付近の破片である。244は推定

胴径33.4cmを測る。外面に平行線状叩き・内面に格子目状当て具が見られる。

255～274は下胴部の破片である。255は推定胴径27cmである。外面に格子目状叩きが見られる。内面はよくナデられており調整は不明瞭である。

251・267は朝鮮系無釉陶器である。

275～286は底部の破片である。275はC-4区で検出された柱穴内遺物が接合している資料である。底と下胴部は接合出来なかったが、同一個体であると考えられるため、図上で復元している。推定底径24.8cmを測る。

9 滑石製品（第70～72図287～347）

滑石製品は主に長崎県西彼杵半島で産出される滑石を利用して作られた鍋である。出土した滑石製品は総数592点出土し、図化できたのは62点である。

第64表 白磁観察表(1)

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
64	140	一括		H4		白磁	碗	Ⅱ 1	口縁部	口径：16.2cm			浅黄色	浅黄色	良好	釉は薄くかかる
	141		Ⅲ	I6	I0610	白磁	Ⅲ	Ⅵ	口縁部	口径：15cm			浅黄色	にぶい黄褐色	良好	光沢のある釉がかかる
	142	一括	Ⅱ	E3		白磁	Ⅲ	Ⅵ	口縁部	口径：15cm			浅黄色	浅黄色	良好	光沢のある釉がかかる
	143	一括	Ⅱ b	H5		白磁	碗	Ⅱ	底部	底径：4.8cm			灰色	灰黄色	良好	体部外面は露胎
	144	25	Ⅱ	H3	H0325	白磁	Ⅲ	Ⅱ 1a	口縁部	口径：14cm			灰白色	灰白色	良好	体部外面は露胎
	145	一括	Ⅲ	H4		白磁	Ⅲ	Ⅵ	口縁部				にぶい黄色	にぶい黄色	良好	内外面貫入あり。
	146	一括		I4		白磁	Ⅲ	Ⅵ 1	底部	底径：3.7cm			灰白色	にぶい黄色	良好	釉は薄くかかる。
	147	一括	Ⅱ b	G5		白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：18cm			淡黄色	淡黄色	良好	
	148	一括	Ⅱ a	G6		白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：18cm			灰白色	灰白色	良好	
	149	一括	Ⅲ	A5		白磁	碗	Ⅳ	口縁部				灰白色	灰白色	良好	貫入あり
	150	一括		H4		白磁	碗	Ⅳ	口縁部				灰黄色	浅黄色	良好	
	151		Ⅲ	H6	掘立9(P11)	白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：15.6cm			灰白色	灰白色	良好	貫入あり
	152	一括	Ⅱ b	H4		白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：15cm			灰白色	灰白色	良好	貫入あり
	153	一括	Ⅱ	F4		白磁	碗	Ⅳ	口縁部				明オリブ灰色	明オリブ灰色	良好	
	154	一括	Ⅱ b	G6		白磁	碗	Ⅳ	口縁部				灰白色	灰白色	良好	
	155	一括		I4		白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：16.6cm			灰白色	灰白色	良好	
	156	一括		H4		白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：16.2cm			灰白色	灰白色	良好	
	157			F4	F0459	白磁	碗	Ⅳ	口縁部				にぶい黄褐色	明黄褐色	良好	
	158		Ⅲ	H5	掘立14(P3)	白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：15.4cm			明オリブ灰色	明オリブ灰色	良好	
	159		Ⅲ	H5	H5113	白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：14.6cm			にぶい黄色	にぶい黄色	良好	貫入あり
160	一括	Ⅱ a	H4		白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：16.8cm			灰オリブ色	灰オリブ色	良好		
161		Ⅲ	C4	C0422	白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：16cm			灰白色	灰白色	良好		
162	一括	Ⅲ	I5		白磁	碗	Ⅳ	口縁部	口径：17.6cm			浅黄色	灰黄色	良好	貫入あり	
163		Ⅲ	H5	H0585	白磁	碗	Ⅳ 1a	底部	底径：7cm			灰白色	灰白色	良好		
164		Ⅲ	H5	柱穴列2(P1)	白磁	碗	Ⅳ 1a	底部	底径：6cm			灰白色	灰白色	良好	底には重ね焼きの跡が残る	
165	一括		H4		白磁	碗	Ⅳ 1a	底部	底径：6.2cm			灰白色	灰白色	良好	胎土に黒色粒子を混入。貫入あり	
166	一括	Ⅱ a	H6		白磁	碗	Ⅳ 1a	底部	底径：7.2cm			灰白色	灰白色	良好		
167	一括	Ⅱ	E3		白磁	碗	Ⅳ 1a	底部	底径：6.6cm			灰白色	灰白色	良好	貫入あり	
168		Ⅲ	A3	A0323	白磁	碗	Ⅳ	底部	底径：6.6cm			灰白色	灰白色	良好	貫入あり	
169		Ⅲ	H6	掘立8(P2)	白磁	碗	Ⅳ 1a	底部	底径：6.6cm			灰オリブ色	灰白色	良好		
170	一括		I4		白磁	碗	Ⅳ	底部	底径：6.4cm			明オリブ灰色	明オリブ灰色	良好		

287～292は口径が復元出来た石鍋である。破損後加工がされているものとされていないものがある。出土したのは縦耳を有するものである。

287は推定口径19.7cmを測る。破損後再加工はされていない。外面には火を受けた跡がみられる。288は推定口径32.4cmを測る。異なる柱穴内から出土したものを接合した資料である。断面には擦り切り技法によって切り込みが入れられ、その後折られている所が見られる。接合部分にも割れた後に再加工してある痕跡が確認できる。また、内面には縦の線が入れられており、意識的に割り取りをしようとしている痕跡が見られる。291は縦耳を有する石鍋であるが、縦耳の位置がやや下に下がる、木戸Ⅱb3類に該当する。この類は1点だけ出土している。292は口径復元はしてあるが、破碎した断面部分は擦られている。縦耳部分も二次的に加工を受け、削られている。これから加工される素材の可能性はある。

296～319は滑石石鍋片に対して再加工を施しているものである。2次加工品の素材・製作途中の未加工品である可能性が考えられる。

290, 296～309, 311は穿孔が認められるものである。312～315には穿孔部分に鉄が入っている状況が確認できる。315は穿孔部分に鉄錆状のものがみられる。断面は擦られている。309～311は底部

の破片である。311は底部分にも貫通穿孔が認められる。316・317は明瞭に擦り切り技法が見られるものである。

320～347は加工品である。

320～322は錘状に加工した製品である。貫通穿孔を有し、断面は丁寧に擦られている。320はほとんど破損していないが、用途不明の製品である。上部は擦り切り後折断され、折断面は擦られている。322は貫通穿孔が見られる。

323～333はスタンプ状の製品である。これらの一群の特徴としては突起部を有し、突起部中央付近には貫通穿孔が1か所ないし2か所施されている。形状は円形状から方形まで様々である。323は円形状を呈している。突起部分は9角形状に削り取られており、下部は半球状になっている。半球状の部分には擦痕が多数確認できる。327は角の取れた隅丸方形形状を呈している。突起部分の端部は鑿痕が見えないほど擦痕を受け丸く加工されている。

334～344は棒状に加工した製品である。334～336は先端部を加工しているものである。断面は四角形状を呈するものである。334は胴部を再利用して作られている。端部は擦られて細くなっている。337は携帯用砥石を想起させるような形状を持つ製品である。全体的に擦痕が見られる。338～344は

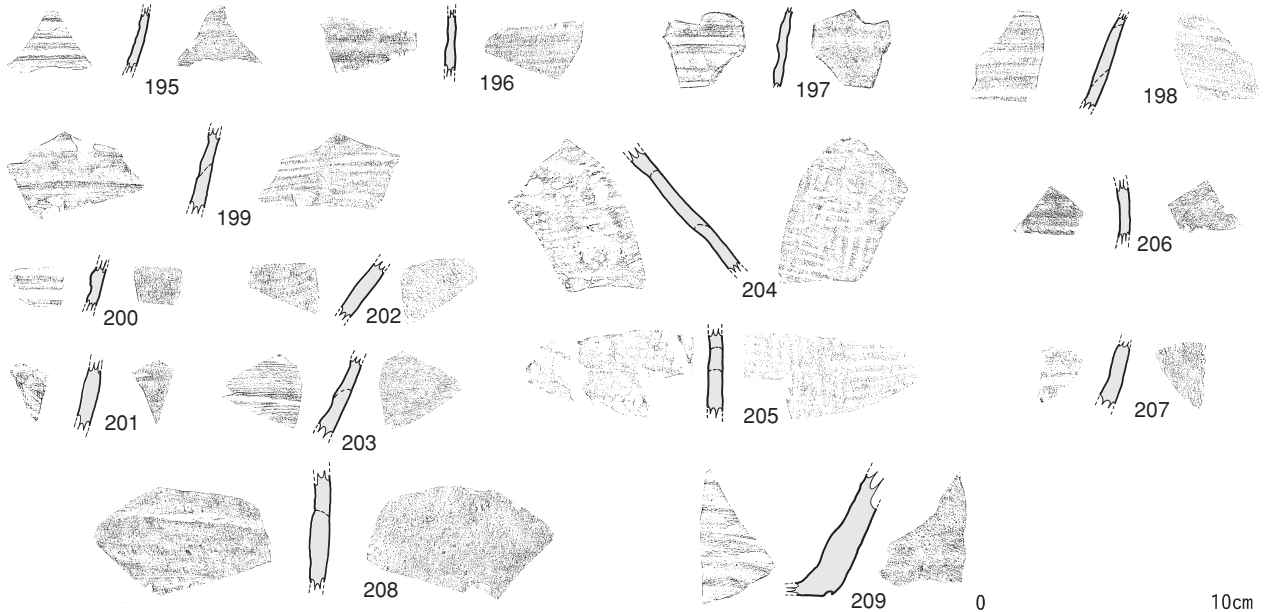
第65表 白磁観察表(2)

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
64	171	一括		I4		白磁	椀	IV1a	底部	底径：6.2cm			灰白色	灰白色	良好	貫入あり
	172	一括		I4		白磁	椀	IV	底部	底径：6cm			灰白色	明青色	良好	
	173	一括	I	F3		白磁	椀	IV	底部	底径：4cm			淡黄色	浅黄色	良好	貫入あり
	174	一括	Ⅲ	C5		白磁	椀	IV	底部	底径：6cm			灰色	灰色	良好	
	175	一括	Ⅱ	A3		白磁	椀	IV	底部	底径：6cm			にぶい黄色	にぶい黄色	良好	
	176	一括	Ⅱb	H6		白磁	椀	V	口縁部	口径：16.2cm			オリブ灰色	オリブ灰色	良好	
	177		Ⅲ	H6	H0610	白磁	椀	V	口縁部	口径：17cm			灰白色	灰白色	良好	
	178	一括	Ⅲ	D5		白磁	椀	V1	口縁部	口径：14.2cm			明緑灰色	明緑灰色	良好	
	179		Ⅲ	H6	H0640	白磁	椀	V1	口縁部	口径：16cm			灰黄色	灰黄色	良好	釉だれあり
	180	一括	Ⅱ	B3		白磁	椀	V2	口縁部	口径：17cm			明緑灰色	明緑灰色	良好	貫入あり
	181			H6	H0640	白磁	椀	V1	口縁部	口径：14cm			灰黄色	灰黄色	良好	
	182	一括	Ⅱ	B3		白磁	椀・皿		口縁部				灰オリブ色	灰オリブ色	良好	
	183	一括		I4		白磁	椀	V1	口縁部				灰色	灰色	良好	
	184		Ⅱ	C4	C0475	白磁	椀	V1	口縁部				明緑灰色	明緑灰色	良好	
	185	一括	Ⅱb	H6		白磁	椀	V2	口縁部				灰白色	灰白色	良好	
	186		Ⅲ	H6	掘立8(P2)	白磁	椀	V	胴部	胴径：15cm			灰白色	灰白色	良好	
	187	一括		E6		白磁	椀	V	底部	底径：6cm			灰オリブ色	緑灰色	良好	
	188		Ⅲ	H3	H0332	白磁	椀	V	底部	底径：7cm			灰白色	灰白色	良好	
	189	一括	Ⅱa	H6		白磁	椀	Ⅷ	胴部	胴径：9.8cm			灰白色	灰白色	良好	
	190		Ⅲ	H6	H0610	白磁	椀	Ⅷ	底部	底径：6.6cm			灰白色	灰白色	良好	
191	一括	Ⅱb	H5		白磁	椀	Ⅵ	底部	底径：6.5cm			灰オリブ色	灰白色	良好		
192		Ⅲ	C4	C4110	白磁	皿	Ⅷ	口縁部	口径：11cm			灰白色	灰白色	良好		





第65図 初期高麗青磁



第66図 朝鮮系無釉陶器

全体を棒状に加工しているものである。全体的に摩滅を受けているが、断面部分には擦り切り技法によって取り除かれた痕跡が確認できるものがほとんどである。

その他、346は全体的に摩滅を受けており、全体的に丸い。中央部はやや窪んでおり、擦痕のような痕跡が見られることから、錘状の加工品として使わ

れていた可能性が考えられる。347はボタン状の加工品である。上部は割れているため、詳細は不明だが、穿孔が2か所施されている。

10 滑石混入土器 (第73図 348 ~ 360)

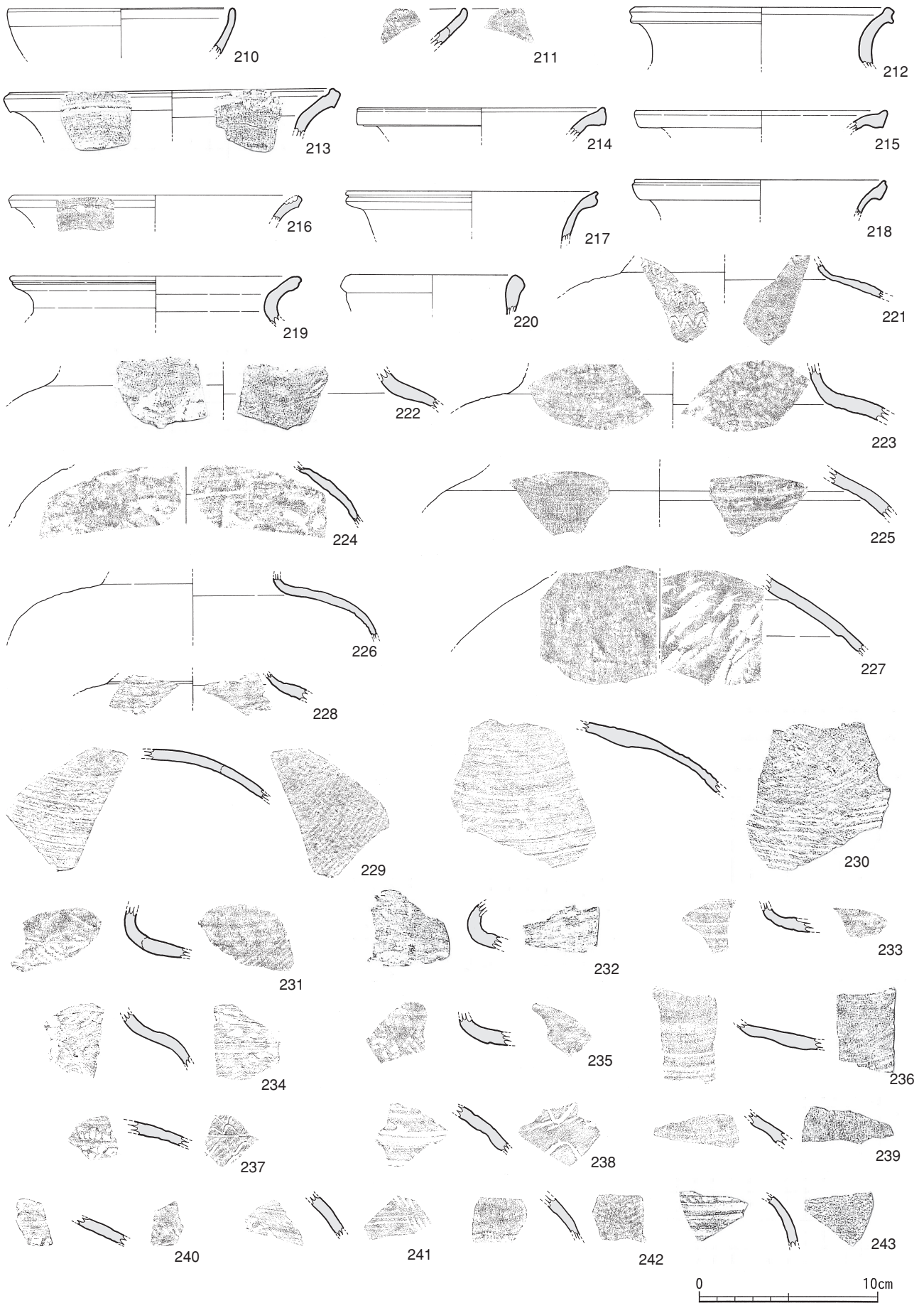
滑石混入土器は総数44点出土している。その内陶化出来たのは13点である。348 ~ 352は口縁部付近

第66表 初期高麗青磁観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
65	193			F3	F0309	初期高麗青磁	椀	Ⅲ系	胴部				にぶい黄色	にぶい黄色	良好	
	194			G3	G3181	初期高麗青磁	椀	Ⅲ系	胴部				にぶい黄色	にぶい黄色	良好	

第67表 朝鮮系無釉陶器観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
66	195	一括		I4		朝鮮系無釉陶器		A群	胴部		ナデ	ナデ	暗青灰色	暗青灰色	良好	
	196	一括		I5		朝鮮系無釉陶器		A群	胴部		ナデ	ナデ	青灰色	暗青灰色	良好	
	197			H6	H0601	朝鮮系無釉陶器		A群	胴部		ナデ	ナデ	灰黒色	灰黒色	良好	白粒は見えない。
	198	一括	Ⅱa	I4		朝鮮系無釉陶器		A群	胴部		ナデ	ナデ	暗青灰色	暗青灰色	良好	
	199		Ⅲ	E4	E0429	朝鮮系無釉陶器		A群	胴部		ナデ	平行	青灰色	灰色	良好	
	200	一括		H4		朝鮮系無釉陶器		A群	胴部		ナデ	ナデ	暗青灰色	暗青灰色	良好	
	201	一括	Ⅱa	G5		朝鮮系無釉陶器		A群	胴部		ナデ	ナデ	暗青灰色	灰色	良好	
	202	一括	Ⅲ	A5		朝鮮系無釉陶器		A群	胴部		ナデ	ナデ	青灰色	黄褐色	良好	外面に灰釉がかかる。
	203	一括		I4		朝鮮系無釉陶器		A群	胴部		ナデ	ナデ	緑灰色	灰色	良好	
	204		Ⅱ	AC23		朝鮮系無釉陶器		B群	胴部		格子目	ナデ	明青灰色	黒色	良好	
	205		Ⅱ	AC23		朝鮮系無釉陶器		B群	胴部		格子目	平行	明青灰色	オリブ黒色	良好	
	206	一括	Ⅱ	F4		朝鮮系無釉陶器		B群	胴部		ナデ	ナデ	青灰色	灰オリブ色	良好	
	207	一括		I4		朝鮮系無釉陶器		B群	胴部		ナデ	ナデ	灰色	灰色	良好	
	208	一括		F4		朝鮮系無釉陶器		B群	胴部		ナデ	ナデ	明青灰	灰	良好	
209		Ⅲ	G5	掘立18(P5)	朝鮮系無釉陶器		B群	底部		ナデ	ナデ	灰色	青灰色	良好		



第67図 カムイヤキ(1)

の資料である。348は口縁部がほぼ直角に屈曲する。分厚い資料で土師甕を模倣した可能性もある。349は口縁部が直行する。やや薄手で口唇部は平坦に整えられる。350は胎土が赤褐色を呈し、混和される滑石の量が少ない。屈曲しながら外反する土師甕の模倣品と考えられる。352の口縁部は舌状の口唇部を呈する。353～355は胴部資料である。355は非常に薄手の資料である。356～360は底部資料である。357は底部付近の内面にペレット状の粘土粒が2個付着している。358～360は底部が盤状に残されている。

### 11 青磁 (第74図 361～366)

龍泉窯系青磁・同案窯系青磁・産地不明青磁が出土している。図化出来たのは龍泉窯系青磁が4点、同安窯系青磁が1点、産地不明青磁が2点である。出土した器種は碗・皿である。

361・362は龍泉窯系青磁碗Ⅱb類に相当する。体部外面に連弁を有する。363は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類に相当する。口径15cmを復元している。365は同安窯系青磁の口縁部である。366は器壁は非常に薄い。釉下に白色の層が見られる。白化粧土か釉の素地の化学反応によるものなのかは不明である。やや釉調は異なるが、耀州窯系の青磁である可能性が考えられる。

第68表 カムイヤキ観察表(1)

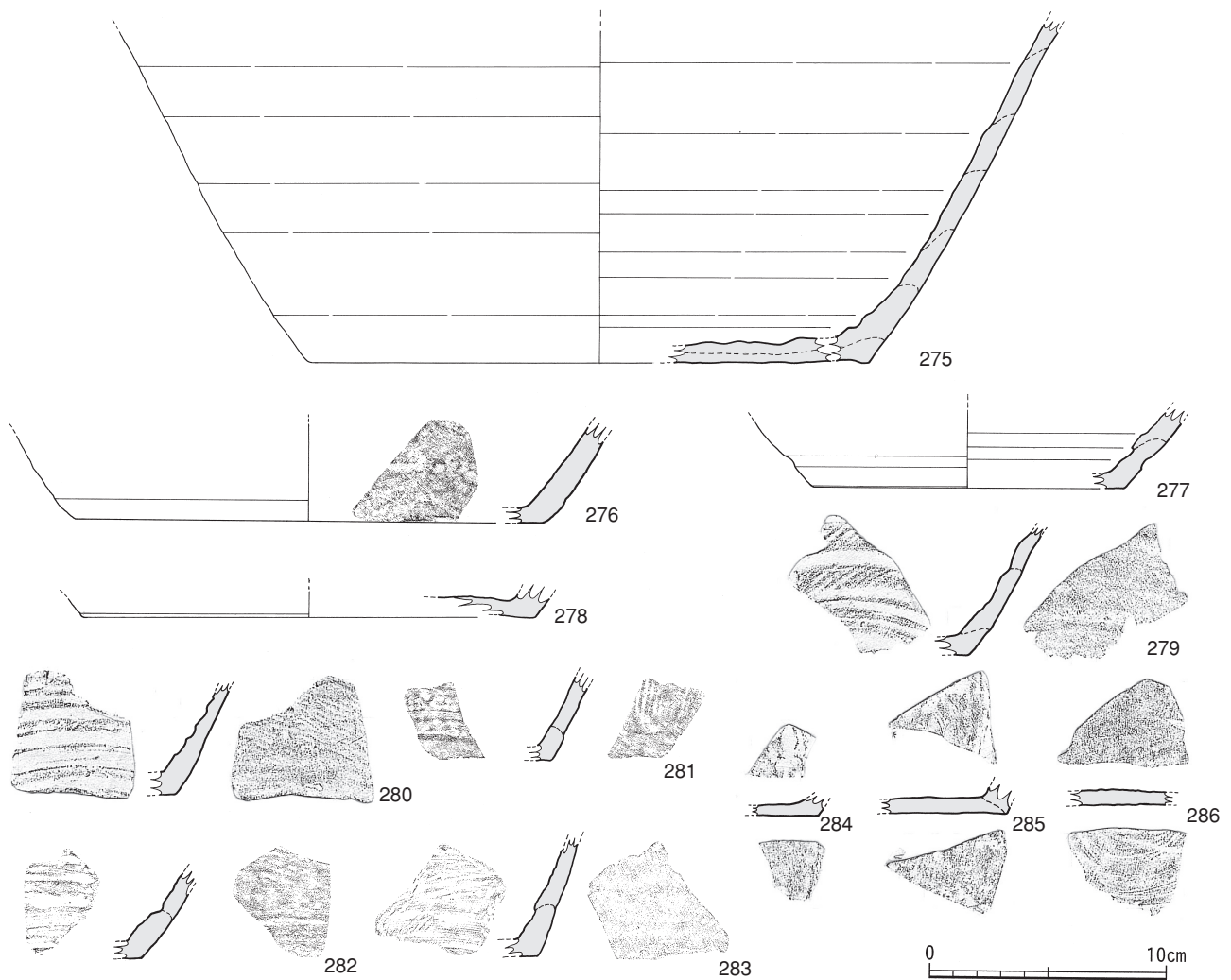
挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
67	210	一括	Ⅱa	H6		カムイヤキ	碗		口縁部	口径：12.6cm	ナデ	ナデ	灰色	灰色	良好	約1/18残存。
	211	一括	Ⅱa	H6		カムイヤキ	碗		口部		ナデ	ナデ	暗青灰色	灰色	良好	
	212	一括		I4		カムイヤキ	甕・壺		口縁部	口径：14.4cm	ナデ	ナデ	灰色	灰色	良好	
	213	一括	Ⅱa	G5		カムイヤキ	甕・壺		口縁部	口径：18.2cm	ナデ	ナデ	暗青灰色	暗青灰色	良好	
	214		Ⅲ	I6	I0638	カムイヤキ	甕・壺		口縁部	口径：13.8cm	ナデ	ナデ	青灰色	暗青灰色	良好	
	215	一括	Ⅱa	H6		カムイヤキ	甕・壺		口縁部	口径：14cm	ナデ	ナデ	灰色	灰色	良好	
	216	一括	Ⅲ	C5		カムイヤキ	甕・壺		口縁部	口径：16cm	ナデ	ナデ	灰色	灰色	良好	
	217			F5	F0563	カムイヤキ	甕・壺		口縁部	口径：14cm	ナデ	ナデ	灰色	灰色	良好	
	218			C3	C0351	カムイヤキ	甕・壺		口縁部	口径：14cm	ナデ	ナデ	緑黒色	オリブ黒色	良好	
	219	一括	I4	I4		カムイヤキ	甕・壺		口縁部	口径：16.2cm	ナデ	ナデ	黄灰色	褐灰色	良好	
	220		Ⅲ	D4	D0427	カムイヤキ	甕・壺		口縁部	口径：9.2cm	ナデ	ナデ	青灰色	青灰色	良好	
	221	一括	Ⅲ	A5		カムイヤキ	甕・壺		頸部	頸径：14.4cm	ナデ	ナデ	褐灰色	オリブ黒色	良好	波状沈線文
	222		Ⅱ	H4	H0406	カムイヤキ	甕・壺		頸部	頸径：19.2cm	格子目	平行	暗青灰色	暗青灰色	良好	
	223	38	Ⅱ	FI23		カムイヤキ	甕・壺		頸部	頸径：17.7cm			灰黄色	灰黄色	やや軟	調整はマメツにより不明瞭。
	224		Ⅲ	A地区外	ピット	カムイヤキ	甕・壺		頸部	頸径：16cm			橙色	明褐色	軟	全体的に摩滅し、調整不明瞭
	225	一括		I4		カムイヤキ	甕・壺		頸部	頸径：21cm	格子目	平行	褐灰色	黒褐色	良好	
	226		Ⅲ	H6	H0640	カムイヤキ	甕・壺		頸部	頸径：18cm	ナデ	ナデ	褐灰色	黒褐色	良好	丁寧になでられ器壁も薄い。
	227			A5	掘立35(P8)	カムイヤキ	甕・壺		頸部	頸径：20.8cm	刺突状	格子目	灰色	黒オリブ灰色	良好	当て具は下方から施される。
	228	一括	Ⅲ	B5		カムイヤキ	甕・壺		頸部	頸径：9.6cm	ナデ	ナデ	灰色	暗青灰色	良好	
	229	一括	Ⅱb	H6		カムイヤキ	甕・壺		頸部		格子目	綾杉	青灰色	灰色	良好	
	230		Ⅲ	E4	E0405	カムイヤキ	甕・壺		頸部		ナデ	平行	暗青灰色	オリブ黒色	良好	
	231	一括		H4		カムイヤキ	甕・壺		頸部		平行	平行	黄灰色	暗青灰色	良好	
	232	一括	Ia	H6		カムイヤキ	甕・壺		頸部				灰黄色	オリブ灰色	軟	調整はマメツにより不明瞭。
	233		Ⅲ	H6	掘立8(P1)	カムイヤキ	甕・壺		頸部		ナデ	ナデ	灰色	灰色	良好	
	234	一括	Ⅱb	G6		カムイヤキ	甕・壺		頸部		格子目	ナデ	青灰色	青灰色	良好	
	235		Ⅲ	E5	E0550	カムイヤキ	甕・壺		頸部		格子目	ナデ	暗青灰色	暗青灰色	良好	
	236			F4	F0428	カムイヤキ	甕・壺		頸部		ナデ	平行	青灰色	暗青灰色	良好	
	237		Ⅱ	H3		カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目		暗青灰色	暗青灰色	良好	波状沈線文
	238	一括	Ⅱ	E3		カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ		青灰色	青灰色	良好	平行タタキ後波状沈線
	239		Ⅲ	E5	E0602	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	ナデ	暗青灰色	暗青灰色	良好	
240		Ⅲ	I6	掘立5(P2)	カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	灰色	灰色	良好		
241		Ⅲ	I6	I0636	カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	灰色	暗青灰色	良好		
242		Ⅲ	H5	掘立13(P1)	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	平行	褐灰色	褐灰色	良好		
243		Ⅲ	C3	掘立33P12	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	ナデ	青灰色	灰色	良好		



第68図 カムイヤキ(2)

第69表 カムイヤキ観察表(2)

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
68	244		Ⅲ	B3	B0327	カムイヤキ	甕・壺		胴部	胴径：33.4cm	格子目	平行	灰色	灰色	良好	
	245		不明	H6	H0634	カムイヤキ	甕・壺		胴部		平行	格子目	明赤褐色	暗灰黄色	やや軟	内側は還元せず赤色
	246		Ⅲ	C3	掘立33(P12)	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	平行	暗緑灰色	暗緑灰色	良好	
	247	135	Ⅱ	H4	H4135	カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	灰色	灰色	良好	
	248		Ⅱ	H4	H0475	カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	暗青灰色	暗青灰色	良好	
	249		Ⅱ	AC23		カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	灰色	灰色	良好	
	250	一括	Ⅱa	I5		カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	ナデ	灰黄褐色	緑灰色	良好	
	251			H5	掘立11(P7)	朝鮮系無釉陶器		B群	胴部		ナデ	ナデ	青灰色	青灰色	良好	
	252		Ⅲ	C4	C0448	カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	ナデ	暗青灰色	青灰色	良好	
	253		Ⅲ	D4	掘立32(P7)	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	ナデ	灰色	暗青灰色	良好	内外面に白い灰が付着
	254		Ⅱ	E5	E0561	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	平行	灰色	暗青灰色	良好	
	255		Ⅲ	C4	C0420	カムイヤキ	甕・壺		胴部	胴径：27cm	列点状	格子目	灰色	にぶい赤褐色	良好	
	256	一括	Ⅱ	A4		カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	暗青灰色	暗青灰色	良好	
	257	一括	Ⅱb	G6		カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	黄灰色	黄灰色	良好	
	258		Ⅱ	AC23		カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	暗青灰色	青灰色	良好	
	259			F4	F0428	カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	青灰色	青灰色	良好	
	260	一括	Ⅲ	C6		カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	暗青灰色	青灰色	良好	
	261	一括	Ⅱa	G5		カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	暗青灰色	暗青灰色	良好	
	262	一括	Ⅱa	I5		カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	格子目	青灰色	オリブ黒色	良好	
	263	一括	Ⅱ	A4		カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	青灰色	青灰色	良好	
	264		Ⅱ	H4	掘立15(P8)	カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	オリブ黒色	暗青灰色	良好	
	265		Ⅲ	I6	I0638	カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	オリブ黒色	暗青灰色	良好	
	266		Ⅲ	H4	H4131	カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	平行	灰色	青灰色	良好	
	267	一括	Ⅱ	F4		朝鮮系無釉陶器		A群	胴部		ナデ	ナデ	青灰色	青灰色	良好	
	268		Ⅲ	H5	掘立12(P4)	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	平行	暗灰黄色	暗灰黄色	良好	
	269		Ⅲ	H5	H0583	カムイヤキ	甕・壺		胴部		平行	平行後格子目	灰色	灰オリブ色	良好	
	270		Ⅲ	G4	G0421	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	ナデ	青灰色	暗青灰色	良好	
271		Ⅲ	H5	柱穴列2(P1)	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	ナデ	暗青灰色	にぶい赤褐色	良好		
272		Ⅲ	H5	掘立14(P6)	カムイヤキ	甕・壺		胴部		格子目	ナデ	明褐色	暗青灰色	良好		
273	120	Ⅱ	H4	H4120	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	平行	青灰色	暗青灰色	良好		
274	23	Ⅱ	H3	H0323	カムイヤキ	甕・壺		胴部		ナデ	ナデ	青灰色	暗青灰色	良好		
69	275		Ⅲ	C4	C0480 C0482 C0483 C4110	カムイヤキ	甕・壺		底部	底径：24.8cm	平行	平行	灰色	灰色	良好	底に縄目状の成形痕
	276	一括	Ⅱb	H6		カムイヤキ	甕・壺		底部	底径：20cm	ナデ	ナデ	灰黄色	灰黄色	やや軟	
	277	一括	Ⅱb	G6		カムイヤキ	甕・壺		底部	底径：13.2cm	格子目	平行	青灰色	黒褐色	良好	
	278		Ⅲ	H6	H0624	カムイヤキ	甕・壺		底部	底径：18.6cm	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	やや軟	底部分は破損
	279	一括	Ⅱ	A3		カムイヤキ	甕・壺		底部		平行	ナデ	青灰色	青灰色		
	280	一括	Ⅱa	I6		カムイヤキ	甕・壺		底部		ナデ	平行	青灰色	暗青灰色		
	281	一括	Ⅱ	I5		カムイヤキ	甕・壺		底部		ナデ	平行	暗青灰色	灰色		
	282	一括	Ⅲ	C6		カムイヤキ	甕・壺		底部		ナデ	平行	青灰色	緑灰色		
	283	一括	Ⅱa	I6		カムイヤキ	甕・壺		底部		ナデ	ナデ	オリブ灰色	緑灰色		
	284	一括	Ⅱ	A4		カムイヤキ	甕・壺		底部		ナデ	ナデ	青灰色	暗青灰色		
	285		Ⅲ	I6	I0638	カムイヤキ	甕・壺		底部		ナデ	ナデ	オリブ黒色	灰色		
	286		Ⅲ	B2	B0217	カムイヤキ	甕・壺		底部				暗青灰色	暗青灰色		



第69図 カムイヤキ(3)

## 12 ガラス玉 (第74図 367)

367は柱穴内から出土したガラス小玉である。直径7mm前後である。表面は白色を帯びている。

## 13 鞆の羽口・鉄滓 (第75・76図 368～378)

368～374は鞆の羽口である。鞆の羽口は総数270点出土し、6点図化した。368は先端部は残存しないが、外面に鉄分が付着する。371はほとんど被熱しておらず、外面はほぼ直行するが内面はラッパ状に開く、基部とみられる。372,374は先端部とみられる。強く被熱しており、外面には鉄滓が付着している。

375～378は鉄滓である。鉄滓は総数81点出土し、4点図化した。378は部分的に発泡しているが全体としては均質な質感を呈し、比重も重い。小さな粘土塊が付着している。

## 14 土製品 (第76図 379～386)

379は粘土塊である。表面は被熱し赤化している。粘土を指状のもので擦り付けた状態で焼成されてお

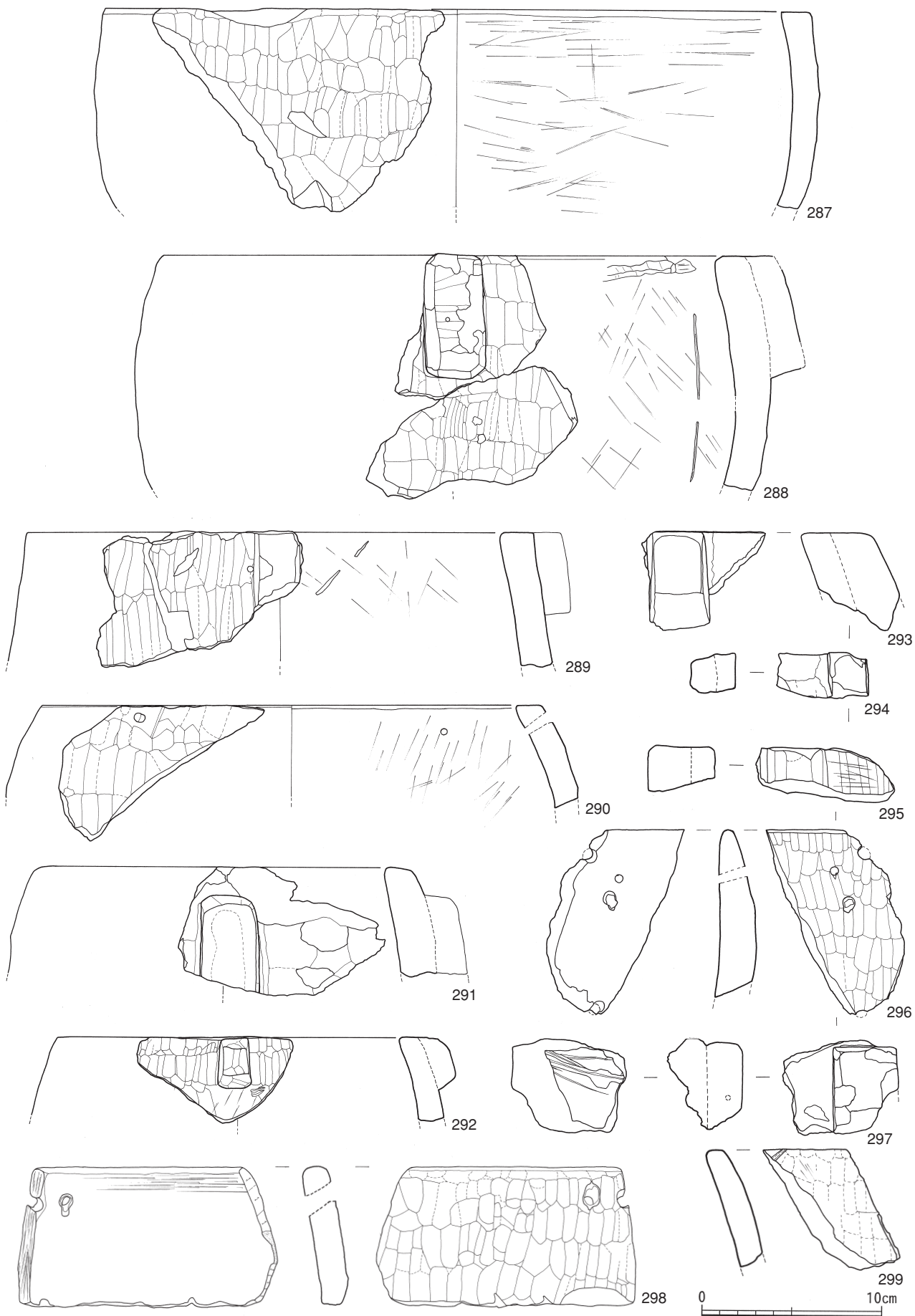
り、炉等の構造物の一部と思われる。鉄滓などは付着していない。380～384は四角くレンガ状に整形された小型土製品の破片である。380は比較的大きな破片である。外面には繊維状の痕跡が確認できる。385は胎土に白色粒が混入し、他のものとは趣を異にする。脚である可能性がある。386は厚さ5mm程度の円盤状に整えられた土製品である。半分は欠損しており全体形は不明である。裏面には径2mm程度の丸い溝が数本直交する状態で残されている。

## 15 石器 (第77～80図 387～408)

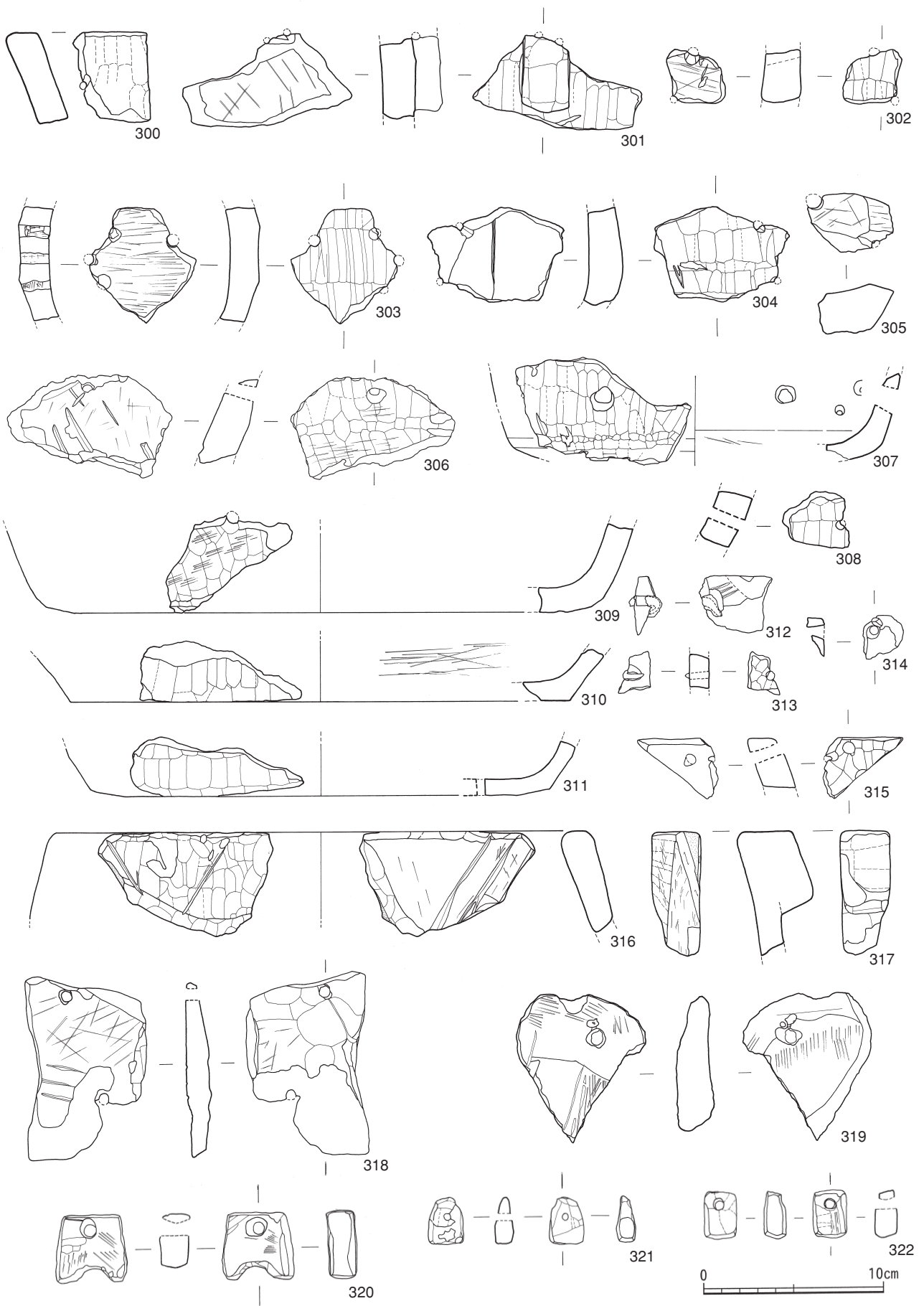
石器は総数331点出土している。そのうち図化したのは22点である。

### (1) 磨製石斧 (第77図 387～390)

いずれも淡緑色のホルンフェルス素材とする。387は素材面を残さず全面研磨により整形されており、刃部には細かい剥離痕が顕著に観察される。388も素材面を残すものの、完形を保つ資料である。頭部付近には整形剥離痕及び素材面を残す。刃部は



第70図 滑石製品(1)

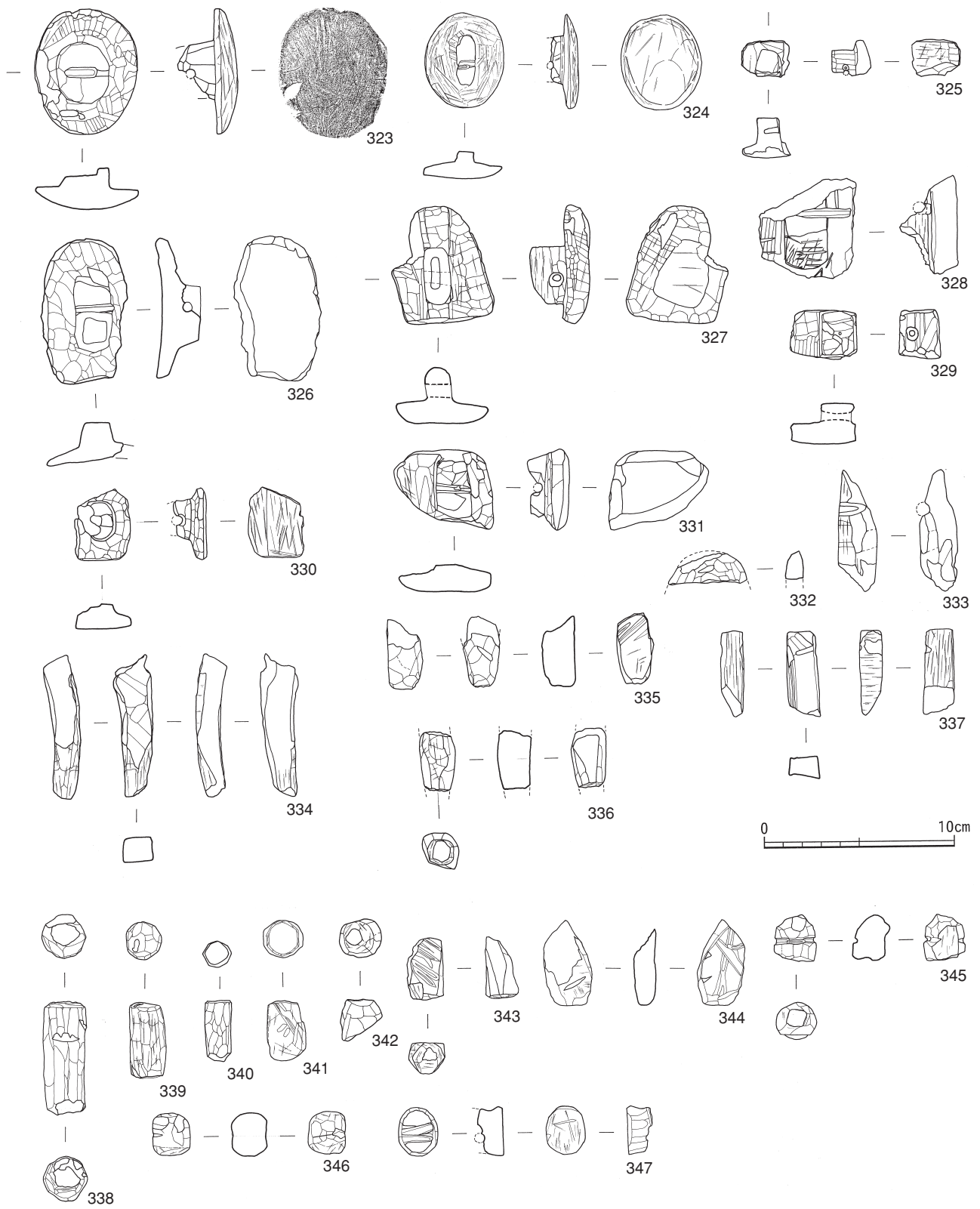


第71図 滑石製品(2)



第70表 滑石製品観察表(1)

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
70	287	一括	Ⅲ	I4		滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	口径：39.4cm、 重量：470g			灰白色	褐灰色		煤が付着
	288		Ⅲ	H6	H0601	滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	口径：32.4cm、 重量：620g			灰黄褐色	灰黄褐色		縦耳,煤付着
					H0660										
	289		Ⅲ・Ⅱb	HI56	H0505	滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	口径：28.4cm、 重量：315g			にぶい褐色	にぶい褐色		縦耳。二点接合。
	290		Ⅲ	E5	E0532	滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	口径：14cm、 重量：165g			灰色	オリブ黒色		口縁部は摩滅が激しく不明瞭。
	291			E4	E0408	滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	口径：19cm、 重量：273g			褐灰色	赤灰色		やや内湾。破損し調整不明瞭。
	292			H6	H0653	滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	口径：20cm、 重量：100g			黄灰色	褐灰色		形状・雰囲気はスタンブ製品に類似。
	293		Ⅲ	H3	H0307	滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	重量：180g			灰色	灰色		
	294		Ⅲ	F5	F0566	滑石製品	滑石製石鍋	胴部	重量：42g			灰オリブ色	黄灰色		調整は摩滅により不明瞭。
	295			I5	I0529	滑石製品	滑石製石鍋	胴部	重量：110g			灰色	灰黄色		調整は摩滅により不明瞭。
	296	一括		E4		滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	重量：225g			緑灰色	暗緑灰色		4ヶ所穿孔
	297		Ⅲ	C4	掘立29(P10)	滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	重量：145g			灰オリブ色	黄灰色		摩滅が激しい。線状痕あり。
	298		Ⅲ	H6	掘立9(P1)	滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	重量：420g			灰白色	暗オリブ褐色		2か所穿孔有。上下に引張った様な痕跡が確認できる。
299		Ⅲ	H6	掘立8(P5)	滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	重量：100g			灰黄色	黒褐色		表面は黒く変色。二次的な加工は見られない。	
71	300		Ⅲ	H6	掘立8(P1)	滑石製品	滑石製石鍋	口縁部	重量：80g			黄灰色	褐灰色		穿孔1ヶ所。全体的に摩滅。
	301	一括	Ⅱb	H6		滑石製品	滑石製石鍋	胴部	重量：150g			灰白色	灰色		縦耳。2ヶ所穿孔有。
	302		Ⅲ	F5	F0580	滑石製品	滑石製石鍋	胴部	重量：40g			灰色	灰白色		2か所穿孔有。
	303			H6	柱穴列3(P5)	滑石製品	滑石製石鍋	胴部	重量：95g			灰色	にぶい黄褐色		4ヶ所穿孔。一部に鉄が入る。
	304	一括	Ⅱb	G6		滑石製品	滑石製石鍋	胴部	重量：125g			灰白色	灰色		2ヶ所穿孔。内面に縦線。
	305		Ⅲ	H6	掘立8(P1)	滑石製品	滑石製石鍋	胴部	重量：42.5g			灰オリブ色	オリブ黒		穿孔2ヶ所所有。破断面擦痕。
	306		Ⅲ	G5	G0535	滑石製品	滑石製石鍋	胴部	重量：175g			青灰色	灰黄色		全体的に摩滅。
	307	一括	Ⅱb	H6	H0640	滑石製品	滑石製石鍋	胴部	胴径：20.2cm、 重量：140g			黄灰色	暗灰色		穿孔3ヶ所（1ヶ所未貫通）。断面には擦り切り痕あり。
	308			F5	掘立21(P1)	滑石製品	滑石製石鍋	胴部	重量：40g			灰黄色	灰色		穿孔1か所所有
	309		Ⅲ	G5	掘立19(P12)	滑石製品	滑石製石鍋	底部	底径：27.4cm、 重量：100g			にぶい黄褐色	青灰色		穿孔1か所所有
	310		Ⅲ	F5	F0566	滑石製品	滑石製石鍋	底部	底径：28cm、 重量：155g			灰白色	オリブ黒色		約1/8残存。外側は煤が付着。
	311		Ⅲ	H6	H0610	滑石製品	滑石製石鍋	底部	底径：22cm、 重量：100g			黄灰色	暗灰色		底面に穿孔1か所あり。煤付着。
	312		Ⅲ	H4	H0423	滑石製品	滑石製石鍋		重量：20g				褐灰色		穿孔部に鉄釘状のものあり。曲げて固定されている。
	313		Ⅲ	H3	H0307	滑石製品	滑石製石鍋		重量：7g			褐灰色	褐灰色		鉄釘が入っている。周囲は赤く変色。
	314	一括	Ⅲ	H6		滑石製品	滑石製石鍋		重量：5g			褐灰色			穿孔2か所所有。1か所には鉄が入る。
	315		Ⅲ	G3	G0302	滑石製品	滑石製石鍋		重量：30g			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		二ヶ所穿孔あり。鉄錆の跡あり。
	316			H6	H0660	滑石製品	滑石製石鍋		口径：29.4cm、 重量：175g			明青灰色	灰白色		全体的に摩滅。割り取るための溝が明瞭に見られる。
	317		Ⅲ	E5	E0512	滑石製品	滑石製石鍋		重量：95g			青灰色	灰黄色		縦耳部分。擦り切り後折断。
	318			H6	掘立8(P5)	滑石製品	滑石製石鍋		重量：125g						2か所穿孔。炭が付着。
	319		Ⅲ	I6	I0651	滑石製品	滑石製石鍋		重量：115g			灰白色	灰白色		3か所穿孔。(内1か所は未穿孔)
320		Ⅲ	H6	H0607	滑石製品	二次加工品	錘状	重量：45g			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		1か所穿孔。	
321	一括	Ⅲ	I5		滑石製品	二次加工品	錘状	重量：10g			灰黄色	灰黄色		全体的に摩滅。調整痕は不明瞭。	
322		Ⅲ	H6	H0607	滑石製品	二次加工品	錘状	重量：12g			灰白色	浅黄褐色		全体的に摩滅。調整痕は不明瞭。	



第72図 滑石製品(3)

敲打により鈍化しており、敲石に転用されたものとみられる。

(2) 敲石 (第77図 391～393)

径10cm程度の球状の円礫を素材とし、部分的に敲打痕が観察されるものを一括した。392は淡緑色のホルンフェルス素材とする。半分程度は被熱により赤化している。敲打痕は径1cm程度の範囲に集中し浅く凹む部分が複数観察される。敲打痕の痕跡が極めて狭い範囲に集中するため、台石的な使用法もしくは間接打法による使用が想定される。

(3) 磨敲石 (第77～79図 394～400)

長軸径が10cm～15cm、短軸径が7cm～8cm程度の大型で石鱗状を呈するものが多く、顕著な敲打痕が観察されるものが多い。394は砂岩を素材とする。表裏とも顕著な磨面が観察されるほか、側面は敲打により平坦面が形成されている。表裏とも敲打により径3cm、深さ5mm程度の凹みが形成されている。396は一部欠損するが表裏に磨面、側面に敲打による平坦面が顕著にみられる。やはり中央部に敲打痕

が集中し浅い凹みを形成している。398は長軸径が約17cmとやや大型の資料である。表面には平坦な磨面が形成され、中央部は敲打痕が集中する。表面は砥石として利用された可能性も考えられる。裏面にも磨面や敲打痕の集中部が観察される。左側面および上面の一部には敲打痕が観察される。若干被熱しており、一部剥落している。400は大型の円礫を素材とする。敲打痕は左側面の周辺に帯状に観察されるが、狭い範囲に集中することはない。正面の中央部にもわずかながら観察される。磨面はほぼ全面にわたる。

(4) 台石 (第79図 401)

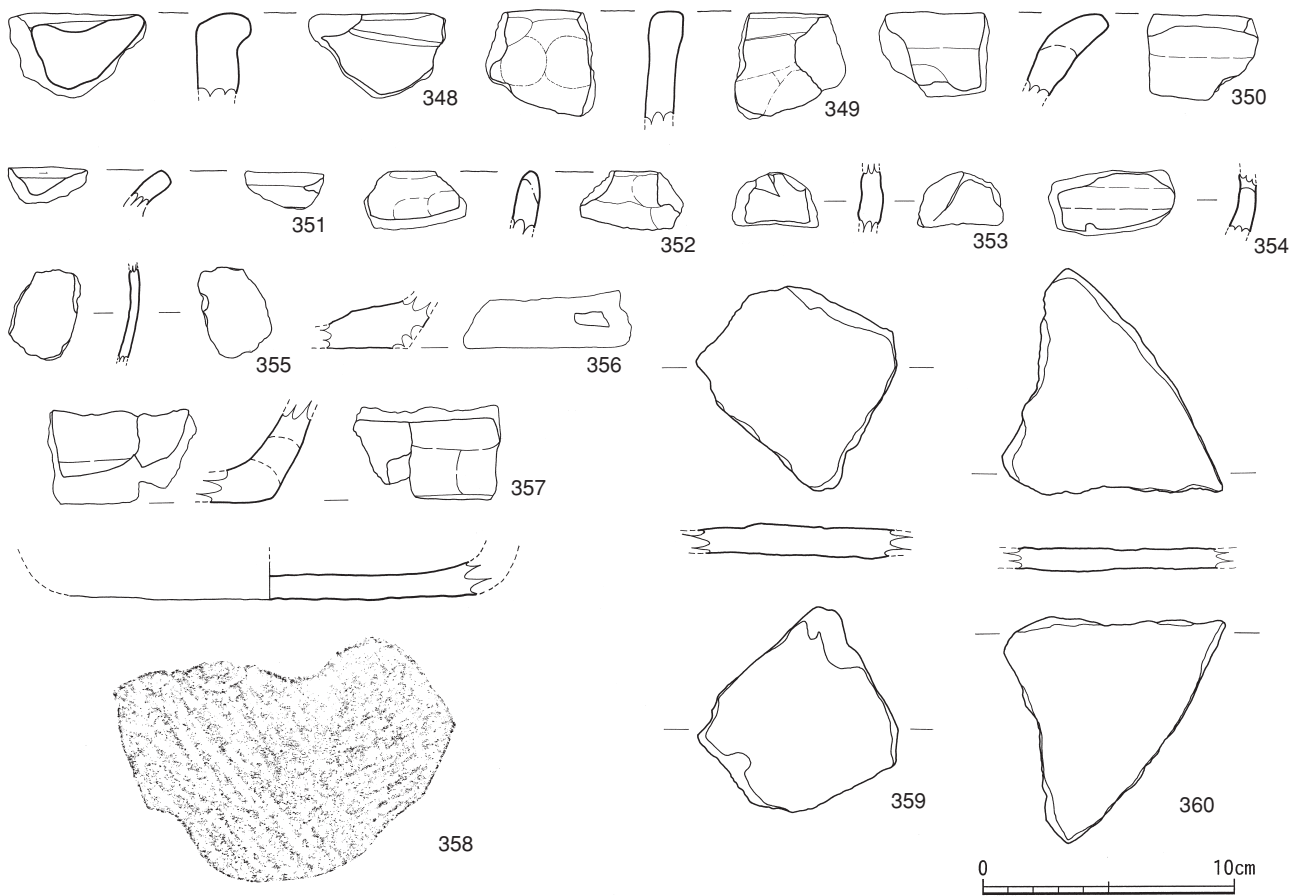
黄褐色のやや粒径の粗い砂岩を利用し、正面に磨面が形成されている。磨面は部分的であり、敲打痕が散在する。若干被熱し、分割されている。

(5) 有溝石錘 (第79図 402)

紫色の砂岩の円礫を素材とする。幅5mm程度、深さ2mm程度の丸い溝が長軸に沿って作出されている。

第71表 滑石製品観察表(2)

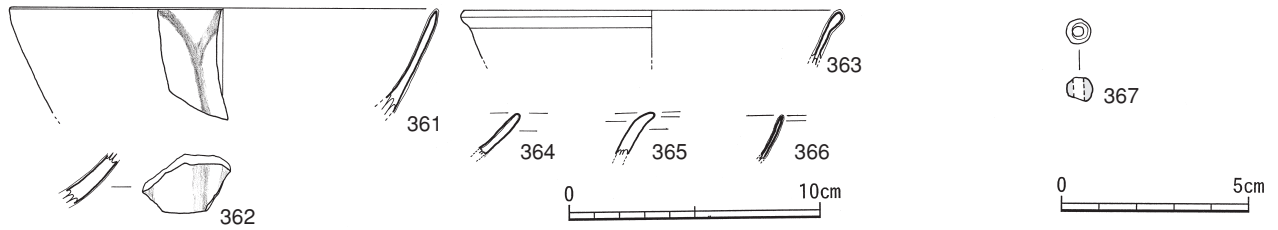
種図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	分類L2	分類L3	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
72	323		Ⅲ	H6	H0620	滑石製品	二次加工品	スタンプ状	重量:75g			ネリ-黒色	ネリ-灰色		左右から中央部に穿孔。裏面は丸く多数の擦痕あり。
	324	一括	Ⅱ a	H5		滑石製品	二次加工品	スタンプ状	重量:30g			灰色	灰白色		全体的に擦痕あり。
	325		Ⅲ	C4	C0466	滑石製品	二次加工品	スタンプ状	重量:10g			灰黄色	灰黄色		2か所穿孔。
	326		Ⅲ	I4	I0425	滑石製品	二次加工品	スタンプ状	重量:65g			浅黄色	浅黄色		やや赤みがかった滑石を使用。
	327			H6	H0634	滑石製品	二次加工品	スタンプ状	重量:76g			灰色	灰色		
	328			H6	H0620	滑石製品	二次加工品	スタンプ状	重量:71g			褐灰色	褐灰色		縦耳部分を使用か。
	329			H5	H0585	滑石製品	二次加工品	スタンプ状	重量:34g			褐灰色	灰黄褐色		破損した部分を再加工。
	330	一括	Ⅲ	H6		滑石製品	二次加工品	スタンプ状	重量:20g			黄灰色	灰黄褐色		穿孔部の真中が一段深い。
	331		Ⅲ	H6	H0621	滑石製品	二次加工品	スタンプ状	重量:52g			褐灰色	褐灰色		縦耳部分を使用か。
	332		Ⅲ	H5	H5112	滑石製品	二次加工品	スタンプ状?	重量:8g			明褐灰色	明褐灰色		スタンプ状製品の先端か。
	333		Ⅲ	I5	掘立7(P11)	滑石製品	二次加工品	スタンプ状?	重量:29g			黄灰色	灰色		スタンプ状製品の先端か。
	334	一括	Ⅱ b	H6		滑石製品	二次加工品	棒状	重量:37g			灰白色	灰褐色		胴部を再利用し、先端を細く加工。
	335		Ⅲ	H5	H5114	滑石製品	二次加工品	棒状	重量:20g			灰白色	灰白色		裏面は平らで、溝状の線あり。
	336		Ⅲ	C4	C0491	滑石製品	二次加工品	棒状	重量:13g			灰白色	灰ネリ-7色		胴部を再利用。全体的に摩滅。
	337	一括	Ⅱ b	H5		滑石製品	二次加工品	棒状	重量:13g			灰色	青灰色		方形状に加工。全体的に擦痕あり。
	338		Ⅱ	F1.3	G0238	滑石製品	二次加工品	棒状	重量:14g			灰黄色	灰黄色		8～9角形。上下ともに擦り切り後、折断。
	339		Ⅲ	C4	C0472	滑石製品	二次加工品	棒状	重量:10g			青灰色	青灰色		全体的に擦痕が入り調整不明瞭。
	340		Ⅲ	H5	H5112	滑石製品	二次加工品	棒状	重量:6g			ネリ-7灰色	ネリ-7灰色		八角形状に削り出している。
	341	一括		D5		滑石製品	二次加工品	棒状	重量:7g			灰ネリ-7色	灰ネリ-7色		調整は不明瞭である。
	342			I6	掘立7(P12)	滑石製品	二次加工品	棒状	重量:5g			灰黄色	灰黄色		破損部分も擦られている。
343			H6	H0620	滑石製品	二次加工品	棒状	重量:5g			暗青灰色	暗青灰色		下部は丸く加工。平坦面に浅い窪みあり。	
344			I4	I0421	滑石製品	二次加工品	棒状	重量:8g			暗青灰色	暗青灰色		裏面には浅い窪みが縦横に走る。	
345	一括	Ⅱ	F3		滑石製品	二次加工品	錘状	重量:7g			暗灰黄色	暗灰黄色		中央部には線状痕あり。面ごとに切り込みが入る。	
346			C3	C0351	滑石製品	二次加工品	錘状	重量:7g			青灰色	青灰色		全体的に摩滅。中央部に縦状痕あり。	
347		Ⅱ	AC23		滑石製品	二次加工品	ボタン状	重量:5g			灰色	灰色		穿孔は二回。	



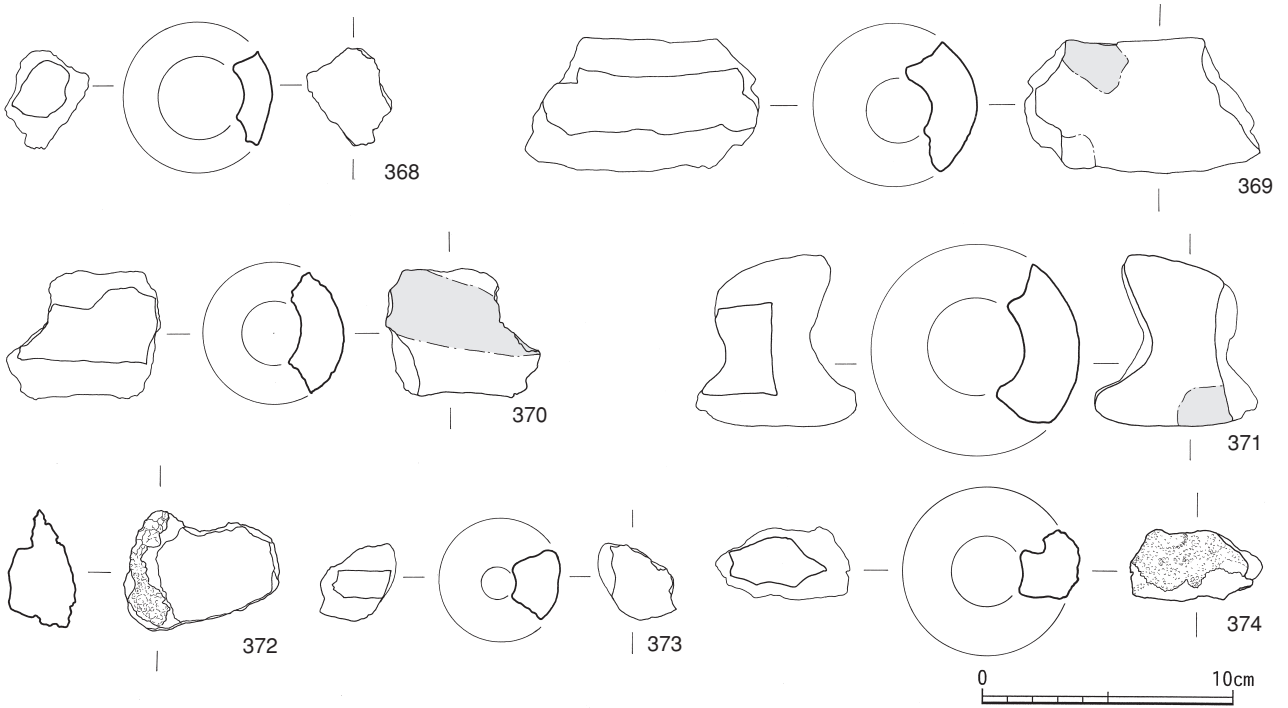
第73図 滑石混入土器

第72表 滑石混入土器観察表

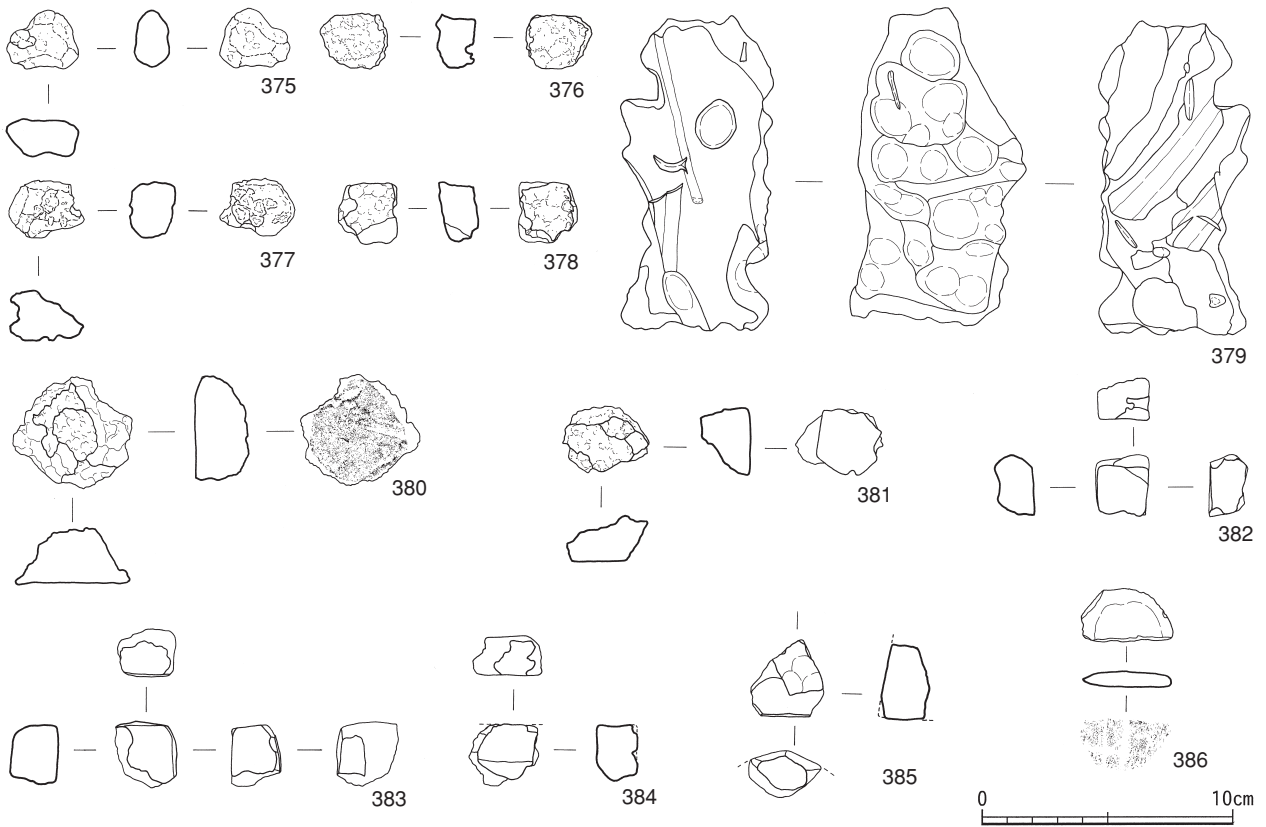
挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整内	調整外	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
73	348		Ⅲ	D4	D0421	滑石混入土器		土師器模倣	口縁部				褐灰色	灰黄褐色		器表面に約1~2mm弱の白色・黒色・茶色粒あり。
	349	一括	Ⅱa	H4		滑石混入土器		石鍋模倣	口縁部				褐灰色	にぶい褐色		胎土に1mm以下の滑石粉を多く含む。
	350		Ⅲ	E2	E0233	滑石混入土器		土師器模倣	口縁部				にぶい橙色	にぶい褐色		微細な滑石粉を多く含む。1mm程の黒色粒子が混入。
	351	一括	Ⅱb	G6		滑石混入土器		土師器模倣	口縁部				にぶい褐色	橙色		微細な滑石粉と1mm程度の黒色粒を含む。
	352		Ⅲ	H5	無印(P)	滑石混入土器		石鍋模倣	口縁部				黄灰色	黒褐色		土製品の可能性有
	353		Ⅲ	H6	H0621	滑石混入土器		石鍋模倣	胴部				灰褐色	黄橙色		土製品の可能性有
	354	一括	Ⅱ	A3		滑石混入土器		石鍋模倣	胴部				黄灰色	にぶい褐色		1mm程の滑石粉あり。
	355		Ⅲ	I4	I0409	滑石混入土器		土師器模倣	胴部				オリブ黒色	黒褐色		器壁が非常に薄い
	356		不明	E5	E0554	滑石混入土器		石鍋模倣	底部				黄灰色	にぶい黄褐色		1mm程の滑石粉あり。
	357	一括	Ⅲ	H5		滑石混入土器		石鍋模倣	底部				灰黄褐色	橙色		滑石が多量に混入。
	358		Ⅲ	C4	C0480	滑石混入土器		石鍋模倣	底部	底径：16cm			灰色	暗オリブ褐色		
	359			C4	C0445	滑石混入土器		石鍋模倣	底部				橙色	黒褐色		
360		Ⅲ	C4	C0480	滑石混入土器		石鍋模倣	底部				灰褐色	褐灰色			



第74図 青磁及びガラス玉



第75図 轆の羽口



第76図 鉄滓・粘土塊・土製品

(6) 砥石 (第80図 403, 404)

全て砂岩を素材とする。403は長軸径10cm程度の円礫が節理面に沿って割れたものを利用している。節理面に平坦な磨面が形成されており、砥石と判断した。404は節理によって破損した磨石を転用している。裏面の周縁に簡単な整形剥離を施した後、平坦な磨面を形成している。

(7) 金床石 (第80図 405 ~ 407)

分厚い板状の砂岩製大型礫を素材とし、砥石からの転用品が多い。全体的に被熱しているが敲打痕が集中する部分がやや強く被熱を受けている傾向があ

る。405は主に正面と右面に平坦でやや湾曲した磨面が形成されている。正面に径3cm~4cm程度の範囲で敲打痕が観察され、周囲が帯状に被熱している。砥石からの転用品とみられる。407は磨面が裏面に位置する。全体的に被熱しており、正面には鉄分の付着が顕著に観察される。

(8) 大型礫 (第80図 408)

大型の砂岩礫を素材とする。分割されているが自然面は顕著な磨面が形成され、光沢を帯びる。被熱している。

第73表 青磁及びガラス玉観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
74	361	一括	II a	H4		青磁	椀	龍泉II b	口縁部	口径:17cm			オリブ灰色	オリブ灰色		鎬連弁を有する
	362	一括		A4		青磁	椀	龍泉II b	胴部				灰オリブ色	灰オリブ色		連弁を有する
	363	一括	II	A3		青磁	椀	龍泉IV	口縁部	口径:15cm			灰オリブ色	灰オリブ色		無文
	364	一括	I	I4		青磁	皿	龍泉窯	口縁部	口径:12.5cm			オリブ黄色	オリブ黄色		
	365	一括	II b	I5		青磁	椀	同安III	口縁部				にぶい黄色	にぶい黄色		外面に圈線が1条ある
	366		III	H6	H0624	青磁		耀州窯?	口縁部				オリブ灰色	オリブ灰色		釉下に白色の層あり。 釉の化学反応かは不明。
	367		III	I6	I0651	ガラス玉										表面は白色を帯びる。

第74表 韃の羽口観察表

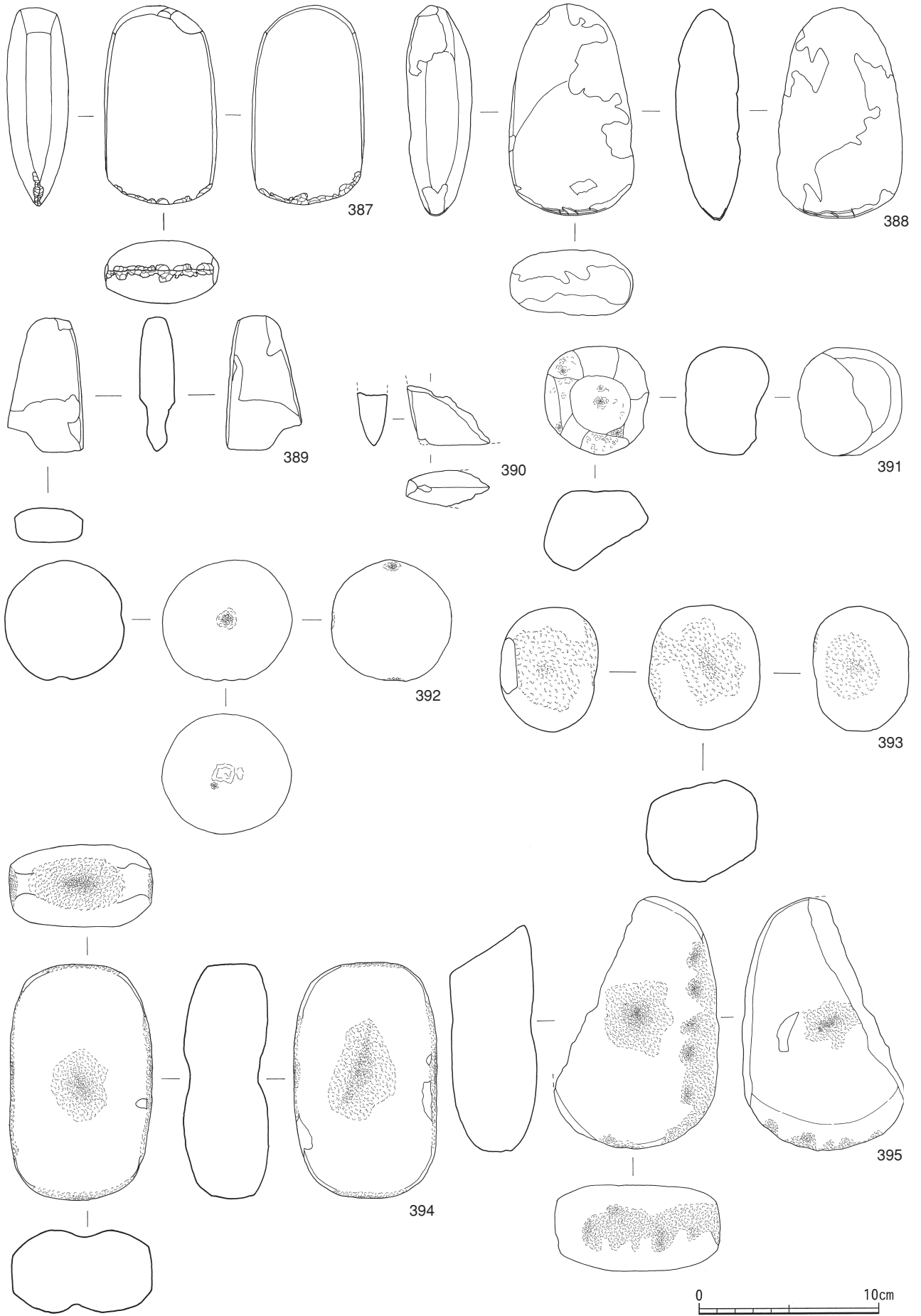
挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
75	368		III	E5	E0560	韃の羽口				内径:3.4cm/外径6cm			橙色	灰黄色		外面に気泡がある
	369	一括	III	B3		韃の羽口				内径:2.6cm/外径6.6cm			浅黄橙色	赤橙色		一部火を受けた跡がある。
	370		III	H6	H0624	韃の羽口				内径:2.6cm/外径5.6cm			橙色	橙色		一部火を受けた跡がある。
	371		III	F1	F0103	韃の羽口				内径:3.8cm/外径4.4cm			橙色	橙色		一部火を受けた跡がある。
	372	一括	II b	G6		韃の羽口							浅黄色	浅黄色		表面ガラス質
	373	174	II	G3	G3174	韃の羽口				内径:1.4cm/外径4.8cm			褐灰色	黄灰色		表面ガラス質
	374		III	H4	H0452	韃の羽口				内径:2.7cm/外径6.8cm			黄橙色	赤灰色		表面ガラス質

第75表 鉄滓観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
76	375	一括	III	H4		鉄滓										
	376	一括	II	F4		鉄滓										表面凸凹。
	377	一括		I5		鉄滓										表面に大きめの気泡。 ずっしりと重みがある。
	378			不明		鉄滓										粘土塊(韃?)が付着。

第76表 土製品観察表

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
76	379		III	H5	H0551	土製品							橙色	橙色		不定形粘土塊。
	380		III	I4	I0432	土製品							橙色	明赤褐色		炬壁か。
	381		III	H5	掘立12(P4)	土製品							黄橙色	明赤褐色		一部平らな面あり。
	382		III	H5	H5105	土製品							赤褐色	赤褐色		中央がやや凹む。
	383		III	H5	H5103	土製品							明赤褐色	明赤褐色	良好	胎土は密。
	384	一括	III	H4		土製品							暗灰黄色	黄橙色		中央部がやや凹む。
	385		II	H4	H0491	土製品		脚?					明赤褐色	明褐色	良好	微細な砂粒を多く含む。
	386	一括	III	E4		土製品		円盤状					明赤褐色	明赤褐色		混和材は肉眼で見えないほど細かい。

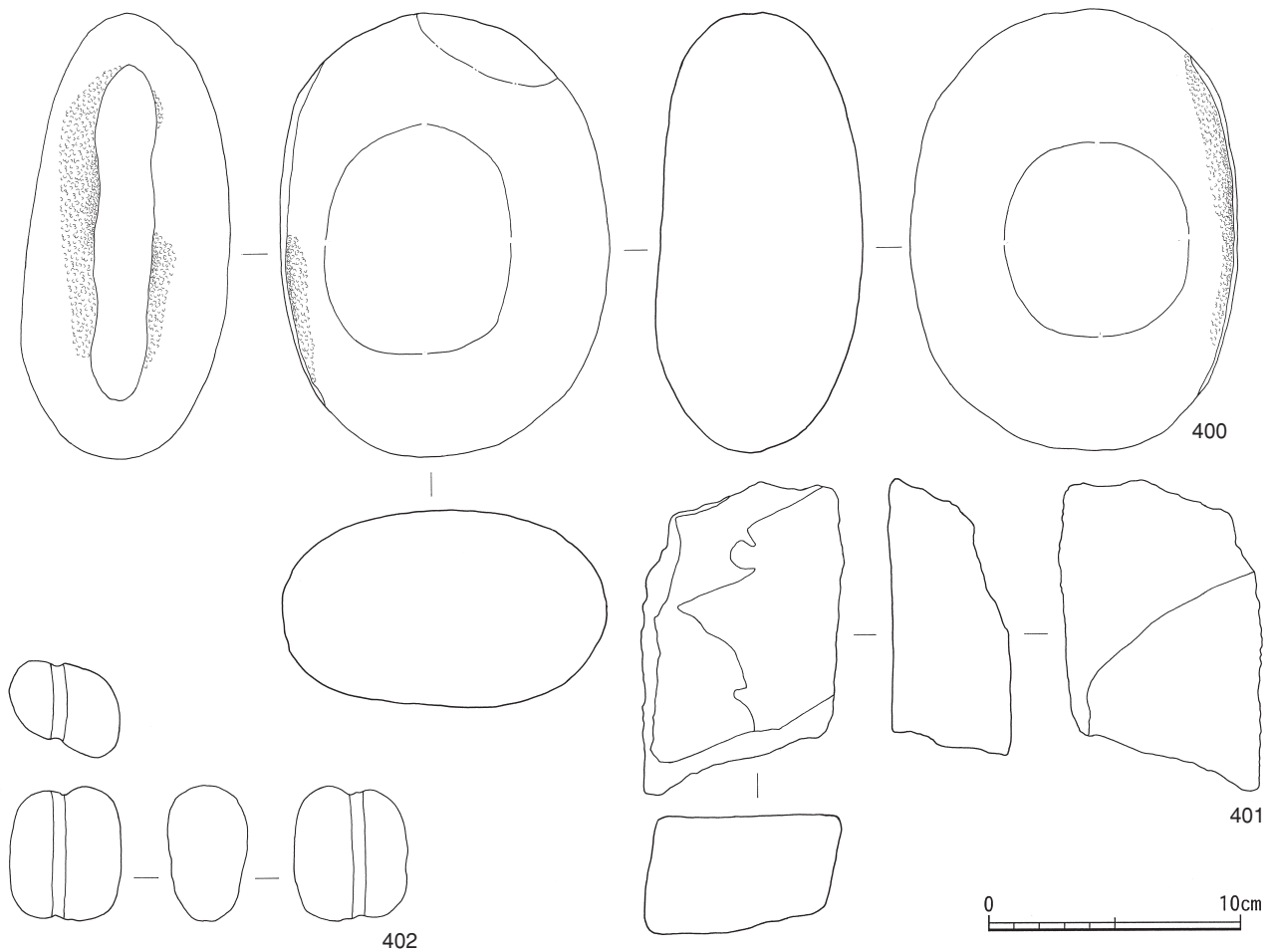


第77图 石器(1)



第78図 石器(2)

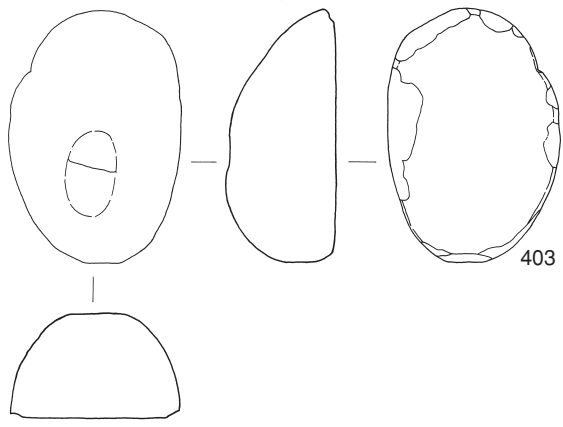




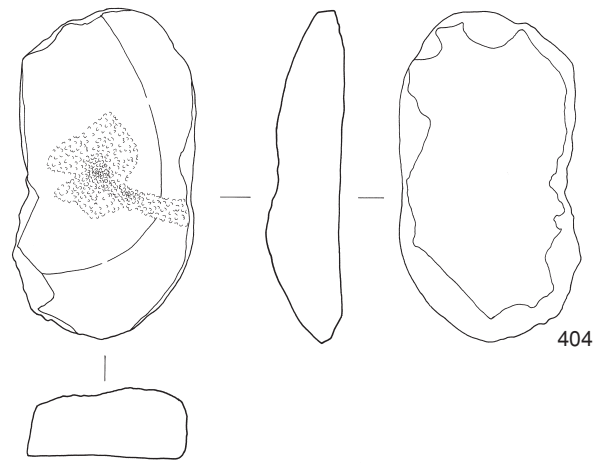
第79図 石器(3)

第77表 石器観察表

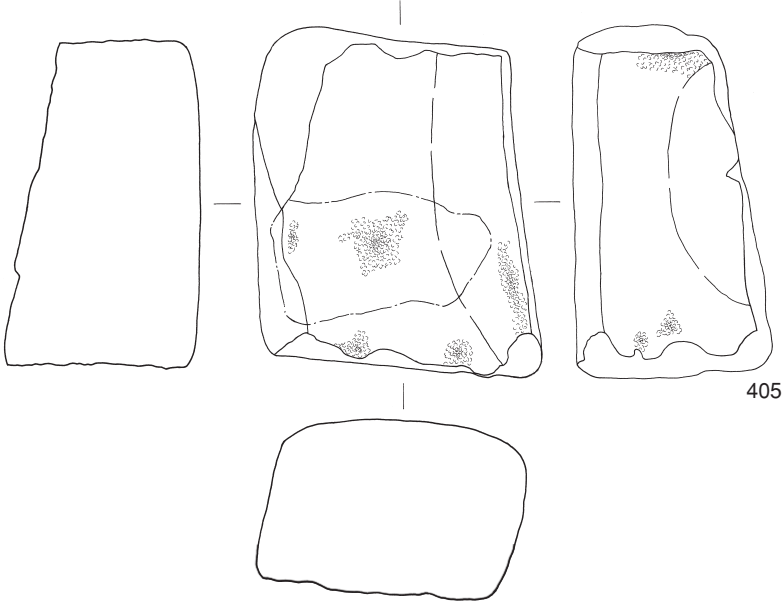
挿入No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	計測値	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
77	387		Ⅲ	H6	H0620	石器	磨製石斧	ホルンフェルス		重量：420g						全体的に丁寧に研磨。
	388			F4	F0459	石器	磨製石斧	ホルンフェルス		重量：480g						刃先は敲打により潰れる。
	389	一括	Ⅱ	G6		石器	磨製石斧	ホルンフェルス		重量：86g						
	390	一括		H4		石器	磨製石斧	ホルンフェルス		重量：25g						丁寧に研磨。
	391		Ⅲ	C4	C0420	石器	敲石	ホルンフェルス		重量：250g						
	392		Ⅲ	I4	I0402	石器	敲石	ホルンフェルス		重量：500g						被熱により半分程が赤化。
	393		Ⅲ	E4	E0403	石器	敲石	砂岩		重量：386g						
	394		Ⅲ?	C3		石器	磨敲石	砂岩		重量：865g						敲打痕以外の平坦面は磨面。
	395		Ⅲ	C4	C0442	石器	磨敲石	安山岩		重量：945g						敲打痕以外の平坦面は磨面。
78	396		Ⅲ	不明	不明	石器	磨敲石	砂岩		重量：1065g						敲打痕以外の平坦面は磨面。
	397		不明	不明	不明	石器	磨敲石	砂岩		重量：820g						敲打痕以外の平坦面は磨面。
	398		Ⅲ	C4	掘立31(P3)	石器	磨敲石	砂岩		重量：1845g						敲打痕以外の平坦面は磨面。
	399		Ⅲ	I5	掘立6(P3)	石器	磨敲石	砂岩		重量：860g						敲打痕以外の平坦面は磨面。
79	400		Ⅲ	F3	F0313	石器	磨敲石	砂岩		重量：2800g						敲打痕以外の平坦面は磨面。
	401		Ⅲ	H5	柱穴列2(P5)	石器	台石	砂岩		重量：700g						やや砂粒が粗い。
	402		Ⅲ	H6	掘立9(P10)	石器	有溝石錘	砂岩		重量：125g						
80	403		Ⅲ	C4	C0491	石器	砥石	砂岩		重量：425g						
	404		Ⅲ	H6	H0642	石器	砥石	砂岩		重量：375g						割れた破片を転用。
	405			G5	G0561	石器	金床石	砂岩		重量：1975g						一部被熱。
	406	71	Ⅱ	G3	G0371	石器	金床石	砂岩		重量：2100g						
	407			F2	掘立26(P1)	石器	金床石	砂岩		重量：2050g						鉄分付着。
	408		Ⅲ	C4	C0448	石器	大型礫	砂岩		重量：2100g						磨面部分以外は破損。



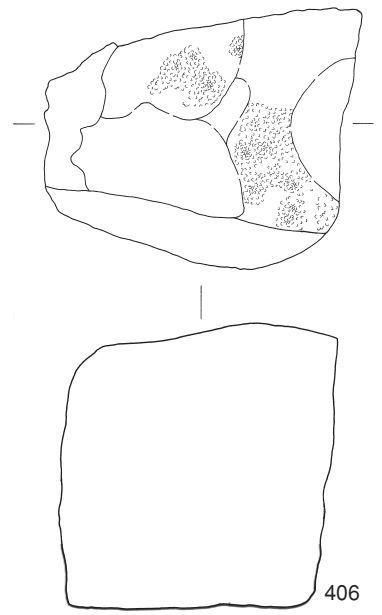
403



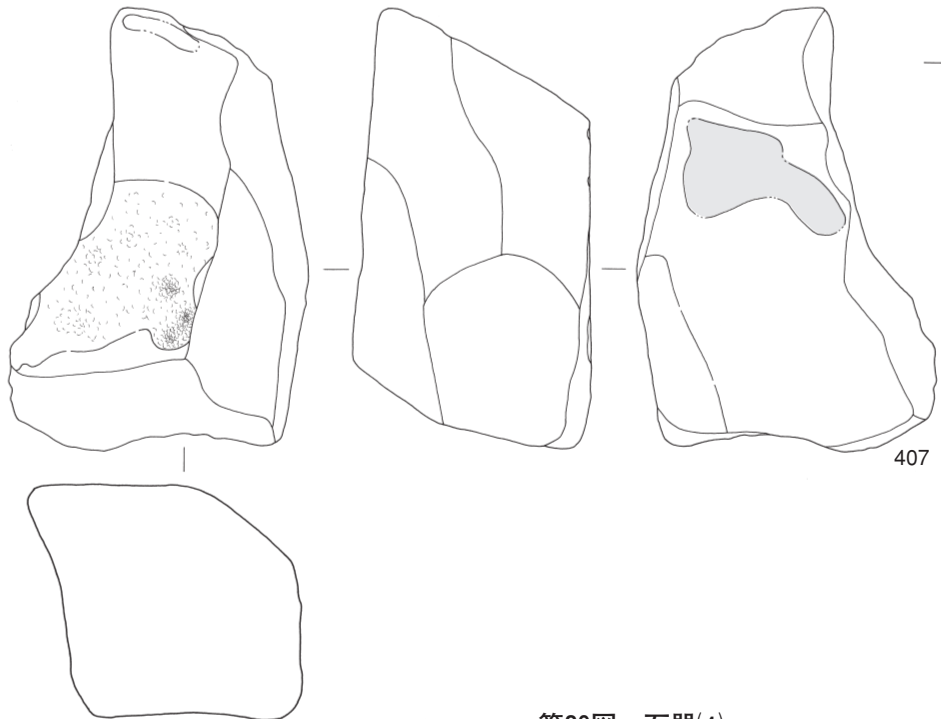
404



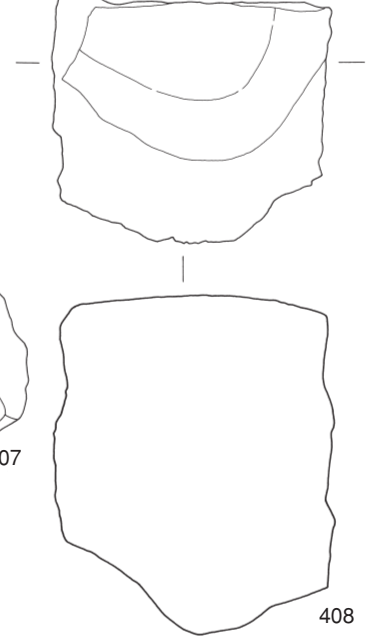
405



406

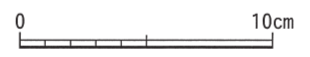


407



408

第80図 石器(4)



## 第Ⅵ章 自然科学分析

### 第1節 山田中西遺跡出土人骨の分析

鹿児島女子短期大学 竹中 正巳

#### はじめに

2003年8月、鹿児島県大島郡喜界町城久遺跡群山田中西遺跡から土坑墓が出土した。4基の墓の中には土坑墓4, 5, 6号に焼骨が土坑墓8号に火を受けていない人骨が埋葬されていた。中世の南西諸島の火葬や埋葬習俗を知る上で大変貴重な資料であり、以下に人骨の人類学的検討を行った結果を示す。

#### 土坑墓4号出土焼骨 (?・成人)

出土した人骨は、火を受け、表面がひび割れ、細片化している。総重量は151gである。検出された焼骨のサイズは6cmを超えない。検出された焼骨のサイズは1~2cm程度のものと1cm未満のものが多い。部位同定できたのは、頭蓋2g、上腕骨5g、橈骨1g、手5g、椎骨5g、肋骨2g、寛骨9g、左膝蓋骨5g、右腓骨4g、脛骨10g、右距骨22g、左中間楔状骨4g、右外側楔状骨5g、左第1中足骨3g、右中足骨4g、足3gだけであり、残りは長骨片が1g、部位不明の小骨片が61gあった。同定できた焼骨片に部位の重複がないことから、1体分の焼骨の可能性が高い。しかし、納められた焼骨は少ない。

焼骨の色調は、表面は白色を示すものが多いが、青灰色、茶褐色を示すものもある。内部の海面質は黒色を示すものがほとんどである。遺存している焼骨をみる限り、火も十分まわっておらず、高温で焼けたとは言い難い。

性別は、性判定の決め手となる部位は遺存していない。年齢は、手や足の指の骨端が完成しており、距骨の大きさから成人と考えられる。

#### 土坑墓5号出土焼骨 (?・成人)

出土した人骨は、火を受け、歪み、表面がひび割れ、細片化していた。総重量25gである。検出された焼骨のサイズは4cmを超えない。検出された焼骨のサイズは1cm未満のものが多い。部位同定できたのは、頭蓋4g、左肩甲骨4g、手3g、左寛骨4gだけであり、残りは部位不明の小骨片が10gであった。同定できた焼骨片に部位の重複がないことから、1体分の焼骨の可能性が高い。しかし、納められた焼骨

は極めて少ない。

焼骨の色調は、表面は白色を示すものが多いが、青灰色を示すものもある。内部の海面質は黒色を示すものがほとんどである。遺存している焼骨をみる限り、火も十分まわっておらず、高温で焼けたとは言い難い。

性別の正確な判定はできない。年齢は、肩甲骨の破片の大きさ、頭蓋の厚さから成人である可能性が高い。

#### 土坑墓6号出土焼骨 (?・成人)

出土した人骨は、火を受け、歪み、縮み、表面がひび割れ、細片化していた。総重量は99gである。検出された焼骨のサイズは4cmを超えない。検出された焼骨のサイズは1~2cm程度のものが多い。部位同定できたのは、頭蓋(下顎、鶏冠)23g、手7g、寛骨2g、足2gだけであり、残りは長骨片が2g、部位不明の小骨片が63gあった。同定できた焼骨片に部位の重複がないことから、1体分の焼骨の可能性が高い。しかし、納められた焼骨は少ない。

焼骨の色調は、表面は白色を示すものが多いが、青灰色、茶褐色、黒色を示すものもある。内部の海面質は白色を示すものが多い。焼かれた温度は、土坑墓4号や土坑墓5号の人骨よりも高温で焼かれたと考えられる。

性別は、性判定の決め手となる部位は遺存していない。年齢は、手や足の指の骨端が完成しており、頭蓋の厚さから成人と考えられる。

#### 土坑墓8号出土人骨 (?・成人)

土坑墓8号の人骨であるが、他の3基の火葬骨とは異なり、火を受けていない。頭蓋の一部だけが遺存しており、性別や年齢の正確な判定はできないが、頭蓋片の大きさや厚さから、成人に達していた可能性が高い。

#### おわりに

土坑墓4, 5, 6号に納められていた火葬骨は、歪み、縮み、細片化していた。性別や年齢の正確な判定はできなかった。

火葬時、焼骨は200℃で焦茶色、400℃で黒色、500℃で灰白色、600℃で純白色、800℃で淡桃色を帯びた乳白色になる(平野, 1935)。本遺跡から出土した焼骨の表面の色調は黒色、茶褐色、青灰色、白色など変異に富んでいるが、大半は白色で、内部の海面質は黒色が多い。土坑墓6号に納められた焼

骨の海面質は白いものが多く、この墓に納められた焼骨が、一番高温で焼かれたことがわかる。今回の山田中西の火葬時、高温に達した部位では、600～800℃に達していたはずである。しかし、全体に火の回りはよくなく、比較的、低温で焼かれたことがわかる。

一般に、軟組織が残っている時に焼かれたのであれば、長骨には外面の深いひび割れ、横方向の輪状の亀裂、長軸方向の裂開、著しい捩れが生ずるが、白骨を焼くと長軸方向の裂開と表面の浅いひび割れだけにとどまり、形が歪むことはないと言われている（Buikstra, 1973）。山田中西遺跡の3基の焼骨は、深いひび割れや著しい捩れは認められない。これは、軟部組織が残っている時に焼かれたにもかかわらず、比較的、低温で焼かれたために、亀裂や歪みがほとんど生じなかった可能性が高いと考えられる。

今回の山田中西の各墓に納められた焼骨の量は少なく、その割りに手足の細かい骨が多いが、全身の部分が納められている。また、いったん白骨化した骨を集める際、手足の小さい骨をたくさん集めることは難しい。これらのことも白骨化した骨を集め、火葬したと考えるよりは、亡くなった後、あまり時間がたたない時に焼かれたとの考えを後押しすると思われる。

今回、各墓に納められた焼骨の量は少なく、細片化している。また頭蓋や四肢の長骨が極めて少ない。納める焼骨量が少ない場合、拾骨を丹念に行わなかった可能性、分骨、二次的な改葬などが理由として考えられる。山田中西の例が、どのような理由でこの程度の納骨量になり、頭蓋や四肢の長骨など、大きな焼骨片を拾わなかったのか、今後、解明しなければいけない課題である。

また、細片化については、焼骨が布袋や木質の容器に納められていた可能性が考えられ、このような容器に納められるように、拾骨や納骨の際、骨を人為的に細片化したことによる可能性も考えておかなければならない。

そして、土坑墓8号の人骨であるが、他の3基の焼骨とは異なり、火を受けていない。山田中西遺跡を営んだ人々は火葬だけでなく、土葬も行っていたことがこれから分かる。

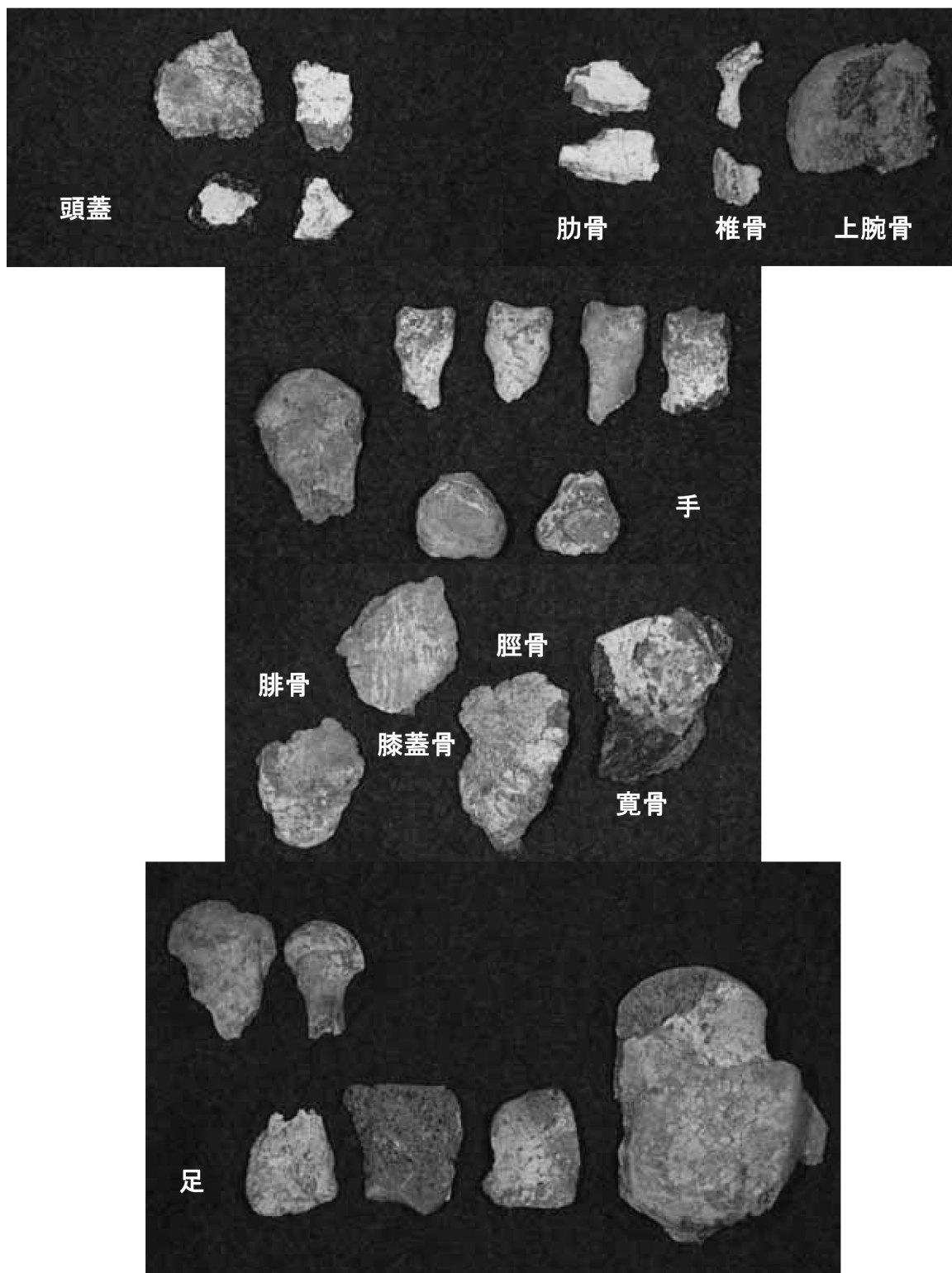


写真1 鹿児島県喜界町山田中西土坑墓4号出土焼骨（性別不明・成人）

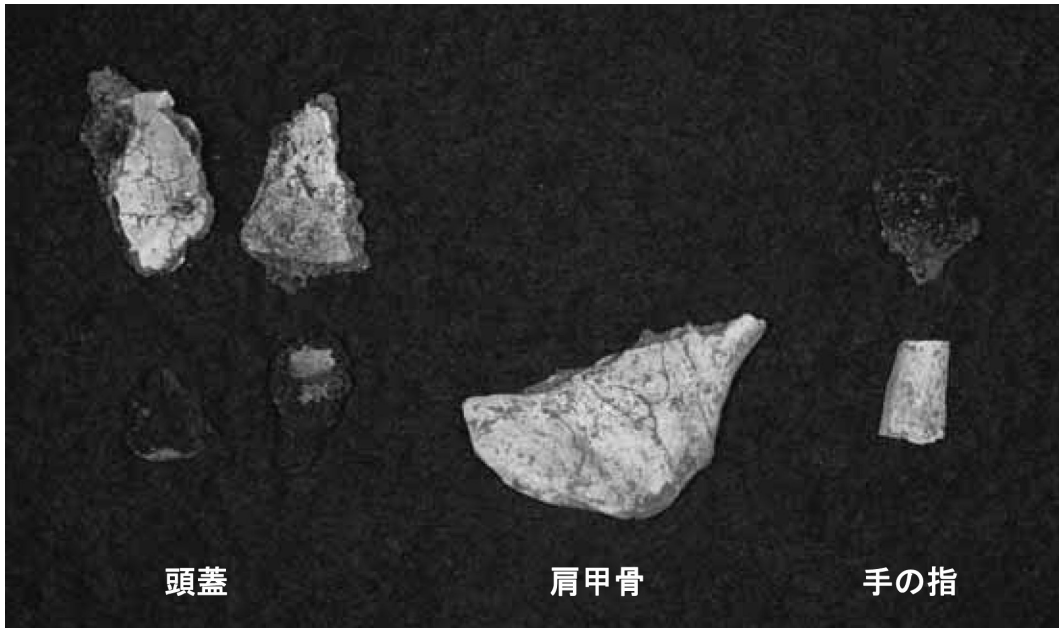


写真2 鹿児島県喜界町山田中西土坑墓5号出土焼骨 (性別不明・成人)

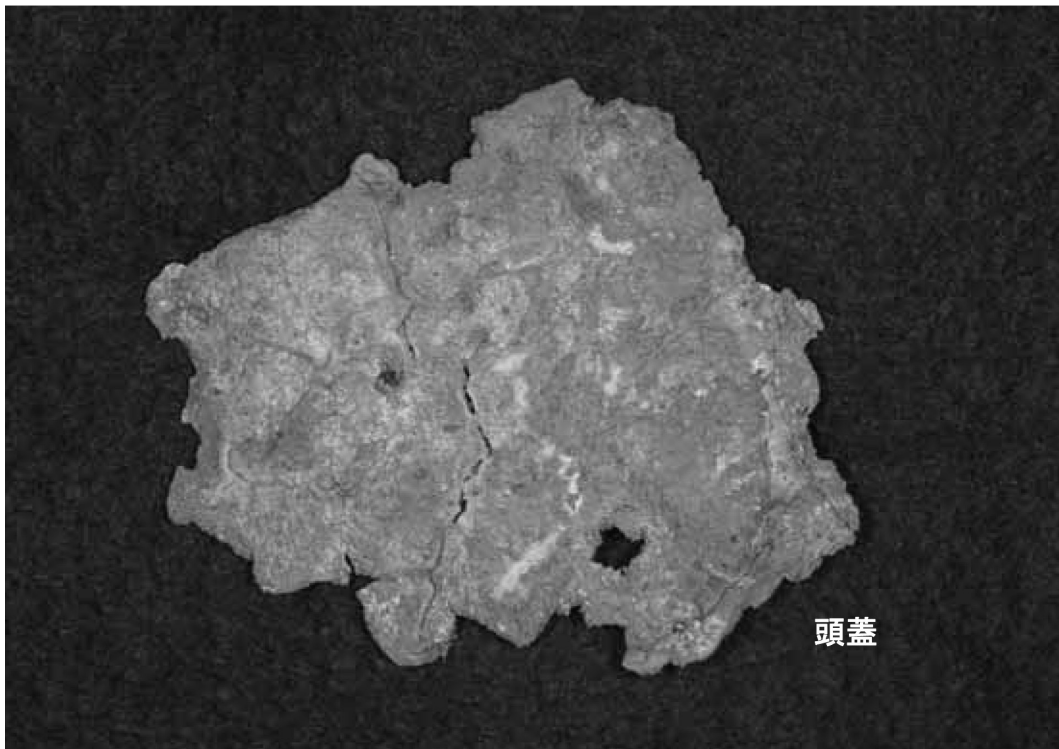


写真3 鹿児島県喜界町山田中西土坑墓8号出土人骨 (性別不明・成人)



写真4 鹿児島県喜界町山田中西土坑墓6号出土焼骨（性別不明・成人）

## 第2節 炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定

### I 放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

山田中西遺跡より検出された炭化材の加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を実施した。

#### 2. 試料と方法

試料は、土坑墓4号I-6区Ⅲ層より採取した炭化材 (不明) 1点、土壙6号I-6区Ⅲ層より採取した炭化材 (シノキ属) 1点の併せて2点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定した<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した<sup>14</sup>C濃度を用いて<sup>14</sup>C年代を算出した。

#### 3. 結果

第78表に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値 - 25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差を補正した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代を示す。

<sup>14</sup>C年代値 (yrBP) の算出は、<sup>14</sup>Cの半減期として Libbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、計数値の標準偏差  $\sigma$  に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の<sup>14</sup>C年代が、その<sup>14</sup>C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

### 暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い (<sup>14</sup>Cの半減期5,730  $\pm$  40年) を較正し、より正確な年代を求めるために、<sup>14</sup>C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて<sup>14</sup>C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

暦年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い (<sup>14</sup>Cの半減期5,730  $\pm$  40年) を較正し、より正確な年代を求めるために、<sup>14</sup>C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて<sup>14</sup>C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代を算出する。

<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正值は<sup>14</sup>C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1  $\sigma$  暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する暦年代範囲であり、2  $\sigma$  暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差の2倍に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1  $\sigma$  暦年代範囲および2  $\sigma$  暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1  $\sigma$  暦年代

第78表. 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代		
					暦年代較正值	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-2543 (AMS)	炭化材 (不明) 土壙1号 I-6区Ⅲ層	1,010 $\pm$ 25	-30.0	930 $\pm$ 25	cal AD 1,045 cal AD 1,090 cal AD 1,120 cal AD 1,140 cal AD 1,155	cal AD 1,040 - 1,070 (35.3%) cal AD 1,080 - 1,125 (49.1%)	cal AD 1,025 - 1,165 (97.9%)
PLD-2544 (AMS)	炭化材 (シノキ属) 土壙4号 I-6区Ⅲ層	985 $\pm$ 25	-26.5	960 $\pm$ 25	cal AD 1,035	cal AD 1,020 - 1,045 (34.1%) cal AD 1,090 - 1,120 (41.3%) cal AD 1,140 - 1,155 (24.6%)	cal AD 1,020 - 1,070 (39.7%) cal AD 1,080 - 1,130 (39.6%) cal AD 1,135 - 1,160 (20.7%)



範囲および2 $\sigma$ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

#### 4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1 $\sigma$ 暦年代範囲および2 $\sigma$ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

#### 引用文献

- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の<sup>14</sup>C年代, p. 3-20.
- Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended<sup>14</sup>C Database and Revised CALIB3.0 <sup>14</sup>C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

## II 山田中西遺跡出土炭化材の樹種同定

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

ここでは、平安時代から鎌倉時代(約850～700年前)の土坑墓I-6区Ⅲ層から出土した炭化材2点の樹種同定結果を報告する。

### 2. 試料と方法

同定は、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

### 3. 結果

土坑墓4号から出土した炭化材は、保存が悪く脆いこともあり、組織構造が十分に観察できず、不明である。主に柔細胞から構成されているようであり、材ではなく草本性と思われ、葉や茎の一部かもしれ

ない(図版1 写真1-2)。

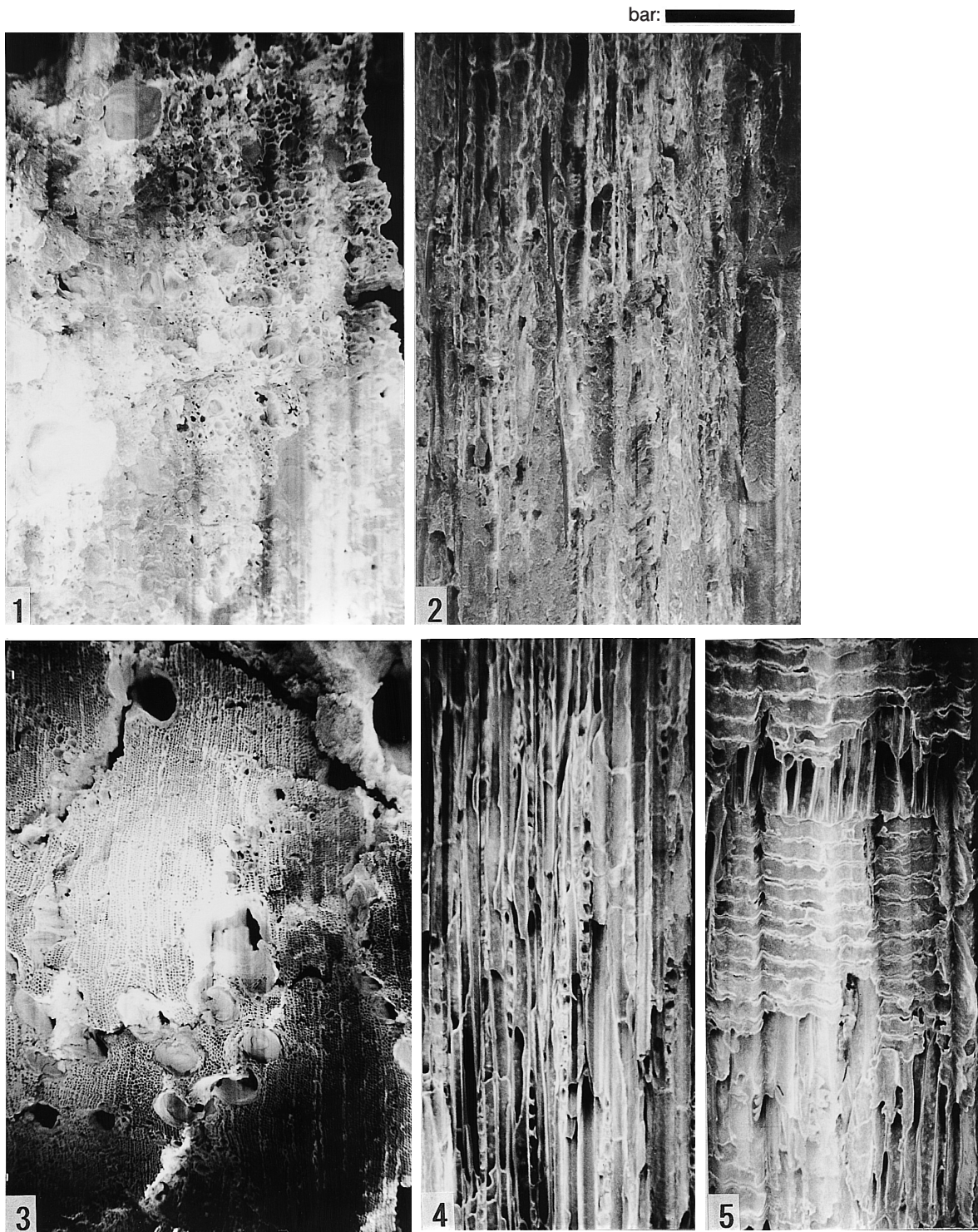
土坑墓6号から出土した炭化材は、以下に記載する材組織から、シイノキ属と同定した(図版1 写真3-5)。シイノキ属は、高木となる常緑広葉樹で当地域一帯では普通に生育することから、火葬の燃料材や葬儀の構造物などに利用された可能性が考えられる。

シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科

年輪の始めに中型の管孔が間隔を開けて配列し除々に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火災状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は単列同性である。年輪始めの管孔が間隔を開けて配置していることからクリとは異なり、また孔圏部が部分的にずれるなどの点で、シイノキ属と同定した。

シイノキ属は暖帯に生育する常緑広葉樹で照葉樹林の主要素である。関東以西・四国・九州に分布するツブラジイ(コジイ)と、本州の福島県と新潟県佐渡以南・四国・九州に分布するスダジイがある。シイノキ属の放射組織は単列がほとんどであるが、スダジイは樹心部に限り集合放射組織が現れることがあり、ツブラジイは樹心以外でも現れる。当遺跡の試料は、保存が悪く広い面積の横断面を観察できなかったため、スダジイとツブラジイの識別はできていない。

図版1 山田中西遺跡土壙出土炭化材の走査電子顕微鏡写真



1-2 : 不明 (土壙4号) 3-5 : シイノキ属 (土壙6号)

1 : 横断面? ber : 約0.26mm, 2 : 縦断面? ber : 約0.13mm

3 : 横断面 ber : 約0.74mm, 4 : 接線断面 ber : 約0.18mm, 5 : 放射断面 ber : 約0.13mm

第53図 土坑墓8号及び副葬品

### 第3節 炭化人骨の放射性炭素年代測定および炭素・窒素同位体分析

株式会社古環境研究所

#### I. 放射性炭素年代測定

##### 1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により $^{14}\text{C}$ 年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、山田中西遺跡で出土した火葬人骨の年代を特定するために、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc. の協力を得た。

##### 2. 試料と方法

測定試料は、山田中西遺跡で出土した炭化物2点(土坑墓5号, 土坑墓6号)である。加速器質量分析 (Accelerator Mass Spectrometry; AMS) 法による放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸 (HCl) で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で $80^{\circ}\text{C}$ で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、*n*-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデム加速

器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を第79表にまとめた。

#### 3. 結果

年代測定の結果を第80表に示す。

##### (1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した (実際の半減期は5730年)。

##### (2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表す。

##### (3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を $-25$  (%) に標準化することによって得られる年代である。

##### (4) 暦年代 Calendar Age

$^{14}\text{C}$ 年代測定値を実際の年代値 (暦年代) に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動および $^{14}\text{C}$ の半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値およびサングのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24050年までの換算が可能である (樹木年輪データはBC10450年まで)。

暦年代の交点とは、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 $1\sigma$  (68%確率) と $2\sigma$  (95%確率) は、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

#### 4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、土坑墓5号 (試料No.1) では $950 \pm 40$ 年BP ( $1\sigma$ の暦年代で AD 1030 ~ 1160年)、土坑墓6号 (試料No.2) では $980 \pm 40$ 年BP (同AD 1020 ~ 1040年, AD1100 ~ 1120年) の年代値が得られた。

第79表 試料と方法

試料名 測定法	地点・土層	種類	前処理・調整
No.1 AMS	土坑墓5号	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄
No.2 AMS	土坑墓6号	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

第80表 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代 (西暦)
No.1	226077	970 ± 40	-26.4	950 ± 40	交点: cal AD 1040 1 $\sigma$ : cal AD 1030 ~ 1160 2 $\sigma$ : cal AD 1010 ~ 1170
No.2	226078	1000 ± 40	-26.1	980 ± 40	交点: cal AD 1030 1 $\sigma$ : cal AD 1020 ~ 1040 : cal AD 1100 ~ 1120 2 $\sigma$ : cal AD 990 ~ 1160

## 文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

尾崎大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ. 学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3 - 炭素年代測定による高精度編年体系の構築 -, p.14 - 15.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p. 1 - 36.

## II. 炭素・窒素安定同位体分析

### 1. はじめに

この調査は、山田中西遺跡で出土した人骨資料について安定同位体分析を行い、彼らの食性（海産物依存率）を検討したものである。

### 2. 試料

分析対象は、土坑墓5号と土坑墓6号より出土した火葬人骨2点である。

### 3. 測定方法

粉末乾燥した試料を正確に秤量後スズカプセルに入れ、装置内の燃焼管に落とし、酸素を含むヘリウム（キャリアーガス）気流中で燃焼させる。生成したガスは、酸化触媒で完全酸化されCO<sub>2</sub>、NO<sub>x</sub>、H<sub>2</sub>Oとなり、還元管を通過させた還元銅によってNO<sub>x</sub>をN<sub>2</sub>に還元させ、さらにMg (ClO<sub>4</sub>)<sub>2</sub>トラップでH<sub>2</sub>Oを除去する。燃焼ガスを均一化した後、分離カラムに通し成分分離し、分離したCO<sub>2</sub>及びN<sub>2</sub>ガスを質量分析計に導入し同位体比を測定した。

### 4. 分析結果

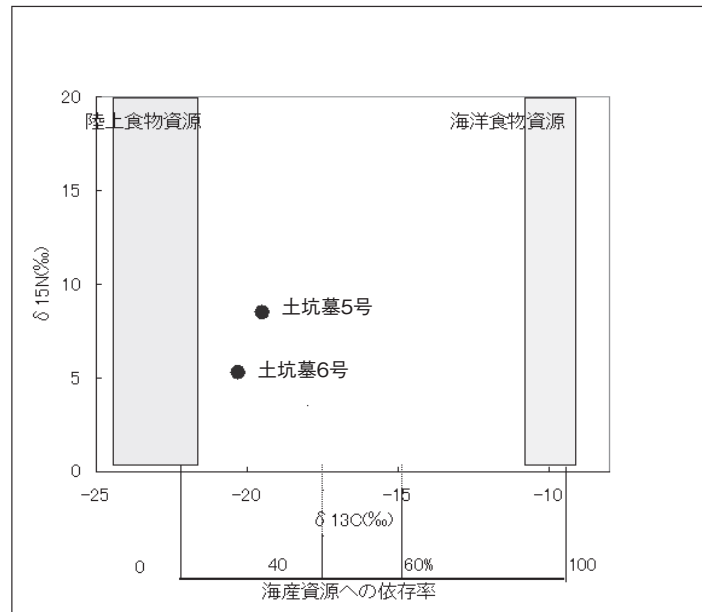
分析結果を第81表に示す。

### 5. 所見

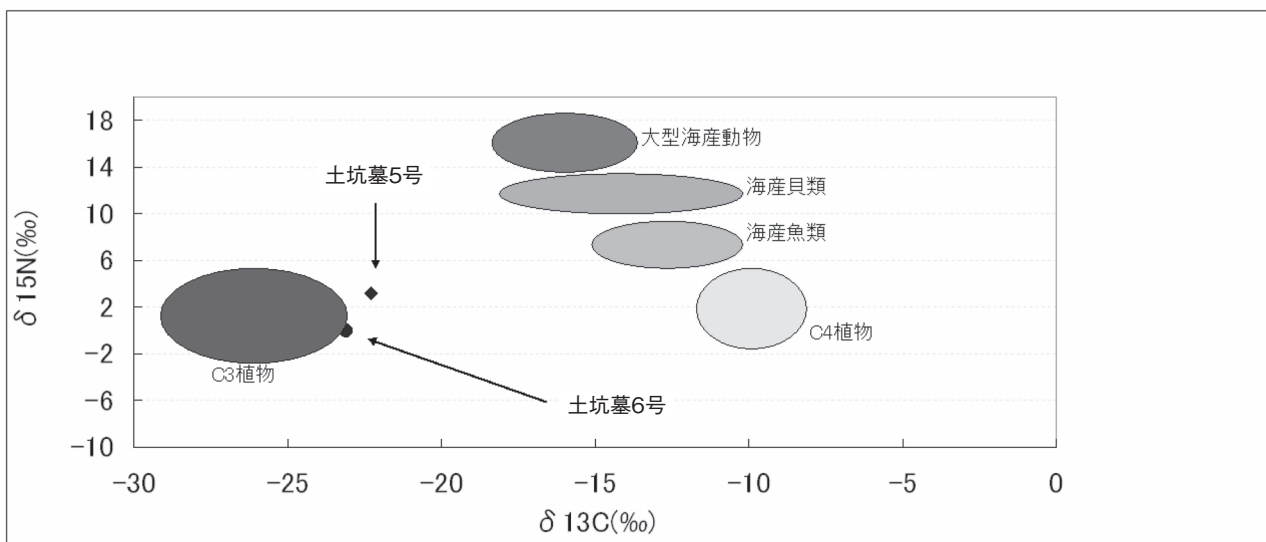
第78図に炭素安定同位体対比から見た海産資源への依存率を示す。炭素安定同位体比から食物の依存率について見ると、 $\delta^{13}C$ が $-23.5 \sim -20.5\%$ であれば100%陸上生態系に依存、 $-10.5 \sim -8.5\%$ であれば100%海洋生態系に依存していると推定できる（小池, 2000）。

第81表 骨コラーゲンの安定同位体比測定結果

Sample #	試料名	試料種	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰)
30986	土坑墓5号 火葬骨	人骨	-19.5	8.5
30987	土坑墓6号 火葬骨	人骨	-20.3	5.3



第81図 安定同位体比からみた海産資源への依存率



第82図 先史時代の食資源の同位体分布と試料の同位体比

今回の試料から得られた炭素安定同位対比は、陸上食物資源と海洋食物資源の中間的な値であった。

第82図は先史時代の食資源の同位体分布（南川，2000）と当該試料の同位体比をプロットしたものである。

一般に食物と骨コラーゲンの間には以下のような関係があることがわかっている。第79図においては試料のプロット値は補正後の値を用いた。

炭素同位体：骨の合成に用いられた食物の同位対比  
= 骨コラーゲンの同位対比 - 2.8

したがって、土抗墓5号火葬骨： $-19.5 - 2.8 = -22.3$ 、土抗墓6号火葬骨： $-20.3 - 2.8 = -23.1$

窒素同位体：骨の合成に用いられた食物の同位対比  
= 骨コラーゲンの同位対比 - 5.3

したがって、土抗墓5号火葬骨： $+8.5 - 5.3 =$

$+3.2$ 、土抗墓6号火葬骨： $+5.3 - 5.3 = 0$

#### 引用文献

小池裕子 (2000) 食糧資源環境と人類, 環境と人類, p31-60.

南川雅男 (2000) 「先史人は何を食べていたか」炭素・窒素同位体法でさぐる「考古学と科学をむすぶ」, p195-221.

三原正三 (2003) 佐賀県大友遺跡出土人骨のAMS  $^{14}\text{C}$ 年代測定海洋リザーバー効果, 名古屋大学加速器質量

## 第4節 山田中西遺跡出土の植物遺体：速報

高宮 広土

### はじめに

山田中西遺跡における生業を理解するために、土抗1号、土抗墓4号、5号、7号および8号より、それぞれ8リットル、4.5リットル、16.5リットル、36.5リットル、および12リットルの土壌をサンプルし、フローテーション処理を実施した。回収された浮遊物を分析した結果、以下の植物遺体が回収された。

### 1 回収された植物遺体 (第82表)

イネ *Oryza sativa* L.

イネ穎果の破片が、土抗墓5号および土抗墓7号よりそれぞれ1片、土抗墓8号より2片の計4片検出された。全て小破片である。写真1の残存部のサイズは、長さ×幅×厚さ (mm) :  $1.8 \times 1.5 \times 0.8$ mm ; 写真2長さ×幅 :  $1.9 \times 1.2$ mm

イネ？

イネの穎果と思われるが、保存状態が悪く、イネとは同定できなかった植物遺体をこのカテゴリーに含めた。土抗墓8号より1片回収されている。

コムギ *Triticum aestivum* L.

コムギ穎果が土抗墓7号より1粒および土抗墓8号より1片得られた。前者より回収されたコムギはほぼ完形で、グスク時代の遺跡から検出される小型のコムギである。写真3のサイズは、 $2.6 \times 1.6 \times 1.6$ mm

オオムギ *Hordeum vulgare* L.

オオムギの穎果が、土抗墓5号より1粒、土抗墓

7号より2粒および土抗墓8号より1片の計4 (粒/片) 回収された。これもグスク時代の遺跡から回収されるオオムギと類似する。写真4のサイズは $4.1 \times 2.0 \times 1.6$ mm ; 写真5は $4.8 \times 2.1 \times 1.7$ mm ; 写真6は $3.7 \times 1.4 \times 1.0$ mm

アワ *Setaria italica* Beauvois

アワの穎果が1粒土抗墓8号から検出されている。写真7のサイズは、 $1.2 \times 0.9 \times 0.9$ mm

同定不可能

計23片の植物遺体を同定不可能とした。

### まとめ

サンプル量が十分ではなかった可能性もあるが、以下のことが明らかになりつつある。まず、山田中西遺跡で生活を営んでいた人々は農耕を生業の糧としていたであろう。少なくとも、喜界島には12世紀前後半ばごろまでには、農耕が導入されたと思われる。このころまでに、イネ、コムギ、オオムギ、およびアワは喜界島で栽培されていたであろう。興味深い研究テーマは、同島に存在した狩猟採集民が農耕を受け入れたのか、あるいは農耕を基盤とする人々が移住してきたか、である。今後の重要な課題であり、さらなる植物遺体回収のために、今後も土壌をサン

リングすることを期待したい。

謝辞：

土壌をサンプリングして下さった喜界町教育委員会澄田直敏・野崎拓司氏に感謝申し上げます。奄美市教育委員会中山清美氏にはフローテーション処理を行うためにいろいろと便宜を図って頂きました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

第82表：山田中西遺跡出土の植物遺体

遺構	フローテーション No.	グリッド No.	層	土壌サンプル量 (l)	浮遊物量 (g)	イネ (片)	イネ? (片)	コムギ (粒/片)	オオムギ (粒/片)	アワ (粒)	同定不可能 (片)	計 (粒/片)
土坑1号	6	A-1	III	8	4.19							0
土坑墓4号	7	I-6	III	4.5	21.99						7	7
土坑墓5号	2	I-6	III	4	0.89							0
土坑墓5号	9	I-6	III	1.5	0.08							0
土坑墓5号	10	I-6	III	1.5	0.5							0
土坑墓5号	11	I-6	III	3.5	0.58	1			1		2	4
土坑墓5号	12	I-6	III	3	0.43							0
土坑墓5号	13	I-6	III	3	0.39							0
土坑墓7号	1	I-5・6	III	10	4.16			1	1		3	5
土坑墓7号(北)	4	I-5・6	III	10	4.11	1					2	3
土坑墓7号(南)	5	I-5・6	III	8.5	6.43				1		1	2
土坑墓7号(東)	8	I-5・6	III	3	2.57							0
土坑墓7号(西)	14	I-5・6	III	5	4.83							0
土坑墓8号	3	D-5	III	12	1.14	2	1	1	1	1	8	14
			計	77.5	52.29	4	1	2	4	1	23	35

山田中西遺跡出土の植物遺体



1) イネ 側面 (上部破片)



2) イネ 側面 (胚の部分)



3) コムギ (背面)



4) オオムギ (背面)



5) オオムギ (背面)



6) オオムギ (背面)



7) アワ (背面)

## 第Ⅶ章 基礎資料

本遺跡では包含層の堆積が薄く表土直下で遺構が検出される状況であった。出土遺物については小片が多いが可能な限り分類を行い一覧表を作成した。

ピット内の出土遺物一覧表については第83表～第94表に、出土区毎の集計表（土坑墓，土坑内出土遺物は除く）については第95表に示す。

併せて，第83図～第92図にはピット内出土遺物の出土状況図を，第93図～第104図には詳細遺構配置図を示した。

なお，ピット番号については発掘調査時に出土区毎の通し番号としているが，一部は出土区の境界を

第83表 ピット内出土遺物一覧表(1)

ID	内容	遺構	掲載遺物
A0105	土師器(1)		
A0107	土師器(1)		
A0157	石器(1)		
A0163	石器(2)		
A0207	土師器(3)		
A0209	土師器(1)		
A0213	土師器(2), 粘土塊(1), 布目圧痕土器(1), 轆の羽口(4)		
A0302	土師器(1)		
A0303	石器(1)		
A0305	土師器(1)		
A0306	粘土塊(1), 轆の羽口(5)	掘立37(P4)	
A0323	中世白磁(1)		第64図168
A0335	土師器(3)		
A0340	石器(1)		
A0401	土師器(1)		
A0503	土師器(3)	掘立35(P9)	
A0505	カムイヤキ(1), 石器(2)	掘立35(P8)	第67図227
A0510	土師器(1)		
A0513	石器(2), 土師器(1)		
A0562	石器(1)		
B0203	土師器(1)	掘立38(P6)	
B0217	カムイヤキ(1), 粘土塊(1), 轆の羽口(1)		第69図286
B0225	カムイヤキ(4), 朝鮮系無釉陶器(2)		第66図204, 第66図205
B0308	轆の羽口(2)		
B0320	カムイヤキ(1)		
B0327	カムイヤキ(1), 滑石製品(1)		第68図244
B0332	石器(1)		
B0334	滑石製品(1), 鉄滓(1)		
B0337	石器(1)	掘立36(P12)	
B0340	中世白磁(1)	掘立36(P14)	
B0346	鉄滓(1), 土師器(1)		

越えて連続した通し番号で採番されているものがある。このためピット関係の図面，遺物等の整理にあたっては，通し番号の基点となった出土区名+ピット番号の組み合わせでIDを生成し，整理作業のための基礎番号とした。名前付け規則は，原則として出土区名[3桁]+ピット番号[2桁]とするが，ピット番号が3桁となった場合は，出土区名[2桁]+ピット番号[3桁]とする。発掘調査時にピット番号が付与されていなかったものについては，整理作業時に901から始まる番号を任意に付与して処理した。

このIDについては遺物観察表（第60表～第77表），ピット内出土遺物一覧表（第83表～第94表），詳細遺構配置図（第93図～第104図）に表示した。

第84表 ピット内出土遺物一覧表(2)

ID	内容	遺構	掲載遺物
B0407	土師器(1)		
B0429	石器(1)		
C0229	土師器(1), 轆の羽口(1)		
C0307	カムイヤキ(1)		
C0311	土師器(2)	掘立33(P14)	
C0312	土師器(2), 粘土塊(1)	掘立33(P7)	
C0314	カムイヤキ(3)	掘立33(P12)	第67図243, 第68図246
C0316	カムイヤキ(2), 土師器(4), 布目圧痕土器(1)	掘立33(P5)	
C0317	鉄滓(4), 土師器(2)		
C0318	滑石製品(1), 軽石(2), 土師器(1), 轆の羽口(1)	掘立33(P11)	
C0320	滑石製品(2), 土師器(3), 轆の羽口(1)	掘立33(P10)	
C0326	滑石製品(2)		
C0332	石器(1)	掘立33(P1)	
C0334	カムイヤキ(1), 土師器(1)		
C0341	粘土塊(3)	掘立31(P7)	
C0348	土師器(1), 粘土塊(2)		
C0350	石器(1)		
C0351	カムイヤキ(3), 滑石製品(1), 土師器(1)		第67図218, 第72図346
C0353	中世白磁(1), 滑石製品(1), 軽石(1), 粘土塊(4)		
C0382	カムイヤキ(1)		
C0412	土師器(1)		
C0413	須恵器(1), 土師器(1)		
C0416	鉄滓(1), 土師器(1)		
C0420	カムイヤキ(1), 滑石製品(4), 軽石(1), 石器(1), 鉄滓(2), 土師器(1), 粘土塊(4)		第68図255, 第77図391
C0421	カムイヤキ(1), 中世白磁(1), 土師器(1), 轆の羽口(1)		
C0422	中世白磁(1)		第64図161
C0427	中世白磁(1)	掘立29(P7)	
C0431	石器(1)		
C0433	土師器(1), 轆の羽口(1)		



第85表 ピット内出土遺物一覧表(3)

ID	内容	遺構	掲載遺物
C0438	滑石製品(1), 須恵器(1)		
C0442	滑石製品(2), 石器(1)		第77図395
C0443	滑石混入土器(1)		
C0445	滑石混入土器(1), 石器(2), 土師器(2), 轆の羽口(2)		第59図80, 第73図359
C0448	カムイヤキ(1), 石器(5)		第68図252, 第80図408
C0451	中世白磁(1), 土師器(1)	掘立31(P5)	
C0454	石器(1), 土師器(2), 轆の羽口(2)	掘立29(P5)	第59図64
C0456	滑石混入土器(1), 滑石製品(1), 土師器(1)		
C0459	石器(1), 土師器(1), 粘土塊(1), 轆の羽口(1)		
C0465	石器(1)	掘立31(P3)	第78図398
C0466	滑石製品(2)		第72図325
C0471	石器(1), 鉄滓(1)		
C0472	中世白磁(1), 滑石製品(2)		第72図339
C0474	滑石製品(1)		
C0475	中世白磁(1)		第64図184
C0476	滑石製品(1), 轆の羽口(4)	掘立29(P3)	
C0479	滑石製品(1)		
C0480	カムイヤキ(1), 滑石混入土器(2), 滑石製品(1), 土師器(1)	掘立28(P2)	第69図275, 第73図358, 第73図360
C0483	カムイヤキ(2)		第69図275
C0491	滑石製品(2), 石器(1)		第72図336, 第80図403
C0499	滑石製品(1)	掘立29(P10)	第70図297
C4109	カムイヤキ(1)	掘立28(P10)	
C4110	カムイヤキ(4), 中世白磁(1), 石器(6), 土師器(4), 粘土塊(4), 布目圧痕土器(1), 轆の羽口(7)		第63図134, 第64図192
D0304	カムイヤキ(1), 石器(1)		
D0305	滑石製品(1), 石器(1), 土師器(2)		
D0312	土師器(1)		
D0417	カムイヤキ(1)	掘立32(P7)	第68図253
D0420	滑石混入土器(1), 粘土塊(3), 轆の羽口(1)		
D0421	滑石混入土器(2), 土師器(1)		第73図348
D0422	土師器(2)		
D0427	カムイヤキ(1), 中世白磁(1), 滑石製品(1), 粘土塊(1)		第67図220
D0429	滑石製品(1), 軽石(1)	掘立30(P10)	
D0506	カムイヤキ(1)		
D0513	カムイヤキ(2), 中世白磁(1), 石器(2), 轆の羽口(1)		
D0517	石器(1)	柱穴列5(P3)	
D0533	石器(1)		
E0220	石器(1), 土師器(2)		
E0221	滑石混入土器(1)		
E0222	滑石混入土器(2), 土師器(2)		
E0233	滑石混入土器(1), 土師器(1), 轆の羽口(1)		第73図350
E0301	土師器(2), 轆の羽口(1)		

第86表 ピット内出土遺物一覧表(4)

ID	内容	遺構	掲載遺物
E0308	滑石製品(1)	掘立24(P2)	
E0403	滑石製品(1), 石器(1)		第77図393
E0405	カムイヤキ(1)		第67図230
E0406	土師器(1)		
E0408	滑石製品(2)		第70図291
E0416	土師器(3)		
E0429	カムイヤキ(1), 滑石混入土器(1), 朝鮮系無釉陶器(1)		第66図199
E0436	土師器(3), 轆の羽口(1)		
E0477	滑石製品(1)		
E0502	滑石製品(1), 軽石(1)		
E0505	カムイヤキ(1), 石器(1), 鉄滓(1)		
E0506	カムイヤキ(1), 布目圧痕土器(1)		第63図135
E0509	須恵器(1)		
E0512	滑石製品(1)		第71図317
E0516	土師器(1)		
E0520	滑石製品(1)		
E0522	土師器(3)		
E0524	石器(1)		
E0532	滑石製品(1)		第70図290
E0536	滑石製品(2), 鉄滓(3), 土師器(3), 模倣土器(1)		第59図85
E0539	滑石製品(1)		
E0542	滑石製品(2)	掘立27(P6)	
E0547	石器(1)		
E0549	土師器(1)		
E0550	カムイヤキ(1)		第67図235
E0554	滑石混入土器(1), 土師器(1)		第73図356
E0560	轆の羽口(3)		第75図368
E0561	カムイヤキ(1)		第68図254
E0562	滑石製品(2), 石器(1)		
E0602	カムイヤキ(1), 滑石製品(1), 土師器(1), 轆の羽口(1)		第67図239
F0103	土師器(1), 轆の羽口(1)		第75図371
F0112	滑石製品(1)		
F0204	石器(1), 轆の羽口(1)	掘立26(P1)	第80図407
F0215	滑石製品(2)	掘立25(P5)	
F0220	滑石製品(3)		
F0306	滑石製品(1), 土師器(2), 粘土塊(2), 模倣土器(1)		第59図84
F0307	土師器(1)		
F0308	布目圧痕土器(1)		第63図136
F0309	初期高麗青磁(1), 土師器(1)		第65図193
F0313	石器(1), 土師器(1)		第79図400
F0319	土師器(2)	掘立24(P4)	
F0325	石器(1), 土師器(1)		
F0329	粘土塊(3)		
F0331	土師器(2)		
F0408	土師器(4)		
F0417	軽石(3), 石器(1), 土師器(1), 粘土塊(2)	掘立22(P10)	

第87表 ピット内出土遺物一覧表(5)

ID	内容	遺構	掲載遺物
F0418	滑石製品(1), 土師器(1)		
F0420	滑石製品(1), 須恵器(1), 土師器(1)		
F0422	轆の羽口(1)		
F0423	カムイヤキ(1)		
F0428	カムイヤキ(4), 滑石製品(3), 須恵器(2), 石器(1), 鉄滓(1), 土師器(4), 粘土塊(1)		第60図100, 第67図236, 第68図259
F0432	滑石製品(1)		
F0436	滑石混入土器(1), 滑石製品(1), 土師器(2)		
F0439	滑石製品(1)		
F0442	カムイヤキ(1), 石器(3), 轆の羽口(2)		
F0451	滑石製品(1)		
F0452	土師器(1)		
F0454	滑石製品(1), 石器(1), 土師器(1)		
F0459	中世白磁(1), 石器(1)		第64図157, 第77図388
F0460	滑石製品(1), 土師器(4)		
F0461	滑石製品(1), 軽石(5)		
F0462	滑石製品(3), 土師器(2)		
F0465	石器(1), 轆の羽口(1)		
F0503	粘土塊(1)	掘立19(P7)	
F0504	古代白磁(1)	掘立18(P4)	第62図133
F0505	須恵器(1)	掘立18(P3)	
F0513	轆の羽口(1)		
F0515	土師器(2)		
F0516	土師器(1)	掘立19(P1)	
F0519	鉄滓(1)		
F0520	カムイヤキ(1), 滑石製品(1), 土師器(2)		
F0523	土師器(3)		
F0524	土師器(1)		
F0534	須恵器(1), 石器(1), 土師器(1)	掘立19(P5)	第60図88
F0535	滑石製品(1), 土師器(2)	掘立20(P6)	
F0536	石器(1)		
F0538	粘土塊(1)		
F0541	滑石製品(2), 石器(2)		
F0548	石器(1), 土師器(2)		
F0550	土師器(2)		
F0558	滑石製品(1)	掘立20(P4)	
F0559	滑石製品(1), 土師器(2)	掘立21(P3)	
F0561	滑石製品(1), 軽石(1), 須恵器(1), 鉄滓(1)		
F0562	中世白磁(1), 滑石製品(1), 石器(1), 土師器(2), 轆の羽口(1)	掘立21(P4)	
F0563	カムイヤキ(1), 中世白磁(1), 滑石製品(1), 土師器(2)		第67図217
F0564	カムイヤキ(2), 滑石製品(2), 須恵器(1)		第60図106
F0566	滑石製品(4), 軽石(1), 土師器(1), 粘土塊(1)		第70図294, 第71図310

第88表 ピット内出土遺物一覧表(6)

ID	内容	遺構	掲載遺物
F0569	滑石製品(3), 土師器(1)		
F0570	滑石製品(3), 須恵器(1), 石器(1), 鉄滓(1)		第61図117
F0571	滑石製品(2), 石器(1)	掘立21(P2)	
F0572	軽石(1)		
F0576	滑石製品(1), 土師器(3)		
F0577	布目圧痕土器(3)		
F0578	滑石製品(2), 鉄滓(2), 土師器(1)		
F0580	滑石製品(1)		第71図302
F0581	滑石製品(2)	掘立21(P1)	第71図308
F0583	滑石混入土器(1), 石器(1), 土師器(3), 粘土塊(2)	掘立20(P2)	
G0238	滑石製品(1)		第72図338
G0302	滑石製品(2), 土師器(1)		第71図315
G0304	土師器(10)		
G0309	土師器(1)		
G0311	土師器(4)		
G0316	土師器(4)		
G0317	土師器(3)		
G0318	土師器(2)		第59図82
G0326	滑石製品(1)		
G0371	石器(1)		第80図406
G0403	滑石製品(1), 土師器(1)	掘立23(P3)	
G0405	中世白磁(1), 石器(1), 土師器(1), 轆の羽口(4)		
G0407	土師器(1)	掘立23(P1)	
G0411	土師器(2)		
G0412	粘土塊(2)		
G0416	土師器(2)		第59図75
G0417	滑石製品(1)	掘立22(P8)	
G0420	滑石製品(2), 土師器(8)	掘立22(P2)	
G0421	カムイヤキ(1), 中世白磁(1), 土師器(1)		第59図74, 第68図270
G0423	土師器(1)	掘立23(P4)	
G0425	土師器(3)		
G0428	土師器(1)		
G0505	滑石製品(1)		
G0508	粘土塊(1)		
G0509	轆の羽口(1)	掘立10(P1)	
G0513	滑石製品(3), 土師器(1), 轆の羽口(4)		
G0515	滑石混入土器(2), 滑石製品(2), 土師器(2), 轆の羽口(2)		
G0517	滑石製品(2), 土師器(2), 粘土塊(2)		
G0522	石器(1), 土師器(2)		
G0524	土師器(1)		
G0533	土師器(1)		
G0535	滑石製品(1), 土師器(2)		第71図306
G0536	土師器(1)		
G0542	土師器(1)	掘立19(P9)	
G0546	滑石製品(1)	掘立19(P12)	第71図309

第89表 ピット内出土遺物一覧表(7)

ID	内容	遺構	掲載遺物
G0547	滑石製品(2), 土師器(1), 轆の羽口(2)	掘立19(P13)	
G0551	須恵器(1), 朝鮮系無釉陶器(1), 土師器(2)	掘立18(P5)	第60図105, 第66図209
G0552	土師器(2)		
G0555	石器(2)		
G0557	土師器(1)	掘立19(P8)	
G0559	土師器(2)		
G0561	石器(1), 土師器(2)		第80図405
G0602	中世白磁(1), 土師器(1)		
G0609	須恵器(1)	柱穴列6(P3)	第60図96
G3169	石器(1)		
G3174	轆の羽口(1)		第75図373
G4138	カムイヤキ(1)		
G4157	布目圧痕土器(1)		第63図138
G4158	カムイヤキ(1)		
H0301	滑石製品(1)		
H0304	石器(1)		
H0306	滑石製品(1), 土師器(4), 粘土塊(1)		
H0307	滑石製品(3), 石器(1)		第70図293, 第71図313
H0308	須恵器(1)		
H0309	石器(1)		
H0310	石器(2), 土師器(1)		
H0314	滑石混入土器(1), 須恵器(1)		第61図114
H0315	滑石製品(1), 土師器(1), 轆の羽口(1)		
H0317	石器(1)		
H0319	石器(1)		
H0323	カムイヤキ(1)		第68図274
H0325	中世白磁(1)		第64図144
H0330	石器(1)		
H0331	須恵器(1)		
H0332	中世白磁(1)		第64図188
H0336	石器(1)		
H0339	越州窯系青磁(1)		第62図127
H0343	石器(1)		
H0347	石器(1)		
H0364	中世白磁(1)		
H0402	滑石製品(1)		
H0404	越州窯系青磁(1), 石器(1)	掘立17(P7)	第62図128
H0406	カムイヤキ(1), 石器(1)		第67図222
H0417	土師器(3)		
H0421	土師器(1)		第59図78
H0423	滑石製品(3), 土師器(1), 轆の羽口(1)		第71図312
H0427	土師器(1)		第59図61
H0429	鉄滓(1), 土師器(3), 布目圧痕土器(1)		
H0431	中世白磁(1), 滑石製品(1)		
H0432	石器(1), 轆の羽口(1)		

第90表 ピット内出土遺物一覧表(8)

ID	内容	遺構	掲載遺物
H0435	土師器(1)		
H0437	粘土塊(2)		
H0438	須恵器(1), 轆の羽口(1)		
H0439	須恵器(1), 青磁(1), 土師器(2), 布目圧痕土器(1)		第60図109
H0440	越州窯系青磁(1), 滑石製品(4)		第62図126
H0443	滑石製品(1), 須恵器(1), 石器(1), 土師器(3)	掘立16(P5)	第59図69
H0445	須恵器(1), 鉄滓(1), 土師器(1)		第61図125
H0450	轆の羽口(1)		
H0451	滑石製品(1), 轆の羽口(1)		
H0452	轆の羽口(1)		第75図374
H0453	滑石製品(1), 石器(1), 土師器(1)		
H0455	土師器(3)		
H0463	滑石製品(1), 石器(1), 土師器(3), 布目圧痕土器(2)		
H0465	中世白磁(1), 鉄滓(1), 土師器(2)		
H0467	石器(1), 土師器(3)	掘立15(P2)	
H0468	土師器(3)		
H0470	土師器(3)	掘立16(P7)	
H0471	土師器(2)		
H0472	カムイヤキ(1)		
H0473	須恵器(1), 石器(1)	掘立17(P9)	第60図93
H0475	カムイヤキ(1)		第68図248
H0476	中世白磁(1)		
H0479	土師器(1)		
H0480	土師器(1)	掘立15(P10)	第59図71
H0481	土師器(2)		
H0482	滑石製品(1), 土師器(1)		
H0483	土師器(3)	掘立15(P9)	
H0485	石器(1), 鉄滓(1), 土師器(2)	掘立17(P8)	
H0486	土師器(2)	掘立15(P4)	
H0489	土師器(2)		
H0490	須恵器(1)		
H0493	カムイヤキ(1)		
H0494	滑石製品(1), 須恵器(1)		
H0495	石器(1), 鉄滓(1)		
H0496	土師器(1)		第59図58
H0497	土師器(4)	掘立15(P7)	
H0498	カムイヤキ(1)	掘立15(P8)	第68図264
H0503	轆の羽口(1)		
H0505	滑石製品(1), 石器(3)	柱穴列2(P5)	第79図401
H0509	カムイヤキ(1), 中世白磁(1), 滑石製品(1)	柱穴列2(P1)	第64図164, 第68図271
H0512	土師器(2)	掘立11(P5)	
H0515	石器(1)		
H0516	黒色土器(1), 土師器(2), 粘土塊(2)	掘立9(P8)	第59図60
H0522	カムイヤキ(1), 滑石製品(2), 土師器(1)	掘立14(P6)	第68図272
H0524	滑石製品(1), 石器(5), 土師器(1)	掘立14(P12)	
H0525	滑石製品(1)	掘立14(P9)	

第91表 ピット内出土遺物一覧表(9)

ID	内容	遺構	掲載遺物
H0526	石器(1)	掘立14(P10)	
H0527	滑石製品(1), 石器(1)	掘立13(P4)	
H0528	滑石製品(2), 土師器(1)	掘立14(P11)	
H0530	中世白磁(1), 滑石製品(1), 鉄滓(1), 轆の羽口(6)	掘立11(P3)	
H0533	鉄滓(1), 土師器(1), 粘土塊(3)	掘立9(P3)	
H0537	カムイヤキ(1), 滑石製品(1), 土師器(1), 轆の羽口(1)	掘立13(P1)	第67図242
H0541	中世白磁(1), 滑石製品(1)	掘立14(P3)	第64図158
H0542	滑石製品(1)	掘立14(P4)	
H0544	滑石製品(1), 土師器(2)		
H0546	土師器(3)		
H0550	土師器(1)		
H0551	土製品(1)		第76図379
H0552	滑石製品(1), 石器(1), 土師器(2)		
H0558	滑石製品(1), 土師器(1), 粘土塊(1)		
H0559	土師器(2)		
H0561	石器(1), 轆の羽口(1)		
H0564	轆の羽口(1)		
H0565	滑石製品(1)		
H0566	土師器(4)	掘立12(P3)	
H0569	滑石製品(1), 轆の羽口(5)	掘立12(P2)	
H0570	滑石混入土器(2), 粘土塊(2)	掘立12(P7)	
H0571	須恵器(1), 土師器(6)	掘立10(P3)	第60図110
H0574	滑石製品(1), 軽石(1), 土師器(1), 粘土塊(3)		
H0576	カムイヤキ(1), 轆の羽口(1)		
H0577	土師器(1)		
H0580	土師器(3)	掘立10(P11)	
H0583	カムイヤキ(1), 石器(1)		第68図269
H0585	中世白磁(3), 滑石製品(1)		第64図163, 第72図329
H0589	カムイヤキ(1), 滑石製品(1), 軽石(1), 石器(1), 土製品(1), 轆の羽口(1)	掘立12(P4)	第68図268, 第76図381
H0590	滑石製品(2)		第71図313
H0591	土製品(1)		第76図385
H0592	中世白磁(1), 滑石製品(2), 土師器(2)	掘立10(P6)	
H0593	土師器(2)		
H0594	鉄滓(1), 土師器(1), 轆の羽口(2)	掘立10(P7)	
H0597	轆の羽口(2)	掘立9(P2)	
H0598	石器(7), 朝鮮系無釉陶器(1), 土師器(4), 粘土塊(8), 布目圧痕土器(2), 轆の羽口(3)	掘立11(P7)	第68図251
H0599	土師器(1)		
H0601	滑石製品(1), 軽石(1), 朝鮮系無釉陶器(1), 土師器(7), 粘土塊(3)		第59図57, 第66図197, 第70図288
H0602	軽石(1), 石器(1), 土師器(1), 粘土塊(2)	掘立7(P3)	
H0604	石器(1)	掘立9(P10)	第79図402
H0607	滑石製品(2), 土師器(1), 轆の羽口(2)		第71図320, 第71図322

第92表 ピット内出土遺物一覧表(10)

ID	内容	遺構	掲載遺物
H0608	中世白磁(1), 滑石製品(5), 軽石(1), 鉄滓(1), 土師器(1), 轆の羽口(1)	掘立8(P5)	第70図299, 第71図318
H0609	中世白磁(1)	掘立9(P11)	第64図151
H0610	中世白磁(2), 滑石製品(5), 須恵器(1)		第60図108, 第64図177, 第64図190, 第71図311
H0613	土師器(1)	掘立9(P12)	
H0615	滑石製品(2), 石器(1)	掘立9(P1)	第70図298
H0616	滑石製品(1)		
H0617	中世白磁(2), 石器(1)	掘立8(P2)	第64図169, 第64図186
H0619	滑石製品(2)		
H0620	滑石製品(7), 石器(2), 土師器(2)		第72図323, 第72図328, 第72図343, 第77図387
H0621	滑石混入土器(1), 滑石製品(3)		第72図331, 第73図353
H0623	土師器(1)		
H0624	カムイヤキ(1), 滑石製品(1), 軽石(2), 青磁(1), 石器(5), 轆の羽口(7)		第69図278, 第74図366, 第75図370
H0629	中世白磁(1)	柱穴列3(P1)	
H0630	土師器(1)	柱穴列3(P2)	
H0631	土師器(1), 轆の羽口(2)	柱穴列3(P3)	
H0633	滑石製品(2), 鉄滓(1), 粘土塊(2), 轆の羽口(1)		
H0634	カムイヤキ(1), 滑石製品(2)		第68図245, 第72図327
H0635	滑石製品(1), 鉄滓(1), 土師器(1)	柱穴列3(P5)	第71図303
H0637	滑石製品(2), 鉄滓(1)		
H0638	土師器(2)	柱穴列3(P6)	
H0640	カムイヤキ(1), 近世白磁(1), 中世白磁(2), 滑石製品(5), 土師器(3), 粘土塊(2)		第64図179, 第64図181, 第67図226, 第71図307
H0641	カムイヤキ(1), 滑石製品(5), 石器(6), 土師器(1), 轆の羽口(4)	掘立8(P1)	第67図233, 第71図300, 第71図305
H0642	須恵器(1), 石器(2)		第80図404
H0646	土師器(1)		第59図66
H0647	滑石製品(1), 土師器(1), 轆の羽口(3)		
H0649	滑石混入土器(1), 土師器(1), 布目圧痕土器(1)		第63図137
H0650	朝鮮系無釉陶器(1), 粘土塊(2), 轆の羽口(1)		
H0652	カムイヤキ(1), 滑石製品(2), 軽石(3), 石器(3), 鉄滓(2), 粘土塊(5), 轆の羽口(2)		
H0653	滑石製品(1), 粘土塊(1)		第70図292
H0654	滑石製品(1)		
H0656	土師器(1)		
H0657	土師器(2), 轆の羽口(1)		
H0658	須恵器(1)		第61図122

第93表 ピット内出土遺物一覧表(1)

ID	内容	遺構	掲載遺物
H0660	滑石製品(3), 土師器(1), 粘土塊(1), 轆の羽口(2)		第70図288, 第71図316
H3104	石器(1)		
H3186	越州窯系青磁(1)		第62図127
H4120	カムイヤキ(1)		第68図273
H4126	軽石(1)		
H4131	カムイヤキ(1)		第68図266
H4135	カムイヤキ(1)		第68図247
H5102	滑石製品(1), 軽石(1), 粘土塊(4), 轆の羽口(3)		
H5103	土師器(1), 土製品(1)		第76図383
H5104	滑石製品(1), 石器(1), 土師器(1), 轆の羽口(1)		
H5105	須恵器(1), 土師器(3), 土製品(1)		第61図119, 第76図382
H5112	滑石製品(4)		第72図332, 第72図340
H5113	中世白磁(1)		第64図159
H5114	滑石製品(2), 軽石(4)		第72図335
H5115	滑石混入土器(1), 滑石製品(1), 石器(1), 土師器(1)	掘立11(P1)	第73図352
H5118	滑石製品(1)		
I0308	土師器(1)		
I0401	石器(1)		
I0402	石器(1)		第77図392
I0405	滑石製品(1), 石器(1), 土師器(2), 粘土塊(2)		
I0408	滑石製品(1)		
I0409	滑石混入土器(1), 滑石製品(1), 軽石(1), 須恵器(1), 石器(1), 土師器(6)		第59図81, 第73図355
I0410	中世白磁(1)		
I0411	土師器(2)		
I0412	滑石製品(1), 須恵器(1)		第61図120
I0413	鉄滓(3), 土師器(1)		第76図377
I0414	滑石製品(1)		
I0415	土師器(1)		
I0419	鉄滓(1), 土師器(4)		第59図68
I0421	滑石製品(1)		第72図344
I0424	滑石製品(1), 土師器(2)		
I0425	滑石製品(1)		第72図326
I0426	石器(1)		
I0428	越州窯系青磁(1), 土師器(1), 轆の羽口(4)		第62図131
I0429	土師器(3)		
I0430	粘土塊(1)		
I0432	滑石製品(1), 土師器(1), 土製品(1), 粘土塊(8), 轆の羽口(4)		第76図380
I0449	石器(2)		
I0450	石器(1)		
I0454	石器(1)		
I0501	土師器(5)		
I0502	土師器(1), 轆の羽口(2)	掘立6(P5)	

第94表 ピット内出土遺物一覧表(2)

ID	内容	遺構	掲載遺物
I0503	滑石製品(2)	掘立6(P4)	
I0509	土師器(1)	掘立6(P7)	
I0517	土師器(1), 轆の羽口(1)	掘立6(P8)	第59図83
I0525	土師器(1)	掘立6(P1)	
I0526	土師器(1)		
I0528	石器(1)	掘立6(P3)	第78図399
I0529	滑石製品(1)		第70図295
I0531	滑石製品(1)	掘立7(P7)	
I0533	石器(1), 土師器(1), 轆の羽口(1)		
I0534	中世白磁(1)		
I0539	軽石(1)	掘立7(P6)	
I0548	滑石製品(1)		
I0550	カムイヤキ(1), 滑石製品(3), 朝鮮系無釉陶器(1), 土師器(1), 轆の羽口(7)		
I0551	滑石製品(1)		
I0554	滑石製品(2), 石器(1), 土師器(2)	掘立7(P11)	第72図333
I0602	土師器(1)		
I0603	滑石製品(1), 土師器(7), 轆の羽口(4)		
I0606	石器(1)	掘立5(P5)	
I0607	滑石製品(1), 土師器(1)		
I0608	石器(1)		
I0609	滑石製品(1), 石器(3)		
I0610	中世白磁(1)		第64図141
I0616	滑石製品(1), 軽石(1), 土師器(1)	掘立7(P12)	第72図342
I0619	石器(3), 土師器(1)		
I0621	滑石製品(1), 鉄滓(2)	掘立7(P1)	
I0625	土師器(2)		
I0626	カムイヤキ(1), 滑石製品(1), 土師器(3), 轆の羽口(1)	掘立5(P2)	第67図240
I0628	土師器(1)	掘立5(P1)	
I0630	カムイヤキ(1), 粘土塊(1)		
I0632	土師器(2), 粘土塊(2)	掘立5(P6)	
I0634	土師器(2)		
I0636	カムイヤキ(1), 土師器(1), 轆の羽口(1)		第67図241
I0638	カムイヤキ(3), 土師器(1), 粘土塊(4), 轆の羽口(2)		第67図214, 第68図265, 第69図285
I0639	石器(1), 粘土塊(3)		
I0641	石器(1)		
I0642	須恵器(1), 土師器(1)		
I0650	中世白磁(1)		
I0651	ガラス玉(1), 滑石製品(5), 土師器(2), 粘土塊(1)		第59図77, 第71図319, 第74図367
I0652	滑石製品(1)		

第95表 山田中西遺跡出土遺物出土区別集計表

出土区	土師器	黒色土器	模倣土器	須恵器	越州窯系青磁	古代白磁	布目庄痕土器	中世白磁	初期高麗青磁	朝鮮系無釉陶器	カムイヤキ	滑石混入土器	滑石製品	青磁	ガラス玉	鞆の羽口	鉄滓	粘土塊	土製品	軽石	石器	近世白磁	炭化物	合計	
A-1	2																				3			5	
A-2	7						1	1								4		1					1	15	
A-3	5			1				4			4	1	2	1		6		1				2		27	
A-4	2			1				4			27		6	1		1	3	1				2		48	
A-5	5			2				1		1	5											6		20	
A-6	1																							1	
AC-23	6									2	21	1	3			20	2		6		5			66	
A地区外											1													1	
B-2	1									2	5					1		1						10	
B-3	3	1						4			4	1	5			4	2					3		27	
B-4	6							1			5	1	3									1		17	
B-5				1				1			4		1									2		9	
B-6																1						4		5	
BD-23																						1		1	
C-2	1															1								2	
C-3	18						1	1			14		8			2	1	4	10		3	5		67	
C-4	19			2			1	7			12	5	20			19	2	4	9		6	23		129	
C-5								1			4		1									3		9	
C-6	2			1							7		2			5	1		4			6		28	
CF-23	1										1	4	2			1			9			1		19	
D-3	4										4		1									2		11	
D-4	4							1			2	3	3			1			4		1			19	
D-5								2			7		3			3						4		21	
D-6											4											1		5	
E-2	5											4				1						1		11	
E-3	8			3				2			4		4			5	2					3		31	
E-4	12						1			1	4	1	7			1			1			2		30	
E-5	9		1	1			1				5	1	11			3	4			1		4		41	
E-6	2			1				2			6		3			2	1			1		7		25	
F-1	1												2			1								4	
F-2													5			1						1		7	
F-3	12		1	1			1	2	1		3		7			3			5			3		39	
F-4	29			10				5		3	20	2	24			7	2	2	6		8	16		134	
F-5	32			5		1	3	2			4	1	29			2		5	5		3	9		101	
F-6																1								1	
FI-23	6							2			1		8				1	1				4		23	
G-3	49							3	1		1	1	17			2	1	3				6	1	85	
G-4	34			5	1		1	4		1	5	2	19	1		8		4		1		5		91	
G-5	26			3				2		2	4	3	27			10	2	4				7		90	
G-6	3			3	1			3			6	1	29			1	1	3				8		59	
H-3	58			5	2			3			8	1	24			8		3	14		1	13		140	
H-4	74			14	2		5	25		1	28	4	49	2		14	3	10	9	1	5	36		282	
H-5	61	1		4	1		2	12		1	6	4	61			39	1	3	23	5	9	38	1	272	
H-6	39			16			1	19		2	17	2	104	1		46		6	20		8	27	1	310	
HI-56													2											2	
I-3	6				1			3		3	4		12			8		1	4			3		45	
I-34											3													3	
I-4	32			14	2		1	12		5	33	1	26	2		16	5	3	16	1	1	29		199	
I-5	19			1				9		2	12		31	1		14	2	1			2	16		110	
I-6	38			7				9			11		31		1	9		2	13		2	19		142	
合計	642	2	2	101	10	1	19	147	2	26	316	44	592	9	1	270	27	54	163	23	52	331	1	4	2839



第83図 ピット内遺物出土状況図(1)



第84図 ピット内遺物出土状況図(2)





第85図 ピット内遺物出土状況図(3)



第86図 ピット内遺物出土状況図(4)



第87図 ピット内遺物出土状況図(5)



第88図 ピット内遺物出土状況図(6)



第89図 ピット内遺物出土状況図(7)



第90図 ピット内遺物出土状況図(8)

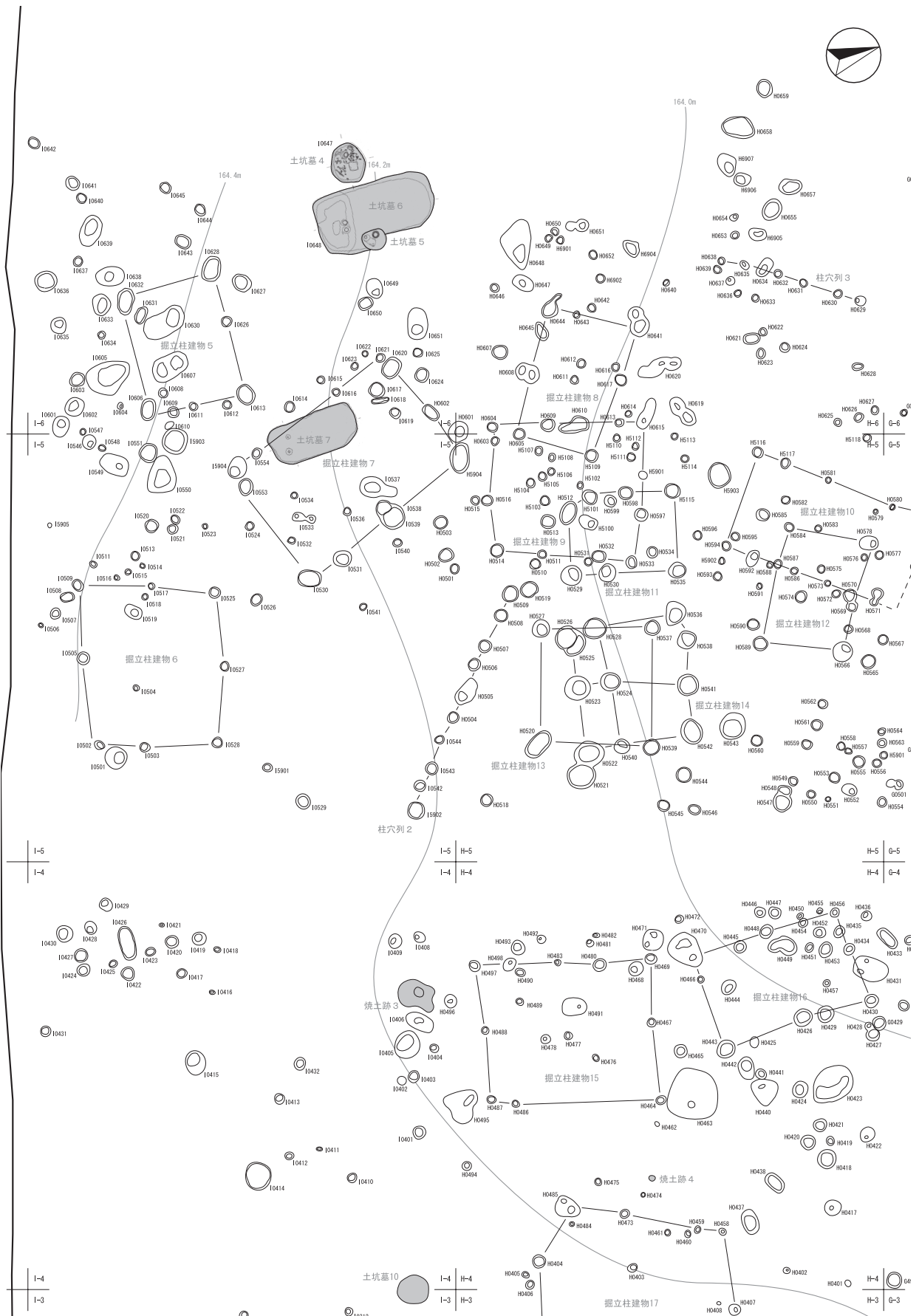


第91図 ピット内遺物出土状況図(9)

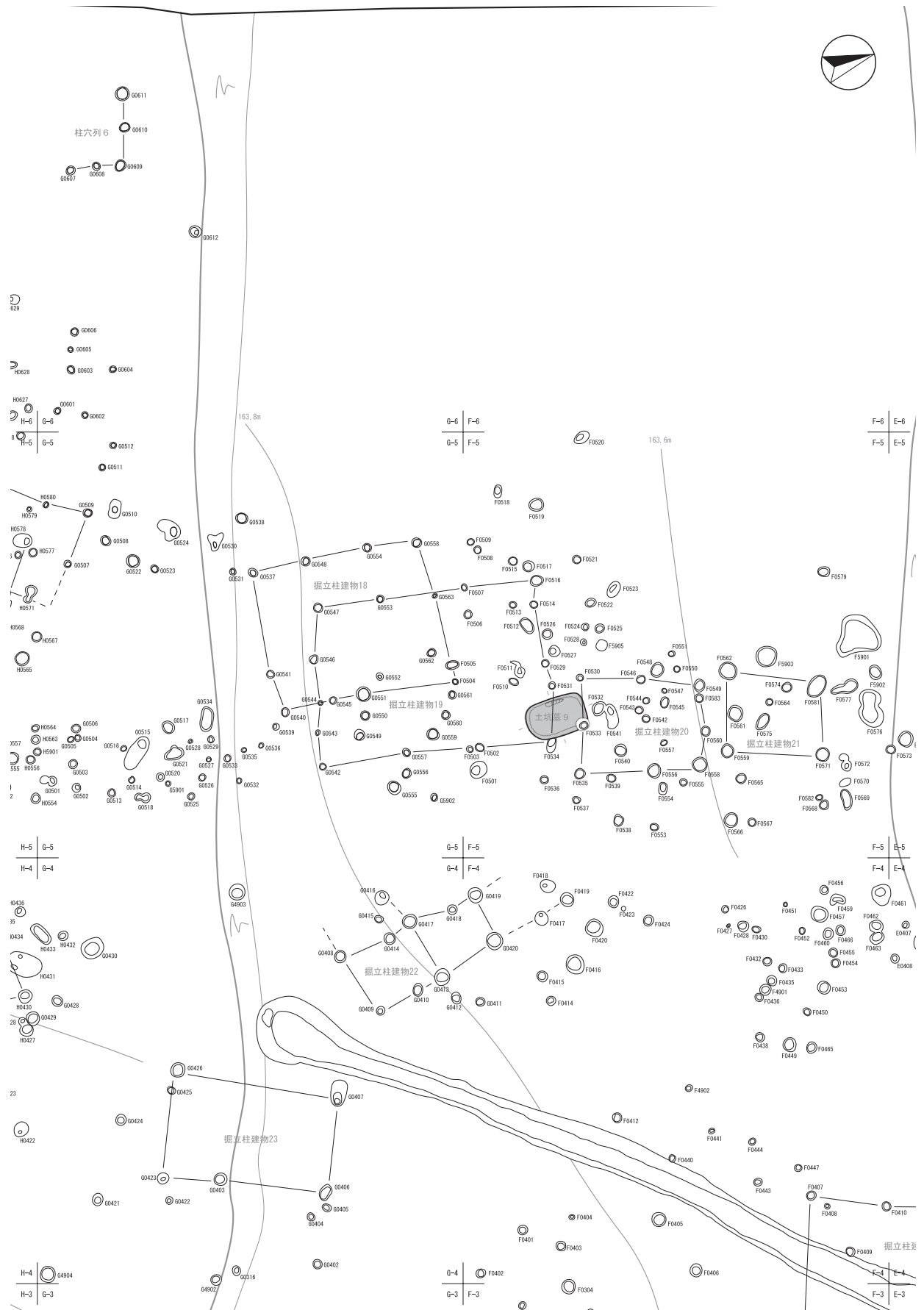


第92図 ピット内遺物出土状況図(10)

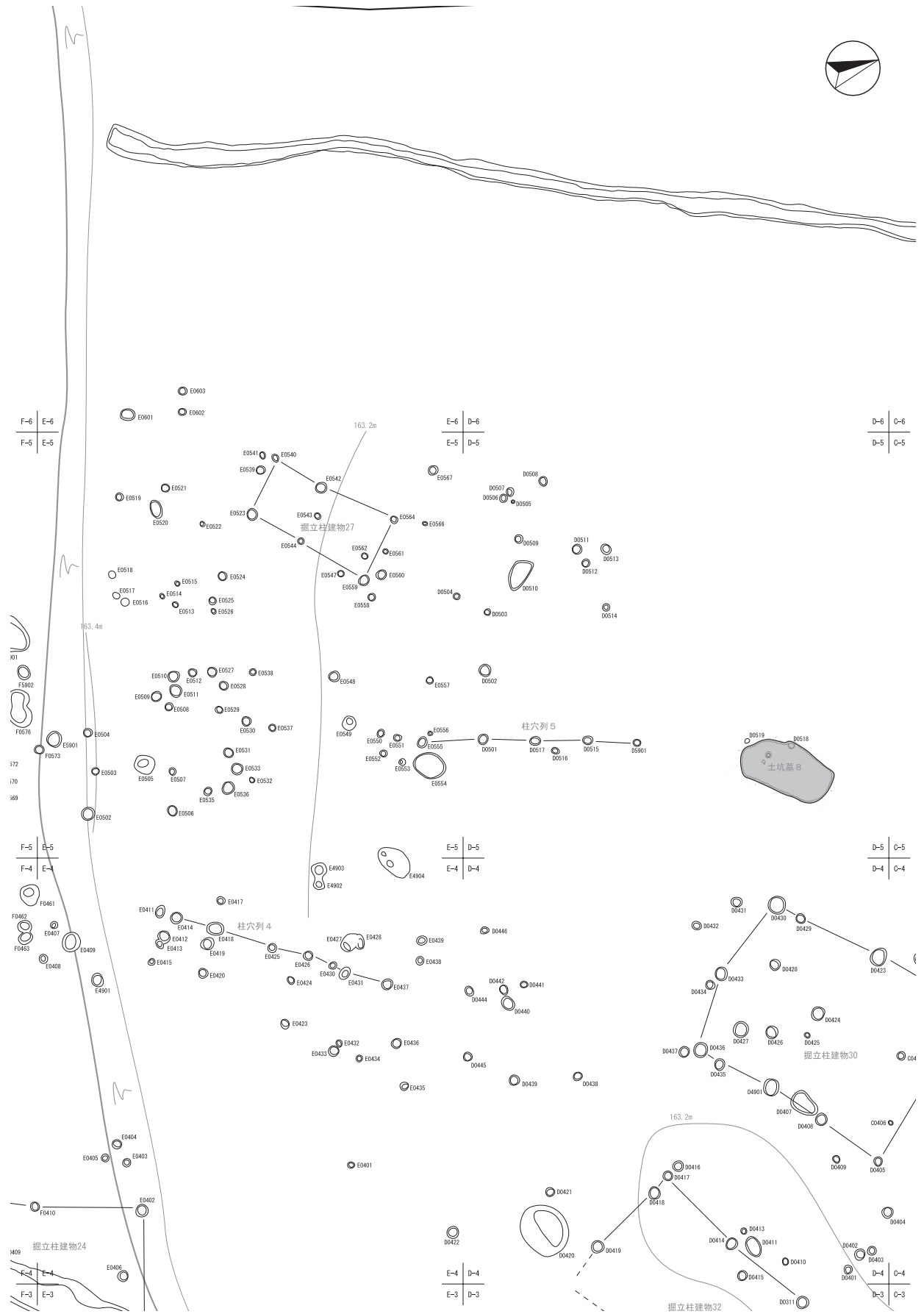




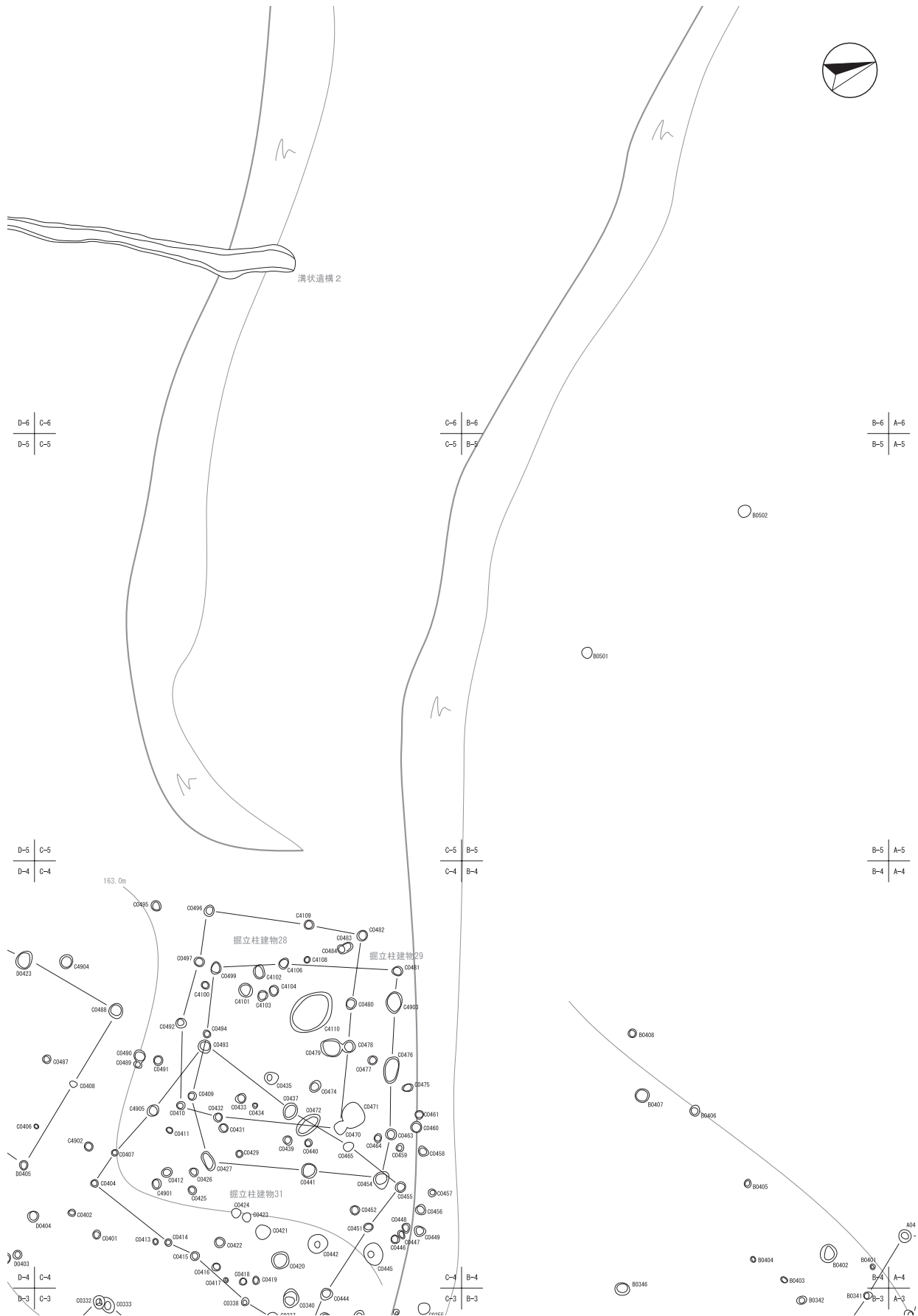
第93図 詳細遺構配置図(1)



第94図 詳細遺構配置図(2)



第95図 詳細遺構配置図(3)



第96図 詳細遺構配置図(4)



B-6	A-6
B-5	A-5

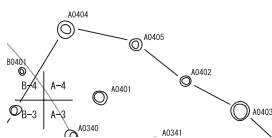
A-6	a-6
A-5	a-5

a-6
a-5

B-5	A-5
B-4	A-4

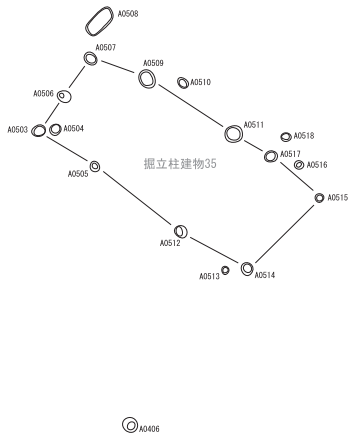
A-5	a-5
A-4	a-4

a-5
a-4

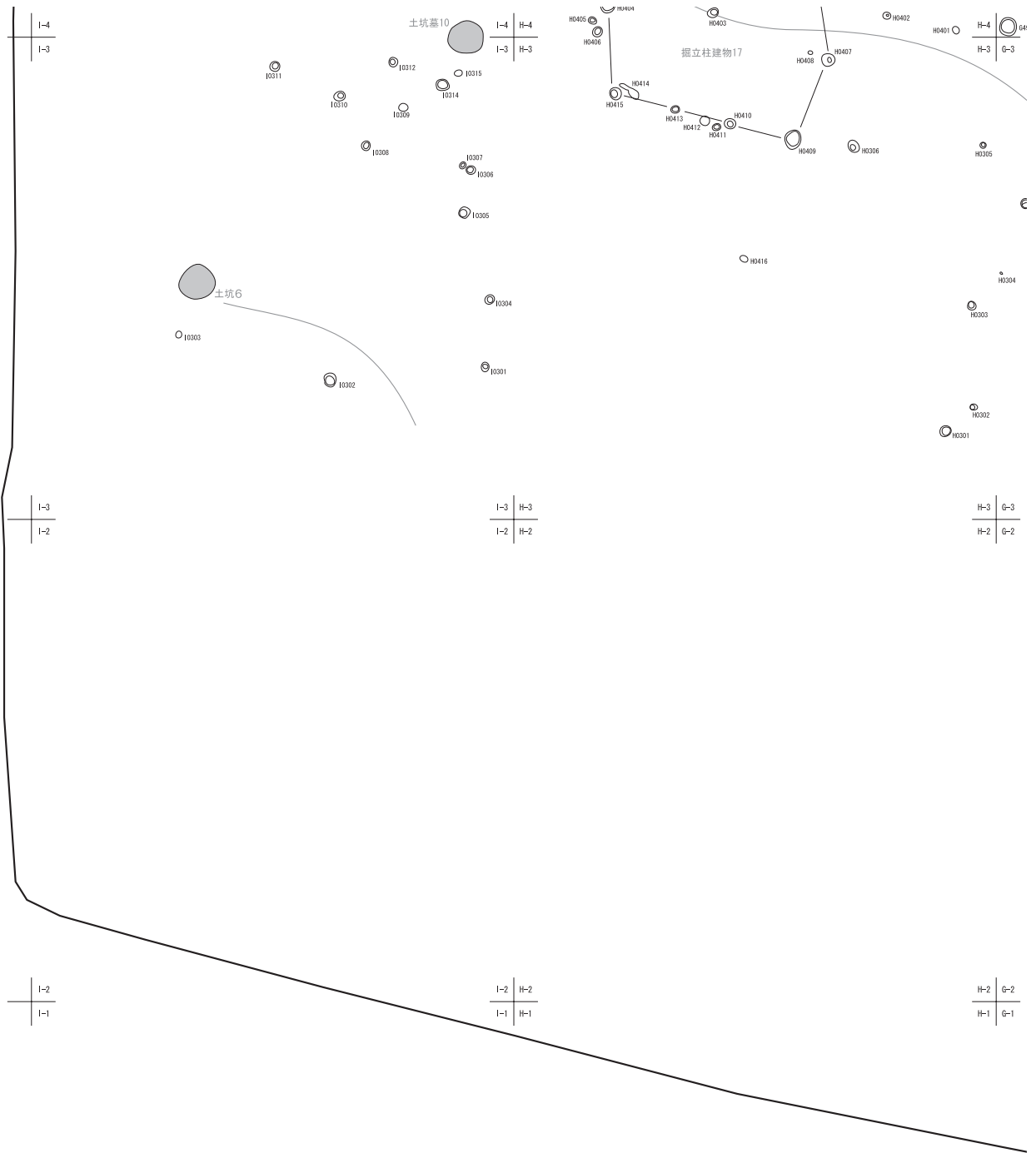


A-4	a-4
A-3	a-3

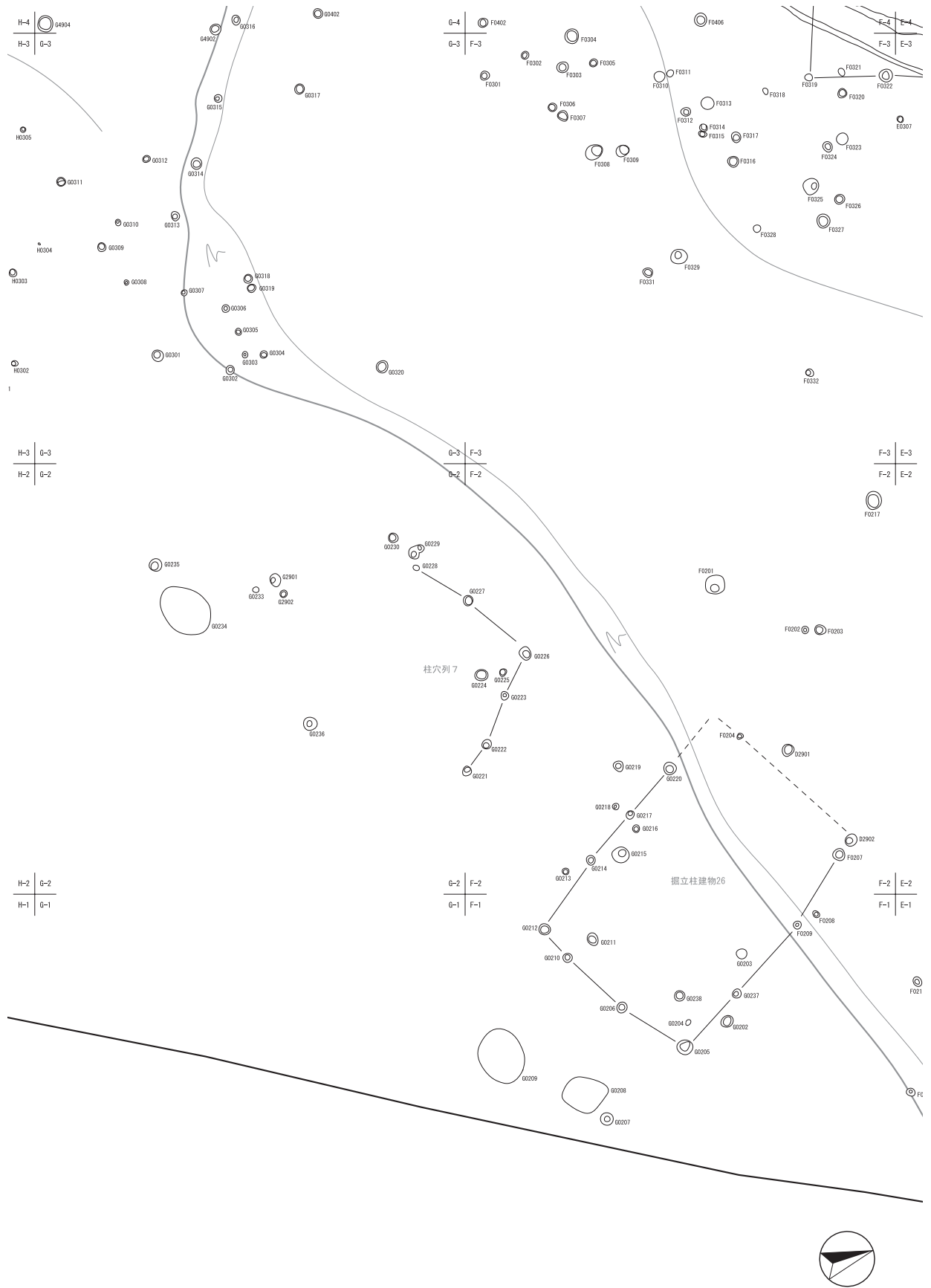
a-4
a-3



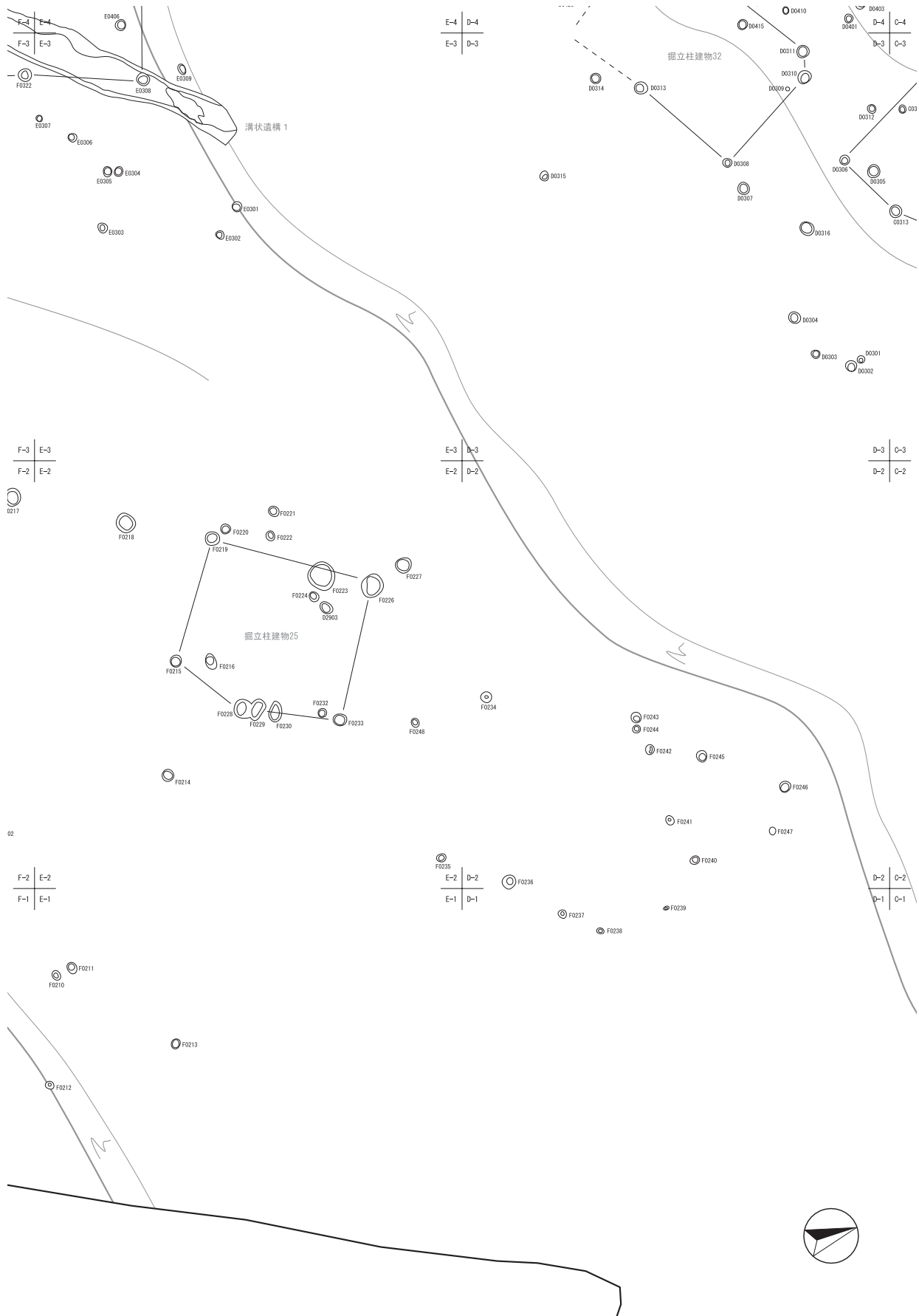
第97図 詳細遺構配置図(5)



第98図 詳細遺構配置図(6)

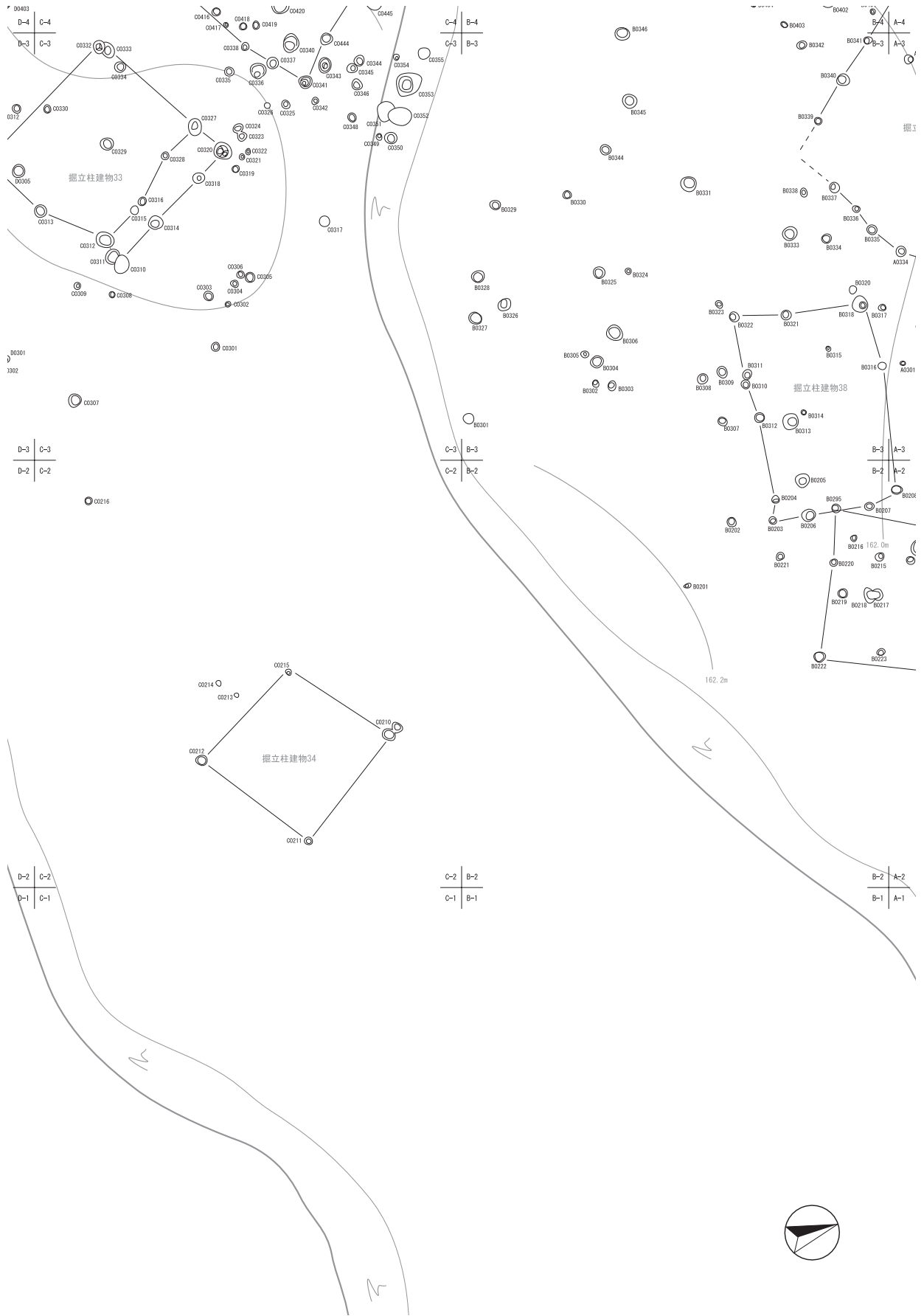


第99図 詳細遺構配置図(7)

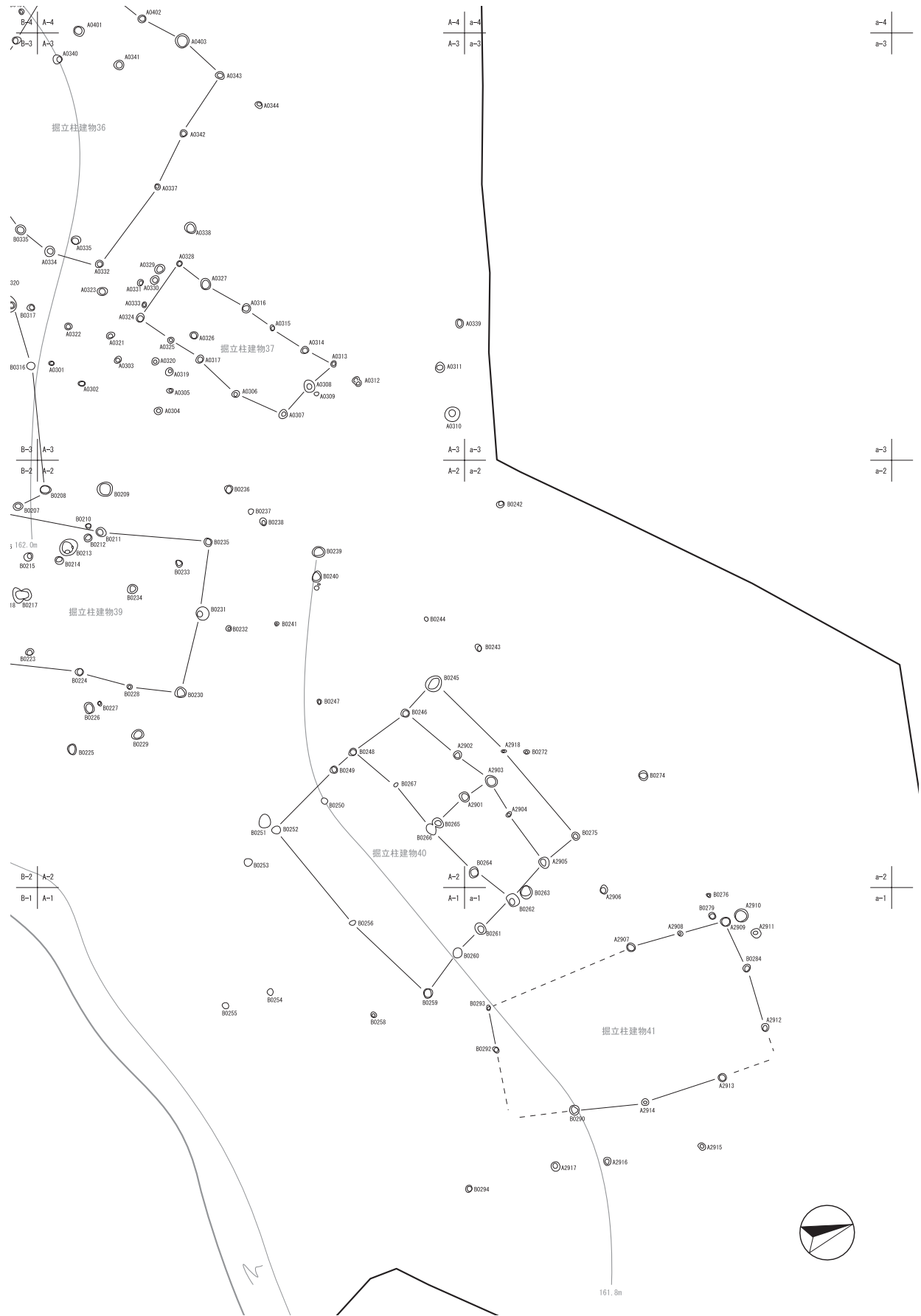


第100図 詳細遺構配置図(8)

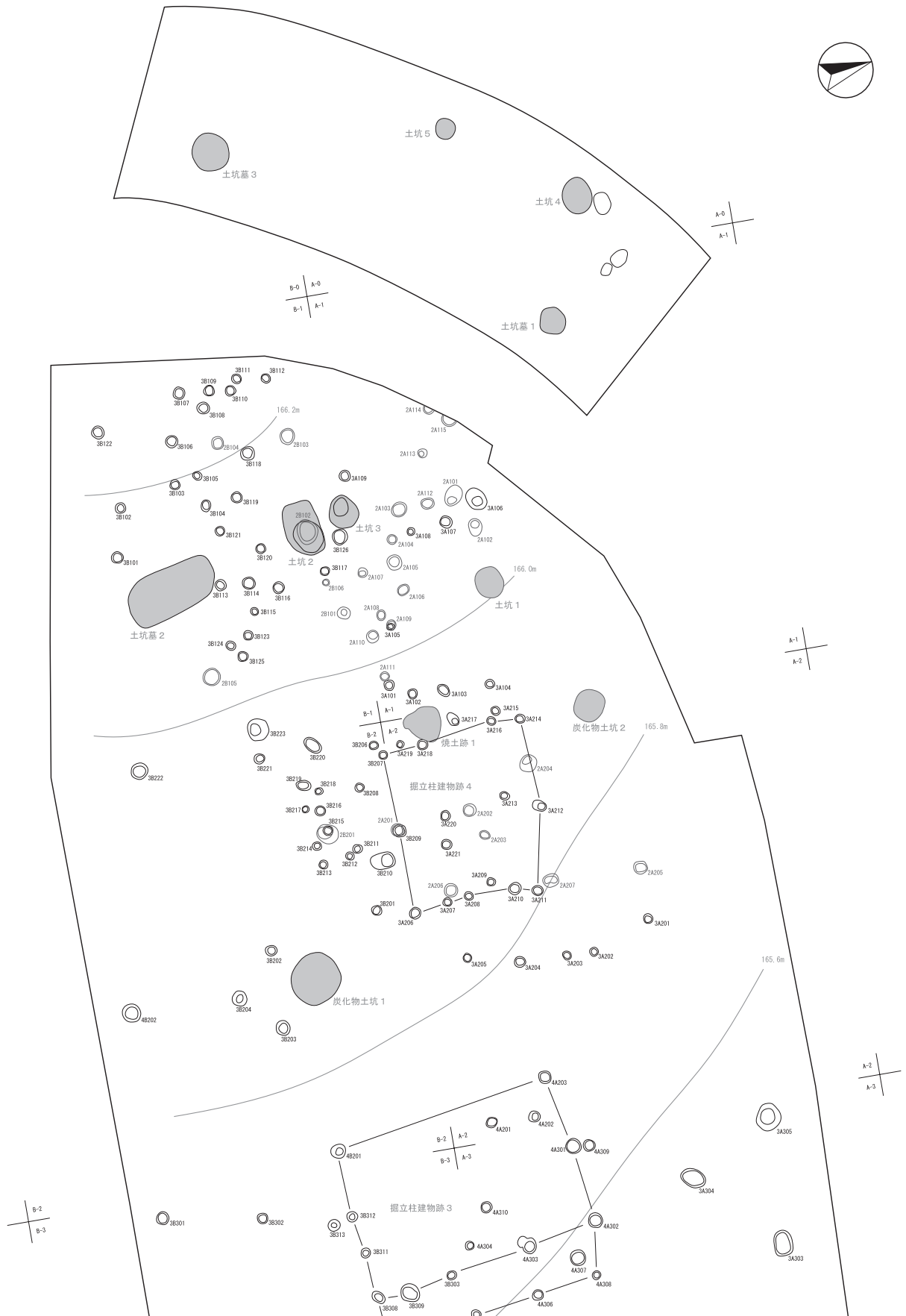




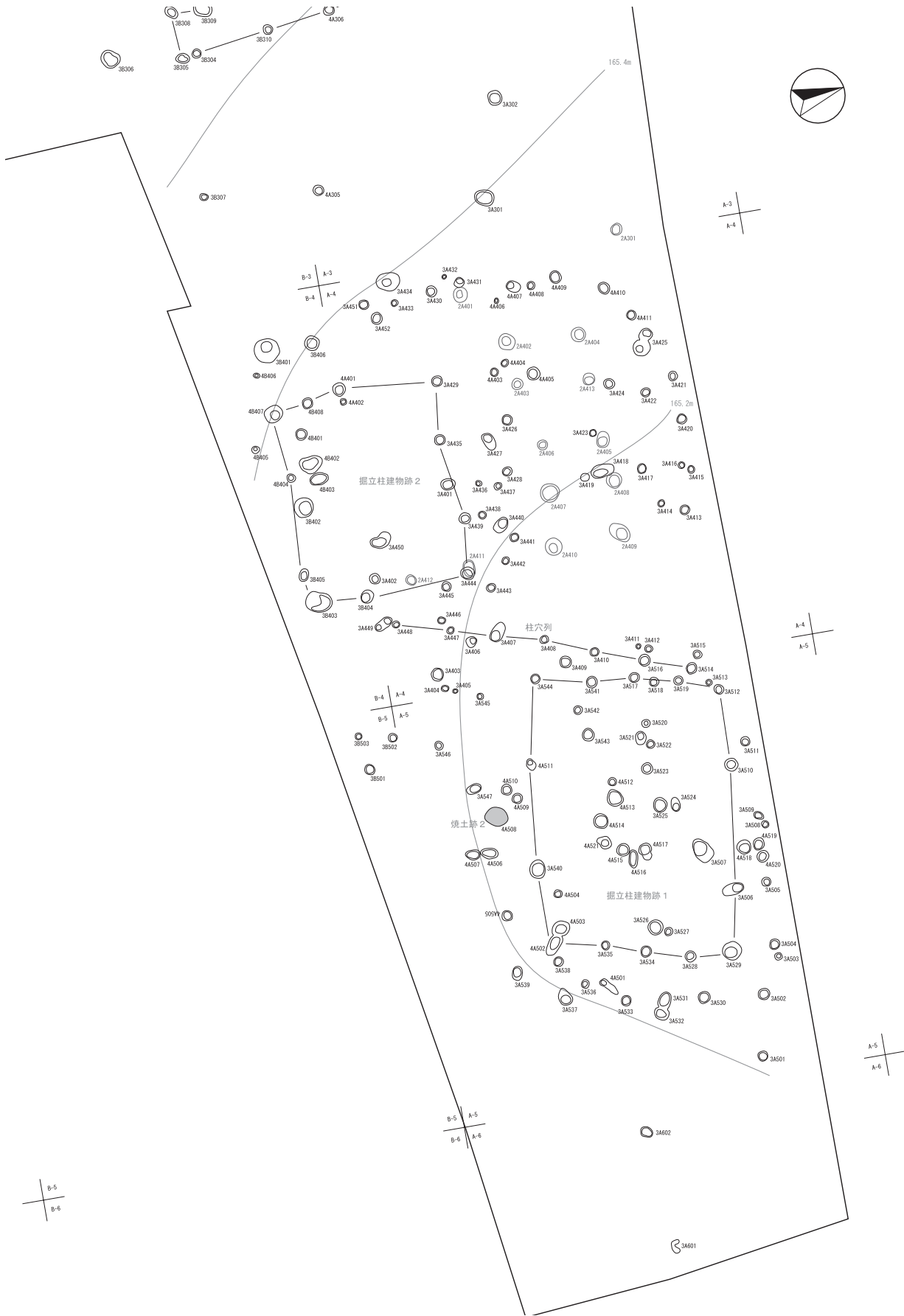
第101図 詳細遺構配置図(9)



第102図 詳細遺構配置図(10)



第103図 詳細遺構配置図(11)



第104図 詳細遺構配置図(12)

## 第Ⅷ章 山田中西遺跡Ⅰ補遺

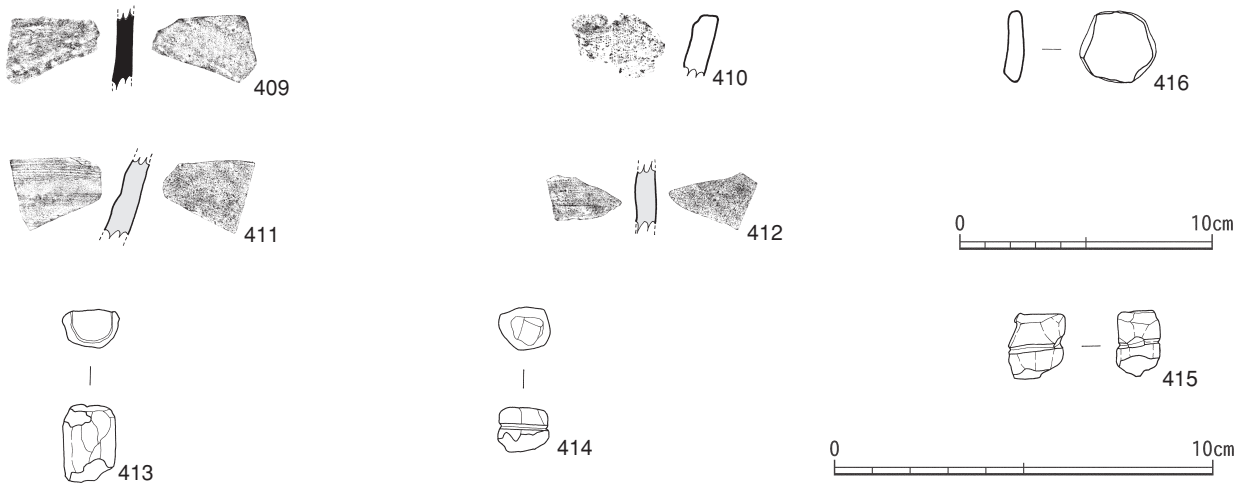
山田中西遺跡通信所整備事業において掲載できなかった実測図及びデータ一覧表を追補する。

ピット内出土遺物一覧表については第97表～第100表、出土区の集計表については第101表に示す。

データについては第Ⅶ章と同様に出土区名+ピット番号の組み合わせでIDを生成した。名前付け規則は、原則として層位〔1桁〕+出土区名〔2桁〕+ピット番号〔2桁〕とする。このIDについては、ピット内出土遺物一覧表（第97表～第100表）、詳細遺構配置図（第103・104図）に表示した。

### 出土遺物

409は須恵器である。内外面が摩滅しており、調整痕は不明瞭である。410は布目圧痕土器である。胎土に2mm程の白色粒を混入し、一部器表面にも現れている。411・412は朝鮮系無釉陶器である。山田中西遺跡Ⅰの第17図33と同一個体であると見られる。本報告書内で分類した朝鮮系無釉陶器B群に該当する。413～415は滑石製品である。413は棒状加工品である。1/2残存している。414・415は錘状加工品である。第72図345の類似品である。416は円盤状土製品である。胎土は土師甕と同様で、1mm程の白色粒を多く混入している。



第105図 山田中西遺跡Ⅰ出土遺物実測図（追補）

第96表 山田中西遺跡Ⅰ出土遺物観察表（追補）

挿図No	図No	取上No	層位	出土区	遺構	分類L1	器種	分類L2	部位	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	焼成	備考
105	409	一括	Ⅱ	A-5		須恵器	甕・壺		胴部			浅黄色	灰ナリ-7色	良好	内外面摩滅
	410		Ⅲ	A-1	3A106	布目圧痕土器			口縁部			灰褐色	橙色	良好	
	411		Ⅳ	A-3	4A301	朝鮮系無釉陶器	甕・壺	B群	胴部	ナデ	ナデ	青灰色	灰色	良好	
	412		Ⅳ	A-3	4A301	朝鮮系無釉陶器	甕・壺	B群	胴部	ナデ	ナデ	青灰色	灰色	良好	
	413		Ⅲ	A-2	3A212	滑石製品		棒状加工品					灰色		重量：1g
	414		Ⅱ	A-2	焼土を伴う土坑2号	滑石製品		錘状加工品					灰色		重量：4g
	415		Ⅲ	A-2	3A212	滑石製品		錘状加工品					灰白色		重量：4g
	416	一括	Ⅱ	A-5			土製品		円盤状				灰黄褐色	黒褐色	良好

第97表 山田中西遺跡 I ピット内遺物一覧表(1)

ID	内容	遺構	掲載遺物
2A101	滑石製品(1)		
2A102	軽石(6), 土師器(1), 粘土塊(17), 轆の羽口(2)		第24図83
2A105	滑石製品(1)		第19図57
2A201	粘土塊(9)		
2A202	粘土塊(4)		
2A203	カムイヤキ(1)		
2A204	粘土塊(14)		第24図86
2A205	滑石製品(1)		
2A206	カムイヤキ(1), 粘土塊(9)		
2A207	カムイヤキ(1), 滑石混入土器(5), 軽石(1), 炭化物(2), 土師器(1), 粘土塊(2), 轆の羽口(1)		
2A208	滑石混入土器(1)		
2A209	粘土塊(1)		
2A213	滑石製品(1)		
2A404	滑石製品(1)		第19図52
2A408	粘土塊(2)		
2A409	粘土塊(2)		
2A410	カムイヤキ(1)		
2A411	土師器(1)		
2A412	滑石製品(1)		
2B101	軽石(1), 土師器(1)		
2B102	滑石製品(2), 粘土塊(4), 轆の羽口(1)		第19図55
2B104	石器(1)		第21図71
2B201	炭化物(1), 粘土塊(1)		
3A102	カムイヤキ(1)		
3A103	カムイヤキ(1), 炭化物(2), 粘土塊(8)		
3A104	土師器(1), 粘土塊(5)		
3A105	炭化物(1), 粘土塊(2)		
3A106	滑石混入土器(4), 滑石製品(5), 土師器(1), 粘土塊(4), 布目圧痕土器(1)		
3A107	土師器(1), 布目圧痕土器(1), 轆の羽口(1)		
3A109	カムイヤキ(1)		第17図27
3A201	粘土塊(1)		
3A202	粘土塊(1)		
3A204	滑石混入土器(1), 粘土塊(1)		
3A205	滑石混入土器(1), 滑石製品(1)		第20図61
3A206	滑石混入土器(1), 滑石製品(1)	掘立4 (P10)	第20図60
3A208	滑石製品(1), 粘土塊(4)	掘立4 (P8)	
3A212	カムイヤキ(1), 滑石製品(3), 土製品(1), 粘土塊(17)	掘立4 (P5)	
3A214	粘土塊(6)	掘立4 (P4)	
3A217	粘土塊(2)		第24図85
3A218	石器(2)	掘立4 (P2)	第21図67, 第22図77
3A228	カムイヤキ(1)		第18図47
3A302	土師器(1)		
3A305	滑石製品(1), 土師器(1)		

第98表 山田中西遺跡 I ピット内遺物一覧表(2)

ID	内容	遺構	掲載遺物
3A402	滑石製品(2)		第19図53, 第19図58
3A403	粘土塊(1)		
3A405	石器(1)		第22図73
3A411	石器(1)		第21図66
3A412	軽石(3), 鉄滓(1)		
3A420	滑石製品(1)		
3A424	カムイヤキ(2), 須恵器(1), 朝鮮無釉陶器(1), 粘土塊(1)		
3A426	鉄製品(1)		第24図82
3A428	カムイヤキ(2), 滑石製品(1), 須恵器(1)		
3A430	滑石製品(2)		
3A437	滑石製品(1)		
3A443	軽石(1), 石器(1)		第23図79
3A445	土師器(2)		
3A450	土師器(2), 粘土塊(1)		
3A503	土師器(2)		
3A504	粘土塊(1)		
3A506	石器(1)	掘立1 (P7)	第23図80
3A511	土師器(2)		
3A514	土師器(3), 粘土塊(1)	柱穴列 (P1)	
3A515	軽石(1)		
3A519	滑石製品(1), 土師器(1)	掘立1 (P4)	第19図50
3A529	土師器(1)	掘立1 (P8)	
3A534	炭化物(1), 土師器(1)	掘立1 (P10)	
3A540	土師器(1)	掘立1 (P13)	
3B122	土師器(1)		
3B123	滑石混入土器(1)		
3B201	炭化物(1), 粘土塊(45)		
3B204	滑石製品(1), 粘土塊(3)		
3B206	土師器(1), 粘土塊(7)		
3B207	カムイヤキ(5), 滑石混入土器(1), 須恵器(1), 粘土塊(7)	掘立4 (P1)	第16図16, 第17図23, 第17図28, 第17図30, 第17図37, 第18図40, 第18図41
3B209	粘土塊(4)	掘立4 (P11)	
3B210	カムイヤキ(2), 滑石製品(1), 炭化物(1), 粘土塊(5)		第17図26, 第17図34
3B219	カムイヤキ(1), 滑石製品(1)		
3B220	カムイヤキ(1)		
3B309	粘土塊(1)		
3B313	カムイヤキ(1)		第17図33
3B402	滑石製品(3), 粘土塊(2)		第19図56
3B405	滑石製品(5), 炭化物(1), 粘土塊(2)	掘立2 (P10)	第19図48, 第19図48
4A203	カムイヤキ(4)	掘立3 (P2)	第17図35, 第17図36, 第18図43, 第18図45
4A301	石器(1), 朝鮮無釉陶器(2)	掘立3 (P3)	第22図74

第99表 山田中西遺跡 I ピット内遺物一覧表(3)

ID	内容	遺構	掲載遺物
4A302	滑石混入土器(1), 石器(2), 土師器(1), 粘土塊(1)	掘立3 (P4)	第16図12, 第22図75, 第23図81
4A303	石器(1), 鉄滓(1), 土師器(4), 粘土塊(2)	掘立3 (P13)	第22図78
4A307	粘土塊(2)		
4A401	滑石製品(1), 軽石(1), 土師器(1), 粘土塊(6)	掘立2 (P3)	

第100表 山田中西遺跡 I ピット内遺物一覧表(4)

ID	内容	遺構	掲載遺物
4A402	滑石製品(2), 土師器(1)		
4A409	滑石製品(1)		
4B201	滑石製品(1), 鉄滓(1)	掘立3 (P1)	第19図54
4B402	滑石製品(6), 粘土塊(2)		
4B403	滑石製品(1)		

第101表 山田中西遺跡 I 出土遺物出土区別集計表

出土区	土師器	須恵器	布目圧痕土器	白磁	朝鮮無袖陶器	カムイヤキ	滑石混入土器	滑石製品	鞆の羽口	鉄製品	鉄滓	土製品	軽石	石器	粘土塊	近世陶器	炭化物	合計
A-1	5		3	4		10	5	14	3				6		39		3	92
A-2	20	1		1		18	30	15	1			1	1	3	75	2	2	170
A-3	32	2		1	2	1	1	12	2		1		1	6	19			80
A-4	30	2			1	6		34	3	1	1		8	4	21			111
A-5	12	6						34			1		1	2	13		1	70
A-6									1									1
B-1	3					3	1	4	1				1	2	4			19
B-2	3			2		8		7			1				73		3	97
B-3						1									1			2
B-4								16							6		1	23
B-5											1							1
B-6														1				1
C-2															1			1
D-6						2												2
不明				1														1
合計	105	11	3	9	3	49	37	136	11	1	5	1	18	18	252	2	10	671

## Ⅹ章 まとめ

山田中西遺跡は喜界島通信所整備事業と県営畑地帯総合整備事業と2度に渡り本調査が行われている。通信所事業は平成16年度に調査を行い、平成17年度に報告書を刊行している（喜界町教育委員会2006）が、地形・出土状況からは連続する遺跡であると判断されるため、本報告書では通信所調査区も含めて若干の検討を行い、まとめとしたい。

### (1) 遺物

#### 古代相当の遺物

##### 土師器・須恵器について

土師器は甕がほとんどであり、埴・坏類は少量しか出土していない。埴・坏に関しては胎土が精製されたものが使用されていることなどから、本土からの搬入品であると考えられる。出土した甕は全て小破片であり、器表面の残存状況は良好でなく、調整痕は不明瞭である。しかし、口縁部から胴部にかけて内面にケズリを施す技法は本土で出土する土師器の甕と共通していることから、現段階では本土産の土師器の甕が主体を占めると考えている。鹿児島県内の土師器を集成・分類した松田氏の成果を援用すると、おおむねⅡ・Ⅲ期に比定でき、9～10世紀頃の年代観が与えられる。（松田2004）

本遺跡出土の土師器は小片が多く、細分は困難である。今後の城久遺跡群の資料整理を通して検討を進めていきたい。

また、これまでも指摘されている通り、当該期の奄美諸島での在郷土器である兼久式土器が出土していないのが特徴の一つである。しかしながら、兼久式土器の胴部片や本遺跡で出土した土師器の甕の胴部片、摩滅した布目圧痕土器の胴部片が混在すると、胎土のみでは判別がつかない場合もある。しかしながら、兼久式土器の特徴的な底部付近の資料は見られないため、仮に出土しているとしてもごく少数に留まる見通しである。

須恵器は総数112点が出土している。産地不明のものがほとんどであるが、一部は金峰町中岳山麓古窯跡群の須恵器に類似していることが指摘されている。現段階では9世紀以降のものであると考えている。今後は胎土分析などを通じて産地の特定を行うとともに、時期の確定を行うことが必要であり、課題である。

#### 初期貿易陶磁器

出土した初期貿易陶磁器は越州窯系青磁Ⅰ・Ⅲ類、白磁Ⅰ類が挙げられる。越州窯系青磁Ⅰ類・白磁Ⅰ類は大宰府時期区分のA期（8世紀末～10世紀中頃）、越州窯系青磁Ⅲ類はB期（10世紀後半～11世紀中頃）の標識磁器である。国府・郡衙など古代日本における国家的機関ないし相当機関で出土するとされる。鹿児島県内では薩摩国府跡や薩摩国分寺跡など28遺跡から出土している（高梨2006）。これまで越州窯系青磁の分布は松原遺跡（南種子町）までであったが（亀井1993）、南限を大きく広げる事例となった。

白磁Ⅰ類に関しては鹿児島県内では8遺跡出土事例があるのみであり、初期貿易陶磁器がまとまって出土するのは南西諸島では初めてである。

#### 中世相当の遺物

##### 中世前期の貿易陶磁器

出土した中世相当の陶磁器には白磁・青磁が認められる。その中で特に注目されるのは初期高麗青磁の出土である。大宰府分類碗Ⅲ類に比定でき、10世紀後半～11世紀中頃の年代観が与えられている（太宰府市教育委員会2000）。初期高麗青磁については集成が行われており、これまでの出土例では熊本県阿蘇地域が南限とされていた（山本2001、降矢2002）が、分布域を大きく広げる事例となった。

白磁は大宰府分類碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類、ⅢⅥ類、龍泉窯系青磁Ⅱ・Ⅳ類、同安窯系青磁Ⅲ類が出土している。出土した中では白磁碗Ⅳ・Ⅴ類が圧倒的多数であり、11世紀後半～12世紀頃までのものが主体となる。

#### 無釉陶器

無釉陶器については北部九州を中心に報告されている。本土系須恵器と異なる胎土や焼成、調整等を手がかりに、朝鮮系の無釉陶器であるとされ（山本2003、山崎1993、赤司1991）、鴻臚館跡・大宰府跡・筑前国分寺跡では7世紀後半～12世紀に、それら以外の遺跡では11世紀後半が上限であろうとされている。

南西諸島出土の朝鮮系無釉陶器は新里氏により、カムイヤキ古窯産以外の製品として3点紹介されている（新里2003）。カムイヤキと朝鮮系無釉陶器は類似しているが、胎土・調整方法から判別は可能であると見られ、本報告ではA・B群として捉えた。可能性があるものも含めて総数29点出土しており、



これほどの点数がまとまって出土するのは南島では初めてである。

カムイヤキは総数365点出土した。破片資料がほとんどであるが内面に格子目文、外面に平行文や綾杉文または格子目文を留めるA群に分類される（伊仙町教育委員会2005）。口縁部資料はⅡ、Ⅲ、Ⅳ式があり（新里2003）、これらも全てA群と対応する。A群は11世紀後半から13世紀前半に位置付けられており、白磁の年代観とも矛盾しない。

### 滑石製品

滑石製石鍋は728点出土している。出土した総重量は12,971 gである〔(通信所) 2,177 g, (畑総) 10,794 g〕。出土した滑石製石鍋は縦耳を有するもののみであり、木戸編年Ⅱ類（11世紀頃）に、山本・山村の編年中世Ⅰ期（11世紀後半～12世紀前半）に該当する（木戸1995, 山本・山村1997）。なお、現時点では鐙状の石鍋は出土していない。

二次加工品に関してはスタンプ状（バレン状）・棒状・錘状など様々な形がある。スタンプ状製品については平面の形状は様々であるが、把手様の部分に貫通穿孔が施されているのが特徴である。把手部の穿孔か所から上半部が破損しているものが多い。使用用途としては、宮崎県八児遺跡で補修具としての利用方法が発見されており、今後検討が必要である。

また、南西諸島では滑石粉を混入した土器が中世の遺跡で見つかる。これまで滑石製石鍋を模倣したものであると考えられていたが、本遺跡出土遺物からは滑石製石鍋を模倣したものに加え、土師器の甕を模倣したと考えられるものが出土している。

## (2) 遺構

### 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は41棟検出された。柱穴数が多い所では主軸方向の異なる建物跡が重複しており、複数の時期に分けられる可能性が高い。

柱穴内出土遺物から検討すると古代のみの遺物で構成される建物跡と中世の遺物が混入する建物跡がある。ほとんどが後者に該当し、11世紀後半～12世紀頃であろうと考えられる。前者は掘立柱建物跡17号が該当する。柱穴内出土遺物に越州窯系青磁Ⅲ類等が混入していることから、10世紀後半～11世紀頃の可能性がある。この建物跡は主軸方向が概ね調査グリッド枠に平行する、南北軸方向のものであり、この主軸方向を持つ建物跡は古代に相当する建

物跡が混在している可能性がある。

建物の規格に着目して見ると、等間隔もしくは直線状に規則的に並ぶものはほとんど検出できなかった。逆に柱間間隔が統一されておらず、間隔がずれて検出されているものが大多数である。

掘立柱建物跡17号のような1×1間の建物跡は奄美・沖縄地域に現存する高倉と類似しており、同様の性格を有していると推察される。それ以外の建物跡は主に住居に利用されたと考えている。ただし、掘立柱建物跡35・37号については面積が狭く、異なる用途が想定され、検討の必要がある。

柱間間隔等に見られる規格のばらつきは、建物の性格や使用した柱の大きさ、調達出来た材木の規格などに規制されている可能性が高い。まっすぐな材木を調達しにくい当地域の地域性とも考えられるが、建物の性格や時期差を示す可能性も考えられる。

城久遺跡群では100棟以上の掘立柱建物跡が検出されているが、具体的な建物跡の機能・性格などについては今後遺跡群全体を通じた分析が必要である。

### 土坑墓

土坑墓は10基検出された。その内人骨が検出されたのは7基であり、火を受けている人骨（焼骨）と受けていない人骨が検出されている。焼骨は総じて炭化物が混入した塊で検出される場合が多く、袋や木器など有機質の容器に入れられていた可能性がある。また、本遺跡出土の焼骨は全て壺の外側から検出されているが、奄美大島笠利町宇宿貝塚ではカムイヤキ壺内に焼骨が混入していた事例がある。壺の中から焼骨がみられる事例は古代の鹿児島県本土では広く見られ、それには主に須恵器壺が使用されている（松田・上床2005）。本遺跡出土のカムイヤキ壺は中世に属し、蔵骨器というより副葬品としての様相が強い。

土坑墓の形態には大きく分けると円形と長方形の2つが見られる。

#### Aタイプ：円形状土坑墓

直径は最大1 m前後であり、50～60 cm程のものが多く見られる。焼骨・炭化物の塊と副葬品は、中央部もしくはやや西側に検出されることが多い。

#### Bタイプ：長形状土坑墓

プランは長軸約2 m×短軸1 mのものが多く。焼骨・炭化物の塊と副葬品が出土するものは円形状土坑墓と同じであり、南端に置かれている場合が多い。単に焼骨塊を安置するためであればこのような大き

さは必要ではないことから、焼骨塊がある土坑墓は再葬されている可能性がある。

A・B両タイプに共通するのは副葬品の下に炭化物層を確認できるものがあることである。炭化物層の周辺では被熱部分が検出できていないため、人為的に敷かれている可能性が高い。また、副葬品はカムイヤキ壺・白磁・ガラス玉等が共通して出土しており、形状・出土量の違いが被葬者の出自によるものなのか、時間差なのかは現段階では結論を得られない。

土坑墓の年代は白磁の年代観と炭化物や焼骨の科学分析結果を考慮すると11世紀～12世紀頃に比定される。また、カムイヤキ壺はすべてA群に該当し、新里編年Ⅳ式に対応する(新里2003)。

### 焼土跡

焼土跡は4基検出されている。焼土跡は以下のように整理できる。

①直径20cm程の小型の円形状を呈し、内部に鉄滓や焼土粒などを含むもの

②不定形な焼土のみを残すもの

①に関してはその形状などから鍛冶炉の可能性が非常に高いと考えている。通信所調査区の第12図焼土跡2号、畑総調査区では第57図焼土跡3・4号が該当する。

### まとめ

山田中西遺跡は出土遺物から見ると、越州窯系青磁や白磁Ⅰ類の出土から、9・10世紀辺りから遺跡が展開し始め、11世紀後半～12世紀頃に最盛期を迎えると考えられる。その後続く陶磁器がほとんど見られないことから、13世紀代には廃絶されたと見られる。

遺跡の主体は、11世紀後半～12世紀頃であり、遺構もほとんどがこの時期に比定される。しかし、古代に相当する建物跡があることなどから、周辺に古代を中心とした遺構が存在している可能性がある。調査区内には規格性を有する大型の建物跡は見られず、拠点的な性格を持つと考えられる建物跡は検出されていない。

土坑墓には火葬と土葬がある。長方形土坑墓内に焼骨塊が見られるものは、再葬されている可能性がある。本遺跡からは土坑墓の変遷について十分に吟味する材料は得られていないが、城久遺跡群全体では20例を超える出土例がすでに蓄積されており、機を改めて論じていきたい。

出土遺物はほとんどが島外産のもので占められていることが特徴である。中でも、南西諸島では出土例の少ない越州窯系青磁・白磁Ⅰ類・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器などがまとまって出土した。鹿児島県内でも出土例は少なく、特に越州窯系青磁の出土は注目される。土師器・須恵器は古代相当であると考えているが、柱穴内から白磁やカムイヤキ・滑石製石鍋等と混入した状況で検出されることから、中世段階まで残る可能性があり、注意が必要である。

山田中西遺跡は本土系の遺物を主体とする、当該期の奄美諸島ではみられない遺物組成を持つ遺跡である。山田中西遺跡の資料のみでは城久遺跡群全体の評価を語ることはできない。今後城久遺跡群の資料整理を通して各遺跡の性格などを論じていきたい。

### 引用・参考文献

- 赤司善彦1991「朝鮮系無釉陶器の流入－高麗期を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』16
- 池田榮史2007「律令体制の南進問題」『季刊考古学』第100号
- 池畑耕一1998「考古資料から見た古代の奄美諸島と南九州」『渡辺誠先生還暦記念論集列島の考古学』
- 亀井明德1993「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第11号
- 喜界町教育委員会2006『城久遺跡群山田中西Ⅰ』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 木戸雅博1993「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅹ』
- 新里亮人2003「琉球列島における窯業生産の成立と展開」『考古学研究』第49巻第4号
- 高梨修2007「第5章第4節9交易、10古代の南島」『先史・古代の鹿児島通史編』
- 太宰府市教育委員会2000「大宰府条坊跡XⅤ－陶磁器分類編－」
- 中村和美1997「鹿児島県内における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号
- 降矢哲男2002「韓半島産陶磁器の流通－高麗時代の青磁を中心に－」『貿易陶磁研究』22
- 松田朝由2004「高篠遺跡 Ⅲ章まとめ 第1節土器の製作技術と土器様相」『久養岡・踊場・高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター(71)
- 松田朝由・上床真2005「鹿児島県内の蔵骨器について」

て」『財部城ヶ尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター(90)

山崎純男1993「鴻臚館跡Ⅲ」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第355集』

山本信夫・山村信榮1997「中世食器の地域性－九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』71

山本信夫2003「東南アジア海域における無釉陶器」『貿易陶磁研究』23

大和書房2007『東アジアの古代文化』130号